Absolute zero.

清明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏ．

【Ｎコード】

Ｎ３９５３Ｄ

【作者名】

清明

【あらすじ】

Ａｂｓｏｌｕｔｅ・Ｚｅｒｏ（アブソリュート・ゼロ）物質の下限温度。－２７３．１５℃『絶対零度』

『ミセリコルディア』

Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏ．

第一章　装填

『ミセリコルディア』

耳障りなレッドアラートは未だに鳴り響いていた。

傭兵稼業も長いので実戦は幾度となく経験してきたが今回が最悪のケースのようだ。軍の研究施設の警備要員としてここにやってきた。退屈な任務内容には飽き飽きしていたが、平和なのもたまには良い。と、思い始めていたのに、安寧は長く続かないものらしい。

規則正しく、それでいて無機質な通路が、枝分かれしながらどこまでも続いている。

等間隔に顔を覗かせる通風口の格子。通常電源は落ち、非常灯の醸し出す昏闇が辺りに立ちこめていた。長い時間、大音量の警告音に晒されているせいか、それ以外の音は既に耳に届いては来ない。それが、不気味だった。

少女は舞い降りた。

歩調には何の躊躇いもなく、ただ、淀んだ地下の空気を切り裂いて凛然と疾駆するその姿。淡々と薄ら寒い通路を踏みにじる軍靴。身を戒めるは、実用性だけを求めた灰色の戦闘服。それでも、少女の発する艶美な魅力は隠し切れていなかった。

靡く金髪は彼女の膝の裏に届く程長く、泥濘した風を孕んで幻想的な軌跡を描いている。

このような逼迫した状況下にあっても眠たげに薄く閉じられた目蓋。眼窩に填め込まれた澄んだ藍色の双眸。睫毛の一本一本が酷く

官能的な存在感を放っていた。焦がれるような紅に上気した、幼さの色濃く残る無垢な顔立ち。まるで少女の肉体は、神自らが手掛けた芸術品ようで、創作物のようで、絶美を究めていた。

傭兵隊の少女――ネリス・カラシニコヴァ。

誰もが畏怖と畏敬を声高に叫ぶ戦いの申し子。

『硝煙の死神』の二つ名を持つ少女兵だ。

状況は不透明だった。なんでも、この地下研究施設で厳重に保管されていたはずの生命兵器が脱走したらしいのだ。いくら出来損ないの犬擬きといえど、元から対人掃討戦を考慮されて設計されたものだ。そのスペックは計り知れない。無責任にも、そいつらを生み出した研究員どもは早々に施設を放棄して逃げ出してしまった。これ以上の被害を防ぐべく、もうじきここを潰そうと空軍の戦闘攻撃機が馬鹿でかい貫通爆弾を腹に抱えてやってくることだろう。早く逃げねば施設ともども埋葬されてしまいかねない。

頭の中で状況を整理すると少し悲しくなってくる。

つくづく自分は戦神に愛でられているらしい。……いや、死神だろうか、この場合。

どこからか銃声が聞こえる。ネリスとは別の警備要員が応戦しているのだろう。ろくな武装はないはずだから長くは持つまい。

久々に感じた戦場の雰囲気と死の臭いが全身にまとわりつき、背筋に物言えぬ高揚感が走る。

足は自然と回転数を上げ始め、しばらく伸ばし放題だった髪が淀んだ風を孕んでなびく。

今ある武装と言えば、九ミリ口径の自動拳銃が一挺。剥き出しの銃身に、肉抜きされた撃鉄。彼女の手に食らい付くように型取られたラバーグリップ。高い視認性と照準性を誇るタクティカルサイト。所余すことなく戦闘用にチューンアップされている逸品だ。彼女の腕なら、構えてから五秒で一五メートル先の六人にヘッドショットをお見舞いできる。

この施設には通路が蟻の巣のように張り巡らされているため、閉

所戦闘では拳銃の方が取り回しが効いて有利。だが、それは対人戦での話。これだけであの化物達を相手取るには火力に不安が残る。

とりあえず最初の目的地は武器庫だ。記憶が正しければ、この通路を越えた先にある。

十字路にさしかかり異変に気づいた。拳銃の銃口を目線と同じくして用心深く歩を緩める。生々しい血の臭い。硝煙の香り。それらが鼻腔を刺激してきた。

トリガーストロークを少しでも短くするため、ダブルアクションのハンマーを起こす。曲がり角の壁に背中を預けて向こう側の気配を探った。

通路の向こうに何かが居る。口から飛び出そうと騒ぐ心臓を、何とかなだめて飲み込む。

もし、化物が居たらどこに撃ち込もうか。やはり初弾は胸部。怯んだところで次弾は頭部だろう。相手がヒト型を模していたらの話だが。

意を決して、素早い挙動で角から飛び出す。瞬時に前方の空間を銃口でなめる。

怪物はフロントサイトとリアサイトの先には居なかった。

通路の壁に盛大にぶちまけられた、鮮やかとは言えない紅の色彩。それはある一点を軸にして、地面に、壁に、果ては天井にまで塗りたくられていた。血溜まりが一帯に形成され、その中に紅く染まった真鍮製の空薬莢が大量に転がっている。この一角だけ妙に湿度が高い。むっとした鉄臭い空気を不意に吸ってしまいむせ込みそうになった。唾液の分泌が過剰になり、飲み込むと嫌な味がした。肺は呼吸を自重し、胃がきゅっと締まったような気がする。背筋に走った武者震いはあながち気のせいでもなさそうだ。

壁に躯を横たえる、ボロ雑巾のように引き千切られたヒトの残骸が在った。

顔立ちと体付きから見るに、ネリスより五つぐらい年上の青年。ヒトの原型を留めては居るも、腹は何か肉食獣に貪られたかのよう

にずたずたで、腸は節操なく露出し、辺りには臓物の臭いが充満していた。しかし、彼はまだ生きていた。瞳からはまだ光は消えておらず、ごぽごぽと血が入り込んだ気道から嫌な音を出して呼吸している。いや、厳密には既に死んでいるのだろう。意識が有れど、それは生きる痛みを増長するだけ。

ネリスは彼に注意深く駆け寄って容態を見た。彼は何かを言おうとネリスに向かって幽かに口を上下する。しかし、ネリスが次に取った行動は、気休めの手当をするでも無く、遺言を尋ねるために口を開く事でも無かった。

彼女は唯、無慈悲に――いや、誰よりも慈悲深く、拳銃の銃口を彼の額へと優しく押し当てた。撃鉄は完全に屹立していたし、引き金にネリスの細い指が掛かっている。

死神の残酷さと、女神の慈悲深さ。どちらとも言えない無機質な表情で、ネリスは相変わらず薄く閉じられた目蓋の、吸い込まれてしまうような碧色の眼で青年の瞳を見ている。長く、柔らかなウェーブを描く金髪は、青年の躯を包み込むようにして垂れ、その切っ先が紅く染まる。そこから感情を伺うのはとても難しかった。だが、青年は自分の生きた意味を悟ったかの様にゆったりと目を閉じる。

「おやすみなさい」

微笑――。

最後に掛ける言葉は、総てのヒトが安らぎを覚えるような、とても慈愛に満ちた声色だった。それだけで、終わる命に絶対無比の価値を与えてしまう。その命は無駄では無いと頷ける。その言の葉を聞くために生まれ死ぬのだと。

ネリスは就寝前の子供にキスをする慈母のように、穏やかに引き金を引いた。

跳ね上がる銃口は何処までも暴力的で。宙を舞う空薬莢は思いの外軽やかで。沸き立つ硝煙は消え入るように幽かで。真鍮の放つ鈍い光は導きとなるのだろうか。終わりを彩る轟音は耳を疑うほど乾いていた。

ネリスは青年の骸を、血で汚れるのも構わずに抱き寄せた。涙は無い。嗚咽もない。在るのは静かな微笑のみ。
綻ぶ前の蕾の様な唇が、弾痕の穿たれた青年の額に寄せられ、そっと触れる。唇に血が付着する。まるでルージュを引いた様だった。
青年の骸が突如として光を帯びる。
ネリスはそんな幻想的な光景を淡々と見つめていた。
その陽炎の様な光は徐々に青年の胸に収束して形を成していく。
その姿は鳥だった。フィンチ類の小鳥を連想する、輪郭だけの光る鳥。
鳥は一度ネリスの顔を見て小首を傾げると、差し出された手の平に飛び乗った。小さなくちばしでネリスの親指の爪をつついた。細長い尾羽が動きに従ってせわしなく上下する。
それは確かな質量を持っていた。それは彼の魂と呼べるモノ。感情や意識の集合体と言ったものだろうか。それは確かに人を人たらしめるモノの筈なのだが、何故か鳥の形をしていた。
肉体と言うモノのは、所詮鳥籠なのかも知れない。人は生まれた瞬間から自分の魂を肉体と云う器に投獄しているのか。彼女は答えを持っていなかった。自分の意志なんか最初から亡い。
ネリスは少し悲しげに微笑む。感触を確かめるかのようにつついてくる小鳥に応えて指を動かす。ネリスの指が光の羽に包まれた胸元に当たると、くすぐったそうにそれを避けて人差し指にとまった。
「そう……。解ったわ」
肉体を無くした心は正直だ。ネリスは剥き出しの魂と意思の疎通ができる。その能力は死が蔓延する環境を生きてきた彼女にはとても重要だった。それと同時に悲しい事でもあった。
ネリスは死の価値が下落することを危惧していたからだ。
「そろそろ、お行きなさい」
あまり死者と触れ合ってはいけない。それは一種の冒涜だし、自分をこの世界で保っていられなくなる。ネリスは被われた天井に向かって鳥を解き放った。驚いた様に羽ばたいて、天井に消え入って

しまった。
やはり、自分は人としてどこか欠けているのか。苦痛を伴う生をぬぐい去り、死の安らぎを与えるためなら味方に銃を向けるのもいとわないのだろう。
彼を殺したのは背丈二メートルほどの犬とも猿ともつかない化物。一応ヒト型。
情報だけで実物を見たことはなかったが、やはり醜悪なヒトが作り出した悪魔だ。
その赤い目には狂気だけが映っていて、知性のかけらもない。
そいつはサブマシンガンの弾をかなりの量浴びせても平気な顔をしていた。
急所に当てればいくらか違っただろうが彼にはそんな余裕はなく、取り乱してトリガーを引きっぱなしにすることしかできなかったらしい。
更に、怪物の方もかなりの俊敏性を発揮していた。かなり熟練した兵士でも正確に照準に捕らえるのは難しかっただろう。
怪物はあっという間に肉薄してきた。怪物の凶悪な爪は、彼の腹をボディアーマーごと引き裂き、生きたまま怪物の餌にされた。
ネリス冷静に分析をしていた。何でも、怪物はオーガと呼称されているらしい。
食人鬼。まさにその通りだろう。
目蓋を開け、交信を終了する。
彼の首に掛かったドックタグを外し、ポーチにしまった。
人知れず涙がほほを伝っているのは悲しいからではない。
彼が泣いていたのだ。頭に残った彼の残滓をそっと消した。
そして、ゆっくりと立ち上がる。彼の遺したサブマシンガンを使わせて貰おう。血に汚れているが気にはならなかった。
サブマシンガンは長方形の箱のような形状をしている。抱え込むようにして構える様子から、兵士達の間でヴァイオリンと呼ばれていた。

あまり銃に慣れていない兵士でも容易に扱えるようレシーバーにレーザー照準器が組み込んである。銃口に円筒形の消音器がついているので入っている弾丸は亜音速弾だろう。

両利きで使用できるように排莢は下向きに行われる。注意すべくは自分で出した空薬莢を踏んで転ばないようにすること。戦闘中に転んだら明日の陽は拝めない。

大型の五十発入りマガジンは大容量で嬉しいが装填にはこつがいる。ネリスは過去に何度か使っているので慣れているから問題はない。

スリングベルトを肩に通して銃を脇の下に保持する。

ネリスはホルスターからダガーを抜き、その刃をのぞき込んだ。

煌めく白刃に映った自分の顔を眺める。

髪がだいぶ伸びたみたいだ。最近切るのを忘れていたから。

こんなところで血塗れていなければ、まだあどけない少女のものと変わらない、愛らしい顔立ち。つくづく戦場には似つかわしくないと思う。派手な傷の一つや二つ付いていれば少しは兵士らしくなるだろうが、残念なことにフェイスペイントぐらいしか施したことのない肌は白く奇麗なままだった。

普段から表情筋をあまり使わないため頑なになってしまった表情。当然だ。笑顔で銃は撃てないのだから。

髪でも手向けようかと一瞬逡巡したが、ダガーの柄を握ったところで思い止まった。

相棒がこの髪を好きだといってくれたから――。

『再会と別離』

『再会と別離』

そこは施設の最奥部にある機密区画だった。
戦闘機の格納庫ほどのスペースに何台もの巨大なコンピュータが佇んでいる。据え付けられた冷却装置が低く唸っていた。制御端末の画面の光が、照明の落とされた薄暗い空間を奇妙なコントラストで彩っている。
中央付近に天井まで伸びる円筒形の水槽がある。根本のあたりのガラスが砕け散っていて、中に入っていたであろう物は既になかった。ガラスの破片と共に何かの液体が床にこびり付いている。
そんな異様な空間。
水槽の前でライフルを構えた三人の兵士と白髪の少女が対峙していた。
アサルトライフルの銃口が一糸纏わぬ裸体の少女を睨んでいる。
少女は今にでも発砲しそうな兵士達を前にし、眉根一つ動かさずに平然としていた。
ひたひたと素足で固い床を歩く。確実に少女は兵士達との距離を縮めていった。
「動くんじゃない！」
先頭に立った隊長格らしい男が、銃を少女に向けたまま安全装置を外した。後ろの二人もそれに倣う。
兵士達が少し指を引くだけで、少女は弾丸に体内を蹂躙され物言わぬ死体と化すだろう。
しかし、人工物めいた精緻な美貌は揺るぎなく、月を映す水面のように静かで感情が見えない。少女が放つ雰囲気はあまりに無機質で鋭かった。
髪の毛が漂白されているかのように白く、瞳は透き通ったワイン

のように紅い。起伏の乏しい身体はしなやかなラインを描いている。
勧告に従わないしっかりした足取りに、自殺めいた倒錯感をも感じる。
「構わん。撃て！」
兵下達が一斉に引き金を引いた。狭い空間の中で耳をつんざくような轟音が谺する。
アサルトライフルの銃口で星が断続的に瞬き、弾丸が音の三倍の速度で飛び出す。
銃の扱いに長ける兵士達が目前の的を撃ち漏らすはずはなかった。
少女の薄い胸部を五・五六ミリライフル弾はきわめて正確に穿つ。
兵士達の目に、少女の身体が着弾にあわせておこりのようにびくびくと痙攣するのが映った。肉体から力が抜け、そのまま冷たい地面に幼い躯が倒れ伏す――ことはなかった。
彼女は眉一つ動かすことなく、まるで何事もなかったかのようにその場に立っていた。
少女は胸に穿たれた穴を指でなぞる。桜のように可憐な唇に指先を持って行き、自らの血液を口に含んだ。くちゅり、と不気味な音を立てて赤い体液を咀嚼する。
「うわぁぁぁ！」
得体の知れないモノに対する恐怖に、錯乱状態に陥った兵士達は弾数を気にする余裕もなく、少女に向かって一方的なフルバーストを浴びせかけた。彼女は身を貫く弾丸を物ともせずに兵士達に向かって近接する。
それはあっという間の出来事だった。
少女は兵士の頬にモミジのような掌を添え――その首を無造作に百八十度回転させた。
筆舌に尽くしがたい嫌な音が高らかに鳴り響く。いつの間にか銃声は止んでいた。
ぱっと手を離すと、既に死体へと変貌を遂げていた兵士は力なく倒れ、後ろの床にキスした。

少女はやはりなんの感慨も抱いていない様子で、ただ淡々と死体を見つめている。
「ひぃっ！」
生き残った二人の兵士は情けない悲鳴を上げた。恐怖に駆られて何も対応できずにいる。役立たずのアサルトライフルは弾切れでとっくに沈黙していた。気が付くと少女の両手には二丁の自動拳銃が握られている。兵士達の腰のホルスターがいつの間にか空になっていた。
少女は器用に片手で安全装置を外した。腕を伸ばして拳銃を左右の兵士達の喉元に突きつける。ひたり、と冷たい感触を首筋に感じて二人は身体を硬直させた。
「やめてくれぇ！」
悲痛な命乞い。ぱかん、という軽い発砲音。一発にしか聞こえない銃声が辺りで反響した。
三人分の物言わぬ死体が転がり、赤い水たまりが少女の足下で展開されていった。
「すばらしい」
少女は声がした方向に胡乱な視線を送った。そこには一人の兵士が居た。
初老の男性だった。精悍な顔つき。髪はロマンスグレーに染まり、それほど背は高くはないが鍛え上げられた肉体が威圧感を放っている。おそらくは歴戦の猛者だろう。
兵装はそこに転がっている兵士達の物とは異なり、身をぴっちりと包む特殊スーツとアサルトライフル。いくつかの手榴弾と四十五口径自動拳銃がホルスターに一丁。
少女は冷めた目で男性を見つめた。片手の拳銃を向け、少女はさも当然そうに引き金を引く。
兵士は少女が挙動する前に動いていた。一瞬で少女に肉薄し拳銃のスライドを鷲掴む。　銃口を自分の身体を斜線からずらすと同時に乾いた銃声が響いた。しかし、弾丸は明後日の方向に飛んで征き

無機質な床で跳弾した。スライドが後退しきった状態で押さえているため次弾の発射はできない。
兵士は掴んだ拳銃を少女の手首ごとひねった。少女の手から容易く拳銃をもぎ取る。
直ぐさまもう片方の拳銃を兵士に向けるが、同様の手でいなされてしまった。
少女の貌に初めて動揺の色が浮かんだ。目を大きく見開いて目前の手練れを見つめ直す。
初老の兵士は間合いを開けることはせずにそのまま突っ込んできていた。
少女は兵士の頭部に鞭のような上段蹴りを放つ。兵士はそれを華麗に受け流して、残った軸足をはらう。すると少女の体はすんなりと体制を崩して引力に従い体を沈めた。
受け身もとれず無様に地を転がる。起き上がった時には目の前にアサルトライフルの銃口があった。
「その凝り固まった殺戮衝動を何とかした方が良いな。君は身体能力が高いようだが、それが逆にネックだ。一直線過ぎて読みやすい」
兵士は諭すように少女に告げた。まるで訓練後のおさらいをしているように。
「俺と一緒に来い。俺はラルフだ。そして、おまえの名はツェザリカだ」
ラルフは威厳に満ちた微笑を浮かべていた。
「あたしの名前……？」
きょとんとした表情を浮かべて少女は自分に付けられた名前を口の中で反芻した。
ラルフは銃口を下ろして手を差し伸べた。
逡巡しているかのような時が流れ、少女は唐突にラルフの手を取った。
「行こう」
ツェザリカはラルフの背を細かい歩調で追って行った。

消音されたサブマシンガンが気の抜けた射撃音を奏でる。それが戦闘開始の合図となった。この場の仲間はネリスを含めて四人。近くの事務室で使われていたデスクを使い、狭い通路上にバリケードを構築して怪物の大群と対峙していた。

「生き残りたかったら弾を節約しなさい！」

ネリスはバリケードに身を隠しながらフルオート射撃を行っていた仲間に檄を飛ばす。

状況は圧倒的に不利。横幅が狭いためほとんど弾を外すことはないが、化物達は数で攻めてくる。醜い死体の山がうずたかく敷き積もっていく中、その勢いは一向に減る気配を見せない。

今ある武装は武器庫から調達したサブマシンガンとアサルトライフル。それと手榴弾が数十個。弾数を考えると五分の応戦が限界だろう。

「グレネード！」

ネリスは仲間に注意を促して手榴弾の安全ピンを抜いた。

三秒信管の起動したそれを怪物達の真ん中に投げ込む。

全員がバリケードに身を伏せて爆風から身を守った。弾体が炸裂し閃光と鉄片をあたりにまき散らした。耳鳴りを引き起こすような爆音が腹の底に響く。

破片が怪物達を巻き込んで、肉を引き裂き壁に叩き付ける。

ネリス達は爆煙が晴れる前に身を乗り出して掃射を再開した。

眼前は死屍累々の様相を呈している。にもかかわらず怪物の数が減る気配はいっこうに訪れない。これではきりがない。ここは退却した方が良いだろう。

「後退する！　武装をまとめて三階まで上がるぞ！」

仲間に指示して目の前にまで迫っていた怪物の頭に五・七ミリ弾をお見舞いする。

「走れ！　走れ！」

バリケードから抜け出して階段まで走った。途中何度か振り返りながら追って来る怪物の群れをフルオート射撃で牽制する。もう弾数にかまっている余裕は無かった。

かしゅん、とトリガーから引き応えがなくなって連射が途絶える。見るとシースルーマガジンは弾切れを訴えてきていた。手早い動作で空のマガジンを銃から引き抜き、新しい物をポーチから取り出して差し込む。ボルトハンドルを引いて、弾丸をチャンバーに送り込んだ。しかし、そこに生まれた一瞬の隙に一体の怪物がネリスの喉元を引き裂かんと飛び付いてきた。

銃を構えている暇はない。瞬時に判断して、ネリスは左手でナイフをホルスターから抜き怪物の額に突き立てた。ばぎり、と冷凍庫に何年間も放っておいたチョコレートをへし折った時のような小気味よい音がした。

怪物は悪夢のような悲鳴をあげて絶命する。ネリスの足下にまた一つ死体が転がった。

「へぁ……、ぁは……、はぁ！」

荒い息を吐き出して、血糊を飛ばしたナイフをホルスターに仕舞い、射撃を再開すべく銃のストックを肩に当て引き金を引く。

だが、フルロードのマガジンを入れたはずなのに連射はいきなり途絶えた。

ボルトの閉鎖不良だ。こんな時に動作不良が起こるなんて。見るとボルトが戻りきる途中で止まってしまっている。

「――っ！」

顔が驚愕に歪む。味方はすでに上の階に行ってしまったようで影も形も見えない。つまり援護は居ないのだ。攻撃の手が緩まると怪物たちの勢いは殺しきれない。

肉薄してきた怪物の丸太のような腕が振り下ろされる。ネリスはそれを正面から喰らってしまう。

「っ、がっぁ！」

無様に殴り飛ばされて壁に激突し、擦るように体がずり落ちて床

に倒れた。
怪物は乱杭歯の生えた口を大きく開けてネリスにかぶりつこうとしてくる。
腰の拳銃はもうとっくに弾が切れていた。身体はまともに動いてくれない。
戦士として常に死は覚悟して生きてきた。が、こんな化物に喰われるくらいなら自分で自らの頭を打ち抜いて死にたかった。
しかし、痛みと死は何時まで経っても訪れなかった。
雷の直撃のような轟音が響くと同時に、怪物の頭が熟れた果実みたいに弾け飛んだ。脳漿のかけらや肉片がネリスに降り注ぐ。全身が汚濁した粘液に包まれた。
気が狂いそうになりそうな嫌悪感が背筋を這いずり回り、鳥肌が体中の皮膚という皮膚に展開された。
「な、に……？」
ネリスは一瞬だけ呆然とへたり込み、轟音のした方を見た。
白い少女が立っていた。巨大な銃を平然と構えている。
銃口からもうもうと硝煙が上がっているところを見ると、怪物の頭部を木っ端微塵にしたのはその銃だろう。
二十五ミリ口径ペイロードライフル。
一撃で装甲車を吹き飛ばす威力を持ち、国際条約で対人使用を禁止されている非人道的な兵器だ。
少女はその紅い目をスコープに通し、怪物の群れに向かって速射を開始する。
自分の背丈ほどもありそうなライフルを巧みに操り、迫り来る怪物達を順番にミンチにしていった。銃は次々とエジェクションポートから太い空薬莢を弾き出し、銃口から視界を覆うほどに硝煙を吐き出していく。
その光景は怪物達の虐殺にしか見えなかった。
あるものは胴体から弾けるように身体を引き裂かれ、あるものは頭部を粉々に破砕されて絶命した。よく見ると少女は一発の弾丸で

三体ほどの怪物をいっぺんに貫いている。
五発目をもって少女の虐殺ショーは終幕を迎えた。弾が切れたようだ。しかし、怪物はまだ数体残っている。
ネリスは銃のボルトを力任せに殴ってこじ開けた。
閉鎖不良を解除して再び戦闘に参加する。
少女には負けていられないといった感じに、長年鍛えた正確無比な射撃技術を惜しげもなく披露する。サブマシンガンのレーザーポインターをめまぐるしく走らせ、怪物たちの頭部を目にも止まらぬ早さで撃ち抜いていった。
「こっちだ！」
轟音で麻痺した耳が威厳を感じさせる男性の声を捉えた。
その声には少なからず聞き覚えがある。
脳裏にはある男性の姿が浮かんだが、ネリスはその映像をあわてて打ち消した。
その想像を否定するために声のした方を恐る恐る振り返った。
しかし、甘い希望など容易く打ち砕いてしまうのが現実というものだ。
其処に立っていたのはネリスの師であり、父同然だった男……。
「師匠！」
ラルフ・アーセック。幼い頃のネリスに戦いの術と生きる術を教えてくれた。
再会するのは十年ぶりだろうか。伝説の兵士と呼ばれ、前大戦を戦い抜いた英雄である。
ネリスがこの世で一番あこがれていた人。
彼は自動式グレネードランチャーを装着したアサルトライフルで三バースト射撃を行い、迫り来る怪物達を危なげもなく撃ち倒していた。
ネリスはラルフの横に駆け寄り、フルバーストで弾幕の密度を上げた。
「師匠！　なぜここに？　あなたは……」

「話は後だ。ツェザリカ。上に行くぞ！」
ツェザリカと呼ばれた白髪の少女が巨大な銃を縋り付くように持ち、弾倉の交換を終えたところだった。ツェザリカがラルフの指示を聞いて階段を上っていく。ネリスとラルフも後に続いた。
この施設は衛星に見つからないように地下に埋没されている。
地下一二階まであり、ネリス達が居るのは地下十一階だった。
「脱出するぞ。上にヘリがある。急げ！」
階段を全力で駆け上る。少しでも気を抜くと地下から次々と這いあがってくる怪物に地獄まで連れ戻されてしまう。
ネリスは途中何度も息が上がりそうになる。
そのたびに追いついてきた怪物をフルオートで蹂躙して足の倦怠感を紛らわせた。
平和ぼけというのは怖いものだ。鍛錬を怠っていた過去の自分を叱咤したい。
ラルフは力強い足取りで階段を三段ほど飛ばしながら駆け、ツェザリカは目分量でも十五キロはある銃を抱えて羽のような軽快さで先頭を行く。
ネリスはラルフの背中を見ながら、今すぐにでも彼を撃ち殺すべきかと悩んだ。
そこに私的な感情が含まれていないと言えば嘘になる。
外にはもう車両は残っていないだろうし、彼のヘリが使えないと脱出に困る。
そんな利害関係を持ちだしてネリスは自分の行いを正当化した。
おそらくはネリスの命よりも彼を殺すことは優先されるべき事なのである。
でも、引き金を引くことはできなかった。ネリスは一度上げた銃口を下ろしてしまう。
そんな彼女の心境を見透かしているのかいないのか、ラルフは一度振り返り、
「もう少しで地上だ」

と、言ってきた。ツェザリカはその光景を見ていても始終無言だった。
考えているうちに階層を示す表示の数字はどんどん少なくなっていき、ついには地上に出た。
そこは広々としたドーム状の格納庫のような場所だった。近くに資材搬入用のトラック用のトンネルが通っていて、あたりは停止したフォークリフトや荷解きされていない機材でごちゃごちゃしていた。
隅っこの方に天蓋まで続く長い梯子があった。高さにして二十メートルはあるだろうか。　ネリスは自分が高所恐怖症でないことに心から感謝する。
ツェザリカは誰に言われるのでもなく、またしても先手を切って梯子に組み付いた。
ペイロードライフルはスリングベルトを通して背中に背負っているが、後続のラルフにとっては顔の前にストックが来てかなりの障害になるだろう。あんなでかい銃、置いていけばいいのに。
ラルフは眉根をひそめることもなく黙々と梯子を登っていった。昔から何事も黙ってやる人だった。今でも同じらしい。
こんな事を無意識でも考えるあたり、彼と過ごした五年という短そうで長かった日々は重くのしかかってきている。その辺は深く自覚している。
今ではないとしても、いつか彼を殺せるだろうか？
いつの間にか、梯子を登り切っていた。
先頭のツェザリカは天蓋の重いハッチを開け、ネリス達を太陽の下へ誘う。
ずっと地下勤務だったので久々に見た自然の光は目に染みて、慣れるのに時間がかかった。視力がだんだん戻ってくるとそこはヘリポートだった。足下にHのマークが書かれている。目の前に一機のヘリが駐まっていた。特殊部隊が使う中型の兵員輸送ヘリで、長距離移動用に予備の燃料タンクが外部に据え付けてある。

目をしばしばさせながら太陽を長いこと眺めていたツェザリカがヘリの操縦席に飛び乗った。この少女に操縦できるのかと思ったが、容易くヘリのエンジンがかかり、ローターが指導し始めたところを見るとおそらく大丈夫だろう。いざとなったらヘリの操縦はできる。ネリスとラルフは後部の兵員スペースにドアを開けたまま乗り込んだ。

まもなくして、ヘリは虚空へと飛び立つ。

施設のドームが小さくなっていく。その光景をネリスはドアを開け、手すりにつかまりながら眺めていた。

あたりには見渡す限り密林が広がっていて、施設の他に人工物は見えなかった。

高空の新鮮な空気を肺一杯に吸い込んで、ネリスは振り向く。

彼と話の続きをする決心がついたからだ。

ネリスが今彼を殺さないにしても、彼があの施設にいた理由くらいは聞いておきたかった。そしてこれからどこに向かうのかも。

しかし、彼はネリスのすぐ背後に居た。

口をあうあうさせているうちに、彼はあろう事かネリスを抱きしめてきた。

しっかりとその太い腕を絡めて。

「……師匠？　ラルフ……」

なぜ、彼がネリスを抱いているのか解らなかった。

「すまない」

彼が耳元でささやいたその言葉は過去の行為についての謝罪か。

ラルフは肩に寄せていた顔を離す。

そして、ネリスの眼をじっと見つめてきた。

彼の瞳は透き通るように青かった。

そして彼はネリスから少し距離を置き――銃を抜いた。

「え……？」

彼が安全装置を解除する挙動も、トリガーを引く指も、落ちる撃鉄も。

ネリスには全てスローモーションのようにしっかりと見えていた。
飛んでくる四五口径弾さえもひどく緩慢に。
それがネリスの左目に着弾すると同時に、彼女の躯は弾かれたように
ヘリから高度数千メートルの蒼穹に投げ出されていた。
目下の密林へとネリスはひどくゆっくりと墜ちていく。
そんな様子をヘリから身を乗り出して、悲しげな顔で見送るラルフ・アーセック。
薄れゆく意識の中、ネリスは走馬燈のように彼と過ごした日々を思い出していた。

――あの時、この手を取ってくれた大きな手は、もう、ないのかもしれない。

『漆黒の少女騎士』

『漆黒の少女騎士』

鬱蒼と茂った密林。

過密を極めた木の葉と枝が太陽の光を遮り、木々から放出された水蒸気は霧となってあたりをたゆたっている。大人の大腿ほどもある太い根が辺り一面に張り巡らされ、隆起した岩石が複雑な地形を構築していた。この場の雰囲気を評価するならば、よく言えば神秘的、悪く言えば不気味だ。

齢千年はありそうな大樹の根元に腰掛けている人影があった。

簡単に説明するなら銃を持った戦闘服の少女。詳しく描写するなら、少女が携えている銃は五・五六ミリ口径のアサルトライフル。銃身と並列して四十ミリグレネードランチャー。それに付随したバーティカルフォアグリップ。左右のレイルに高輝度フラッシュライト、光学レーザー照射装置が装着されている。

いくつかの手榴弾が巻き付けられたバックパックを腰に巻き付け、使い捨て式の軽量ロケットランチャーを二本背負っている。身を包むのは四カ所のマガジンポーチを備えた高性能ボディアーマー。グリップに滑り止めナイロンが巻かれた近接戦闘用の大型ダガー。高いストッピングパワーを誇る四十五口径自動拳銃がホルスターに収まり、コックアンドアロックでその出番を今か今かと待ちわびている。

ついつい、不似合いな重武装にばかり目が行ってしまいそうになるが、少女の容貌はそれに劣らぬ存在感を持っていた。はっきり言うと戦場には場違いなものだが、そこでこそ輝くものがあるというものだ。たとえるならば鋭利な刀剣。軍用銃のような、どこまでも攻撃的で純粋な美しさ。そして、儚げ。そんな印象だ。

ケプラーヘルメットの間から伸びた、銀糸のような髪は短く切り

そろえられ、淡い硝煙の香りを纏っている。強い意志を称えた瞳は上質の黒硝子を思わせる。油断なく周囲を見回し、銃口もそれに付き従う。少女の整った顔立ちは使い古された表現を使うとするなら、まるでビスクドールのよう。それに浮かんだ一抹の怯えは絵画にしたならばとても絵になっただろう。

少女は周囲に敵がいないことを確認すると、物憂げにまぶたを閉じた。伏せられた長いまつげは深い嘆息を催す。小柄な肩が大きく上下し、荒くなった呼吸をなだめる。顔色には少なからず疲弊が見られた。

銃口を上に向けたライフルを小さな胸に抱きしめて、少女はつかの間の休息と食事をとる。バックパックから銀の包み紙を取り出して開封する。中身は簡素なクッキー状の軍用携行食が入っていた。それを少しずつ嚙りながら咀嚼し、水筒の中身を流し込む。

味気ない食事でも少女の精神を安定させるには効果があった。レーションにはストレスを軽減させる働きがある。レーションの包み紙をバックパックにしまってから少女はあることに気がついた。

おもむろに自分のライフルを見る。何年も使い込み自分の体の一部にさえなっていた戦友である。傷だらけのフレームには少女の名前が彫ってあった。

（セシリア・ブラウニング）

そこにあった文字の羅列はその様に読めた。

セシリアはライフルのマガジンキャッチに指を掛け、マガジンを銃から抜く。

マガジンの接合部に見えたのは、弾丸が形成するダブルカラムでなく、マガジンフォロアーの頭頂部だった。

つまり、三十発入り箱形弾倉には弾が一発も残っていなかったと言うことだ。

この事実にセシリアは深く息をついた。もし、先ほどの状態で敵に遭遇していたら、ろくな対応ができなかったであろう。残弾数は感覚で熟知していたはずなのに、やはりこの状況ではそれさえも狂

ってしまっているようだ。自分の未熟さに自己嫌悪は加速していく。
しかし、生きなければならない。戦わなければいけない。
セシリアは銃を横にしてチャージングハンドルを引く。薬室に残っていた最後の弾丸が、空中に弾き飛ばされた。真鍮製の薬莢がかすかに光り眼前に落ちてくる。
セシリアはそれを何とも言えない表情を浮かべ空中で掴んだ。
紅葉のように小さな手のひらを開いて、しばらくの間弾丸を食い入るように見つめる。並み居る男達を一瞬で骨抜きにしてしまいそうな熱い眼差しを一発の弾丸は一身に受けた。セシリアは思いを定めるようにもう一度弾を握りしめ、ボディアーマーの胸ポケットに入れた。マガジンポーチから新しいマガジンを取り出す。三十発の弾丸が詰まったマガジンをライフルに叩き込み、チャージングハンドルを引き、ぱっと離す。初弾が薬室に装填されると、手のひらでボルトフォワードアシストを押し込み、動作不良を起こさないように閉鎖する。今まで何千回とこなしてきた動作を無心で行う。月を映す水面のようにセシリアは淡々と準備を済ませた。しかし、その水辺に微かな細波が立っていることを彼女は理解していた。銃を操作するたびに響く澄んだ金属音は、静かで暗い密林に響き渡っていった。
セシリアが属する王室親衛騎士団――通称ブラックナイツが女王の勅命を受け、グラネイ空軍基地を飛び立ったのは今から約二時間前のことだった。任務内容はバイオハザードを起こした軍立研究所の事態鎮圧、それができない場合は施設の破壊を実行すること。しかし、彼女達ブラックナイツが搭乗した武装ヘリは研究施設へと急行する途中に何者かの攻撃を受けた。飛行不能に陥りながらもこの樹海に不時着できたが、それからが地獄だった。そのすぐ後、体制も整わないうちにブリーフィングで聞いていたオーガと呼ばれる生物兵器達に取り囲まれてしまう。負傷者を抱えながらも、不慣れな敵を相手に孤軍奮闘したが、部隊は散り散りになり、ほかの隊員の生存も確認できていない。

若くしてブラックナイツの騎士長であるセシリアには、今すぐにでも頭を撃ち抜きたくなるような失態である。しかし、それを実行しないで未だに生きているのは、一人であろうと任務を実行しようという使命感と、女王に対する忠誠心が彼女の暴走しがちなプライドを押さえていた。

グレネードランチャーのアルミニウム製の銃身を前方にスライドさせて、信号弾を装填する。通信機は先ほどの戦闘で落としてしまった。これで隊の生き残りが答えてくれたらいいのだが。セシリアはライフルを上に向け、太い銃身とマガジンに手を添え、グレネードの安全装置を外した。見上げると、そこは生い茂った木の葉や枝で覆われていて、空を仰ぐことはできなかったが、うまく隙間に撃ち込めば上まで突き抜けるだろう。

密林のどこかに味方がいれば音で気づく。それに、この周辺は特に木々が密集している地帯だが、ヘリから見たときはもっと樹が少ないところもあった。そこからなら信号弾の光を見つけてくれるだろう。

引き金に指をかけると、ヘリコプターのエンジン音が見えない空から降り注ぎ、密林の静寂を破った。セシリアが身を縮めてその音に傾注していたとき、視界を覆う木々のアーチからバキバキバキ、とすさまじい破砕音が発せられた。

「あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁぁ！」

セシリアは職業柄、不足の事態への対処能力が並外れて高い。しかし、状況も状況。肉体が疲弊して判断力が鈍ったのかもしれない。その落ちてきた物体を視認することはできたが、反応するにはコンマ一秒ほど遅かった。

「きゃぁ！」

セシリアは恥ずかしいぐらいに可愛らしい悲鳴を漏らして、落ちてきた物体を全身で受け止める羽目になった。

それが人間で、セシリアに直撃するコースをとっているとは想像できなかった。さらにそれが見知った顔だったなんて想定したくも

なかった。
ものすごいジュールをもってセシリアを押しつぶした少女は地面に転がり、何度かうめいた後、動かなくなった。
セシリアは痛い目にあったがなんとか無傷で済んだ。バックパックがクッションになってくれたようだ。
「ネリス！　貴様、何で空から落ちてきた！」
セシリアは怒りにまかせて、倒れた少女の襟首を掴んで引き起こした。しかし、それもネリスの惨状を確認すると、目をそらさずにいられなくなってしまう。
枝に何度も当てられてきたのか全身のところ余さず、酷い打撲痕や擦過傷ができている。
そして、左目は銃創が確認され、眼球は潰されていた。
弾丸が脳に向かわず、こめかみから抜けたおかげで九死に一生を得たらしい。
全く、悪運のいいやつだと呆れたセシリアは、その美しい柳眉を顰めた。
「おい！　何があった！」
セシリアはネリスに息があることと、眼球以外の部分の怪我は大事ではないことを確認してから、少し強引に問い詰めた。昔からこいつのことは好きになれない。
「うぅぅ……なんで……。……ラルフ」
そのか細い声をとらえて、セシリアは目を大きく見開いた。
「貴様、ラルフ・アーセックに会ったのか！　今回の事態は彼奴が！」
さらに力を込めて胸ぐらをつかんで暴力的に揺さぶるがそれきり、ネリスは黙ってしまった。
「くそ……」
プライドにまた泥を塗るが、ここは撤退する他なるまい。こんな荷物ができては任務どころではない。隊員を失ったのも自分の不始末。営倉入りも、自害さえも覚悟の上だ。

「とんだ災厄が降ってきたものだ、なぜ私がこんなやつ……」
ネリスの身をくの字に折って背負う。不思議なほど軽かった。絶え絶えの呼吸を繰り返して、静かにセシリアに身を預けている。
周辺の地図を頭に思い浮かべ、完璧に把握している方角と照らし合わせて、この樹海を抜ける最短コースを割り出す。
「こんな状態でオーガに襲撃でもされて見ろ、生きることに折り合いをつけるぞ」
冗談めかして、そんなことをいう。しかし、事実は小説より奇なり。
前方約二百メートル。少し樹が開けたところに斥候らしきオーガの姿があった。セシリアの黒い瞳と、オーガの紅い目がしっかりと空中で合致した。
ああ、私のところにも死神が来たようだ。
斥候オーガが背筋の凍るような禍々しい雄叫びを上げた。それがあたりにこだまし、徐々にその数が増えていく。群れの本流が到達するのにそう時間はないのだろう。
「くそぉ！」
今日悪態をつくのは何度目だろうか。役立たずのネリスを脇に転がし、この事態に対する対処法を瞬時に構築する。といっても、大して方法はない。ネリスを餌にして自分だけ逃げるという選択肢は上位に入れておこう。
セシリアはスリングで肩に掛けていた軽量対物ロケットランチャーを手に持ち、後部の安全ピンを引き抜き、カバーを開け放って中からコンテナを引き出す。フロントサイトとリアサイトを立ち上げて、本体後部の伸張した部分を肩に乗せる。目標に砲口を照準し発射ボタンを押し込んだ。
「バックファイア！」
鋭い発射音と共にランチャー後部の排炎口から大量の発射炎が吹き出る。前方に射出された形成炸裂弾頭はロケットにより自ら推進し、最大加速点に到達。オーガ達の群れが集結しつつある場所に正

確に突撃した。弾頭内部の形成炸薬が激発し、鮮やかな炎が数体のオーガを飲み込む。一瞬のタイムラグを挟んで爆音と衝撃波がセシリア達まで届いた。

「逃げるぞ！」

セシリアは用済みのランチャーを捨て、ネリスもついでに捨てていこうかと一瞬逡巡した後、仕方なく背負って走り出した。爆風に煽られて激昂したオーガ群れは、セシリア達を本能のままに引き裂くべく紅い目をぎらぎら光らせて、犬のような四足歩行で疾駆していた。まだかなりの距離があるが追いつかれるのも時間の問題だ。

複雑な地形が荷物を背負ったセシリアの足を掬い、急速に体力を奪っていく。それでも止まるわけにはいかなかった。

「重い！　貴様、降りて走れ！」

それでもネリスは蚊の泣くような、肺から空気が漏れただけのような呻き声を上げるだけで、とても自走できるような状況ではなかった。

「この疫病神！」

ネリスに罵声を浴びせ、手榴弾をバックパックから取り出し、口でピンを抜き取る。特に狙いもつけないで後方に投擲。樹の根が形成する狭い地形だ、どこに投げても当たる。セシリアは走る足を一切休めないでさらに二、三個の手榴弾を追尾してきているであろうオーガの群れにプレゼントする。後ろを振り向いている暇もない。面妖な獣の咆哮が徐々に肉薄してきているのが分かる。

やがて、林立する木々の数が少なくなっていき、光が差し込んできた。

オーガ達は光を浴びると灰となって崩れ落ちる――ならどれだけ楽なのだろう。

鬱陶しい樹木の閉鎖空間から抜けたセシリアはその美貌を大きく歪めた。表情筋が意識してやったことではないのだろう。その力の正体は絶望といったら説明がつくのだろうか。

「今日という日を呪うよ……」

そこは断崖絶壁の行き止まりだった。切り立った崖の下は落差百メートルぐらいあろうか。　地平線の向こうまで、もういい加減に見飽きた樹海が広がり、所々で『三百年前の白』以前に建造された遺跡群が摩天楼を形成していた。いい景色だ。こんな場所で食事でもしたらどれだけ気持ちの良いことだろうか。樹海と絶壁の間に設けられた、猫の額ほどの狭い円形の空間はまさにディナーの乗ったテーブルを連想させられる。生憎、テーブルにのっているのはセシリアとネリスの方だろうが。

オーガの群れはもう追い詰めたとばかりにセシリア達を半円形に取り囲み、なぜか即座に飛びかかってくるようなことはせず、じりじりとその距離を縮めていた。

セシリアはネリスを背から下ろし、深く嘆息をついた。

「これ、借りるぞ」

ネリスが持っていたサブマシンガンを肩に掛ける。そしてアサルトライフルを構える。

「私はテネジア王国、王室親衛騎士隊、騎士長。セシリア・ブラウニングだ！　私を喰らいたくば、どこからでもかかってこい化物ども！　貴様等の腹の中で五臓六腑を切り裂いてくれる！」

セシリアは先頭に立つ一際体躯の大きいオーガを睨み付けた。その眼は、死を覚悟したもののふの眼だった。

悲壮を背に負い、絶望を孕む。誇りを身に纏い、破壊の剣を振るう。

先頭のオーガが吠えた。それと同時に右翼左翼に分かれたオーガ達がセシリアに向かって一斉に飛びかかった。セシリアはそのすべてを双眸に捕らえ、正確無比な掃射で五体のオーガを撃墜した。だが、すべてを撃ち抜いたわけではない。残っていた一体の、まるで鎌のようなかぎ爪がセシリアの胸を引き裂かんと振り下ろされる。その斬隙を特殊合金製のライフルのフレームで受け止める。ものすごい膂力にライフルと腕から下の肉体がぎりぎりと悲鳴を上げた。

「この、雑魚が！」

セシリアはオーガを片手で押さえつけ、もう片方の手で脇から下げたネリスのサブマシンガンを操り、弾丸の雨を浴びせた。腹部を蜂の巣にされた切り込みオーガはその巨躯を大地に横たえた。第一波を剿滅すると空かさず第二波が襲ってくる。左の団体をサブマシンガンで牽制し、正面で一際大きなオーガを守るように立っていた二体にライフルグレネードを撃ち込む。爆風に煽られてたたらを踏んだ左のオーガをライフルで射殺。襲いかかるオーガの爪をまるで倒れ込むようにして避け、低い体制から拳銃を抜いて三発撃ち込む。

すでに生きた心地はなかった。アドレナリンが過剰放出された脳は若干の麻痺を始め、オーガの爪が身体をかすっても痛みを感じることはなかった

「私に触るなぁぁぁ！」

ライフルを向け、引き金を引き放つと手応えが返ってこなかった。弾切れだ。

化物に肉薄し、抜き身のナイフでそののど笛を掻き切った。吹き出す大量の血液を浴び、阿修羅姫は狂おしく舞う。

一度、ネリスの近くまで下がる。オーガ達は数を減らしていたが、まだ五体いる。セシリアは最後のロケットランチャーを構え、先頭のオーガに向けて発射する。限界起爆距離ぎりぎりでの炸裂に辺りが煙に包まれ視界が効かなくなった。

「やったか！」

息を整えて拳銃とナイフを同時に構える。粉塵は収まらず戦果を確認できない。

そのとき、周囲に転がっていたオーガの死体の一つが動いたことにセシリアは気づけなかった。それが背後から襲いかかってくる。

「うがぁ〝っ！」

まだ息のあったオーガが、最後の力を振り絞ってセシリアの肩にその乱ぐい歯を深々と埋めた。あまりの激痛にうずくまり、噛みついてきたオーガの頭を狂ったように拳銃で何度も撃った。それでもオーガの牙はセシリアの肩から外れなかった。ナイフを何度も振る

い、オーガの分厚い首の肉や骨を切り裂き、胴体と泣き別れさせた。どさり、とオーガの身体が地に墜ちる。だが、セシリアの肩には頭部が怨念のごとく噛みついたままだった。

それでもセシリアは立っていた。満身創痍となりながらも拳銃を構え、右肩には野蛮な民族の装飾品のようにオーガの首が噛みついたままなのに握ったナイフは放さない。

だが、限界だった。目の前にはオーガのリーダー格が毅然として立っていた。そして、爪を振り上げる。

もうだめか。

自分は最後までこの世界にとっての不要品だったのか。幼い頃、親にこの身を売られ、戦場でチャイルドソルジャーとして生きた。武勲をたてブラックナイツの騎士長にもなった。だけど、それでも満たされなかった。自分が望んでいることさえも分からず、己の存在価値を知るためにただ戦ってきた。戦火に身を投じることで孤独をかき消そうとしていが、これがその終焉か。

そのとき、今まで気にしていなかった、周囲の音が鮮明に蘇ってきた。バタバタバタと羽ばたくような轟音だ。それに混じって人の声も聞こえた。

「伏せろ！」

セシリアはその声に従い、匍匐の要領で倒れ込むように大地に身を任せた。

直後、眼の前の大地が小刻みに土煙を噴き上げながら抉れていった。それが帯状にたゆたってオーガ達を飲み込んでいく。大蛇のような帯状の破壊は、オーガの肉体を暴力的に穿ち、ばらばらに分解した。肉塊が飛び散り、血の霧があたりに立ちこめる。オーガ達の悲鳴は爆音に霧散し、後には静かな景色が残った。無論セシリアの背後ではバタバタとやかましい音が鳴りやむことはなかったが。

セシリアは首だけを後ろに向けてその機影を確認した。複座式の対戦車攻撃ヘリがホバリングしている。機体にペイントされた部隊マークは漆黒の荒馬を模したもの。テネジア軍のブラックナイツ所

有機体だ。左右のスタブウィングにはヘルファイアと呼ばれる対戦車ミサイルを計一六発ぶら下げている。ヘルファイアは一発で一般的な戦車を過剰破壊できる非常に強力なものだ。さらに機体前方下部に搭載されているのは三十ミリチェーンガン。オーガを皆殺しにしたのはおそらくこれだろう。前大戦ではこれ四機で一個大隊クラスの機甲部隊を殲滅したという驚異的な実績を持つ最強の戦闘ヘリだ。

コックピットが開いていて、そこからヘルメットをかぶった青年が身を乗り出していた。

「二人とも無事か！」

「クライブ！　恩に着る！」

クライブ・ストーナー。ネリスと同じ傭兵隊に所属する兵士だ。クライブはヘリを断崖のぎりぎりまで近づける。セシリアはネリスを背負い、前席に飛び乗った。普通このヘリは操縦を請け持つパイロットと、兵装操作を受け持つガナー二人で運用されるが。ガナー席である前席にはなぜか誰も乗っていなかった。セシリアは邪魔だとばかりにネリスをクライブの座る後席に放り込んでガナー席に就いた。クライブは膝上にネリスを座らせて、少し窮屈ながらもヘリを操縦して高度を取った。

「二人とも酷くやられたな。大丈夫か？」

普段は軽薄な男だがネリスとセシリアの惨状を見て、呟く声はいつになく真剣になっていた。特にネリスはクライブのバディだ。本来ならネリスと任務を共にしていたはずだが、偶然、首都の本隊に呼び出しを受けていたため研究所の事件に巻き込まれることは無かった。

「大丈夫な訳がないだろう。今にも気絶しそうだ。早く帰って取ってもらわないとな。感染症でも持っていたら事だ。まったくついていない」

「ネリスはともかく、おまえは元気そうだな」

クライブの膝に座っている、左目を失ったネリスを見る。どうや

ら熱が出てきたようだ。頬を赤く染めうなされていた。
「そんなやつ放っておけ。それより、これで任務が果たせそうだ。クライブ。研究所に向けてヘルファイアを撃ち込む。ありったけだ。射程範囲内まで飛んでくれ」
「ああ、了解」
前傾姿勢を取った攻撃ヘリはターボシャフトエンジンを唸らせて加速を開始する。さほど時を待たずに研究所を視界内に捕らえた。
「地下部分の完全破壊には至らないだろうが、地上施設を破壊するだけでも始末はつくだろう」
ガナー席のセシリアは慣れた手つきでディスプレイが搭載された兵装システムを操作し、ミリ波レーダーで目標を識別、補足する。
「ヘルファイアミサイル発射」
セシリアが静かにつぶやくと、攻撃ヘリから一斉に射出された十六発にも上るヘルファイアミサイルは、放物線状の軌跡を空に描いて目標の研究所地上施設に着弾。まるでこの世の終わりのような大爆発が起こり、周辺に残っていたオーガと共に研究施設は文字通りの地獄の業火に沈んでいった。

『亡霊と不沈空母』

洋上を征く一つの機影があった。
タンデムローターの中型輸送ヘリは、海面ぎりぎりを滑るように飛翔している。
操縦席では白髪の少女がスティックを握っていた。
「もう、後戻りは出来ないよラルフ。貴方は今再び、終焉りを始めてしまったのだから」
ツェザリカは振り返ることもなく、後部キャビンに居るラルフ・アーセックに向けて語りかけた。ラルフは脱力するように座席に腰掛け、握った四十五口径の拳銃を喰い入るように見詰めていた。足下には、まるで取り残されたように、空薬莢が一つ。ぽつりと転がっている。
「覚悟は五年前に決めたさ。この絞り粕のような世界に、最期に遺ったモノ総てを壊す。だが、俺は鬼になりきれるだろうか。今更良心が痛むなどと言うつもりはない。だが、ネリスを撃ったとき。少しだけ手元が狂った。あいつは……まだ生きているだろう。俺の事を覚えているだろう。俺がまだヒトだった頃の記憶を。今は、それだけが、こわい」
威厳ある壮年男性の声音が、少し不安げに揺らいでいた。彼はそう言って、物憂げに口髭をなぜた。
「私はあなたの望む堕天使を演じるから。あなたはあなたが望む悪魔を演じきって」
紅い瞳は遙か向こうの紺碧を凝視していた。一体どのような征く末が見えたのか。きっとツェザリカは何の感慨も抱いていないのだろうが、ラルフはその横顔を黙々と見詰めることしかできないでいた。
「どちらにせよ、俺はトリガーを引いてしまった。既に激芯は雷管を叩き、弾丸は銃身から飛び出そうとしている。後は突き進むしか

ない。何もかも、置き去りにして……」
彼にはすべての罪を背負う覚悟があった。もはや後悔すらも赦されない。だとしたら、この喪失感と寂寥感すらも、ヒトとして甘受する権利は無いのだ。
【こちら空母ノア。そちらの機影を確認した、着艦を許可する。ラルフ・アーセック。貴殿の乗艦を歓迎する。――飛行甲板にて総統がお待ちです】
「了解、これより着艦する」
水平線上に航空母艦の巨大な艦影が見えてきた。ツェザリカはその航跡を追う様に進路をとる。
「空母ノアか……大戦末期の亡霊が、まだ洋上を彷徨っていたとはな。随伴艦の姿が無いのは妙だが」
四百メートル級の正規航空母艦が海洋に白い軌跡を描いて航行している。
飛行甲板には多くの人影があり、だが艦載機の数はまちまちだった。ツェザリカが慣れた手つきで着艦を済ませると、軍服を纏った兵士達が儀装銃を持って出迎えてきた。
その中央を威風堂々とかきわけて歩んでくる二人の軍人。一人は金髪を肩口までなびかせた長身の男で、年の頃はまだ若く二十代中頃に手が届くかどうか。だが、険の深い精悍な顔立ちに、猛禽を彷彿とさせる鋭い目付きは、彼が歴戦の兵士であるということを物語っていた。帽章と制服から察するに彼は親衛隊の者だろう。
もう一人は、その堅苦しい軍服が似つかわしくない、小柄な少女だった。身長はそれほど低いわけではないのだが、身体を構成する部品のひとつひとつが規格より小さい。
栗色のセミロングはくせっ毛。碧緑の双眸はまだ澄んだ色をしていて、おそらくヒトを撃ったことは無いのだろう。腰に下げたサーベルと拳銃は、お守りというよりは重りといった方がしっくり来そうだ。その表情は緊張の為かいささか硬いが、まだあどけない少女の面影を色濃く残していた。

「ようこそ！　ヴィスタ海軍、第二四独立機動艦隊、旗艦――空母ノアへ！　そして、私がこの国の総統を襲名している、アイリス・ヘッケラーだ。この艦は我々に遺された最後の領土であり、暫定首都である――ようこそ、ヴィスタ共和国へ！」
　アイリスはいくらか舌っ足らずな口調で、仰々しい文言を高らかに唱えた。両手を広げて、黒衣のマントを誇らしげにひるがえす。それに呼応するかのように、艦橋に掲揚されたヴィスタ国旗『眺望する眼』が海風に吹かれて大きくたなびいた。
「私はガーランド、階級は大佐だ。この船の艦長代理を、閣下より拝命している。まずは迎えも出さなかった非礼をわびよう。できることならば護衛機を出したかったのだが、稼働機はあまり多くないのだ」
「いえ、我々のような傭兵風情にこのような歓迎。身に余る光栄と存じ上げます」
「貴官らの助力のおかげで、我ら同士達の悲願を、実現に向かわせることが叶う。礼を言うのはこちらの方だ。Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏの惨劇以来、国土を完全に失った我らヴィスタの民は、洋上を亡霊の如く放浪し、ずっとこの時を夢見て戦ってきた！　凍り付いた母なる大地を、再び我らの手に取り戻すのです。たとえ、どんな犠牲を払ってでも！」
　アイリスは何かに誓うように掲げた手のひらを、眼前で強く握りしめて見せる。
「閣下、一つ拝聴してもよろしいか」
「……かまいません」
「――何故、Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏを引き起こした張本人である私を雇い入れたのですか？　私はいわば、ヴィスタ国民からすれば亡国の大罪人です」
　ラルフはまるで挑発するかのように、アイリスを試すように視線を這わせた。
「確かに、貴公は、今もあの地に眠る多くの同胞と――父の仇です。

けど、そんな事は些末な問題。もはや貴公一人を血祭りに上げたところで、我々は浮かばれないのです。失われた命の数と同等の血を、いや、それをあがなって余りある血を流さなければ、我々に刻まれた呪詛と怨念は静まってくれない。それほどの深い憎しみに囚われてしまっているんですよ。我々は、もう戦鬼としてしか生きられないのです」

アイリスは熱っぽく狂態を演じて見せたが、ラルフはその碧緑の双眸に深い悲しみの色を見逃さなかった。かつてのネリスやセシリアの中には見いだせなかった、使命感のようなモノをアイリスは内に秘めていた。彼女はおそらく、それに囚われている。これも、自分が引き起こした罪の破片。それが深々と突き刺さろうと、彼は歩みを止めるわけにはいかないのだ。

「気に入った。アイリス・ヘッケラー総統！　私の持ちうる全ての武を提供しよう！」

ラルフ・アーセックはまるで悪魔のように嗤って見せ、少女の華奢な手を握った。

「お力添え、感謝いたします」

声はか細いながらも、力強い手応えが返ってきた。

「各地に散った同志達も行動を開始している。いずれ艦隊に合流するだろう」

そう言い放って、少女は黒衣をひるがえした。

「細かい軍議はＣＩＣ（戦闘指揮所）で行おう。こっちだ、案内する」

ガーランド大佐はそれに付き従うように、アイリスの隣に控えた。

ツェザリカはそのやりとりに口を挟むことも無く、ただラルフの傍らに寄り添い、茫洋と成り行きを見守っていた。彼女は誰に聞かせるでも無く、小さく何かつぶやいていた。

この世界の神様は、ヒトによって生み出されました。

だから、神様はヒトを愛していました。
終わる事の無い命の中、神様は思いました。
こんなにも愛おしいモノが、どうしてこんなにも哀しく、愚かしく、醜いのか。
自分の存在が矛盾しているとわかりきった上で、神様は骸を掻き抱いて泣くのです。
どうして、どうして、こんなモノを愛してしまうのか。
ユガミは、すぐそこまで来ていました。
もう、止める術など無いのかもしれません。
せめて、その終わりが安らかでありますように。
そして、もう二度とそれが始まらないことを祈り続けて……。

それは少女神信仰にある、神話の一節だった。
「何をしているツェザリカ、置いていくぞ」
「……待って」
ツェザリカの目前で、アイリスは肩越しに振り返り、視線を這わせた。そして彼女は不敵に嗤ってみせる。黒衣をたなびかせ、孤高の道を歩くかつての独裁者。亡霊に取り憑かれたまま、絶望の淵であえぐ少女の姿だった。

「――さぁ、征こうか」

「閣下、これで、本当に、よろしかったのですか――？」
アイリスはガーランドの耳打ちに、嘆息するような声で応えた。
「いいんだ、これでいいんだ、もう」
「皆、死にますよ」
「ああ、そうだな」

「私は、何処までも、お供いたします」
「それで、いい。――今はそれで、いいんだ」

第二章　照準

「しかし……、これは面倒なことになりましたね」
淡い月明かりが差し込む夜の樹海。現実味に欠けた薄藍色の大気が静謐な空間に満ち溢れていた。この息を呑むような景観に、誰が先日の惨劇を思い渡すことができただろうか。
一際、月光が映える広い空間。其処には確かに戦いの痕跡が残っていた。それは一見、周囲に点在する枯れた巨木と見分けが付きにくい。
大型の重装強襲兵員輸送ヘリが周囲の樹をなぎ倒して大地に横たわっていた。胴体は殆ど原型を留めているものの、タンデムローターのブレードはまるで針金のようにひしゃげ、攻撃を受けた前後の機関部には無数の弾痕が残っている。
最大積載量十一・三トン、最大搭乗人数六十五名という驚異的な輸送能力を確保する太く左右に迫り出した胴体には、漆黒の荒馬を模したブラックナイツの部隊マークが誇らしげに描かれていた。
月華に立つ少女はその絵柄を感慨深げに撫でる。
身に纏うのは純白のレースで飾られた漆黒のアンティークドレス。スカートのスリットからは芸術的な脚線が垣間見える。見事な造形の輪郭に、群青の瞳と朱を引く唇。白く華奢な四肢。すらりと筋の通った背中には艶美な黒髪が流れている。
その姿にセシリアは見とれてしまっていた。
もちろん、周囲への警戒を怠ることはしなかった。女王陛下の御前。黒の儀礼服で身を固めているが、しっかりとライフルで武装している。背負った黒金は確かな存在を訴えてくるため物言えぬ安心

感が伴うのだ。騎士として女王陛下を護衛することに誇りと喜びを感じる。
「先ほどの報告は確かなのですか？」
　オリヴィアは振り返ってセシリアに問う。少し面を喰らってしまったセシリアは、それでも資料を手に事務的に返事を返した。
「はい。私が搭乗していたヘリに撃ち込まれた弾丸ですが、十五・二ミリ翼安定徹甲弾だということが判明しました。これは我が軍で採用されているどの対物狙撃銃にも使用されていません。データベースに照合したところ、翼安定徹甲弾を採用しているライフルはソレイユ軍のＩＷＳ２０００だけでした。弾頭に残った旋条痕も同銃と一致します。……陛下。今回の事件にソレイユ連邦の関与が疑われるのでは……」
「この件に関しては慎重に事を進めなければなりません。たとえ、これがソレイユの我が国に対する牽制だとしても手口が露骨すぎます。まるで誰かがソレイユ軍の仕業に見せかけようとしているようではないですか。また、その裏もあり得ますが……」
　テネジア王国がソレイユ連邦と停戦協定を結んでから五年。未だに両国間での緊張は緩和されていなかった。この場所は国境沿いの緩衝地帯に近いため、対応を間違えれば戦火の火種に油を注いでしまう事にもなりかねない。オリヴィアは今後の外交政策について思考を巡らせる。小規模とはいえ、研究所の後始末に軍を派遣してしまった。これではソレイユに警戒心を抱かせてしまう。そもそも、あのような施設を今まで野放しにしていたことが何よりの失態か。しかし、前王の時代から秘密裏に行われていた研究らしく、オリヴィアが実態を把握したのはつい最近のことだったのだ。
「叔父上は何処にいるのですか？」
「閣下は陣でオーガ掃討作戦の指揮を執っておられます」
「では、ここへ連れてきてください。その後の指揮はあなたに任せます」
「Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ！」

セシリアが慇懃に最敬礼をして、将軍の元へ向かおうとオリヴィアから離れた時。まるで待ちかまえていたかのように一体のオーガが茂みから飛び出した。研ぎ澄まされたかぎ爪がオリヴィアの白磁のような肌を切り裂かんと振り下ろされる。

「陛下！」

ライフルを構えている暇はない。セシリアは腰の拳銃を抜く。しかし、鈍い痛みが肩から発せられ指先に到達した。先日、オーガから受けた傷がこんな時になって疼いたのだ。グリップを握り込めず、痛みで照準がぶれてしまう。狼狽したセシリアは銃を持ち替えようとしたが、既に遅かった。

世界から音が消える。

「全く……無礼な化物ですね」

オリヴィアの華奢な手には巨大なリヴォルバーが握られていた。五十口径のハンドキャノンだ。一つ一つのパーツが規格違いに大きく、強化ステンレス製のフレームは禍々しい白銀の光沢を放っている。

まるで恐怖を感じていないかのように、オリヴィアは肉薄してきた怪物の頭部に銃口を突きつけた。通常の拳銃より遙かに重いトリガーをひと思いに引き切ると、シリンダーが弾丸一発分回転して撃鉄が雷管を叩く。薬莢内に納められた大量の白色火薬に引火し、シリンダーギャップから吹き出る延焼ガスの衝撃波がオリヴィアの艶やかな黒髪をはためかせた。

五十口径の重い弾丸が四インチの短い銃身内を通って射出される。コンペンセイターのスリットから上方に発射ガスを逃がして銃口の跳ね上がりを抑制するが、それでも拳銃の中で最強の威力を誇るマグナムリヴォルバーの反動は殺しきれない。

見えない巨人に蹴られたかのような衝撃がオリヴィアの肩を襲うと同時に、七・六二ミリ口径のライフル弾に匹敵する運動エネルギーを持つ弾頭がオーガの頭部に易々と進入した。木っ端みじんに破砕された眼球や脳漿の破片が弾頭の飛翔コースに沿って盛大に撒き

散らされる。中枢を失った哀れなオーガはそのまま引力に従って地面に墜ちて動かなくなった。
衝撃波と轟音が辺りに反響し、止まった時間は再び流れ出す。
「ご無事ですか！」
セシリアは慌てて駆け寄る。自分の不甲斐なさに泣きたくなってきた。
「大丈夫です。それよりセシリア。あなたの方が心配です。先日の傷が未だ治っていないのでしょう？　私が無理を言って前線に出てきたのがいけなかったのですね」
オリヴィアは慈しむような視線をセシリアに向け、硝煙沸き立つリヴォルバーを大腿のホルスターに戻す。
「陛下……申し訳ありません」
セシリアは跪いて頭を垂れた。
「いいのです。ここの処理はトムに任せて、あなたはグラネイ基地に戻ってブラックナイツの指揮をしていてください。私は少し考え事が有るので護衛は結構です」
「御意」
セシリアがその場を後にすると、残されたオリヴィアは再びヘリの残骸を見つめ、憂鬱そうなため息を吐いた。
「一体、あなたは何をなさろうとしているのですか。ラルフ・アーセック……」
その呟きは予兆の空へと静かに融けていった。

ＡＷ（Ａｆｔｅｒ　ｗｈｉｔｅ）３１５年。テネジア王国。
王宮に隣接するグラネイ基地は戦後以来続く不完全な平和に包まれていた。
ここは三千六百メートルの滑走路四本と、兵器開発実験工廠を有する国内最大級の軍事施設だ。対空砲やフェイズドアレイレーダーが空を睨み、滑走路脇ではスクランブル発進に備えて戦闘機達が銀

翼を休めている。孤高の鷲を象ったテネジア国旗が管制塔に掲げられ、緩やかな南風になびいていた。
傭兵隊所属のクライブ・ストーナーは軍用車両を駆って広大な敷地内を疾駆していた。
森林迷彩の施されたハンヴィと呼ばれる装輪装甲車だ。全長は約五メートル。横幅が約二メートルとかなり広く、運転席と助手席の間に子供が二人座れてしまうほど。優れた機動性を持ち、例え一輪がパンクでも時速五十キロ弱、二輪がパンクしても時速三十キロで走行可能だ。無駄がない形状の強固なフレームを備え、不整地や急斜面でも容易には走行不能に陥らない様に設計されている。また渡河も深さ一メートル強までならば可能であり、装備を換装することにより様々な場面で使用できる万能車両だ。ハンヴィはグラネイ基地の傭兵隊に支給された唯一の車両である。しかし、現在この基地に配属されている傭兵はクライブとネリスだけになっていて、ほとんど二人の専用車となっていた。
いつもは助手席に座って居るか、屋根の上に搭載された十二・七ミリ重機関銃の面倒を見ている相棒はそこに居ない。
「まさかネリスが負傷するなんてな」
長いことネリスとバディを組んできたが、思い返してみても彼女が負傷したことが一度でもあっただろうか。いや、無い。重武装をしたテロリストを相手にしようが、年に数人は死者が出るという過酷な訓練を重ねようが、何人たりともネリスにかすり傷一つ付けることさえ叶わなかったのだから。幼少の頃から戦火に身を投じ、天才的なその戦闘センスから兵士達の間で神童と呼ばれ、畏怖と敬意の狭間で生きた戦いの申し子。
正直、慰みの言葉の一つもかけるべきかと悩んだものだ。
左目以外の怪我はそうでもなかったらしく、今は傭兵舎で待機しているらしい。
クライブはあれから数日間ずっと事件の後始末に駆り出されていたため、基地に戻ることはできなかった。

しばらくすると滑走路は途切れ、巨大な格納庫の林立する区画にさしかかる。物資を運ぶトラックを避けつつクライブは装輪車を走らせた。そこを抜けると今までちらちら見かけた整備やら補給やらの非戦闘員の姿もめっきり少なくなってくる。ライフルを背負った基地警備兵に挨拶を交わしてさらに奥へ。基地の敷地が途切れる辺り。有刺鉄線が巻き付けられたフェンスが視界の右から左へ流れている。場所的には隣接する陸軍の練兵場が近い基地の外れも外れ。

そんな所に古びたコンクリートの建物がぽつりと佇んでいる。三階建ての無骨な作りで入り口が正面に一つあるだけ。後は窓もベランダもない。その代わりに妙にのっぺりとした屋上があって、ホロのかかった六銃身防空機関砲がその場を占領している。

周り一面育ててもいないのに成長に成長を重ねた雑草が繁茂し、棄てられて錆び付いた重榴弾砲の砲身が転がっていた。建物脇の駐車スペースだけは雑草が装輪に踏みにじられて、わだちにそって地面が顔をのぞかせている。

クライブは装輪車を停車位置に駐める。屋根の上に登って重機関銃から徹甲弾の入ったボックスマガジンを取り外して銃架から降ろす。銃本体だけでも四十キロはある鋼鉄の塊を肩に載せて屋根から降りると、それを近くに敷いてあった緑のシートの上に寝かせる。こいつの整備分解は結構面倒だ。今は重機関銃より扱いの難しいネリスのオモリを最優先。

火気厳禁とかすんだ文字で書かれた扉の鍵を開けて建物の内部に進入。ここはクライブとネリスの居城こと傭兵舎。もとは武器倉庫だったものらしい。大戦期以前からある建物だけあって内装もやはり古ぼけて脆い。五十口径弾を喰らったら紙のようにぶち抜かれてしまうだろう。唯一もの救いは若干の改装を経てトイレとシャワーが据え付けられているということか。二人が利用しているのは一階部分だけで、二階三階は非常用の食料やら現在では一線を退いた火器類などが所狭しと詰め込まれている。そこそこの広さの廊下が奥まで伸びていて、突き当たったところに階段がある。クライブは特

にノックもすることなく、ネリスと共用している部屋のドアノブを回した。
「だだいま」
照明の電源を付ける。
ベッドを覗き込むと、そこにネリスは居なかった。
二人で住むには十分すぎるほど広い長方形の部屋。左右の端と端には無骨なパイプベッドが一つずつ。壁にはネリスの趣味である大量の火器類が飾られている。拳銃からアンチマテリアルライフルまで多種多様かつマニアックな兵器がずらりとそろっているが、ネリスが実戦で使うのはほんのわずかだ。それらの隙間にかけられた滅多に着ることのない二人の制服と私服。工具類の置かれた広い天板の机に弾薬の詰まった保管ケース。圧倒的にネリスの持ち物が多い。クライブの私物と言えば、豪奢な作りのバイオリンケースがベッドの下に隠れているぐらいだ。
ここ以外でネリスの居るところと言えばかなり限定されるので、探すのはあまり難しいことではない。それにネリスお気に入りのライフルが二丁、ケースごと無くなっているので推理の必要はなかった。

陸軍練兵施設内に設けられた屋外射撃場。
まばらに聞こえてくるライフルや拳銃の個性豊かな激発音。乾いた大地から巻き上がる土煙には心なしか硝煙の匂いが混じっている。だがその香りを感じ取ることが出来るのは、銃に親しんでいない新兵か、使う必要のない重りを腰にぶら下げた将校だけ。人は外部からの刺激によく慣れる。何年も銃と寝食を共にしてきたクライブの鼻ではほとんど感じることは出来なかった。
林立している穴だらけのまま回収されなかった人型の的。定点狙撃の練習に使われたボーリングのピン。重機関銃の標的として余生を過ごす退役戦車。伏せ撃ちに便利な土嚢。捨てられた真鍮の空薬

莢が砂利場を形成している。
横一文字に簡易な屋根が走っていて、床に至っては地面がむき出しだが、銃や弾を置く横長の机が何卓も設置してある。管理人の男が詰め所のカウンターで暇そうに銃の手入れをしていた。以前行われた拳銃射撃大会のスコアが記された紙が張り出されていて、まるで当然のように最高位に名前を飾っているネリス。弾丸一発分の本当にわずかな差でセシリアが二位。クライブは残念ながら四位止まりだった。
ネリスの定位置である奥から三番目のレンジを覗き込んでみると、思った通りの光景がそこにあった。まず目につくのが完璧なアソセイレス・スタンスで拳銃を構えている相棒の後ろ姿。生粋のテネジア人でもここまで見事なものはないと言われる金髪が、肩口で粗野に切りそろえられている。もっと手を入れてもいいものだと思うものだが、ネリスは髪など気にも留めないのでいつも癖がついてぼさぼさだ。それほど背が高いわけではないクライブより頭二つか三つ分ほど小柄で白く折れてしまいそうな肢体。殺伐とした野戦服で身を固めていてもその繊細な白痴美は隠しきれない。是が非でもドレスで着飾った姿を拝んで眼福に預かりたいとクライブは常々思っていた。
レンジについていたネリスはふわりと振り返った。
「どう？　少しは兵士らしくなったかしら？」
まるで古代の海賊がつけているような黒い眼帯がネリスの左眼を覆っている。病院にあるアイパッチと違うのはたぶん彼女の趣味なのだろう。白い糸でクロスヘアが刺繍されているあたり何かを狙い撃つ気満々だ。
いつも眠たげに薄く閉じられていたもう片方の目は、決して目つきが悪いわけではなく、年相応の愛らしさを放っている。
「怖いくらいに似合っているが。それにしても」
脇にはテネジア陸軍正式採用の突撃銃と、ボルトアクションの狙撃銃がそれぞれ一丁ずつ立てかけられていた。整備が行き届いてい

るため見目新しいが、実際は耐用限界の寸前まで使い込まれている。目の前の机には穴だらけの的が山を作っていて、足元にはおびただしい量の空薬莢が散らばり鈍い光を放っていた。
　クライブはあきれたように頭をかく。病み上がりにこんなことをやっていていいのだろうか。
「一体、何発撃ったんだ？」
「九ミリはマガジン五本目。ライフルは弾薬箱一つずつ開けた」
　拳銃のマガジン容量は一本につき一五発。突撃銃用の五・五六ミリ弾は弾薬箱一つに八百発入っている。一発あたりのサイズが大きい狙撃銃用の七・六二ミリ弾は数が減って二百発入り。いくら何でも撃ちすぎではないだろうか。
　体を損じてから間もないというのに、彼女の様子からは痛哭な面持ちや悲壮感が全く感じ取れなかった。いや、そもそもネリスは今まで負傷や挫折を全く経験してこなかった。そのため、逆境にどういった対応をしてよいのか知らないのだ。ネリスはそれを補償するかのように平常に振る舞い、力の象徴である銃に縋っているのではないのだろうか。
　クライブは黙ってちりとりとほうきを手に取り、散らばっていた空薬莢を掃除する。
　そんなこともかまい無く射撃を再開するネリス。驚くべき集弾性で的に穴が開いていく。
「やっぱり片眼だと距離感がつかめないわね。エイミングも勝手が違うし。ブルズアイ射撃ならもってこいだけど、実戦となると少し不利ね」
　ネリスが独りごちて引き金を引くと、拳銃のスライドが下がりきって弾切れを伝えてきた。机の上に置いてあった弾倉を手に取って再びクライブの方を振り向く。
「それで、首尾の方はどうだった？」
「掃討作戦のことか。退屈なものだったよ。俺が言い渡された任務は周辺集落の警備だったからな。たまに主戦場から漏れ出してくる

お零れをハンヴィの重機関銃でミンチにするだけ。化物退治ができるってんで躍起になってたのに拍子抜けだったぜ」
「そう」
眼を見合わせているというのにまるで聞いていないかのような相槌を返すネリス。彼女のこういった反応は今に始まったことではないので特に珍しいことではないのだが、今日に限っては少し違って見えた。
「だがな、少し妙な点がある。事件の時といい、あの程度のバイオハザードにブラックナイツが駆り出される必要は無かった。それなのに今回の作戦時には女王陛下自らが前線の指揮を執っていたぐらいだ。あそこがただの生物兵器研究所じゃなかったことは容易に想像がつく。なにか重要なものが研究所にあったんだろう。近いうちにまた何か一騒動あるかもな」
「わかってる。それはもう確実。覚悟はできてるわ」
ネリスは弾倉を拳銃に叩き込んだ。なめらかな金属音がして、マガジンキャッチが弾倉を銜え込むと同時にスライドストップを解除。ネリスは初弾が薬室に送られるより早く、流れるような足捌で身を回転させ、普段は気怠げに閉じられていた目を大きく見開いた。振り乱れたネリスの金髪が後に続いて鮮やかな軌跡を描く。突き出された片手の先にはフルロードの戦闘拳銃。照準をつけているのか怪しいほど刹那の一瞬。エジェクションポートから三つの空薬莢が弾け飛んだ。ほとんど一発分に聞こえる乾いた銃声が、耳覆いをしていなかったクライブの鼓膜を震撼させる。射線の先には、交換したばかりの標的が立ち尽くしていた。それは人型を模した標的で、頭部の中心部に、申し訳なさそうに穿たれた、一発分の弾痕があった。
針の穴を通すような、殆ど不可能に近いワンホールショットをやってのけたネリスは、それに満足するようなそぶりを見せずに銃口を下ろした。
「お見事……」
クライブは驚嘆を通り越して、ぽかんとした表情で気の抜けた拍

手を送った。
　もしかしたら、ネリスは片眼が無いくらいがちょうどいいのかもしれない。
　ネリスはデコックした拳銃にセイフティーを掛けてホルスターに差し込んだ。銃口や機関部の周囲に付着している火薬の燃えかすを軽く拭き取って、弾を抜いたライフルをケースに寝かせる。射撃はもうこのぐらいでいいだろう、腕が落ちていないことは確認できた。
さて、次はどうしたものか。常に何か行動をしていないといけない。ネリスはそんな焦燥感に駆られている。漠然とではあるが、世界が徐々に変革していくような底知れぬ不安を感じていた。
「ねぇ、クライブ」
　ややあって、ネリスはぽつりと呟いた。
「うん？　なんだ」
　クライブはネリスの方に向かい直ってみる。
　が、案の定ネリスの眼は標的を見つめたままだった。
「わたしとラルフ・アーセックの事訊かないの？」
　ネリスは事も無げに言う。
　その横顔は飄々としていて、真意は伺い知れないが、どこか寂しそうだった。
「訊いて欲しくないって顔していたからな。俺はそこまで鈍くは無いさ」
「それは、まあ、他の人間に易々と教えられることでもないけど。クライブになら、話してもいいかなって……」
　語尾を濁して、少し恥ずかしそうに俯く。
「ほう、それは光栄だ」
「はぐらかさないでよ。真面目な話なんだから」
　微笑みながら抗議の声を上げるネリス。
「俺はおまえと話していて巫山戯たことなんか一度もないぜ」
　真面目な顔で答えるクライブ。
「なおのこと質が悪いんだけど……。で、聴きたい？」

「ああ、もちろんだ」
ネリスは滅多に自分の事を話さないため、こんな機会を逃すという選択肢はクライブの中にはなかった。
「そうね……。わたしがラルフ・アーセックに出会ったのは十年前。まだヴィスタ戦争が始まったばかりの頃ね」
十五年前。ＡＷ３００年。
国境付近の古代遺跡を巡って世界を巻き込んだ戦争が始まった。
この世界を支える科学技術のほとんどは、滅亡した旧世界の物を流用しているに過ぎない。このテネジア王国は建国以来、発掘された遺物に対してリバースエンジニアリングを行い、様々な技術を吸収してその国力を増大させていった。
その結果、他国との技術バランスに大きな歪みをもたらすことになるのは必然だった。
それに伴い、大陸の東側に位置する大国、ソレイユ連邦は古代技術の資料提供と遺跡に於ける優先的発掘権を要求してきた。要求が果たされない場合は交戦も辞さないと。
だが、理由を公にしないまま前テネジア国王はその要求を頑なに拒否。
否応なくも事態は一気に大陸全土を巻き込んだ対戦へと発展した。
数多の隣国を滅亡に追いやりながらも、両国は十年に渡る時を戦い続けた。
そして、五年前。新史以来最大の死者と被害を出しながらも、ヴィスタ惨劇とテネジア国王の崩御によって停戦を迎えることになる。
ネリスはレンジから出て、手近に設置されていたベンチに腰掛けた。
クライブもそれにならう。
「今では硝煙の死神なんて呼ばれてるけど、あの頃のわたしは本当に無力だった」
「ネリスにそんな時代が有ったなんて意外だな」
クライブは素直に驚きを表現した。クライブがネリスと出会った

時。彼女は鬼神の如き強さをクライブに見せつけていた。クライブはその強さにずっと憧れ続けていたのだ。
　同時に、ネリスの中にある種の危うさを感じ取っていた事も事実だ。
「……もう、わたしだって生まれた時から銃を手にしていた訳じゃないわ」
「それもそうか」
「幼い頃のわたしはヴィスタ共和国、国境沿いの破棄された街でラルフ・アーセックに保護されたらしいの」
「らしい、ってのはどういう事だ？」
「わたしには当時の記憶が無いの。これはそれからずいぶん後になってから聞いた話。気が付いたらラルフ・アーセックに手を引かれてどこかの基地を歩いていた」
　ラルフ・アーセックがどういった意図を持ってネリスを拾ったのか。
　それはネリス自身さえ知り得ないことだった。
「知らない言葉。視たことのない場所。だけどなぜか不安はなかった。当時から彼は何を考えてるのか解らない人だったけど。なぜか手を握られていると安心できた」
「それからラルフ・アーセックは君を兵士として育てた？」
「結果を言うとそうなるんだけどね。でも、彼はわたしを普通の子供として育てようとしていたのよ」
　それは初耳だった。
　クライブはラルフ・アーセックがネリスを少女兵として利用することを考えて保護したのだとばかり思っていた。
　彼と実際にあったことは無いが、軍内部で語り継がれている話を聞くに、そんな情や良心に囚われるような人間とは思ってもみなかったからだ。
「しばらく彼と共に各地の基地を転々とする日々が続いた。当時テネジアは圧倒的に優勢だったから基地に居れば何の危険もなかった。

テロリスト達は軍に圧殺されていて、基地に奇襲を仕掛ける元気も無かったし。戦争が激化するに従って、あの人は基地に帰ってくることが少なくなった。彼の仲間の兵士達がよく私の面倒を見てくれたから、生活に不自由することはなかったけど。思えば、子供心からの行動だったかもしれないわね。彼の力になりたかった。彼の為に何かしたかった。だからわたしはラルフに戦い方を教えてくれとせがんだ。彼が戦っているのに、わたしだけ平和に生きる事なんて嫌だった。自分も戦いたい。そんな愚かしくも真っ直ぐな思いを彼にぶつけた。最初はもちろん反対していたけど、わたしが真剣なのに気づくと、それからは何も言ってこなかった。それから間もなくしてわたしは彼が設立した部隊『傭兵隊』に入隊した。わたしはその時セシリアと出会って、お互いに切磋琢磨した。わたしにとっては初めての友達で、一番やっかいな敵だった。セシリアは何かとわたしに対抗してきたわ。やっぱり昔から負けず嫌いだったみたいね」

昔も今もあまり変わらんな。訓練で事ある毎にネリスに突っかかってくるセシリアの姿が容易に想像できた。

「そして、ある日突然。彼はわたしたちの前から姿を消し。程なくして戦争は終結した」

そう、戦争終結の引き金となった、前テネジア王暗殺も、数百万人の被害者を出し、一つの国を亡国へと導いたヴィスタの惨劇も。全てラルフ・アーセックが行ったとされている。いったい彼は何を思って、そのような凶行に至ったのか。

「このまま戦い続ければ、彼があの時、何を思ったのか、解るような気がして――」

クライブはネリスの独眼が、今にも泣き出しそうな色をしていたのを見逃さなかった。

「でも、無理みたいね。私は彼の力にはなれなかったみたいだし……」

ネリスは切ない表情で彼に撃たれた左目の眼帯を撫でた。

「だから、わたしは彼の墓標になる。それが、せめてもの――」

ネリスはそこで言葉を句切った。

「――罪滅ぼし」

『銀髪の戦人形』

『銀髪の戦人形』

同練兵施設内の仮想市街地訓練区画。

訓練区画と言っても、そこには簡素な作りではあるが実際の建造物を想定した建物が建ち並び、中央には戦車も通れる広い街道も設けてある。大規模な合同訓練に際しては兵員輸送ヘリからの降下訓練も行われるほどだ。

多種多様なカスタムの施されたアサルトライフルを携え、漆黒の戦闘服を身に纏った兵士達が一糸乱れぬ挙動で市街地を行軍していた。

自分の身を極限まで小さく見せる独特な姿勢。まるで顕現した影のようだ。驚異的なほど俊敏な動作。音一つ立てることなく軍靴を走らせ、移動は遮蔽物から遮蔽物へと慎重深く行われる。並の兵士では彼等を射線上に捉えることさえ叶わないだろう。王国最高の特殊部隊、王室親衛騎士隊――ブラックナイツの面々である。

様々な技法に精通した人間が集い、女王自らが貴賤を問わずに編制、全員が騎士の叙勲を受けている。その入隊試験は一生に一度しか受けることは出来ない。

そんな兵達の中にあって、一際異質な光を垣間見た。隊員の指揮を執る黒髪の少女。幼いと呼べるほどの若さでブラックナイツ騎士長の任に就くのは、誰もが信じて疑わない実力と地位の獲得者だからだ。――セシリア・ブラウニング。一般将校は畏怖と敬意の狭間でその名を呼ぶ。彼女だけが標準装備の炭素繊維強化樹脂ヘルメットを被っておらず、少女特有の真率無垢な美貌が無防備に晒されている。それは彼女の自信の表れなのか、それとも単なる蛮勇なのか。誇らしげに棚引く黒髪がその答えを語っていた。

統合射撃管制装置が付与された強化仕様のアサルトライフルを携

え、右の腰には特殊部隊専用の四十五口径自動拳銃。胸には柄を下にして吊られた戦闘ナイフ。後ろ腰には長方形に似た形状のサブマシンガン。そして左の腰には時代錯誤な長身の軍刀を帯びていた。特殊カーボン製の鞘がつや消しの鈍い光を纏っている。

やがて、ブラックナイツは建造物に挟まれた路地のような場所に至った。セシリアは数人に周辺警戒の指示を出し、入り口から用心深く路地を伺った。広さは乗用車が一台通れるかどうかといったところ。遮蔽物としては錆び付いたドラム缶や山と積もった多量のジャンク。左右から逼迫してくる建造物には内部との連絡口や窓、非常階段までが備わっている。部隊を投じるにはあまりに危険な場所だが、ヤツは確実にここを舞台とするはず。彼女は自分の隊に無上の信頼を置いている。それは実の家族より余程強い絆。この程度の誘いに乗って撃ち勝てない様では、皆で女王陛下に誓った忠誠は何だったのだろう。

セシリアは消音装置がしがみついた銃口を路地に向け、片手だけで後続の仲間に指示を送った。数舜のタイムラグも挟むことなく、黒衣の騎士達は見通しの利かない路地へと突入していく。普段は指揮官だというのに神速で先行するセシリアも、閉所では刹那の判断が必要なため、自分を中心とした密集陣形を仲間に指示していた。全員の銃口がそれぞれ敵が出現するであろう場所に牙を剥く。そのとき、セシリアの通信機が別働隊の報告を告げてきた。

「こちらエドワーズ、C棟にて対象と交戦中！　分隊の被害は軽微。これより屋上に追い詰めます御指示を！」

どうやら罠に掛かったのは我々ではなく向こうの様だった。この路地はC棟とD棟の狭間にある。対象の勝利条件は捕縛される前に目標地点に移動すること。ブリーフィングで確認したその場所はC棟から見てD棟を挟んだ先にあった。ヤツの行動は簡単に予測できる。

「でかしたエドワーズ！　今C、D棟の狭間にいる！　ヤツが跳んだら合図しろ！」
セシリアは簡潔な言葉で別働隊に指示を下した。それだけで通じ合える仲間だ。
入り口付近まで後退して手近にあるジャンクの影に膝を付く。付近の隊員もそれに従い遮蔽物に身を隠した。セシリアがアサルトライフルを構え、ピストルグリップが付加されたアンダーバレル・グレネードランチャーに二十ミリ新型炸裂弾を装填。
銃上部のレイルを占領する単眼が埋め込まれた箱形の電子兵装。光学照準器、昼夜間兼用熱線映像装置、レーザー測距装置、デジタルコンパスが統合されている。先進情報統合兵装機構――通称ランドウォーリアーシステム。
昼夜、天候に左右されずレンズの先に映った敵勢目標を自動的に判別、補足できる。だが、それはランドウォーリアーシステムの些末の一部に過ぎない。本来はヘッドアップディスプレイや他の電子兵装と共に運用される。
セシリアは手動でグレネードの電子信管に射撃形態を入力した。そして、ライフルを線状に切り取られた空へと掲げる。他の隊員達がそれに倣い、次々とグレネードランチャーの砲口が鎌首をもたげていった。銃を操作する金属音が消え、それからやってきた静寂に全員が息を呑んだ。
C棟の屋上から、戦闘特有の殺気を含んだ気配が降り掛かってくる。消音装置のため銃声は殆ど聞こえないが、微かに連続する鋭い着弾音が聞こえた。
「今です！」
通信機が声高に必殺の合図を叫んだ。全員が誰も居ない虚空へと次々にグレネードを解き放つ。くぐもった発射音が響き、その後に続く炸裂までの一瞬のタイムラグ。
その時、一つの影が空を駆けた。
十メートル余りある亀裂をものともせずにC棟からD棟へ飛び移

ろうとするその機影。
　まるで翼の様に空へ融けた長い銀髪。清んだ双つの碧眼は、何処までも透き通ってしまいそうな幻覚に陥る。
　王国最高の特殊部隊に追われ、苦悶の表情を浮かべて逃避する一人の幼い少女。人類の範疇を超えた跳躍の最中、彼女は眼下でライフルを構えているブラックナイツの姿を視認し、自分へと目掛けて飛来する多数のグレネードを目で補足すると、驚愕に幼い顔立ち歪めた。刹那の一瞬にそれらをすべて認識した彼女の身体能力は素晴らしいの一言だが、制動を掛けることの出来ない空中で彼女に為す術があっただろうか。
　勝ち誇ったような笑みを浮かべているセシリアを見つけて、罠に嵌められた悔しさと、直後に来るであろう想像を絶する痛みに備えて少女は目を閉じ、諦観の念を込めて歯を喰い縛った。
　ブラックナイツの面々が遮蔽物に身を仕舞い込むのと同時に、短距離を飛翔したグレネードの群れは一斉に空中炸裂。内包された大量の硬質ゴム弾が四方八方にばらまかれ、銀髪の少女を貪り喰うかの如く一瞬で空を制圧した。炸薬により大きな運動エネルギーを得たゴム弾は少女の無垢な全身を撃ち貫くこと能わずとも、一切の所隈無く残酷なほど暴力的に蹂躙していく。さらに、衝撃により失速した軌道は着地予定地点から大幅にずれ、無残にも彼女の肉体はD棟の壁面に激突した。
　許容量を超える凄絶な苦痛に彼女の美貌は歪み、蕾のような可憐な唇が、悲鳴なのか、哭声なのか、慟哭なのか、聞いた者を罪悪感で発狂させてしまうような、声ならぬ声を発し続けている。
　あろう事か目を覆いたくなるような惨劇はそれでも終わらず、たとえ必然であっても地球は無慈悲に位置エネルギーの返還を要求してくる。重力加速度に加えてさらに上方から力量を持って襲いかかるゴム弾。結果、彼女は迫撃砲弾のような夥しい速度でジャンクの山に叩き込まれた。まるで骨がねじ切れるような凄まじい金属質の破砕音と、思わず耳を覆いたくなるような悲鳴が発せられる。

その音が止むよりも早くブラックナイツは動いていた。少女が四散させたジャンクに足を取られることもなく落下地点に殺到する。
仲間に背中を任せて先行したセシリアはその光景を目の当たりにした。駆けつけた隊員の無数の銃口が少女を取り囲む。
少しやり過ぎだっただろうか。原型を留めていなかったらどうしようかと思ったが幸いその心配は無かった。銀髪の少女はまるで泣きじゃくる寸前のような、非常に保護欲求を掻き立てられる声で嘘び泣いていた。あれだけの打撃を受けたというのに表面上の目立った損傷は全くと言っていいほど無い。
「こちら騎士長セシリア・ブラウニング。状況終了。対象の沈黙を確認。今演習は我々ブラックナイツの勝利だ！」
セシリアが無線に向かって勝利を声高に宣言すると、少女を取り囲んでいた隊員達が活気だった。
「騎士長、やりましたね！」
屋上から顔を覗かせた少年が嬉しそうに言った。
「大儀だったエドワーズ！」
セシリアは別働隊の指揮をしていたエドワーズ・ウィンチェスターに労いの言葉をかける。
「お褒めの言葉光栄です！」
先日の研究所事故で負った怪我を無視してまで演習に参加したエドワーズは、滅多に聞くことのできないセシリアの讃辞に心の底から報われた気がした。いつもの彼は訓練で失敗してセシリアに愛の鉄拳制裁を貰うのが常だったのだ。もしかしたら彼は普通にライフルを持たせて敵に突っ込ませるよりは、指揮官として部隊を纏めた方が良いのではないかとセシリアは思っていた。エドワーズは命辛々生還するほどの傷を負ったばかりだったこともあってか、特別に分隊を指揮することになり、今回それが功を奏した。元から、妙に人望の有った彼のことだ、そつなくこなしてくれることだろうとセシリアは信頼していた。もちろん、失敗をした後のお仕置きもしっかりと考えてはいたが。

「痛くなんかないもんっ！」

その時、少女がジャンクに突っ伏していた上半身を起こした。無機質な碧の双眸はまるで泣き腫らした後のように涙で満たされていた。セシリアよりも幼さが色濃く滲んだ頬が激情に震えている。

「おや、起きたのか。済まなかったな随分と手荒な真似をして。お前には何の恨みもないんだよ。お前の主に焚き付けられてな。こちらとしても意地で引けなくてな」

「そんな……。あたし、負けた？　いや！　だって……。また、お仕置きされる……！」

少女は敗北の事実に打ち震えていた。瞳孔が異常なほど震え、自らの肩を掻き抱いている。

「あたし負けてないもん！　痛くなんかないもんっ！」

少女はだだをこねる子供のように叫び、手近にあったジャンクの中から金属製の棒を手繰り寄せ、それを持ってセシリアに殴り掛かった。動き自体はとても一直線で稚拙なものだったが、いかんせん速度が尋常ではないほど速い。

「躾が成ってないな……」

まだ銃を構えていた隊員達は、その事態に反応できなかった訳ではない。だが誰一人としてその強行を止めようとする者は居なかった。むしろ全員がその少女の行く末に黙祷を捧げていたほどだ。

「うわあああああ！」

少女が棒を振り下ろした先、すでにセシリアは居なかった。振り下ろした金属棒は恐ろしいほどの運動エネルギーを持って劣化したコンクリートの舗装を叩き割った。

少女の愚直な奇襲は失敗に終わったのだった。

肉薄の直前で上半身を相手の背後に回り込ませる華麗な足裁き。気づいた頃にはすでに少女は後ろから膝を折られて拘束されていた。左腕は絡み取られ、仰向けに反らされた不利な姿勢からは反撃も許されない。

そして、彼女が恐れられる主たる理由。セシリア・ブラウニングは立ち向かってくる者は敵だろうが味方だろうが容赦しないこと。
セシリアは少女の華奢な腕を何の躊躇も無くへし折った。
まるで、それが木の棒で有るかの如く、関節の可動限界を超したところで、そこから先が締まり無くぶら下がった。戦車を二つ折りにしたらこんな音がするんじゃないかと思うほどの、けたたましい金属音が辺りに反響し、セシリアを除いたブラックナイツ全員が顔を背けた。さすがに職業軍人といえどこの光景は正視に耐えないのだ。
「あ、ああ……」
もう悲鳴を紡ぐのに使う声は枯れてしまったのか、少女は魂が抜けて感慨なさげな声にならない音を肺から漏らしていた。ふと、彼女の銀髪が頬に触れると、瞳が色を取り戻して、唇が日に何度も言う羽目になった強がりを紡ぎ出す。
「い、痛くないもん……」
今度はあまり元気を伴っていないのが痛々しかった。
だが、泣き叫ぶこともなく、宙ぶらりんな腕を庇いながらも彼女は立っていた。何がそこまで彼女を掻き立てるのか。早々に地に伏せてしまえばそう虐められることもなかっただろうに。
「じゃあ、痛くしてあげるよぉ」
刹那の沈黙を破って、気味の悪い薄笑いを浮かべた声が発せられていた。
とたん、少女の表情は今日見せたことが無いほど青ざめて、口を酸素が足りていない魚のようにパクパクさせる。
「もう、痛いのはいゃ……。ゆ、許してくだ――」
「だぁめ。負けちゃったんだから仕方ないねぇ」
少女には許しを請う時間さえ許されなかった。
「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいだいぃぃぃ！」
突如、少女は地面に倒れて叫びだした。全身がおこりの様にビク

ビクと痙攣し、背骨が砕けるのではないのかと思うほど断続的に激しく仰け反る。長い銀髪を狂ったように振り乱し、もはや折れた腕など眼中に無いほど少女は痛がっていた。瞳孔は閉まることを許されず、全身の体液が噴き出す。小さな身体を掻き抱いて至上の痛みに打ち震えていた。すでに枯れたと思われた喉から強制的に幼い悲鳴が搾取される様は既に地獄。『拷問』と言う単語が生やさしく感じられ、『痛い』という言葉をゲシュタルト崩壊させるほどだ。一体、何がそこまでに彼女の神経を苛んでいるのか。

セシリアは少女に責め苦を与える張本人を見据えた。すでにブラックナイツの殆どは耳を塞ぎ、銃を抱いてうずくまっている。良心とか、自責の念とかと戦っているのだろう。全く、神経の細い連中だ。

路地の入り口付近。そこには線の細い白衣の男が立っていた。度の強い眼鏡の奥の瞳は暗い闇の色。少女の狂態を心底楽しそうに鑑賞して表情を歪ませていた。まともな精神の持ち主ではないとセシリアは評する。

彼の名はアルバート・ウィンチェスター。テネジア王国の兵器産業を一手に担うウィンチェスター家の御曹司にして伯爵の位を持つ貴族。エドワーズの実兄に当たる。NT技術開発の第一人者で、人々にはサーバーアドミンストレーターと賞されている。だが、天才と狂人は同義。性格という汚点を除いて見れば、彼は優秀な技術者であることに違いはないのだが。

セシリアの近くに歩み寄ったアルバートは小型の情報端末を手にしている。それが少女に痛みを与えているのは明らかだった。

「いやぁ、神経に直接ノイズが走るって痛いんだろうなぁ」

アルバートはそんな恐ろしい責め苦を少女に課しているらしい。

「全く、このサディストが」

セシリアがその光景を見てアルバートを罵った。

「君も人のこと言えないんじゃないの？　僕の可愛いベレッタをあんなにしちゃってさぁ」

アルバートは全く怒るそぶりを見せずに言ってのけた。
「大体、お前がけしかけたんだろうが。私は売られた喧嘩はトコトン買うからな。オタクご自慢の人工天使はこの演習でさぞ有用性が実証されたろうに。特に耐久性とか」
セシリアが横目に皮肉る。あの程度のスペックでは単独機動兵器として失格だ。
「うんうん、おかげで良いデータが取れたよぉ。最初からベレッタが負けるように仕込んでたからねぇ。サブプロセッシングユニットのスピードステップを全開にして、デバイスは全部非正規品。あくまで統合情報端末だけど、あれがベレッタのフルスペックだと思わないでねぇ」
「そういうのをな、負け犬の遠吠えっていうんだよ。ところで、いい加減に許してやれ。さすがに可愛そうだよ……」
セシリアは泡を吹いてのたうち回るベレッタを見た。二人とも平然と会話をしていたが、ＢＧＭを奏でている悲鳴の事は辛うじて失念していなかった。
「んじゃ、負け犬のお仕置きもこの辺にしておきますかぁ」
アルバートが端末を操作すると、ようやくベレッタは痛みから解放された。
「ハア、ハア、ハア……」
ベレッタは半死半生と言った風情で小さな舌を垂らし、何度も絶え絶えの呼吸を繰り返していた。表情には影が差し先ほどまでの元気は無い。
屋上から降りてきたエドワーズがそれに見かねてベレッタの介抱を始めていた。
「だ、大丈夫ですか？」
エドワーズが手を差し伸べる。
「ありがとうございます。エドワーズさん。お優しいんですね」
「いや、みんなが非道なだけだと思うよ……。腕、大丈夫なの？」
「平気です、こっちは痛くありませんから」

そう言ってベレッタはセシリアにへし折られた腕をプラプラと振った。
それだけで、エドワーズは血の気が引いていくのを実感するのだった。彼も前回の事件でオーガに胸を裂かれて生死の境を彷徨ったばかりだが、彼としては他人が傷つく方が見ていられないらしい。兄とは大違いである。
「まあ、何にせよ我々の勝ちだ。ブラックナイツへのランドウォーリアシステム配備。よろしく頼んだぞ」
驚いたことにセシリアはアルバートから演習の話を持ちかけられた際、見返りを求めていたらしい。
「わかってるよぉ。可愛い弟の居る部隊だしねぇ」
アルバートはクマの目立つ目元を細めて薄ら笑った。そして白衣のポケットに手を入れて振り返ると元来た道を戻っていく。ベレッタは黙ってその背中を追っていった。
「おや？」
アルバートが怪訝な声を出すと、その視線の先にそこにいた全員が注目した。ベレッタはアルバートの背中で折れた腕を元に戻そうと四苦八苦していたので反応が多少遅れていたが。
「なんだか面白くなりそうだねぇ」
アルバートが呟く。ベレッタは急に立ち止まった彼の背中にぶつかってしまい、その拍子に弄くっていた腕が元の位置まで戻った。
そこに立っていた二つの人影。傭兵隊のネリス・カラシニコヴァとクライブ・ストーナーだ。
エドワーズはセシリアの眉間にしわが寄るのを確りと見ていた。

『共鏡』

『共鏡』

そこに居た全員が路地から出る。珍客の来訪に戸惑いの色を見せるブラックナイツの面々。先ほどまで勝利に嬉々としていたセシリアだったが、今では表情が芳しくない。何か苦い思い入れでも有るのだろうか。

大通りには二台の装甲車両が止まっていた。一台はネリスとクライブのハンヴィ。もう一台はアルバートが乗ってきたもので、左右に三つずつ車輪が付いた装輪装甲車だった。

師団司令部および特科部隊の指揮管制を行う車両で、隣に駐まっているハンヴィと比べると一回りほど大きい。内装、外装共にに、アルバートの手によって大幅に改修されているものだ。屋根の上に載った防御重機関銃は全週を囲むようにして防盾が取り付けてあって、さながら旋回式の対空銃座の様になっていた。そして、見ただけでは全く見分けが付かないが、完全なＮＢＣ防護対策が施されている。キャビン前面および側面の窓には装甲プレートが付いていて中性子も防ぐことができる。

既にアルバートは装甲車のキャビンに籠もってしまっていて、ベレッタが銃座に付いて彼等のやりとりを傍観していた。

「お二人ともどうしたんですかこんな所まで？」

エドワーズがクライブとネリスの前に出た。それと共にブラックナイツの間で友好的な空気が流れ始める。最初は表情を顰めていたセシリアも隊を代表してクライブを歓迎した。

「この間は助かった。隊を代表して礼を云うぞ」

先日の事件の際。クライブは攻撃ヘリでセシリアとネリスを救出する前に、オーガの群れに襲われて絶体絶命だったブラックナイツを援護していた。そのおかげでブラックナイツは一人の死傷者を出

すことなく基地に帰投することができたのだ。
「いや、偶然オーガの群れが目に付いたから蹴散らしただけだ。礼には及ばないよ」
人受けの良い笑顔を浮かべたクライブ。一方ネリスは何か後ろめたいことでもあるかのように俯きがちだった。
「久しぶりだなネリス。怪我は良くなったのか？」
「あ、ええ、まあ……。左目はどうにもならなかったけど、身体の方は何ともない。あの時は助けてくれてありがとうセシリア」
多少どもりながらも礼を言うネリス。碧眼と眼帯で覆われた隻眼がセシリアの瞳に映る自分の姿を伺った。
「片目で済んで良かったな。勘違いするなよ。私がお前を助けたのは騎士道に準じただけだ」
どこか不機嫌そうな声色でネリスの言葉に釘を刺すセシリア。
「そんなこと言って、騎士長は人が良いんだよな」
「それは違いない」
「ああ見えて騎士長は優しいからな」
「エドワーズが負傷したときもひどく心配してたし」
隊員の中の誰かが呟くと、それに続いて幾つも同意の声が上がる。
「ん、何か言ったかね諸君？　この間みたいに、また殴り散らされたいのか君達は？」
セシリアは怒気を押し殺したような、小さいのに良く響く声で隊員達を脅迫した。花が綻ぶような素晴らしい笑顔を振りまいて、淀みない手付きでグレネードランチャーにゴム擲弾を装填しているのは何かの見間違いなら良いのだが。殴るよりこちらの方が効率よく一掃できるというのだろうか。
『何も言ってはおりませぬ騎士長！』
全員が銃を掲げ、一糸乱れぬ動作で姿勢を正してセシリアに敬礼をした。
「相変わらず大した団結力だな」
クライブが苦笑を交えながら感想を述べる。ネリスを救出に行っ

た時、彼がオーガの群れをチェーンガンで掃討する前、既に夥しい量の死骸が転がっていた光景を思い出すと、彼等の対応の正当性が理解できるというものだ。
「よし」
セシリアは満足したように肯くとネリスを返り見た。
「あ、あの、セシリア……」
ネリスは意を決したように何か言おうと舌を回し始めるが、それを知ってか知らずかセシリアは何か思い出したかのように遮った。
「そういえば、おまえに返すものがあったんだ」
そう言ってセシリアは後ろ腰に吊したサブマシンガンを取りだした。
「良い銃だから使わせて貰っていたよ」
「あ、それ」
ネリスが事件の時に持っていた銃だ。オーガ戦の時にネリスから借りて使用していた。
「わたしも渡すものがあるの」
ネリスは言い淀みそうになりながらも、死者に託されたドッグタグをセシリアに差し出した。
「何だ？」
セシリアはサブマシンガンと交換で、そのドッグタグを受け取る。そして、打刻された名前を確認すると小さく喉を鳴らした。
「っ――！」
レンブラント・ファン・レイン。
「彼は事件で死んだの。あなたに渡すように頼まれたから……」
「そうか……」
セシリアは一瞬その遺品から顔を背けた。それをポケットに仕舞うと、ネリスに前置きをするように問うた。
「一つ、……訊いて良いか？」
その言葉には多分の沈黙と感情が練り込まれている。まるで死刑囚に遺言を尋ねる執行官の様だった。

「ええ……」
ネリスはセシリアが遠回しに質問する理由が解らなかった。だがその疑問はすぐにはれる。
「あの日……、あの時……。お前はラルフ・アーセックに遭ったのか？」
「ぁ……はっ――っ……！」
思わずネリスは息を飲んだ。その答えの見当が推し量れていても、ネリスの口が開くまでセシリアは何も言わなかった。
「ええ、彼に会ったわ」
逡巡するように一度ゆったりと瞬きをしてから答えを紡ぎ出す。
最後の音を発した直後、彼女は後方に向かって凄まじい速度で打ち出されていた。
「この、愚か者がぁぁぁ！」
セシリアは全力を込めた右の拳でネリスを殴り飛ばした。
何かがへし折れるような音がして、ネリスは遮蔽物として設置されていたドラム缶の山に叩き込まれた。運の悪いことに、積み重なっていたドラム缶が倒れて彼女の上から落下してくる。ネリスは水が入って重量が膨れあがったドラム缶の餌食となった。腹部が押しつぶされて物凄く辛い。何か可愛らしい小動物を踏みつぶした時のような音がした。
いくらセシリアが軍隊格闘の達人だとしても、いつものネリスが正面からの打突を素直に喰らうはずはなかったのだが、彼女の左目は眼帯に閉ざされていて視界が半減してた。それはネリスにとって、ほんの一瞬だけ反応が遅れただけだったのかもしれない。通常の兵士相手なら、生まれついて持った少女特有の身体能力で十分すぎるほど対応できる。だが、相手がセシリアの場合それが完全に命取りだ。それを今日ネリスは身を以て知る羽目になった。
「ネリス？！　おい、何をする、セシリア！」
今まで押し黙っていたクライブが思わず叫んだ。
「王室親衛騎士隊、騎士長。セシリア・ブラウニングがここに宣言

する……。貴公、ネリス・カラシニコヴァは現時点を以て、国家反逆罪の罪により――」
セシリアは落ち着き払った澄んだ声で述べる。ネリスを殴ったときと打って変わり、まるで氷りの仮面を付けたかのように無表情だった。そして、セシリアは腰の軍刀の柄に手を掛ける。
「おやめ下さい騎士長っ！」
真っ先に動いたのはエドワーズだった。軍刀を握ったセシリアの手に身を挺して縋り付く。それにブラックナイツ全隊員が続いた。セシリアの華奢な身体の所構わず掴みかかる。
「早まらないで下さい騎士長っ！」
「騎士長の責任が問われます！」
「傭兵とはいえ我がテネジアの軍人ですぞ！」
「そうです、わざわざ騎士長が宣言せずとも軍法議会にかければぁ！」
「頭を冷やして冷静になりましょう冷静に！」
一挙に十数名以上の隊員が黒波と成ってセシリアを飲み込んだ。何人もの屈強な男達が一人の少女に縋り付いて身体の自由を奪おうとするその光景は、もはや完全に異様で、下手すると何か犯罪の現場に見えなくもない。
「邪魔だどけぇぇぇ！」
しかし、この年頃の少女に男が身体的能力で勝てる時代ではもうなかった。
『うわぁぁぁ！』
セシリアが華奢な腕を振るうと、まるで終末を迎えた星が弾けるように隊員達は軽々と吹き飛ばされた。核として残った中性子星のような存在感を纏っているセシリアがその身を顕現させる。
セシリアは周囲に見せつけるかのような、ひどく典雅な動作で動作で腰の軍刀を抜き放つ。その切っ先をネリスが潰されていると思われるドラム缶の群生体に向け、見下すような目付きで睥睨する。もはや彼女を止める術など無い。

「ネリス、貴様は私刑だ」
セシリアはその可憐な唇から静かに台詞の続きを紡ぎ出した。
「おや、あれはゲシュタニウム軍刀だね。初めてお目に掛かるよ」
先ほどまで装輪装甲車のキャビンに籠もっていたアルバートが久方ぶりに顔を出した。珍しい玩具を見た子供のようにその目が生き生きとしている。
「今時、軍刀なんて何か特別な物なんですか？」
銃座からベレッタが尋ねた。銃で撃たれたらお終いなのに、と呟く。
「近年、テネジアで実用化が始まったばかりの新素材ゲシュタニウム。それを刀身に使用した酔狂な軍刀さ。ブラックナイツの騎士長だけが所持を許され、女王陛下から直接授かる物だそうな。もちろん、儀仗的な使い方が主なんだけど、恐ろしい切れ味で人を切るにはもってこいだから怖いよねぇ」
「セシリア！」
クライブがセシリアの剣先に立ちはだかる。その光景に、地に伏した隊員達が思わず息を飲んだ。命知らずにも腰の銃を抜かず、両手を広げて身を開け放っている。相棒を守るために仁王立ちするクライブを見てセシリアは吐き捨てた。
「何のつもりだクライブ。相棒の身代わりになって悲壮美にでも浸る気か？　そこを退かんといくら貴様とて切り捨てるぞ！」
得物を用いなくとも、その怒気を孕んだ咆哮だけで眼前の敵を切り刻むことができそうな位だ。
「いやだ、退かない」
だが、クライブは普段見せない鋭い眼光でセシリアを睨み付けた。そこに灯った決意の焔をセシリアはしかと見定めたようだ。
「どうやら本気のようだな。恩人を切るのは寝覚めが悪いが……いたしかたない！」
両手で握りしめた軍刀をセシリアは頭上まで大きく振り掲げる。驚くほど清んだ直刃の刀身が、血で汚れる前の無垢な光を放ってい

た。それは一片の曇りもなく、自分の矜持を信じて疑わない。
「お前のことは嫌いじゃなかった。むしろ気に入っていたぐらいだ。だが、これでサヨナラだぁ！」
クライブはセシリアが本気なのを知っていて、目を閉ざすことはなかった。
「退いてクライブ！」
その時、あれだけセシリアに脅迫されても山の如く動かなかったクライブが、まるで風に吹かれた羽のように退いた。しかし、その動きに華麗といった風は無く、とても切羽詰まっていて、まるで手榴弾が手近に落ちた時の兵士といった感じだ。
「え……？」
セシリアは面を喰らったような声を出し、視界から消えたクライブに驚いた。
「なっ！」
物体に物体を叩き付けたような打突音。クライブの顔が有った場所から、突如として出現して、高速で飛翔してくる物体が有る。
それは、水のたっぷり入ったドラム缶だった。
「うわぁっ！」
殆ど条件反射で飛んでくるドラム缶に向かって思い切り軍刀を振り下ろすセシリア。
見事に中央から真っ二つになったドラム缶は、腹に溜め込んだ大量の水を思う存分セシリアに向かってぶちまけた。
「くそぉ！」
水浸しになったセシリアには悪態をついている暇さえも与えられなかった。
水分を得て潤んだセシリアの瞳に、自分に向かって高速で突き出される物体が映る。それを再び振り上げた軍刀の刃で受け流した。
ぶつかり合う金属と金属の悲鳴。
目の前には長刀身のダガーでセシリアに鍔迫り合いを繰り広げているネリスが居た。

ネリスはダガーで軍刀の刃を押し返して間合いを取る。
「これで頭冷えた？」
「ネリス、貴様！　私を愚弄する気か！」
セシリアは濡れ細った黒髪を振り乱して再び自分を鼓舞した。セシリアの憎悪の炎はこの程度で消えはしない。もう一度斬りかかろうとして、不覚にも彼女は一瞬たじろぐ。
寒気がするほど美しい仇敵の立ち姿に思わず見惚れてしまった。
意気消沈するように俯き、垂れた前髪のせいで表情は窺い知れない。だらり、と垂れ下がり、ダガーを握りながらもまるで戦意を見せないネリスの繊手。だが、そんなうちひしがれたか弱い少女のような無防備な姿を晒しているにもかかわらず、その立ち振る舞いには一分の隙さえ見いだせなかった。
「セシリア、わたしはあなたが好き。いつでも自分を信じてるあなたが。自分の行動を信じて疑わない、いつも真っ直ぐなあなたが。わたしはいつも迷ってばかりよ。わたしの半身はあなたと戦って、狂喜と恍惚の果てにあなたを殺せと囃し立てる。わたしの半身はあなたに殺されて、安寧と虚無にその肉を捧げろと死に急ぐ」
まるで詩を紡ぐように朗々と、それでいて消え入るようにか細く紡がれる言葉。
不思議な感情がセシリアの胸を撃ち、心臓が不協和音を奏でた。
殺したい。殺されたい。そんな自己破滅願望をネリスとセシリアは無意識下で共有しているのかも知れない。共にラルフ・アーセックと云う拠を失った拙い心と心。お互いに求めるモノは同じだった。だが、ネリスは感情が不確定故にそれに抗おうとする。
「セシリア！　あなたがわたしを私刑に処すと言うならば、わたしは全力で抵抗する。確かにあの時、わたしはラルフ・アーセックを殺すのに戸惑った。その躊躇いの所為で左目を失った。でも、もう決心は付いたわ。わたしは彼を殺す。わたしが彼の墓標になる！　わたしの存在凡てを賭けて」
そしてネリスは、腰のホルスターからダガーと拳銃を取り出して

構えた。猫のように背を丸め、拳銃を構えた右手と、ダガーを握った左手を合わせる独特の構え方。
装填されているのは紛れもない実弾である。弾頭の種類はホローポイント弾で、普段、戦闘に使用して良い物ではないが、ネリスはこれを先ほどまで標的射撃に使っていた。人体に着弾すれば膨張した弾頭が余すことなく衝撃を伝達し、効率よく肉を引き裂いて内蔵を蹂躙する。九ミリ弾とはいえ至近距離での殺傷能力には不自由しない。
決意に彩られた独碧眼。黒眼帯に刻まれたクロスヘアはセシリアの姿を捕らえて放さない。その姿がセシリアの記憶に刻まれた、かつての最愛の人と重なった。セシリアにとってネリスは、自分の弱さを映す鏡。ネリスにとってセシリアは、自分の理想像を映す鏡。背中越しの共鏡。交錯する光は永遠にすれ違うのか、それとも常に共にあるのか。
「また貴様は……。私を見下して……。貴様があいつを殺すだと？　笑わせるな！　自分がラルフ・アーセックの一番だと？　昔から貴様はそう思い上がっていつもいつも私を見下していたな！　だから私はお前が許せないんだ！　私を哀れむな！」
感情という名の動揺がゲシュタニウム軍刀の刃を揺らした。柄を握る掌に力を込めると、その刀身は怒りを帯びる。
「違うのセシリア！　わたしは見下してなんかいない、哀れんでなんかない！　むしろあなたの強さが羨ましかった！」
首を振って否定するも、拳銃の銃口はセシリアに向けられたまま。ネリスの頬を伝った一筋の涙に柔らかな金糸が交わっている。
「黙れぇっ！」
セシリアの激昂と共に閃光のような鋭い剣戟がネリスの直上に襲いかかる。ネリスはそれを拳銃のスライドとダガーの刃を交差させて受け止めた。もし、その二つが現用の金属で作られていた物なら、今頃ネリスは二枚におろされていただろう。だがネリスのダガーと戦闘拳銃はゲシュタニウムで強化されている。

「お前の戦闘姿勢はあの人のものだ！　そのダガーも、拳銃も、全部あの人からのガバメント（官給品）だろうが！　お前は過去を拭い切れていない！」
　ネリスはいつもラルフ・アーセックと共にいた。そして、セシリアは才能に溢れていたネリスに対して常に劣等感を持っていたのだ。彼に認められるために必死に戦い続けたセシリア。しかし、彼女は最愛の人に裏切られた。
「過去に囚われているのはあなたじゃない……」
　激情に流されるセシリアとは対照的に、ネリスの叫びはひどく清んでいて静かだった。表情はまるで慈母に抱かれる天使のように穏やか。おおよそ、生死を賭けて戦っている戦士の貌ではない。それが、彼女自身も心の底から不気味だった。なぜ、こんなに気持ちが平坦になっていくのだろう。まるで躍動を止めた心電図のよう。それを生きていると言うのだろうか。
　ネリスはダガーで軍刀の剣先を弾き、嘗ての戦友に銃口を向ける。躊躇いなく引かれたトリガーは彼女の決意の表れか。マズルフラッシュに照らされた横顔は、そのまま掻き消えてしまいそうなほど幽かだった。
　セシリアは神速のサイドステップで射線から自分の身体を逸らして銃撃を避ける。だが次の攻撃に移る前に接近してきたネリスのダガーがセシリアの胴を突く。紙一重でそれをかわして前方に重心のずれたネリスの足を払うと、意外な程あっけなくネリスは尻餅を突いた。
「これが裁きだ！」
　勝利を確信したセシリアはゲシュタニウム軍刀を手前に引き寄せて逆刃に持つ。そして、渾身の力を込めて下方に劇烈な刺突を放った。
「っ――！」
　ネリスは小柄な身体を横に転がして間一髪で避ける。ゲシュタニウム軍刀が深々と地面に突き刺さるが、攻撃の余韻に浸る暇は一瞬

たりとも無かった。セシリアは即座に腰の拳銃を抜き、転がるネリスに照準する。一瞬前まで背中が触れていた地面に四五口径弾が喰い込む。
だが、ネリスは身体を回転させている不利な体勢の最中でも、恐るべき精度を誇る弾道を紡ぎ出していた。刹那を貫くダブルタップはセシリアの豊満な胸部に吸い込まれていった。
「ぐっ――ぁぁ！」
弾丸の衝撃を受けてセシリアの身体が後方に飛んだ。苦痛に見開かれた瞳。背に負ったアサルトライフルが下敷きになる。少女は糸が切れたように身体を横たえ、長い睫が静かに伏せられた。
ネリスは倒れ伏したセシリアに向かって、無慈悲にも九ミリ弾で追撃をかけた。高速で指を切り、紡ぎ出されるフルオートにも似た凄まじい速射。何度もスライドが往復し、淡々と排莢を繰り返す。着弾の度にセシリアの身体はビクビクと跳ね上がり、やがて動かなくなった。拳銃のスライドが下がり切り、弾倉が空になったことを告げる。
「おやすみなさい……」
ネリスは無表情のまま弾倉を交換し、セシリアの傍に歩み寄る。
「騎士長！」
「ネリス！」
思わず叫んで、駆け寄るクライブとエドワーズ。
ネリスがセシリアの躯に触れようとしたその時。セシリアの左手がまるで別の生き物のように蠢いた。その手は一体となった動作で拳銃を抜き、ネリスの額に強力な四五口径弾を叩き込んだ。薄皮が裂け、鮮紅が飛び散る。
「あ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ――！」
「ちっ、ゴム弾だったか」
激痛の走る額を抑えるネリス。額を鷲づかみにして、眼を見開く。
意識が無理矢理に身体から引き剥がされそうになるのを必死で堪える。

その先にある白々ともやが罹った視界の中、セシリアがむくりと、何度も何度も撃たれた腹部を庇いながら起き上がるのを見た。
「全く大したボディアーマーだ。あれだけ撃たれても衝撃が殆ど伝わってこない。それにこの軽さと取り回しの良さで防弾規格がクラス？に達しているとはな」
「お褒めの言葉光栄ですよぉ、セシリア卿」
装甲車からひょっこりと顔を出したアルバートが嬉しそうに言う。これも彼が設計したランドウォーリアシステムの一部である。
セシリアは無数の弾痕でぼろぼろになった野戦服を破り捨てた。肌着の上に直に装着された最新式の高性能防弾鎧。至近距離で十数発の九ミリ弾を受けても、セシリアに骨折などの外傷は無かった。何でもスペック上では徹甲弾の直撃に耐えうるらしい。
セシリアはその功労者をも脱ぎ捨てて、上半身は胸被い一枚のあられもない姿を晒す。露わになった首筋に胸元。肩から指先に掛けて女性的な線を描くしなやかな両腕。程良く引き締まった腹部。それらにはセシリアの過去を物語る幾つもの凄絶な傷跡が刻みつけられていた。
ネリスは歯を喰いしばり、薄く爆ぜた額を庇いながらセシリアと距離を取る。
「クライブ！　銃を！」
「お、おう！」
鬼気迫るネリスの様子に、思わず預かっていたサブマシンガンを渡してしまう。今のネリスに武器を与えたら、戦いが加速していくだけだと知っていたのだが。
「はっ！　そう来なくてはなぁ！」
セシリアは軍刀を鞘に収めて、背負っていたアサルトライフルを構える。
自分でもおかしかった。先ほどまでネリスに対する憎しみ発露していたというのに、今ではわき上がる高揚感がセシリアの血と肉を滾らせていた。久々にネリスとする本気の殺し合い。なぜか、とて

も楽しかった。
勝敗などもはやどうでも良いほどに。
この世界のことも、ラルフ・アーセックの事も、総て忘れて彼女とこの世の終わりまで戦い続けることができたなら、どれだけ心地の良いことだろう。だが、嘗ての最愛の人の幻影は二人の間に重くたゆたっている。
ネリスがサブマシンガンに弾丸を装填するのと、セシリアがライフルからゴム弾を抜き、実弾を叩き込んだのはほぼ同時だった。
ストックが肩に食い込み、照準器がお互いの頭部を狙い定める。
「ネリス！」
「セシリアぁ゛！」
お互いがお互いの名を呼び、絞られた引き金は誰も止める事はできない。
同時に響いた一発分の銃声。けぶる硝煙。はねる空薬莢。音が消え、世界は色彩を失う。
「――双方とも銃を収めて下さい！」
ネリスとセシリアの射線上、その少女は両手を突き出して立ちはだかっていた。精確を期した弾丸は、ネリス、セシリア、そして、二人の間に立つベレッタにも着弾してはいなかった。
なびく銀髪が身体を包み込み、小柄な身体は思いの外に確かな存在感を放っている。
幼い顔立ちは透き通るように凛々しく、先ほどまで碧かったはずの両眼がまるで血の様に紅く染まっていた。
「っ！」
「何？！」
二人は瞬き一つしていなかったはず。なのにベレッタは中間地点に割り込んでいる。確かにベレッタの身体能力は高かったが、目で追えないほどでもなかったはず。
まず銃口を下げたのは、意外にもセシリアだった。
「水が入ったな。お前の意志はよくわかった。やめだ」

それに続いてネリスも引き金から指を離す。
「セシリア……。あなた、変わった？」
ネリスは心底驚いたような表情を浮かべていた。
昔のセシリアだったら、このままベレッタごとネリスを撃ち抜いていただろうに。
セシリアはネリスに一別もくれずに振り返った。そこには仲間達が居て、突然のセシリアの独断暴挙に避難の声を上げる物も少なくはないが、全員が彼女の身をなにより案じていた。エドワーズが目のやり場に困るセシリアに上着を貸している。
「セシリア・ブラウニングは何一つ変わってないさ。ただ、嬉しかったんだ。お前が本気で私を殺そうとしてくれた。それだけだ」
セシリアはそれだけ言って去っていく。済まなかった、と隊員達に謝罪を幾度か述べて。「大丈夫かネリス」
不意に肩を叩かれた。そこには大切な相棒が居た。
「死人が出なくて良かったよ。全く、セシリアはあんなに独善行動するやつだったか」
やはり、先のセシリアの行動に腑に落ちない事がある様子。
「良いのよ、彼女はあれぐらいでないと」
ネリスはさもどうでも良い当然のように言ってのけた。
「良いのか？　殺されてても」
皮肉に笑みを噛みつつも問うクライブ。
「構わないわ。なぜか納得がいくから」
「さらりとそんなこと言うなって。俺が寂しくなるじゃねぇか」
「ふふ……。ごめん。冗談」
ネリスは静かに笑みを浮かべた。
クライブは思う。
この笑顔が自分にだけ向けられていると思えば、今まで散々苦労してきたことも報われると。
二つの繋がりとは離れたところに居たベレッタとアルバート。
ベレッタは握りしめた両方の拳を開いて見せた。その掌の中に収

まっていたのはセシリアの五・五六ミリライフル弾と、ネリスの五・七ミリ軽徹甲弾。ベレッタの手の皮は少し焼け焦げていた。
「スピードステップを全て解除した上に、オーバークロックまでやらかすとはねぇ」
アルバートのいつもと変わらないふざけた声。だが、ベレッタにはそれに非難が含まれていることを感じ取っていた。元の色に戻った碧の瞳を涙で潤ませる。また、お仕置きされるのだ。
「申し訳ありませんでした！」
表情を泣く寸前まで歪ませて、赦しを乞うベレッタ。
「あの二人のこと好きかい？」
びくっ！　と、痛みに備えて身をすくめてみたが、返ってきたのは予想していなかった言葉だった。
「はい……」
ベレッタは上目遣いに訝しみながらも答えた。
「じゃあ、ボクよりも？」
「いいえっ！」
即答。あまり無い胸を張り、自信に満ちた笑顔で高らかに言い放った。
「ふふふ……。それでこそボクの可愛いベレッタ」
ベレッタは感激した。かなり珍しくアルバートが微笑みを返してくれているのだから。嬉しくてまた泣きそうになる。
「――でも……」
感動とは別の涙が涙腺から吹き出たのを理解した。改めてベレッタは何かを悟ったような諦念した心持ちを取り戻した。アルバートはおもむろに端末を開いて、何らかの操作を行う。そしてＥｎｔｅｒに薬指を当て、
「お仕置きは別腹だからねぇ！」
クリック感を存分に楽しみながら押した。
「痛い痛

い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいだいいいぃ！」
「ああ……ベレッタ。君の絶叫はいくら聴いても飽きないよ」
強ばる瞳孔。弓なりに反り返る脊柱。倒れてのたうち回るベレッタをアルバートは恍惚とした表情で見つめる。
その日のお仕置きはベレッタが失禁するまで続いたらしい。

『初恋』

『初恋』

――五年前。ＡＷ３１０年。

体の自由が効かなかった。

少年は窓の無い陰鬱な部屋の隅に、一人膝を抱えてうずくまっていた。

背中に伝わる暖かみのないコンクリートの感触が、無力な自分へのやるせなさと、身を裂くような孤独感を一層駆り立てた。

永遠に続くかと思われた轟音と閃光は、実際には刹那の一瞬だった。

耳が痛い。音は聞こえない。

残った感覚を拡張すべく、固くつぶっていた目を開けると、先ほどまで身震いするほど寒々としていた室内の様相が一変していた。

『　　』

心臓が脈打った。

熱い――。

少年の額からこぼれる一筋の汗。足下に零れ落ちたそれは、先ほどまでそこにはなかったはずの水溜まりに墜ち、静寂に支配された室内に波紋を刻んだ。　瞳孔が限界を超えて見開かれる。自分の吐いている息が妙に冷たい。涙が乾いた瞳を潤していく。霞む視界。

それでも、少年はその光景を生涯忘れない。

狭い部屋の中、まるで絨毯のように部屋に敷き詰められた、死体、死体、死体。

そんなモノはもうどうでもよかった。

死人に口なし。尽きた者に、この残酷で美しい様相を拝むこと能わず。

鉄の臭いを撒き散らす血の海と、それを中和するかのような白い煙。地を覆い尽くす残骸の中に、神話に語り継がれる神が降臨していた。

三百年前、驕り高ぶった卑徒（ヒト）を剿滅し、この世界に新たな人類を創造した双子の神は、少女の姿をしていたと云う。

少年が見据えた、朱に染まる視線の先、一人たたずむ少女。

左右で結われた金の髪は、豊穣の麦穂か。

填め込まれた硝子の瞳には何も映さず。

その無垢な躰は、それが肉でできていると云うことを忘れてしまうほど。

紅の中に栄える白と黒。

纏う黒衣は聖職者が持つ儀礼服か――否。

それが少年の通う学園の制服だと気づくのに時間を要した。

右手に握った鉄は、純然たる暴力。

放たれた鉛は、もしかしたら慈悲の鮮紅なのかもしれない。

少年は見惚れていた。生と死が渾然と融和した少女の艶姿に。

そして、金髪の少女はまるで流れるかのような動作で、少年に向かって歩み出す。

小柄な紅い靴の爪先に、散らばった空薬莢が当たると、真鍮製のそれは怜悧な音を立てて血の水面を転がっていく。

この部屋の中に生者は二人のみ。

少年と少女の唯二人。

生きる者に終焉りなどは無い。

この瞬間は、この世で唯一の永遠だった。

少年の足下で膝を折った少女は、その華奢で折れてしまいそうな繊手を差し伸べた。

幻覚かもしれない。

だが、少年の目には少女が微笑んでいるように見えた。

その日、少年が生まれて初めて感じた死の恐怖。

そして、初恋――。

『葬送演舞と終わらない一日』

――現在。ＡＷ３１５年。

夜。傭兵舎。

違和感に気づいてクライブは目を覚ました。

今日は久々に良い夢を見ていたのに。

できれば朝日の昇るまで余韻に浸っていたかった。

クライブは辺りを注意深く見回した後、違和感の原因が意外と近くにあることに気がついた。

いや、まあいい。これはこれで幸せだ。

半ば呆れながら微笑んで、クライブはシーツの中の闖入者を見つめた。

まるで子猫のように体を丸めて安らか寝息を立て、クライブの腕の中であどけない寝顔を無防備にさらすネリスの姿がそこにあった。

彼女には若干だが夢遊病の気があって、夜な夜な、無意識にベッドを抜け出しては、翌朝になって想像もつかないところで発見される事がしばしばあった。

ネリスがクライブの寝台に潜り込んでくることはその中でも頻繁に起こることだ。無意識下で人肌の温もりを求めているが故の行動だとクライブは思っていた。

凛然としたたたずまいで、並み居る屈強な兵士達をいとも簡単に退けてしまう鬼神は、どこになりを潜めたのだろうか。クライブに身を委ねて眠る少女は年不相応なほど幼く、激しく保護欲をかき立てられる容姿をしている。

ネリスはクライブに弱さを見せることはほとんど無い。それがクライブには悲しいことだった。単純な強さではネリスの右に出る者はいない。だからこそ、クライブはネリスの支えになりたいと願っ

ていた。単純に相棒としてだけではなく。
クライブはネリスの金髪を愛おしげに撫でた。ほんのりと香る白色火薬の匂い。
消せない硝煙を香水に纏う姫は、どんな夢を見るのか。
その横顔は出逢ったときと全く変わらないままだ。
しかし、あの頃の彼女がこんな寝顔をしていただろうか。
与えられた敵を見境無く、唯、激情のままに屠り続けていたあの時のネリスに。
クライブは思う。自分はネリスの隣に立てる相棒になれたかと。
「いや、まだまだ、だよな」
最近は手緩い任務ばかりで身体が劣化してきている。少し訓練でもしてこよう。
クライブはネリスを起こさないように気を配りながらベッドから抜け出した。
「どこ行くの？」
ネリスの小さな手がクライブのシャツの裾をつかんでいた。
久しぶりに本気で驚いたクライブは十センチほど飛び上がった後、小さくうわずった声で訪ねた。
「お、起きてたのか」
「どこへ行く？」
再度問うネリス。そこでクライブはネリスがまだ寝ぼけている事に気づいた。
「訓練場」
素っ気なく答えると「そう……」、と言ってネリスはまた船をこぎ始めた。
「やれやれ、この眠り姫は……」
ネリスにシーツをかぶせてやり、野戦服に着替えたクライブは静かに部屋を後にした。

――練兵場、第五訓練棟。

「妙だな」

クライブは訓練棟の入り口に立ち、取り出した鍵を仕舞いつつ呟く。

普段は施錠されている訓練棟の扉が開いていたのだ。

この時間にこの施設を利用する人間はほぼ皆無だ。射撃場やもっと兵舎の近くにある訓練棟にならまだ人は残っているだろうが、基地の外れに位置するこの古くさい建物にわざわざ足を運ぶ酔狂がいるのだろうか。ちなみに傭兵舎からはこの施設が一番近い。

土足厳禁なので入ってすぐの所で靴と靴下を脱いで靴入れに突っ込む。そしてもう一つの扉をくぐると施設内の全貌が見渡せた。

電源に手を伸ばそうとしたクライブだったが、今日は満月。

大きくとられた窓からは青白い月光が差し込み、辺りを明るく照らしている。

毎回の事だがここに来ると学生時代を思い出してならない。

板張りの床が敷き詰められていて、唯広いだけで何もない空間。

昔在籍していた学園の体育館にそっくりだった。

「――結局、私たちは最後まで、すれ違ったままでしたね……兄様」

息を吐くように小さな声だが、静寂を孕んだ空気はそれをよく伝えた。

月明かりに独り照らされ、物憂げに独白する少女がそこに居た。

「私があなたの思いに答えられなかったのは、私たちが兄妹だからじゃありませんよ。私には、あの時から、――想う人がおりましたから……」

悲しげに故人のドッグタグを握りながら、今にも消え入りそうに呟く少女が誰なのか、判断するのにクライブはずいぶんな時間を要した。

影を成す黒衣は騎士の証。青白く照らされた頬には、一縷の涙が静かに輝いていた。

「セシリアじゃないか。何してるんだ、こんな時間に？」
あえてクライブは普段通りに話しかけた。
「――っ！」
一驚したセシリアの肩が跳ねる。次の瞬間には四五口径の銃口がクライブを睨み付けていたので、特別驚くようなそぶりも見せずに小さく両手を挙げる。正直、撃たれても文句は言えないので（死人に口なし）内心おっかなびっくりだった。
「何だ、クライブか」
「おまえ、判ってて抜いたろ」
「さぁ、どうだろうね。こいつのストロークが後二ミリ程浅かったら、もしやの事態になりかねなかったぞ。月夜ばかりと思うなよ」
憮然とした表情で言い放つセシリア。
もし、判っていなかったら、クライブの脳漿は所定の位置にはない。セシリアの引き金はテネジア軍人の中でもネリスに次いで軽い。そして、練度も高い。この距離で人頭を撃ち抜く位のことは目を瞑ってでも為せる。
グリップを握って安心したのか、その頃にはいつものセシリアに戻ってしまっていた。
親指でセイフティを掛けて拳銃をホルスターにしまい込むと、薄い藍色を帯びた黒髪を掻き上げてクライブの方に向き直る。
「それで、この夜分に何の用だ？」
「いや、このところ手緩い任務ばかりで身体が鈍っていてね。少し鍛錬でもしようかと思った次第ですよ」
「ブラックナイツから負傷者が出る程の激務を手緩いと評するとは……。おまえも言うようになったじゃないか。ストーナーの屋敷で温室暮らしをしていた頃とは訳が違うか」
「それは、まぁ。どこかのメイド長に鍛えられましたからね。あまでされて何故死ななかったのか今でも疑問ですよ。ねぇ、師匠（せんせい）？」
「そのおかげで貴族の坊ちゃまには縁遠い世界が垣間見えただろう？　瀟洒なメイドに手を出すと痛い目を見る」

お互いに芝居がかった口調で鬩(せめ)ぎ合う。とても、懐古しているようには見えなかったが、二人共妙に楽しそうだった。
誰に言われるでも無く、セシリアは壁際まで歩み寄り、そこに埋め込まれているラックの戸を開けた。中には、剣先と刃を鋳潰した稽古用の剣が整然と並べてあった。
「ところで、騎士長殿はこんな時間にこんなところで何をなされておいででしたか？」
セシリアはこれが答えだとばかりにその中の一本を取り、一本をクライブに投げて寄越した。
綺麗な弧をを描いて飛んだ剣はクライブの手中に見事に収まった。
クライブとセシリアは訓練場の真ん中で剣先を合わせて向き合う。
空には碧い満月。流れる群雲がその光を一瞬遮る。
それを見たセシリアはクライブと視線を合わせ、一度目を閉じ呟く。
「――月見だよ」
賽は投げられた。
月明かりさえも朧な宵闇の中。
先に踏み込んだのはクライブだった。
ただでさえ近い間合い。
細い刃は鞭のようにしなり、セシリアの胴を薙ぐ。
セシリアは軽い足裁きで後退し、一閃を凌ぐ。隙のできたクライブの胸元に突きを放つ。間一髪でそれに反応できたクライブは剣先を回して刺突をいなした。
再び二人は間合いを取る。今し方起こった刹那の剣戟が嘘のように、あたりに静寂が帰ってくる。
「ほう、銃を取るようになっても基礎は忘れていなかったか。なら、次は足裁きだ」
クライブは遠山の目でセシリアを捉えていた。剣先が動く前に手元が動く。手元が動く前には肩が動く。
セシリアは極小の振りかぶりで斬檄を放ってきた。何度となく繰

り返し斬り返されるそれにクライブはついて行くので精一杯だった。衝突し合う金属と金属の奏でる音楽が遠くまで良く響いた。隙を伺うようにセシリアの足取りが右へ、左へ変化していく。緩急をつけて流れるように、クライブは翻弄されつつあった。

そこでクライブは動きを変えた。目一杯振りかぶった状態から打ち下ろし、セシリアの剣を弾きつつ斬りつける。あと少しのところで肩に直撃するところで、回り帰ってきた刃に防がれてしまった。

また局面が変わる。そこからはクライブが切り攻める番だった。振りかぶりを大きく取り、正確に斬檄を紡ぐ。防御に回ったセシリアの刃が右へ、左へと揺さぶられる。

「全く、解せないな」

「何がだ？」

防戦に回り、苦戦を強いられているはずのセシリアが紡いだ言葉は、苦し紛れではなく、まるで感慨に耽っているかのようなモノだった。

「公爵家の嫡子として生まれ、何不自由ない人生を送れるはずのおまえが、凡てを捨ててまで戦火に身を投じる理由がだよ！」

セシリアはクライブの剣戟の隙間を縫って、喉笛を掻き斬るべく、しならせた刃を振るう。

「そんなの単純だ」

クライブのシルエットがセシリアの視界から消える。低い体制を取り、セシリアの死角に潜り込んだのだ。剣を握り突き出された手を剣先で切り上げる。

「――っぁ！」

小気味よい音がして、セシリアの剣が天井近くまで舞い上がった。勢いをつけるために剣を持つ手を内側に引き寄せる。

「ネリスの為だよ！」

クライブの突きがセシリアの額を撃ち抜いた。

「がぁっ！」

弾かれたかのようにセシリアの身体が宙を舞い、仰向けのまま床

に倒れた。
　額は割れ血が溢れていた。だが、荒い息を付きながら、セシリアは笑みを零していた。
「ふふふ……。あはははは！　おまえらしいなクライブ。おまえに初めて一本取られたよ」
「今のはネリスの仇だからな。私怨は含まれていないので」
　セシリアは差し伸べられた手を握った。
「全く、手加減をするなんて、すこぶるセシリアらしくない」
「おや、気づいていたのかい？」
「少女相手に真っ正面からやり合って勝てる男は居ない」
「そうだな。たぶん月のせいだろう。――ああ、いい月だ」
　煌々と光る満月は昔と変わらない色をしていた。
「――そうだな」

「おい、何処へ行くんだ？」
　二人きりになったのは久しぶりだったので、旧交を暖めんとこれから酒でも共に酌み交わそうかと思ったところだったのだが、セシリアは剣を元の場所に仕舞うと、一瞥をくれる事もせずに出口へと踵を返してしまった。
「隣だ」
　しかし、その背中から突き放す様な感情は見て取れなかったため、付いていっても良いのだろう。寧ろ、付いてきて欲しがってるようにも見て取れた。
　現在隣の第六訓練棟は臨時モルグ（遺体安置場）として機能している。明日の合同葬儀に向けて、すべての遺体は小綺麗に死化粧され、厳かな作りの棺に込められて眠っていることだろう。
「レンブランドか……」
「おや、坊ちゃまが一使用人に過ぎない庭師のことを覚えていたとはね。結局、死ぬまでろくに顔も会わせられなかったからな。……

兄上は莫迦だ。ストーナー家の屋敷で今も庭師を続けていればこんな事にはならなかっただろうに……。私が本当は軍に居ると知ったとたん、何の考えもなしに入隊してきてしまった。鋏しか持ったことの無いような手に銃を取って。元から、住む世界が違っていたんだよ……。なのに――」

クライブにはレンブランドの気持ちがよく解った。考えてみると、自分もネリスとは違う世界を生きてきた。だが、数奇な運命により、道は一度だけ交差する。それでも、それから二度と交わるはずの無かったはずの世界だ。

今、クライブがネリスの隣にいるのは、彼が確固たる意志を持って他人から与えられた運命と戦い続けてきた結果である。だが、未だに二つの道は完全に交わることは無く、互いに不完全な螺旋を描き続けているのだ。その果ては、収束か離散か。クライブがレンブランドのような末路をたどらないという保証はどこにもないのだから。それでも、もう後戻りはできない。運命に一太刀浴びせた瞬間から彼は逸脱した存在であり、異端なのだから。

クライブは淡々と歩くセシリアの背中を追いかける。この時ばかりは、戦場に勝利と死を振りまき続ける黒騎士の背中が、とても小さく儚いモノに見えた。

「クライブ。おまえも世界に喰われないように精々気をつけることだな」

「覚悟はできてるよ」

「いつかおまえが頽れた時にもその台詞が聞けるかどうか、今から楽しみだよ」

「なんだか、満身創痍な俺の額に銃を突き付けるセシリア。という構図が脳裏を過ぎったのだが……」

「そうならないように注意しろと云っているのだよ。私とておまえを撃つのは避けたいからな。……しかし、やはり解せんな」

「なにがだよ」

「何故、おまえが私でなくネリスを選んだのかだ」

また振り返り、面と向かってクライブの目を見るセシリア。息を飲むような瞬間だけ音が止まった。クライブはセシリアの目を覗き込む。先ほどまでは暗闇の中でも爛爛と光を放っていた黒瞳も、今はなりを潜めていた。

そして目を反らし、一度息を小さく息を吐いてから答えた。

「一目惚れなんだから仕方がない」

それを聞いてセシリアは屈託無く笑った。寂しげで有りながらも、自然な笑みだった。

「相変わらず嫌なやつだおまえは。ますます気に入った。そして、ネリスがますます嫌いになった」

クライブは乾いた笑みを漏らすしかなかった。

銃は良い。

手にした瞬間に伝わる、重厚な鋼の感触。

曇りなく磨かれたフレームは、まるで漆黒の鏡のように無垢だ。

逆に、錆と砂に埋もれた古銃も味があって良い。

塗りたくられたガンオイルの香りが鼻腔を突く感覚も好きだ。

何のカスタムも施されていない少女（ハンドガン）も、様々なオプションでドレスアップした豊満な肉体を持つ淑女（アサルトライフル）も。一丁一丁が設計段階、または同じモデルでも製造ラインで個性豊かな特徴を持つ。刀剣もまた魅力的だが、考えるだけでこれほど胸が躍る武器は他にない。

肩に吸い付くようなアサルトライフルのスリーバーストも、小気味よい九ミリのダブルタップも、フィフティキャリバーの全身を叩きのめすようなシングルトリガーも、わたしを陶酔させるに事欠かさない。

どんなイルミネーションよりも美しい、まるで終焉を迎える星のように瞬くマズルフラッシュ。弾き出された空薬莢が奏でる怜悧な音は、轟音に掻き消されているはずなのに、ひどく明瞭に耳へと届く。

嗚呼――なぜ、こんなにも美しい芸術品達が人を殺めることしかできないのだろうか。
否、彼女達は純粋な破壊をもたらすためだけに創られた。
それ故に美しい。どこまでも無垢で、どこまでも気高く、どこまでも哀しい。
亡くすことが身の常で。壊す事が目的で。殺す事がその意義で。
気づけばすべて喪われ。
トリガーハッピーな己の人差し指を切り落とし、愛する者へと手向けたところで、一つも変わりはしないのだろう。
この身、総てが一振りの鋼なのだから。

セシリアが物を取ってくると言って一度兵舎に戻った。
訓練棟の前に佇み、もの凄い早さで遠ざかっていく小柄な背中を見送った後、クライブも何か思い当たる節があったか、目と鼻の先にある傭兵舎の方へと踵を返した。
さほど、時間を待たずにセシリアが戻ってきた。先ほどクライブに突かれて割れた額に大きな絆創膏を貼って。その様子が思いの外シュールだった為クライブは苦笑した。
そして、セシリアがゲシュタニウム軍刀を腰に帯び、アサルトライフル向けと思われるサイズのガンケースを携えていることに気がついた。
「考えることは皆一様か」
「そうらしいな」
相づちを打つセシリアは、無機質な作りのライフルケースを一度持ち上げて見せ、腰に差したゲシュタニウム軍刀の柄の位置を調節した。
一方のクライブが携えていたのは、何の変哲もないヴァイオリンケースだった。いや、何の変哲も無いと言ったら語弊が生じるだろう。随所から漂う静かな気品は、それ相応の業物だと言うことを語

らずとも主張している。
「それが親衛騎士隊のブラックカービンか」
「ああ、これは儀仗銃としても機能するからな」
「ネリスが前に言っていたな。五・五六ミリ突撃銃の中でも最高峰の性能を誇るってな」
「旧式化しつつはあるが、扱いやすさは他の追随を許さない。何より、黒騎士の名にふさわしい高貴なシルエット。レイルインターフェースシステムによる万能と呼ぶにふさわしい拡張性。製造ラインから高度に選定されたヘヴィバレルはそこら辺の突撃銃じゃまねのできない命中性を誇る。まさに『女王陛下の突撃銃』に相応しい。ネリスが欲しがるのは無理もないだろう。だが、ブラックナイツ専用だから隊員以外は手にすることはできないがな。これを女王陛下から直々に託された時の感動は今でも忘れない。こいつは騎士の生き様そのものだよ」
そう捲し立てたセシリアは、己が剣の収まったケースを誇らしげに撫でた。
その実、ネリスは同銃の保守パーツをブラックナイツから横流し続けて、膨大な労力と時間をかけ一丁を完成させてしまったと言うのは絶対に内緒である。
「じゃあ、行くか」
「応」
その時、一陣の風が二人の間を薙いだ。
一機の戦闘機が哨戒任務を終え、暖まったターボファンエンジンの出力を絞りながら、おのが羽を休めんと滑走路にアプローチしてきていたのだ。それは手を伸ばせば届くような低空を滑るようにして飛び抜け、目と鼻の先にある滑走路の誘導灯へと危なげなく着陸していった。
セシリアは轟風に棚引く黒髪を宥めながらその様子を暫し見守っていた。
また、空が光った。

一瞬、後続機が降りてくるのかと思い、再び空を見上げてみたがそれは違っていた。
二人がこれから訪れようとしていた、臨時モルグが設営されている第六訓練棟。
なんの面白みもない形状の建造物。格納庫のそれに近いアーチを描く屋根。その屋根を突き抜けて、照明弾のように強烈な光を放つ球体の群れが、ゆらゆらと不規則な軌道を描きながら空へ上っていく。一つ一つ、大きさがまちまちで、明度も色彩も異なる。二人はその幻葬を目の当たりにして立ちすくむ。
クライブにしてみれば初めて見る物でも、珍しい物でもない。
だが、その光景は何度見ても、平常心を養う事ができない。寒気を覚えるような、物言えぬ感動が身を支配する。背骨の中を何かが走る。鼻孔の奥に蘇る懐かしい記憶。それが何だったかはずっと思い出せないままだ。実のない既視感が支配し、網膜は血液に焼かれ、その映像を一層のこと鮮明に映し出すだけだ。膝が嗤う。頽れることもできないまま、二人はお互いに顔を見合わせ、その現象の根源へと向かって走り出していた。
風が身を切るような速度で疾走した二人はモルグへとなだれ込み、慣性の法則も無視するが如く音も立てずに制動し、止まった。
そして、その光景を目の当たりにする。
――銃声。
いや、それは歌声だった。
銃口から吐き出される硝煙。
彼女の唇から紡がれる旋律。
辺り一面に整然と鎮座した大量の棺たち。あたりに立ちこめる無数の光の束。月明かりに誘われて空に上ってく様は、目に映ろう現を疑ってしまいたくなるほど幻想的だ。
ネリスはその中心に居た。
青白い光が彼女の金髪を撫でつける。薄紅を引いた唇に、温かみに欠ける表情。だが、それは人形のような人工美とはまたかけ離れ

ていた。無機質にも見える藍色の独眼も、よくよく見ればどこか物悲しそうに伏せられている。
ネリスはたおやかに四肢を操り、幾何学的な軌跡を描く。力尽きて頽れたかと思えば、低い姿勢からゆっくりと頭を上げる。官能的な上目遣いに、長い睫毛。
その艶姿は、美しいというより既に神秘的で、見る物すべての魂が震える。
なめらかなソプラノで彼女は歌い続ける。歌詞に使われている言語系は既に失われて久しい為、その意味を知るものは誰もいない。唯、その歌だけが遙か古代から口伝されている。それは少女神信仰にある送葬演舞だった。
ネリスが掲げたレバーアクションのショットガン。儀仗兵用の装飾が施されている。
モデルはだいぶ古い物で、二百年以上前に原型が世に出回った物だ。当時としては画期的な連発式のショットガン。
銃口からもうもうと立ちこめる黒色火薬のガンスモーク。
ネリスはそれを、レバーを軸にして片手で回した。ストックとバレルの位置が瞬時にして入れ替わり、そして元の位置に戻る。空砲の空薬莢が弾け飛び、チューブマガジンから次弾が装填される。通常、このタイプのショットガンは片手での排莢・装填はできない。ネリスが行ったのは、長大な銃本体をまるでリヴォルバーのようにスピンさせて行う荒技だ。先ほどまでの繊細な動きとはまた違った大振りのモーション。曲調が強くなり、それが頂点に達したところで引き金を引き、黒色火薬の怒張を解放する。
クライブは息を飲んだ。あたりをふよふよと漂う光球の群れが、まるで吸い寄せられるかのようにネリスを中心にして集まっていく。そしてそれらはゆっくりと空へ帰って逝く。だが、ショットガンが激発する瞬間には急に加速する。
舞踊と旋律。轟音と硝煙が彼らの背中を押しているのだろうか。
「硝煙の死神が死臭を嗅ぎ付けてきたか。律儀なやつだ。黙ってい

ても明日の合同葬儀で皆召されるというのに……」
　クライブの隣にたつセシリアが、息を吐くように呟いた。彼女は徐にガンケースを開けて、アサルトライフルを取り出した。キャリングハンドルを鷲づかみにし、その優美な漆黒を目の前に掲げてみせる。それは、ストックが木製のネリスのショットガンとは違い、ゲシュタニウムで形作られたフレームが鋭利な冷たさを醸し出していた。
「五百人近い人間の御霊だ。あいつ一人には荷が勝ちすぎる。私も舞うとするか」
　セシリアはクライブの方を流し目で見つめる。
「音を貰えるかな？」
　クライブは黙って頷くと、ヴァイオリンを構えた。
　轟音が反響する空間に、ヴァイオリンの主旋律が投じられる。
　それにより場の空気が一変する。
　淀みなく前後する弓。流れるように、それでいて激しく。鳥肌が立つほどにその音は清んでいた。
　セシリア右手にゲシュタニウム軍刀を抜き放ち、左手でアサルトライフルを握りしめる。
　一度高く掲げたアサルトライフルを、緩慢な動作で横に振る。同時に指切り三回トリガーを引いてスリーバースト。上を向いたエジェクションポートから薬莢が躍り出る。
　身体を独楽のように回転させながら、刃がそれに付き従う。アサルトライフルのストックを肩に当てたまま身体を開く。それは典雅な舞だった。
　セシリアはその身に纏わり付く死霊の群れを、無慈悲に切り捨て撃ち据えて空へと送る。それはこの世に対する未練を払拭する行為。慈悲深く送り出すネリスのそれとは本質が異なる。
　セシリアとネリスは互いに目配せをし、刻む足取りを合わせる。
　曲調は淡々と変容し、加速していく。
　時には流麗に。時には厳かに。時には情熱的に。

そして終曲へと向かっていく。
終わりは唐突に訪れる。
クライブが最後に弓を引ききると、そこには静寂が殺到してくる。
空薬莢が地面を申し訳なさそうに転がる。
そこには先ほどまでの幻想的な風景は失われていた。
まるで短い夢を見ていたかのようだ。
辺りに充ち満ちていた光の群は形を潜め、窓から差し込む月光が儚く見える。
「本当に、今日は妙な日ね」
ネリスは困ったようにはにかむと、セシリアとクライブが小さく同意した。
「全くだ」
その時、まるでタイミングを身計ったの如く、心臓を跳ね上げるようなけたたましい大音量がそこら中に響いた。
――レッドアラート。
ネリス。クライブ。セシリア。三者三様の驚愕を浮かべて身構える。
「敵襲?!」
クライブが叫ぶ。
「馬鹿な！　ここはテネジアのど真ん中だぞ！　敵がここに来るまで気づかないはずがない！」
セシリアは取り出した情報端末に走った文字を喰い入るようにして読み、目を疑った。
「なっ!?　王都が攻撃を受けているだと……！」
「往くわよ、クライブ！」
真っ先にネリスが駆けだしていた。
「セシリア！　またアパッチを借りるぞ！　スクランブルいいな？」
「頼む！　情報は逐一送る。ブラックナイツも地上部隊を編成して市街地に向かう！」
クライブとネリスはヘリの駐機場に。セシリアは軍司令部に向か

って急行した。
クライブは思う。
「やっぱり今日は厄日みたいだな！」

ネリスとクライブは出撃準備を整えてヘリの駐機場に急行すると、整備兵が離陸準備を整えて待っていた。
セシリアが話を通していてくれたらしい。傭兵隊の二人がブラックナイツのヘリを使う事に嫌な顔をされなくて済んだ。セシリアとクライブは分担して離陸前の簡易点検を行う。いくら腕利きの整備兵が丹精込めて整備した機体でも万が一の事があってはいけない。
一通りのチェックを済ませて搭乗する。
ネリスは後席でパイロットを務め、クライブは前席で火器管制のガナーを受け持つ
整備兵に合図を送り、戦闘ヘリは離陸を始める。
翼下にヘルファイアミサイルとハイドラロケットランチャー。胴体下に三十ミリチェーンガンをぶら下げた空飛ぶ戦車は、戦火に紅く染まった空へと飛び立つ。
コックピットのディスプレイには戦況が順次追加されていく。
それを読み取っていくと、ネリスはまた悲しい顔をした。
「今情報が入ったわ敵の侵入経路は、空路。さっき空軍の戦闘機が敵輸送機を撃墜したらしいけど、積み荷は投下された後だからあまり意味はないわね。戦闘機部隊は今、輸送機についてきた敵護衛戦闘機と交戦中で航空支援は期待できない。戦力差が圧倒的だから、すぐにけりはつくだろうけど、それまで地上戦力だけで王都を守らないと」
「にしても、敵さんはなんて馬鹿なことをやりやがるんだ。レーダー警戒網の隙間をかいくぐり、哨戒機の目をくらまし、空中給油を繰り返してやっとの事で王都に辿り着いても、後方支援も補給も援軍も期待できない。征ったらそれっきりの特攻だ。テネジアがどれ

ほど他国に恨まれているかよく解るな。あるいは、別に目的があるか」
「それはまだ解らないし、私達が気にする事じゃないわ。降りかかる火の粉は払うまでよ」
「そうだな。よろしく頼むぜ相棒！」
「ええ」
そして、レーダーで敵影を確認したクライブは思わず呟いた。暗視装置に映った光景を見て、思わず自分の目を疑いたくなった。
「おいおい、なんだこれ……」

王宮の一角に設置された軍総司令部は有事の慌ただしさで包まれていた。
何台ものモニターが並んだ壁際ではオペレーター達が全軍に向けて指示を送り続けている。誰もかれもが不足の事態に当惑と焦燥を浮かべていた。終戦以来このような大規模な攻撃を受けたことが無い上、状況を鑑みてもう戦いは起こらないだろうという弛んだ空気が軍に流れていたせいでもある。だいたい、前大戦で敵国だったソレイユ連邦とは固い不可侵条約を締結した。疲弊した隣国は常に亡国の危機に晒されていて他国に攻め入る余裕など在りはしない。こんな状況で大規模な軍事侵攻を行える組織は存在しないし、してはいけないはずなのだが。それは希望的観測でしかなかったと、セシリアは司令部に着いた瞬間に思い知らされた。
逐一書き換えられていく情報の大波。それを精査し、的確に状況を把握するのが指揮官のつとめ。
「陛下！」
セシリアは右往左往する軍人の群の中に主を見つけて駆け寄る。
「セシリア。来てくれましたか。状況は不透明です。敵軍の国籍は不明。詳細も把握し切れていません。ですが、王都が攻撃を受けているのは確かです。これを見てください」

オリヴィアが指し示したモニターに映った映像を見て、セシリアは今日何度目か解らない驚愕を浮かべた。
「陛下……。これは……」
それは前線の状況を写した偵察映像だった。
おそらく偵察機が空から写したものだろう。あまり画質は良くないがそのものの全体像をつかむには十分だった。
「二足歩行兵器！　実用化されていたのですか？！」
それは全長十メートル程の人型兵器が、腕に装備された機関砲を市街地に向けて発砲しているシーンだった。シルエットは消してスマートとはいえない。どちらかというと建設用重機を戦闘用に改修したかのような不格好な姿だった。
特に目立つのは背中に背負った、ここから見ただけでは用途不明の不気味なコンテナ。
太い両腕部にはそれぞれガトリング砲と、速射砲らしき中口径の砲が装備されている。
肩に搭載されているランチャーは、赤外線誘導対戦車ミサイルのたぐいだろうか。
周囲には数人の追随歩兵の姿も確認できる。各部が分厚い装甲に覆われている上に、映像を見る限り機動性も悪くはない。無人の乗用車を踏み越えても、バランスを崩す様子も見せない。
「この兵器が確認されただけでも十二機の三個小隊。それに伴った追随歩兵と観測用の無人機も前線に投入されているようです。市民はいち早くシェルターに避難したようで、被害は少ないと思いますが。王都での暴挙、これ以上許すわけにはいきません。どうやらあれは、ここを目指して進行しているようですし。セシリア。征ってくれますか？」
「Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ！！」
セシリアは傅いて最敬礼。即座に待機させておいたブラックナイツの元へ向かうべく、踵を返したその時、妙に楽しそうなアルバートが、普段と変わらない暢気な足取りで、逼迫した司令室へと入っ

てきた。
「あれはソレイユが前大戦の後期に開発していた人型特装兵器。通称Ｆｉｒｅ　Ａｒｍｓ。略してＦＡなんて呼ばれていたね。向こうも古代技術の軍事転用に躍起になってたからねぇ。それが他国に渡ったのかな？　僕の知りうる限りの情報は全軍に流しておいたから。詳しいことはそっちを参照してね」
「解った！　協力感謝する」
アルバートはそれをいつも通りの薄ら笑いで見送り、ひらひらと手を振った。
オリヴィアは刻一刻と動き続ける戦況を見つめながら、物憂げな表情を崩さなかった。
「あちらさんのお人形と僕の作品。どっちが強いのか。いやぁ、楽しみだなぁ……」
アルバートはもう声を潜めることもなく、不吉に笑いだした。
それを見た多くの軍人が気味悪そうに視線を送っている中、オリヴィアは眉根一つ動かすことはなかった。祈るようにその手が握りしめられる。
「――どうか無事に……」

『鉄の騎兵と炎の巨人』

「市民の避難が最優先だ！」
ここはテネジア王都郊外に位置する集合住宅街。
重要な施設など何一つない、一般的な居住区だ。
辺りには比較的背の高い、ビルのような貸し住居が林立している。
そこでは多数の民兵達が、突然の侵略者達を相手に、必死に戦い続けていた。
彼等は民兵とはいえ、月に一度の定期訓練で銃の使い方を学んだ程度の民間人だ。
その殆どが学生である。
ここは都心と続く主要道。
ここを突破されたら首都機能の集中する都心部は目と鼻の先。
万が一そこを占領ないし破壊されれば、テネジア王国は事実上の崩壊を迎える。
「軍が来るまで守り切れ！　ここを突破されたら王宮は目の前だぞ！」
その場の指揮を受け持っていた青年が叫ぶ。
各々が乗用車や土嚢をバリケードにして、隙間からライフルの銃口を突き出して応戦している。彼の背後には負傷した民兵が仲間の手当を受けていた。
彼等はあくまで有事の際の防衛戦力で、歩兵携行兵器以上の武装は殆ど配備されていなかった。敵の歩兵は何とか阻止できたとしても、銃弾もなけなしのロケット弾をも、ものともせずに突き進んでくるＦＡ（Ｆｉｒｅ　Ａｒｍｓ）に対してこれ以上為す術はなかった。戦況は後退を強いられている。
「くそ！　くたばれ怪物！」
指揮を執っていた青年が咆吼と共にロケットランチャーを構える。
横に立った数名の仲間もそれに合わせてランチャーを担いで照準。

安全装置解除。
「撃てぇい！」
一斉に発射され、巨人に向けて殺到するロケット弾の軌跡。一発一発が、一定の範囲を互いにをカバーし合い、あの巨体では避けようのない弾幕を形成するに至った。
しかも一斉射したロケット弾は、一発でテネジアの主力戦車の装甲を貫徹する威力を持っている、いくらあの巨体でもあれだけの数を受けて無事でいられる筈がない。
誰もが直撃を確信したその時、ＦＡはその右手に装着された三十ミリガトリング砲を構えた。
「まさか……！　伏せろ！」
耳をつんざく轟音と、目を焼くような閃光。
それはロケット弾が着弾した合図では無かった。
巨人の右手が焔を噴く。
ガトリング砲の銃身が高速で回転しつつ三十ミリ口径の砲弾を毎秒百発のスピードでばらまき始めたのだ。
巨人の前方に高密度弾幕を形成し、殺到したロケット弾の全てを撃ち落とす。
排莢口から三十ミリ砲弾の太い空薬莢が雨のように流れ出していく。それは手近にあった集合住宅の窓ガラスを叩き割って内部に侵入。誰かの生活空間を滅茶苦茶にした。
「くそ！　ゴールキーパーか！」
ヘルメットに降り注ぐロケット弾の破片に舌打ちをして、忌々しそうに呟く。
戦艦の対ミサイル防御に使用される、近接対空防御システム『ゴールキーパー』。
高度に自動化されたセンサーで迫り来る弾頭を捕捉して撃ち落とす事ができる。
対艦ミサイルと比べて威力も弾速も劣る歩兵携行ロケット弾を撃ち落とすなど造作もないのだ。

今までＦＡは目前の彼等には見向きもせずに、別の方向に向けて砲撃を繰り返していたが、民兵達に危険度が確認された為、遂にその鎌首をもたげた。
巨人がその腕に装備された七十六ミリ速射砲をバリケードに向け照準する。
発砲とほぼ同時にイージス艦の副砲クラスの火力が炸裂した。
彼等の構築した防御陣地が、まるで風に舞う木の葉のように容易く吹き飛ばされてしまう。
鋼の巨人は爆炎を踏み越え、揺るぎない足取りでこちらに向かってくる。
照り返した炎が映るその横顔がひどく禍々しく見えた。
誰もが死を覚悟したその時、轟音と共に巨人の胸部で爆発が起こり、その巨体が一瞬よろめいた。
つぶっていた目を開けて後方を見やると、そこには漆黒の戦車が駆けつけていた。
砲塔側面に『漆黒の荒馬』のエンブレムを誇らしげに掲げて。
「……あれは……。ブラックナイツだ！　ブラックナイツが来てくれたんだ！」
そこにいた民兵の間に生気が戻った。
『そこの民兵達！　今まで大儀だった！　後は我々が食い止める。至急退避を開始してくれ！　市民の事は頼んだぞ！』
セシリアは戦車から指示を飛ばす。
この戦車は小型、軽量かつ優れた機動性を有し、大口径の主砲で敵戦車を迅速に撃破する事を主眼に置いて設計された最新型だった。
特筆すべきはその恐るべき防御性能にある。
装甲には新素材ゲシュタニウムを採用し、戦場での生存性を劇的に向上させている。このゲシュタニウムは特殊な特性が確認されていて、受けた運動エネルギーをそのまま熱エネルギーに変換してしまうというものだ。
耐久性試験では、ＡＰＦＳＤＳやＨＥＡＴの百四十ミリ戦車砲を、

側面装甲と砲塔に二十発以上直撃されてもほぼ無傷という驚異的な結果が報告されている。
自己鍛造弾や百五十五ミリ榴弾を上面に受けてもびくともしない上に、対戦車地雷を踏んでも自走可能だった。
高価かつ、量産も容易ではない為まだ配備数は少なく、主力戦車の座は未だ旧式の第三世代戦車にあるが、この戦車の驚異的な性能は数多の実験と実戦で白日の下に晒されていた。兵役に携わるものでなくても、誰もがこの戦車に対して憧れを抱く。それは、紛れも無く、テネジアの力の象徴なのだから。
この戦車は高度に電子化されていて少人数で運用可能な為、少数精鋭のブラックナイツには非常に適した戦車だといえよう。セシリアは操縦士兼戦車長。砲撃手にはエドワーズが就いている。
敵ＦＡは七十六ミリ速射砲の照準を定める。その瞬間に戦車は動いていた。
セシリアは神速の如き機動で戦車を駆る。それはもはや戦車の機動ではなかった。
いくら戦車として小型軽量とはいえ、全長八メートル、重量四十トン以上ある巨躯が、敵の砲撃を舞い踊る蝶のように避ける様はまさに圧巻だった。
舗装された地面を力強く抉りつつ、粉塵を噴き上げて高速回転する無限軌道。
その重量と機動に激しく伸縮するサスペンション。
唸りを上げる高出力ディーゼルエンジン。
激しく揺られる車内。それに惑わされることなく、セシリアとエドワーズは戦闘行動に従事する。
次々に炸裂する七十六ミリ速射砲。
恐るべき破壊力と連射性能で地面に穴を穿っていくが、セシリアが駆る戦車には未だ一発も当たらない。
「次弾装填！　弾種、ＡＰＦＳＤＳ（翼安定装弾筒付徹甲弾）！」
「了解！」

敵の側面にねじ込むようなドリフト走行。
恐るべき制動性を発揮し、時速百キロメートル以上で疾駆していた巨体が、ブレーキを掛けてから僅か約二メートルの距離で完全に停止する。
車体が一瞬浮き、ものすごい慣性が車内に働く。
それが収まった刹那にセシリアが吠えた。
「撃てぇい！」
セシリアの合図と共にエドワーズが主砲を発射する。
絶大な破壊力を誇る百四十ミリ滑腔砲の反動で、片方の無限軌道が路面から僅かに浮き上がる。
暴力的な轟音と共に、鮮やかな発射炎が砲口から咲き乱れる。
秒速千八百メートルで射出されたＡＰＦＳＤＳは、鋭いチタニウム弾芯を露出させて突進。速射砲の装備されたＦＡの左腕を撃ち抜いた。
「着弾確認！　敵左腕部撃破！」
エドワーズが興奮を隠しきれない様子でセシリアに報告する。
「敵はまだ生きている！　攻撃の手を緩めるな！　次弾装填！　弾種、ＨＥＡＴ（形成炸薬弾）！」
「了解！　弾種選択。ＨＥＡＴ！」
エドワーズは射撃管制装置を操作。ＨＥＡＴにスイッチ。
砲塔内で自動装填装置が次弾のＨＥＡＴ弾を装填する。
この作業は本来人力で行われるため、戦車砲の連射は効かないのが一般だが、この戦車は自動装填装置のおかげで速射砲の如き連射が可能だ。
そもそも、百四十ミリ口径クラスの戦車砲弾を人力で装填する事は事実上不可能に近いため、自動装填装置の搭載は元より必須だった。
その時、車内に警告音が鳴り響いた。
「騎士長！　三時方向に敵影！　照準されています！」
エドワーズが情報を読み上げる。危険度識別システムが周囲の状

況を読み取り、攻性目標が発生すると警告する仕組みになっていた。
「伏兵か！」
セシリアは統合情報ディスプレイの視点を移動させて、カメラを車外の自動機関銃にリンクさせる。
戦車上部に搭載された五十口径の機関銃は自動化されていて、車内からの操作が可能だ。
機関銃に搭載されたカメラを操作すると、近くの背の高い集合住宅の屋上からロケットランチャーでセシリア達を狙う伏兵の姿があった。
「トップアタックを狙ったか、判断は悪くない。だが、遅いわ！」
セシリアは五十口径機関銃を掃射してその敵兵をミンチにした。
その時、伏兵に気を取られていたセシリアに衝撃が走る。
車体が激しく揺さぶられる。警告音が鳴り止まない。
装甲に仕込まれたサブカメラが破壊され車外の情報が絶たれる。
戦車を急発進させて難を逃れる。ペリスコープから外を覗くと、ＦＡが残った右手の三十ミリガトリング砲をセシリア達に向けて乱射していた。
ゲシュタニウム製の強化複合装甲を纏っていても、喰らい続けるのは危険だ。
「左の側面装甲にダメージ！　センサー類に損害、視界の十パーセントが削られました！」
「ふん、この程度で！」
セシリアはまた敵の後方に回って主砲をお見舞いするべく、ジグザグ機動を開始する。
だが、残ったセンサーが近くの建物から出てきた、逃げ遅れの民間人を捕捉した。
「な？！　まだ市民が残っていたのか！」
それは年端もいかない少女で、辺りを不安げに見渡している。親とはぐれてしまったのだろうか。
それを見た巨人が次に執った行動。

卑劣にも民間人の少女に機関砲の照準を向ける事だった。
「あいつ！　民間人に砲口を！」
エドワーズが憤りに身を震わせる。
「射線に車体をねじ込むぞ！　主砲と機関銃の制御は任せた！」
「アイハブコントロール！」
最高戦速で殺到する。エドワーズが重機関銃で行く手を遮る敵兵を一掃し、高機動走行中にも的確な照準で主砲を発射してＦＡを牽制した。
セシリアはその身を挺して盾になるべく、少女とＦＡの間に車体を構える。
反撃に転じようとした瞬間、激しく車体が揺さぶられる。鋼鉄のシャワーが装甲を叩く。
装甲をぶち抜くべく殺到する暴力的な運動エネルギーを、ゲシュタニウムが熱エネルギーに変換。装甲表面の温度が急上昇し、突撃してきた三十ミリ砲弾が次々に蒸発して辺りに立ちこめていく。これがもし通常の装甲ならとっくに蜂の巣にされて四散しているところだ。
「ゲシュタニウム装甲、正常に機能しています！　着弾した弾頭、順次蒸発」
不幸にも瓦礫の山に片側を乗り上げてしまっていて、主砲の射角が取れないため反撃も不能。体制を立て直して反撃するため回避行動を取ると、後ろで腰を抜かしている少女が三十ミリ弾の嵐に晒される事になる。戦車でも悲鳴を上げる弾幕に、生身の肉体が耐えられる道理もない。
情報統合ディスプレイに表示されている装甲の表面温度が上昇し続ける。
「液体窒素噴霧！　敵の弾切れが先か、ゲシュタニウム装甲が限界に達するのが先か……」
セシリアは忌々しげに拳を握りしめた。
紅く焼け爛れた銃身を回転させながら、狂ったように弾丸を吐き

出し続けるＦＡに鬼気としたものを感じる。セシリアの額から一筋の汗が流れる。もう野戦服の中は汗でぐっしょりだった。まるでサウナ風呂で我慢比べをしているような気分だ。既に車内の温度管理も難しくなってきている。

これ以上装甲に運動エネルギーが加えられれば、変換熱を処理しきれずに、この戦車は文字通り灼熱の棺桶となる。そう、車体が無事でも、乗員が耐えられるとは限らないのだ。

その時、統合情報ディスプレイにさらなる警告が追加された。

「赤外線照準を受けてるって……。あの肩に付いてるやつか！」

赤外線誘導対戦車ミサイル。

サイズからして、小型艦船にさえダメージを与えられる強力なものだ。

あのＦＡは文字通り火力でセシリア達を押し殺す気らしい。

「万事休すか……」

まだ思考を手放していないセシリア。しかし、考えれば考えるほど絶望的な状況だった。

その時、空から大量の軌跡が降り注いだ。

それはロケット弾の群だった。七十ミリ口径ハイドラロケットランチャーの対装甲榴弾は、ＦＡを中心に周囲の空間を制圧しつつ炸裂した。

大量の衝撃波が織りなす数の暴力に、巨人はあえなく膝をついて攻撃の手が止まった。

「あれは……？！」

状況が読めないで居るエドワーズを尻目に、セシリアはやれやれといった具合で無線に向かって息をついた。

『無事かセシリア！　おまえがやつの速射砲を潰してくれたおかげでやっと近づけたぜ！』

「おまえに助けられるのは二回目だなクライブ！　援護感謝する！」

『わたしも居るんだけどねセシリア。この間の借りは返したわよ！』

「ふん……」

セシリアは納得いかないといった具合に形の良い鼻を鳴らした。
エドワーズはヘッドマウントディスプレイの視界を空に移すと、そこに滞空している空飛ぶ戦車の姿を確認した。そして識別信号を確認する。
「傭兵隊のお二方！　助かりました！」
エドワーズはハッチを開けて車外へと飛び出した。無論、先ほどの少女を収容するためである。だが、辺りを見渡しても少女の姿は何処にもなかった。先ほどの爆発で攻撃が止んだ隙に逃げてくれたのだろうか。
「早く戻れエドワーズ！　我等の愛馬をこんなにしてくれた礼、たっぷり返さないとな！」
「了解！」
ＦＡは体制を立て直して、空の戦闘ヘリに向けて三十ミリ弾をばらまき始める。
しかし、弾幕はなかなか収束せず、ネリスの神掛かった回避行動を追跡するのも困難だった。
「墜とさせはしない！」
セシリアは全速力で正面から突撃する。
それに気づいたＦＡはそれを阻止するべく、戦車に向けて赤外線対戦車ミサイルを射出する。しかし、予想外の軌道によりミサイルの軌道は直撃コースから大きく逸れた。
「うぉ〝おぉ〝おぉ！」
セシリアはその車体をＦＡの脚部に直接叩き付けた。四十トン以上の重量を時速百キロ近くで衝突させたのだ。その威力は計り知れない。エドワーズは一瞬頭から星が飛ぶような感覚に襲われた。セシリアも脳を揺さぶられて歯を食いしばる。
突然の衝撃に大きくよろめくＦＡの巨躯。ついでに五十口径機関銃をゼロ距離でお見舞いする。
『下がれセシリア！』
急いで戦車を後退させると、膝を折ったＦＡの装甲に三十ミリ砲

弾の弾幕が降り注ぐ。
『やっぱり固いわね』
ネリスはその耐久性に舌を巻いた。
「ぶち抜くまで撃ち込むまでだ」
セシリアは狂々とした笑み浮かべる。
「ＨＥＡＴ弾、撃てぇい！」
軋むサスペンション。後方に抜けていく衝撃。鮮やかに咲く発射炎。
寸分の違いも無く、ＦＡの胸部装甲へと吸い込まれていくＨＥＡＴ弾頭。
着弾と同時に円錐形の形成炸薬が炸裂、モンローノイマン効果により爆風は極限まで収束する。それは秒速八キロメートル、摂氏約三千度の高温極超音速ジェット噴流と化してＦＡの分厚い装甲をぶち抜いた。
鮮やかな爆炎と閃光が撒き散らされる。衝撃でＦＡが大きくのけぞるのをセシリアは見逃さない。
「今だ！　ネリス、クライブ！」
セシリアが無線に向かって叫ぶ。
『了解！　ミリ波レーダー目標捕捉！　ヘルファイア発射準備完了！　発射タイミングをパイロットに譲渡』
装甲を破壊され、コックピットが殆どむき出しになったＦＡは、もはや機体の姿勢制御もおぼつかない。ガトリングをろくに狙いを付けずに乱射している。それは、断末魔の叫びにも聞こえた。
『アイハブコントロール。これで！』
「終わりだ」
セシリアはニヤリとほくそ笑む。
『ファイア！』
一直線に飛翔したヘルファイアは腹に抱いた形成炸薬で、鋼の巨人を木っ端微塵に打ち砕いた。
嘗て無いほどの大爆発が巻き起こり、辺りに大きな爪痕を残して

それは終息した。
「やった！　やりましたよ騎士長！」
「ああ、だが油断するにはまだ早いぞ。警戒を怠るな」
「了解！」
「傭兵隊の二人に告ぐ。貴機の援護を感謝する。……本当に助かった」
セシリアは通信機取って謝辞を述べる。
『全く、相変わらず危なっかしい戦い方をするなセシリアは』
クライブが呟き、ネリスもそれに同意する。
『セシリアは昔からああだからね』
「そこ！　聞こえてるんだがな？」

『オーヴァークロック』

テネジア王都郊外にその巨大な敷地を横たえる、軍と民間共用の大空港。

その滑走路では、巨大な旅客機が業火を噴き上げて炎上していた。

幸い乗客は初期の段階で全員避難したため、死傷者は出ていないようだった。

そこにはＦＡと、かなりの数の敵兵士達が集結していた。

彼等の目的は、空港を制圧する事でテネジア軍の航空戦力を削減するというものだ。

それは半ば達成されつつあった。市街地で市民の避難に人手を割いていた防衛戦力は手薄で、ＦＡの圧倒的火力の前にあっけないほど簡単に敗走してしまった。

だが、彼等はそれを勝利と勘違いしていたのだ。

炎に紅く染まった空を一本の軌跡が通過しようとしていた。

それは、とても航空機とは思えないほど小型で、ＦＡの七十六ミリ速射砲による対空砲火を不可解な機動でかわしつつ、滑走路を目指して急降下してくる。

一陣の風が吹き抜けると共に、ジェット機の残骸から小爆発が起こる。

その炎を背に纏い、一人の少女が空から舞い降りた。銀髪が轟々と吹き荒れる熱波に掻き乱される。少女はその躯に密着するラバースーツのような戦闘服を身に纏っていた。幼くも女性的なラインが浮かび上がっている。背中の部分が大きく開いた構造をしていて、人間で言う脊髄の部分には、ブレインマシンインターフェース用の接続端子が穿たれていた。彼女の両脇には二機の小型無人航空機がまるで付き従うかのように浮遊している。大きさは、だいたい全長三メートル程、圧倒的存在感を放ちつつ仁王立ちする小柄な少女と比べれば決して小さい訳ではない。その機影は有名なステルス爆撃

機に酷似した、全翼式の無尾翼機だった。胴体中央下部のハッチが開け放たれていて、その中でホバリング用ターボファンが轟々と回転して揚力を発生させている。後部の排気ノズルは推力偏向方式で、下向きに排気を吹き出す事によりホバリングを補助安定させている。

外観上の奇異さもさることながら、その無人機の胴体から伸びたケーブルが、少女の脊椎に直接接続されている事が、その場にいた兵士達に恐怖を増長させるに十分だった。

兵士達は狼狽えながらも手に手に銃を構え、ＦＡはその砲口を彼女に向ける。

『いいね、ベレッタ。三分だ。それ以上掛かるようならまたお仕置きだよぉ』

「Ｙｅｓ，Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ！！」

ベレッタは脳に直接響いたアルバートの声に対して肉声で応える。

直後、打ち付けるように吹いていた風が一瞬止む。舞い上がっていた彼女の美しい銀髪の一本一本が、炎に照らされて金属的な艶めいた光を放つ。

一度、その泥濘した空気を肺一杯に吸い込んで、目を閉じる。

次にその目蓋を開いたとき、あのサファイアのような藍色の光は形を潜め、そこには警告灯が発する、あの見る者の心情を不安定にさせるような、攻撃的で鮮やかな紅が浮かんでいた。

「……オーヴァークロック。物理演算アクセラレーター昇圧開始」

彼女の脳内に、感覚系類から濁流のように流れ込んでくる情報の本流。

その全てが驚くべき程鮮明に、体系立てて意味づけられる。彼女の眼は舞い散る何千何万の火の粉の軌道まで、正確に把握する事ができる。彼女の五感は際限なく広がっていく。もはや、この場だけではなく、テネジア全軍の兵器類から軍のネットワークを介してもたらされる情報の全てが彼女の、視覚であり、聴覚であり、触覚ですらあった。

その場にいた兵士達が一斉に引き金を引く。数百メートル離れて

いてもなお、ベレッタ彼等の視線の動き、銃口の向き、果ては呼吸や心拍数まで熟知していた。全ての事象が彼女の脳内で限界を超えて高速演算され、もう一つの世界が構成されていく。それを用いて、現実世界より未来の事象をシミュレーションする。それは一種の、刹那的な未来予知だった。

高負荷をかけた事による脳の異常な発熱を、その銀色の長髪が風を纏って外部へと放出する。彼女の頭髪は、いわば排熱機構のような役割を持っていた。

もはや敵の弾幕は、ベレッタにとって止まって見えるどころか、弾頭が何処に飛んでいってどんな角度で入射するのかさえも予測済みだった。

ベレッタはその兵士達に肉薄するべく走り出す。スタートダッシュを踏み込むと、コンクリートで舗装された地面に彼女の足跡が穿たれた。ものすごい瞬発力でミサイルの如く飛び出した彼女の両脇で、無人機が腹のホバリング用ファンを収容し、巡航形態に移行した。それは、彼女を追い越して敵兵に殺到する。ある程度の距離で、彼女の脊髄と繋がっていた電力供給兼データリンクケーブルが音を立てて弾け飛ぶ。無人機はそのケーブルをドラムで巻き取って収容。無人機の枷が取り払われ、舞い踊る遊鳥となる。

それはこの乱気流吹き荒れる低空で、あっと言う間に音速に達し、ヴァイパーを引いてＦＡの射線を翻弄する。無駄に硝煙を噴き上げながら三十ミリ砲弾をばらまくＦＡ。

彼等は完全に目標を見誤っていた。

一方のベレッタは、敵の追随歩兵を射程に捕らえていた。両手に握られたマシンピストルの上部レールには、その本体に不釣り合いなほど大型な単眼照準装置が乗せられていた。そして、その照準装置からは例に漏れずケーブルが伸びていて、それが彼女の脊髄に接続されている。これにより、彼女の近接戦闘における視界範囲と即応能力は劇的に向上する。

彼女はブレインマシンインターフェースにより、その能力を無尽

蔵に拡張する事ができる。脳幹の一部に物理演算装置を補助電脳として埋め込まれ、脊髄から各部感覚系、運動系も機械で強化されている。そして、特に機械化が激しいのはその華奢な両腕と両足である。この部位に限っては総機械化されている。

本来銃器の二挺持ちは、射手に取って負担にしか成らず、火力が増えるのを天秤に乗せてもデメリットにしか成らないのだが、空間制圧能力のずば抜けたベレッタにとってはむしろメリットでしかなかった。

ベレッタは敵中のど真ん中。躯を大きく開いて両手を広げる。

それは十字架に貼り付けられた聖女のような恰好だった。

その人形めいた美貌に埋め込まれた、ルビーの眼は正面を見据えたまま。

二挺のマシンピストルはほぼ同時に火を噴く。それは予想に反したセミオート射撃。

何かが破裂するような、ＦＡや戦車が撃ち放つ轟音と比べればかき消されてしまいそうな程の気の抜けた発砲音と共に、左右射線上にいた兵士の額に着弾した。

兵士はフルフェイス簡易防弾ヘルメットを被っていたのにも関わらず、四・六ミリの小口径高速徹甲弾がそれを易々と撃ち抜き頭蓋内部を滅茶苦茶にして抜けていった。

悲鳴にも似た歩兵達のクロスファイアが始まるが、そんなものベレッタにとっては障害の内にすら入らなかった。

胴体に向かってくる弾丸を姿勢を屈めて避け、そのまま銃口を的に向けシングルトリガー。あっけなく力を失って後ろに倒れる敵兵。踊るように躯を回転させて、銃口が敵兵を捕らえた瞬間次々と激発。既にこの時点で、敵の歩兵の数は半減していた。

そして彼女の背に向けて遠距離からライフルを構えた敵兵に対して、彼女は無造作に対応する。肩越しに銃を後方に向けその姿勢のまま敵兵の頭を撃ち抜いてみせる。悲鳴と共にその敵兵はトリガーを引きっぱなしにしたまま無様にくずおれた。

その刹那の間に一方的な殺戮が繰り広げられていたとは夢にも思っていなかったＦＡのパイロット。彼の足下には今まで多くの追随歩兵が居て、かえって動きづらいぐらいだった。敵の無人機にかまけて今まで注視する事が無かった。今視線を落としてみればどうだろう。そこには鮮血が咲き乱れ、その中心ではさきほどの銀髪が飄々とこちらを見上げているではないか。喉の奥からみっともない悲鳴が漏れる。

なかば半狂乱になって、ＦＡの代名詞となったその巨大な鉄拳をベレッタに向かって振り下ろす。

ベレッタはまるで何でもない事のように、巨人の鉄槌を片手で受け止めた。

うなる人工筋肉、軋む関節、脊柱がねじ切れそうだ。

大幅に加重された脚部が地面にめり込む。さすがに受け止めるのが精一杯か。

ベレッタは与えられた苦痛に一瞬表情を歪める。

だが、この程度の痛み、アルバートから次々と提案される、拷問めいた耐久試験に比べればなんてこと無かった。

ベレッタは無人機を無線操作して、攻撃態勢に移行させる。

全翼の先端部分を開放すると、そこから禍々しい砲口が覗く。

ベレッタからチャージされた超電力が、コンバーターによりどんどん収束昇圧されていく。金切り声を上げて、その砲口から不可視の酸素沃素レーザー光線が照射された。

そのレーザーは、ベレッタを苛んでいたＦＡの左腕の付け根に当たり、火花を上げながら金属を融解させ、あっと言う間に切断した。照射されていた部分から小規模な爆発が巻き起こる。

自由になったベレッタは、低空を駆け抜けようとしていた無人機に飛び乗る。

翼からベレッタの腰の高さにバーが起きて来てそれに掴まる。

風防もなしに機体の上に直接搭乗するという、通常の航空機ではあり得ない運用法だった。

後部スラスターがアフターバーナーを点火する。
機体はあっと言う間に高高度まで舞い上がった。
ＦＡが対空射撃を展開するが、人が乗っているのにも関わらず、無人機と遜色ない、対Ｇ限界を無視した機動を披露するベレッタにはかすりもしない。
ベレッタを乗せた無人機にぴったりと付随してくるもう一機から、接続ケーブルが圧縮空気で射出される。それを受け取ってケーブルを脊髄に接続。物言えぬ感覚が脊髄に走ると共に、ベレッタは四肢に搭載された超高容量電池から電力を供給する。大電力の集中転送に、触れられない程の熱を帯びるケーブル。
バチバチと、まるで壊れたかのような音を発する無人機の砲口。
一瞬、機動を止めたベレッタをＦＡの砲口が捕らえた。
ベレッタは今まで乗っていた方の無人機から飛び降りる。
三十ミリ弾のシャワーが、先ほどレーザーを照射した方の無人機へと降り注ぐが、その翼は総ゲシュタニウム製でびくともしない。
ベレッタは自由落下しつつも無人機を無線操縦して射線を遮る。
次々と弾けて蒸発する三十ミリ弾。その様を見ると、無人機はベレッタを守る盾（イージス）のようだった。
そしてＦＡの頭上まで墜ちてきたところで、急にベレッタは自分の脊髄と繋がったケーブルを掴む。まるでバンジージャンプのように落下が急停止。それと同時に上空に居た無人機がケーブルを巻き上げる。急激に引き上げられるベレッタと入れ替わりに、無人機はＦＡの頭上にヘッドオンしつつ降下。
ＦＡの頭部が真上を見上げた刹那。
ベレッタはケーブルを通して全力で電力を送り込む。
その時、落下機動にあった無人機が目も眩むような閃光を発した。同時に共に耳を劈くような高周波音が当たりに響く。
それは紫電を纏って一直線に軌跡を描く。
多段式超電磁式加速砲。俗に言うレールキャノンである。
推進薬により一時加速された弾頭が超高電力で二次加速される。

火薬では秒速二キロメートルが限界だが、ローレンツ力を活用して射出するため、その初速は使用される電力に比例する。
戦車砲弾と比べると小口径の弾頭だが、秒速十キロメートルを優に超える高速で射出する事により、そのインパクト力は桁違いに跳ね上がる。
それは、巨人の脳天を頭上からぶち抜き、コックピット内のパイロットを粉微塵にして地面に着弾。地面には人工衛星が落下したかのような、巨大なクレーターが形成された。
縦に真っ二つにされたＦＡの亡骸は、音を立てて崩壊する。
ベレッタはケーブルを引き寄せて、空中でレールキャノンを搭載した方の無人機に飛び乗った。
上空から辺りを見渡す。そこには耳が痛くなるような静寂が戻ってきていた。忘れていた風切り音と、戦闘態勢に入っていた自身と無人機の駆動音が耳に付く。
「当該戦域の敵性戦力の排滅を確認」
無人機の背から、先ほどの射撃に使用したコンデンサが空薬莢のように排出される。
ベレッタは飛び出してきたそれを空中でキャッチする。
「三分ジャスト」
網膜の隅に表示されたタイマーが、アルバートに掲示された目標を達成したことを伝えてくる。
「……やった」
ベレッタは手を口元に当て、花が綻ぶような笑顔を浮かべていた。
自分が無能ではない事を初めて証明できた。前回の模擬戦では能力を制限されすぎたせいで負けてしまったが。この結果をブラックナイツの騎士長に報告したらそれでも再戦を挑んでくるだろうか。
やっと自分の存在意義を証明する事ができたのだ。
これでアルバートに褒めて貰う事ができる。
瞬きと同時に、オーヴァークロックが解除され、紅く染まっていた瞳が元の藍色の光を取り戻す。

その時のベレッタは完全に油断していたのかもしれない。
まるでその瞬間を見計らったかのように、ベレッタのセンサーの範囲内に突如として現れた飛翔物体があった。
それは狙い違わずに、飛翔するベレッタの胴体に向かってくる。
それをかろうじて認識する事はできたベレッタだったが、それを避ける事はどうしてもできなかった。躯が言う事を聞かない。オーヴァークロックを解除した直後は電脳系の各部に負荷が掛かっている為、反射的な回避運動もおぼつかない。
加速演算もしていないのに、時が止まったようにゆっくりと飛んでくる弾頭。
ベレッタは眼を見開く。
それは情け容赦もなくベレッタの腹部に着弾し、ペイロードライフルの二十五ミリ弾が凶悪な運動エネルギーを伝達する。通常の人間よりいくらか頑丈なだけのベレッタに耐えられるものではなかった。
ボ。という鈍い音と共に、ベレッタの上半身と下半身はものの見事に泣き別れさせられた。
墜ちる。内蔵と脊柱を露出させたベレッタの上半身は、重力によって地面へと引きずり墜とされる。
（ベレッタぁぁ〝ぁぁ〝ぁぁッ――！）
「――アルバートさん……」
自分の名を呼ぶ声が聞こえた気がしたが、それは今際の際に聞いた幻聴だったのかもしれない。

滑走路から二キロほど離れた、空港の変電設備。
その管理棟の一室。高所にあるため、空港の全景が一望できる場所だった。
書類や椅子や長机が散乱する仄暗い部屋。そこには誰も居なかった。

「……飛ぶ鳥は墜ちる運命にある。卑徒(ヒト)も、天使も、神もまた、それに漏れず」
無人の筈の空間から、静かに呟く声。その空間が徐々に揺らいでいく。
そこには、二人の人影が突如として出現した。
否、その二人はずいぶん前からずっとそこに潜んでいたのだ。
一人は白髪の少女で、窓の桟にペイロードライフルの二脚をたてて、狙撃姿勢を取っている。その紅い眼光がスコープから外される。
「飛ぶ鳥に突かれずに済んだのは誰のおかげかな？」
もう一人は壁に寄りかかって手持ちぶさたに白髪の少女を眺めていた。
酷く気配が希薄で、目の前に居ても凝視しなければその輪郭が霞んでしまうほどだった。
「フリッカ。おまえは私の観測手を受け持っていたんだろう？　なぜ仕事もせずにそう構えている」
白髪の少女は幼子特有の高音で話しかける。だがその口調は妙に大人びていた。
「貴女が射手じゃ、観測手の出る幕は無いな。それにしっかり役に立ったんだからいいじゃないか。私がエイリアスを掛けたおかげで、あの銀髪に気付かれずに墜とす事ができたんだから」
フリッカと呼ばれた――輪郭がぼやけて容姿を確認する事はできないが恐らく――少女は気怠げに答えた。
『二人ともよくやった。急ぎ合流ポイントへ向かえ』
無線に男の声が届く。二人は短く返事をすると、いそいそと撤退準備を始める。
白髪の少女がもうもうと硝煙棚引く巨大なペイロードライフルをその小さな肩に担ぎ上げると、フリッカは音も無くその場から消えた。
「……置いていかないで」
白髪の少女は寂しげに呟く。

暗闇の中爛々と光る紅い瞳が、形を潜めた魔物のそれに見えたのは錯覚か。

彼女が去った後には、静寂と、二十五ミリ弾の太い空薬莢だけが残された。

『フラッシュバック』

「ベレッタ！　おい、ベレッタ！」
重たい目蓋を無理矢理こじ開けたのは、最愛のヒトが聞いた事もない声色で叫んでいたから。その声は確かに自分を呼んでいた。
「……アルバートさん」
今日は奇異な日だ。あの人がこんな泣きそうな声で声を荒げるなんて事、今まで一度だってあっただろうか。
ベレッタは自分が妙に狭いところに横たえられている事を知覚した。
見上げるとそこにはアルバートの隈の浮かぶ顔があった。どうやら、自分はアルバートに抱きかかえられているようだった。
痛い。躯の隅々が痛い。だけど、とても幸せな気分だった。
あの人がこんなにも自分を見てくれているのだ。もう、意識が飛んでしまうほどの嬉しかった。
揺れている。地面が揺れている。
ここは戦車の車内だろうか。元より二人乗りの手狭な戦車に無理矢理空間を作って、そこで身を寄せているらしい。
「もうすぐ王立研究所だ。それまで逝くんじゃないぞ！」
聞き覚えのある声がする。唯一自由に動く首を横に振ると、操縦席に座ったセシリアが自分の方に窺うような視線を向けていた。
「クソ！　また敵兵が！　まるで僕らを足止めしているみたいだ！」
砲手席で怨嗟の声を上げるエドワーズ。ついこの間聞いたばかりのその声が、妙に懐かしく聞こえてくる。
「同軸機銃で薙ぎ払え！　ここを抜ければもうすぐだ！」
セシリアが叫ぶ。車体を叩く銃声が、同軸機銃の掃射に掻き消される。
「くぅっ？！」
痛い。視線を自分の躯に向けて、徐々に下げていく。

そこには、あるはずの下半身が無く、夥しい量の血液がアルバートの身体を汚していた。
アルバートは、ベレッタの脊髄に端末の通信ケーブルを接続し、バイタルを監視している。
「このままじゃぁ……。急いでくれ！」
アルバートが叫んだ。それはとても悲痛なものに聞こえる。
「解っている！　揺れるぞ！」
セシリアは思いっきり操縦桿を切る。ロケットランチャーを構えていた敵兵をその勢いで撥ね飛ばすと、その身体を無限軌道で耕しながら急発進。
アルバートが所長を務める王立技術研究所は空港からそう離れていない。
空港に隣接して走っている高速道路を利用すれば比較的早く着く。
だが、高速道路沿いには敵が布陣していて、突破するのは容易ではなかった。
ベレッタの容態を見るに、時間的猶予はあまり残されていない。
セシリアは焦っていた。義に厚い彼女がベレッタを見殺しにする事もできなかった。
先ほどは空港で果敢に戦う姿を確認して援護すべく急行したが、ベレッタはセシリアが到着する寸前で撃墜されてしまっていた。アルバートは最初から付近に潜んでいたらしく、セシリアが駆けつけたときにはベレッタを介抱していた。てっきり王宮の軍司令部に居る者だと思っていたセシリアは面を喰らった。全く、不器用な男もいたものだと笑みをこぼせずにはいられない。ベレッタが羨ましくなってしまうぐらいだった。
「ごめんなさい……。ごめんなさい。アルバートさん。またアルバートさんに貰った身体壊しちゃって……、ごめんなさい……」
ベレッタはまるで幼子のように泣きじゃくった。こんな状況になっても出てくるのは、アルバートに対する謝罪だった。自分の無力さに。自分の不甲斐なさに。役立たずで申し訳ないと。

「しゃべるなベレッタ！　おまえはよくやった。おかげで空港も奪還できた。攻撃機が飛び立てば事態を収拾できる」
「良かったぁ……。私、お役に立てたんですね。くぅっ！」
ごぽぁ。切断部から大量の液体が漏れる。
「ベレッタ！」
「あ……頭が！」
ベレッタは呻き声を上げて頭を押さえる。アルバートの端末が、ベレッタのバイタル異常を警告する。
「うわぁぁ〝ぁぁ！」
眼を見開いて頭を振るベレッタ。まるで心が浸食されていくような。
恐怖。
「やめて……」
その痛みは、識っている。
フラッシュバック。自分の胸の中に遺ったぬくもり。
フラッシュバック。エドワーズのあどけない笑顔。
フラッシュバック。悲しげなアルバートの横顔。
フラッシュバック。痛み。半身をそぎ落とされていく痛み。
フラッシュバック。腐り堕ちる四肢と、心と。
誰かが啼いていた。誰かが叫んでいた。誰かが……誰？
視界がちかちかと明滅する。浮かんでは消えていく泡沫の記憶達。
電脳が熱を帯びる。吐き出された言葉が、意味のない不明瞭な音となって肺から漏れ続ける。紡ぐべき言葉が見つからない。ずっと、伝えたかった言葉が見つからない。
最愛のヒトの顔が、間近に在った。
「お兄、ちゃん……」
ベレッタの表情から感情が透過していく。
色を失いつつある唇から紡がれた言葉。
アルバートは熱を失いつつある身体を抱きしめる。
嘔吐きそうになる血の香り。彼もまた、過去の記憶と今を重ねて

いた。
「その呼び方はやめろ……！」
アルバートは痛みに呻き声を上げる。軋む心を押さえつけてベレッタは静かに微笑んだ。
「良かった……。また、逢えたんだ……」
ベレッタの瞳から透明な滴が滴り落ちる。それは、床に広がった紅い海に飲み込まれて消えた。
「エド……！　エドは何処？　何処にいるの？」
ベレッタは不安げに首を振る。まるで焦がれるように。再会の期待に心を溶かして。身動きの取れない彼女の腕が空に伸ばされ、何かを求めてさまよう。それは虚空を掴むだけだった。アルバートがその手を取って握りしめる。
砲手席のエドワーズは何もできないでいた。凍り付く感情と思考。
――エド。
その言葉が、呼び方が彼の心を腐らせる。甘い毒のように、じわじわと染み渡って、彼を構成していた多くを浸食する。
「……姉さん？！」
エドワーズは怖々と後ろを振り返る。息も絶え絶えでその身を横たえた少女は、確かに人工天使ベレッタだったが、そこに浮かんだ表情は嘗ての安逸を強く彷彿とさせた。
愛して止まなかった。どれだけ恋い焦がれてももう触れる事も叶わない微笑みがそこにあった。
前方に敵軍の姿が確認できたが、エドワーズは反応できずにいた。ＦＡを中心とした歩兵部隊だった。恐らく、幹線道路の封鎖が彼等の目的だろう。
「目標、前方敵ＦＡ！　高速徹甲弾、撃てぇい！」
セシリアが咆吼するとともに、音の消えた車内へ音が帰ってくる。
それでも、エドワーズの心は戻ってこなかった。
「おい！　どうしたエドワーズ！　負傷したのか？！」
操縦席と砲手席は少し離れているため、事の顛末を計りかねたセ

シリア。
眼を見開いたまま凍り付いたエドワーズ。顔からはすっかり生気が抜けていた。
その手は砲を操作するためのハンドルを握りしめたまま震えて動かない。
セシリアは戦車を横転させんばかりの勢いでドリフトをかけて急停止。
迅速な判断で席から飛び出すと、後方の砲尾に飛びつく。既に砲弾は装填されていた。
セシリアはマニュアル操作で安全装置を解除し、緊急時主砲発射用のヒモを思いっきり引っ張った。
轟音と共に砲尾が後退する。それに挟まれないように素早く身を翻すセシリア。
車内に熱い空気が流れ込み、装薬の臭いが充満する。砲尾から撃ち殻の弾底部が排出され、バスケットの中に転がり落ちた。
セシリアは急いで操縦席に戻る。
目映いばかりの爆炎を上げて炎上する敵ＦＡ。乗り捨てられた乗用車で構築された簡易バリケードを、戦車の重量を武器に撥ね飛ばしつつ強行突破する。
そこでセシリアは戦車を一旦止め、エドワーズの元に駆け寄る。
セシリアは呆然としているエドワーズに対して、その華奢な鉄拳を振り下ろした。
「痛っ！」
頭蓋骨を打ち砕かんばかりの凄まじい衝撃が脳天を貫通する。
「何を呆けているエドワーズ！　それでも私の副官か？！　感慨に耽るのはこの戦闘が終わってからにしろ！」
激高した瞳で睥睨するセシリア。一文字に結んだ唇。彼女の眼には煌々と光る闘志が宿っていた。
エドワーズは彼女の強い態度に我に返った。自分は何のために毎年死者が出るような過酷な訓練を耐えてきたのだったか。

「次弾装填！　弾種ＨＥＡＴ！　同軸機銃で敵を薙ぎ払いつつ、主砲で突破するぞ！」
　セシリアは片手を大きく振って指示を出した。その勇猛な姿に触発されて、エドワーズに志気が戻ってくる。
「了解！」
　エドワーズは再び主砲制御装置のハンドルを握りしめた。
　前方で道が二股に分かれていた。そのまま前進すれば高架に上げられた高速道。左に曲がると一般道に降りる。幅の広い四車線を疾走するテネジア戦車。普段は乗用車が止めどなく流れ続ける首都高速も、今では乗り捨てられた車両で走りにくい事この上なかった。
　セシリアは一般道へと通じる道に向けて操縦桿を切る。
「スモークディスチャージャー、レディ！　発砲と同時に展開する。――ネリス！　聞こえているか！　私が合図をしたら、今し方送った座標にハイドラで制圧射撃しろ！」
『全く、こちとら別のＦＡとダンスの真っ最中なんだがなぁ』
　クライブが無線に応えた。戦術統合敵味方識別装置によると、クライブとネリスの攻撃ヘリは十キロほど東で交戦中だった。
『わかったわセシリア。何とかやってみる。タイムラグを忘れないで』
「私がそんなへまするか」
　前方を熱線暗視装置で索敵すると、一般道路と交わる所に敵の歩兵部隊が集結していた。それは驚くべき数だった。誰もがその手に手に対戦車兵器を持ち、セシリア達の戦車を待ち構えている。
「ふん、うじゃうじゃと。事が済んだら全て焼き払ってやる。テネジアの国土に土足で踏み込んだ事を後悔させてやる！　だが、今はかまっている暇はない。突っ切るぞエドワーズ！」
「主砲ＨＥＡＴ。スモークディスチャージャー共にスタンバイ」
「まだだ。まだ撃つなよ」
　戦車は最大戦速のまま、そのバリケードへと突っ込む。急な坂道を轟々と黒煙上げながら、アクセル全開で一気に駆け下りる戦車。

悪鬼羅刹も裸足で逃げ出す光景だったが、勇敢にも敵兵達は一歩も引かなかった。
ゴム履帯を付けていない無限軌道が、アスファルトの地面を荒々しく抉り痕を遺す。
突如として辺りに激震と轟音が走る。隣接する高速道路の高架から、先ほど砲撃を浴びせたＦＡが煙を上げながらも飛び降りて来た。まるで先ほどの仕返しをするべくセシリア達を追ってきたかのよう。何という執念深さだ。
「さっきのＦＡ！　あれで行動不能になっていなかったのか！」
エドワーズがうなる。
「押し通す！　主砲照準敵ＦＡ！　発砲と同時にスモークディスチャージャー散布！　ネリス、クライブ！　準備はいいな！」
『こっちはいつでも』
敵歩兵が次々に対戦車兵器を発砲。それは夥しい数で戦車と敵兵との空間を埋め尽くす。セシリアはそれを鋭利な機動で回避運動。中央分離帯を無限軌道で踏みにじる。ものすごい音を上げながらねじ切れてへし折れる金属のポール。大きくカーブした先に置かれていた、黄色と黒の縞が付いた衝撃吸収材を撥ね飛ばす。ぶちまけられた大量の水が車体に降り注ぐ。もうなりふりなど構っていられなかった。紙一重で避けたロケット弾がガードレールを木っ端微塵する。回避しきれずに擦ってしまった弾が無限軌道のスカートに着弾して破壊。弱点である無限軌道がむき出しになるが、未だ力強い走りを見せる戦車は驚くべき耐久性を見せつける。その時点で敵の間に動揺が走りつつあった。何だあの化物は！　誰かが声高に叫ぶが、その声はセシリアまで届かない。
敵が間近に迫る。バリケードから機関銃で銃弾の横雨を降らせてくるのを、同軸機関銃で返礼。セシリアはタイミングを見逃さず、鋭い眼光でペリスコープを睨み付け、叫んだ。
「――撃てぇ！」
かなりの近距離で砲塔が華を散らす。先ほどの砲撃で満身創痍だ

ったＦＡに止めを刺した。だが、ＦＡその身を散らす際の悪あがきとして七十六ミリ砲を乱射してくる。放たれた弾頭は味方である歩兵に命中。数人が巻き込まれてその命を散らした。

『ハイドラ発射』

ネリスとクライブの攻撃ヘリによる遠距離からの直接火力支援。ちょうど今セシリア達が通過しようとしてる道路に向けてロケットランチャーをありったけ撃ち込む。約七キロの遠距離から発射された弾体の群は着弾まで数十秒の猶予が与えられていた。

「スモークディスチャージャー散布！」

戦車に装備された煙幕散布装置が上空に向かって次々と撃ち出される。

それは、炸裂と同時に驚くほどの広範囲に渡って煙幕を展開する。辺りが熱を帯びた煙幕に包まれ、視界はおろか赤外線照準も役に立たなくなる。敵の目を眩ますという古典的な戦法。

敵兵が狼狽える。この程度で戦列を乱すとは、敵兵の練度は民兵以下だな。そんな評価を下しつつ、セシリアは戦車を駆る。その小柄な車体を道を塞いでいたＦＡの間に滑り込ませて突破。戦車が敵軍の封鎖を突破したその瞬間。

遙か上空から降り注いだロケットランチャーの弾幕がその場を焼き払い、完膚無きまでに破壊し尽くした。

爆炎の照り返しをその背に受けて疾駆する漆黒の荒馬。

「抜いた！　抜きましたよ！」

「最大戦速のまま研究所に急行する！」

『白髪の魔物』

ベレッタが死力を尽くして奪還した首都空港では、航空戦力が次々と空へ飛び立っていた。

敷地の一角では砲兵達が陣地を形成し、精密な火力支援を展開している。どうにも砲兵隊の隊長が血気盛んな古参兵らしく、飛んでくる敵の砲撃一発に対して、四十八発の砲弾で返礼しているらしい。前線の部隊からは、調子に乗りすぎだとか、友軍や市街地ごと焼き払う気か！　等々、大量のクレームが発生している為自粛しつつあるが。

空港の制御を取り戻してすぐに、グラネイ基地から防衛戦力が送られてきたため、再び敵に制圧されるという事態は避けられた。おかげで、テネジアの航空戦力は反撃に転じる事が成功しつつあったのだ。対空砲火を展開するＦＡに対して四方八方からミサイルや砲弾の雨を降らせるという、圧倒的物量を駆使した数の暴力で何とか殲滅している。

こうして全体の戦況を見渡してみると、どう考えても敵軍の侵入経路は空路だけではない事が、全軍の認識として定着しつつあった。テネジアの首都防衛戦力を手こずらせるほどの戦力を空輸だけで展開できるものか。まさか国内に手引きしている者が居るのではないかという、不確かな憶測も飛び交いつつある。

夜は更け、日の出も近くなった終夜、テネジアの人々は未だに眠る事叶わずにいた。

ネリスとクライブは先ほど首都空港の一角にヘリを着陸させていた。

アパッチは度重なる戦闘により弾薬と燃料を著しく消耗した為、補給の必要性が出てきた。被弾によりミリ波レーダーが破損したため、ユニットの交換作業に多少時間が掛かるらしい。その間、二人は束の間の休息を取る事にした。

ネリスは民間旅客機の搭乗ロビーに居る。照明は消えていて、普段の活気は失われていた。椅子はいくつも設置されているが他に人気はない。ネリスはその一つにぽつりと腰掛けている。ぐったり、といった表現が適切な具合に、ネリスは体重を椅子へ預けて天井を見つめていた。

ウェーブ掛かった金の長髪は、髪留めを解かれて自由になっていた。眼帯に覆われた左目に違和感は殆ど残ってはいない。すぐ手のと届く位置に愛用のサブマシンガンが立て掛けられていて、大腿のホルスターには九ミリ自動拳銃が収まり、確かにその存在を主張してくる。一見脱力しているように見えるが、周囲への警戒は一時たりとも怠ってはいないようだった。ネリスは日常生活からしてそんな心構えで生きてる為、あまり負担ではなかった。自分の安逸を任せられる人間は数える程もいないのだ。

滑走路を見渡せる大きなガラス窓は、先ほどの戦闘で砕かれてしまい、焼けて乾燥した空気が室内に直接流れ込んできている。そのせいで、戦闘により火照った身体を冷やす事が叶わない。

未だに市街からは戦闘の音が絶えない。遠雷のような爆発音や破裂音。空を灼く対空砲火。最新技術を駆使して製造された兵器達がその存在を主張するとき、砲火の下に一体幾つの命が晒されているのだろうか。

だが、その勢いも戦闘開始時と比べてずいぶんと衰退してきた。

もう一息だ。もう一息で王都を取り戻せる。

ネリスは決意を新たにし、この疲労と不快感をどうしてくれようかと逡巡していると。

近づいてくる足音を確認して、ネリスはそちらを見やった。

飛んでくる物体があったのでそれをキャッチ。ひんやりとした感触が手のひらに伝わってくる。スポーツドリンクのボトルだった。

クライブが普段通りの足取りでこちらに近づいてくる。その背にテネジア軍正式採用のアサルトライフルを背負っている辺り、こちらも気を抜いているわけではない。

彼のライフルはブラックナイツが使用しているような、フレームからして新設計された特別製ではないが、近接戦闘用に色々とカスタムアップされていた。短く切り詰められた銃身に、新設計のフラッシュハイダー。レイルシステムにはヴァーティカルフォアグリップとダットサイトが装着されていた。グレネードランチャーは重くかさばるため、今回はお役ご免だった。

「全く、撃墜（スコア）数忘れちまったな」

クライブはもう一つ投げてよこす。絞った濡れタオルだった。

「ええ、あんなに余裕の無い対地戦闘は久々ね。マニューバー使いすぎてもう身体がバラバラになりそう。展示飛行をやってきたみたいな気分。ミサイルの爆炎や砲弾の閃光で眼もちかちかするし」

ネリスは思い返す。何機ものＦＡを相手取っての戦闘。怒濤の対空砲火。それを回避し続けるために行った無茶な機動の数々。高層ビルを盾にしてのヒットアンドアウェイ。何度ローターのブレードを壁にぶつけそうになった事か。地面に機体を擦り付けるような超低空飛行もした。ヘリで敵戦闘機を相手にしたときは本気で死ぬかと思った。友軍のヘリや攻撃機が次々と墜ちていく中、二人は何とか生き残ってきた。自分たちもセシリアのように戦車を駆って参戦した方がもしかしたら楽だったのではないかと思ってしまう。だが、あの戦闘は空と陸が連携した事によりスムーズに進んだという事も忘れてはならなかった。

クライブはネリスの隣に腰掛けて、自分のスポーツドリンクの封を開ける。

「勝利に」

クライブはそういってボトルを掲げる。

ネリスはそれに付き合い、ボトルを軽くぶつけた。

「――勝利に」

ネリスはなんだかおかしくなってはにかんでしまった。やはり、クライブと居るとどうも調子が狂う。自分らしくないなと我ながら思う。

喉を鳴らして中身をあおると、やっと生きた心地が戻ってきた。タオルで顔を拭いて、ひんやりとした感覚を楽しむ。
クライブが何か思い出したかのように手を叩く。
「やっぱりこれで乾杯するのはあまりに味気ないな。そうだ！　傭兵舎に俺が隠して置いたとっておきがあるんだ、帰ったら二人で――」
ネリスは素早く身を乗り出して、格好を付けた台詞を完成させようとしたクライブの唇に人差し指を当てて、その先を言わせまいと遮る。その流れるような動作に面を喰らったクライブ。目配せをして、ネリスが言葉を紡ぐ。
「わたし、貴方が傭兵舎にとっておきのワインを隠してるの知ってるんだからね。帰ったら二人で飲み交わしましょう」
そう言ってネリスは、はにかみながらクライブの唇にあてた人差し指を離した。
「こうでもしないと、貴方流れ弾に当たって死んじゃうでしょ？　私は嫌よそんなの」
「全く……敵わねぇなぁ、いつまでたっても……」
「あはは、まあ、これで許してよ」
ネリスは先ほどクライブの唇に触れていた人差し指にキスをする。クライブは真っ赤になってそっぽ向いてしまった。
「アパッチはレーダーユニット交換中。後三十分でフライアブル（飛行可能状態）だそうだ。全く、俺たちでやった方が早かったな」
誤魔化すような事務連絡。
「まあ、彼等の仕事を取るのも悪いし、それにこうして羽を休めないと、次は飛べなくなってしまうかもしれないから」
ネリスはタオルを胸元に突っ込むと、クライブの位置からちょうど谷間が見える格好になる。眼福を授かったクライブだったが、ネリスが胡乱な眼で拳銃のハンマーを起こした事で注視を中止せざるをえなかった。
「全く、怒るなら見えないようにするべきだと思います」

「見えても見ない振りするのが紳士の嗜みよ、クライブ」
と、涼しげに受け応えるネリス。男性の社会的優位性が失われてから久しいので何も言い返せないクライブ。驚異的な身体性能を持つ新人類『少女』が確立されてから尚のこと男性の面子は丸つぶれだった。
この世界の創生期。少女神ガイアは、三百人の天使とユグドラシェルを使役して旧世界を滅ぼし、この世界を創造したとされている。新世界が始まって間もなく神と天使は全て死に絶え、天使の血を引く『少女』という新たな人種がこの世界にもたらされたとされている。
だが、その際の詳細な記録は残ってはおらず、あくまで神話の域を出ないのが現状だ。旧世界の遺跡を発掘すると驚くべき程多くの情報が保存されているのにも関わらず、なぜか旧人類が滅びたとされている年代の記録が全く出てこないのだ。旧人類が誕生する遙か昔まで、歴史は克明に記されているというのに、その約三百年間だけは、まるですっぽりと抜け落ちているかのように空白のままだった。
その時代の事を、学者達は『ミッシングリンク』と呼び、長年議論の的になっていた。
その時、彼等が身につけていた無線機に緊急通信が入った。
『こちら東部阻止迎撃部隊ランドウォーリアー。敵の攻撃を受けている、直ちに援軍を要請する！　少女兵が！　白髪の少女兵が次々に隊員を！　畜生、また消えやがった！　おい！　もうこれしか残っていないのか！』
銃声と思われるノイズが酷く、鮮明には聞き取りづらかったが、ネリスはいち早く行動していた。
「東部？　おかしいな。あっちには王墓ぐらいしかないはず。重要な施設なんてこれっぽっちも……。おい！　ネリス！　何処へ行くんだ！」
「整備は待ってられない！　急行するわよクライブ！」

ネリスはクライブの制止も聞かずに飛び出していた。
照明も殆ど無い、廃墟のような空間をおくびもせずに駆けていくネリス。
それに必死に追いすがろうとするクライブ。
停止したエスカレーターを、まるで飛び降りるかのような速度で駆け下りる。
あっと言う間に空港正面出口に到着したネリスは、手近に停車していたハンヴィーを見つけた。荷台にはおあつらえむきな四十ミリフルオートグレネードランチャーが載っている。近くにいたテネジア陸軍の歩哨にその車両を借りて東部軍の援軍に向かう旨を伝えると、思ったよりすんなりと承諾してくれた。
その時、クライブは肩で息をしながら、ようやくネリスの所まで辿り着いた。
やはり、こうまで性能の違いを見せつけられると、クライブとしては悲しいものがある。
「クライブ！　乗って！」
瞬きをするよりも早くネリスは操縦席でハンドルを握っていた。
まだクライブが乗っていないにも関わらず、アクセルを踏み込んで急発進しようとする。
クライブは慌てて荷台に転がり込むと、振り落とされないように固定されたグレネードランチャーにしがみついた。車内にはクライブが使っているアサルトライフルのマガジンが入ったアモ缶があったので、ジャケットのマグポーチに入るだけ突っ込んでおく。小型軽量ロケットランチャーもあったので、お守りとして背負っておいた。
右へ左へと車体が揺れる、しがみついているクライブにはたまったものではない。
「落ちないでよクライブ！　荒っぽく征くからね！」
ネリスが戦場において荒っぽく無かった事があっただろうか。
クライブは逡巡する事自体が無駄である事に気づき首を横に振っ

た。
「そんなに取り乱してどうしたんだよ！　戦闘に於いて最重要なのは、余計な感情を排して常に頭をクリアに保つ事って言ってたのは何処の誰だ！」
「さっきの通信聞いてたでしょ！　あの人が居るんだ！　この戦場には！　あの人が……」
路面状況は最悪だった。舗装道路がぐちゃぐちゃになっている。砲弾が着弾した事により隆起した地面を装輪で踏み越える。車体が思いっきり宙を舞い、着地した際の反動で舌を噛みそうになった。
「何だって？！」
大声で聞き返す。クライブは車体が上げる轟音によりネリスの台詞を聞き取れなかった。
「何でもないわ！　もうすぐ指定された場所だからね！　気を抜かないで！　全方位警戒！」
ネリスは単眼式のヘッドマウントディスプレイに表示された情報を参照していた。
クライブは荷台から車内に移り、屋根から半身を乗り出してアサルトライフルを構えた。
辺りには殆ど街灯もなく、ハンヴィーのヘッドライトが照らす頼りない視界があるだけだった。クライブはヘッドマウントディスプレイを熱暗視装置モードに切り替える。
辺りは闇に包まれていて、殆ど地形など把握できないが、クライブの記憶が正しければここは王墓が建てられた丘陵地帯へと向かう山道のような所だったはず。道路の両側を挟むようにして木々が生い茂り、雲に隠れた月は視界を提供するにはあまりにも頼りない。
風に揺られた葉擦れの音が妙に不気味で、市街地で行われているはずの戦闘の音もどこか遠い。
「なんだあれは！」
急なカーブを曲がると道が開けてくる。
熱暗視装置が焼け付くような反応。慌ててヘッドマウントディス

プレイをずらして肉眼で確認する。
「あれは、ランドウォーリアーの歩兵戦闘車！」
強力な機関砲や対戦車ミサイルを搭載する最強クラスの装甲車が無残に炎上している。
ネリスはハンヴィーの車体を近くに寄せる。轟々と炎を噴き上げて横転している歩兵戦闘車。
「一体、隊員達は何処に……、数人は車外で追随していたはず……」
ネリスは操縦席から辺りを見回す。こんなに仄暗い夜もあったものか。粘着質な闇が立ち篭めていて、魔物が蠢くような気配があちこちから押し寄せてくるようだ。たとえ暗視装置があったところでその物言えぬ恐怖から解放される事にはならない。ネリスは心を奮い立たせるように、すがるように膝上に置いたサブマシンガンを撫でる。
その時、ハンヴィーのボンネットに何かが振ってきた。
鈍い音と共に車体が大きく揺れる。
「何だ！」
屋根の上からクライブが反応する。
操縦席ではフロントガラスに向けてサブマシンガンを構えたネリスが、その降ってきた物体を視認して、喉から小さな悲鳴を絞り出したところだった。
「ひっ！」
それは、テネジア軍の野戦服を纏った死体だった。首から上が既に無く、断面から滴る血液がハンヴィーのボンネットを汚す。
『お探の品はこれかな？』
ネリスは眼を見開いた。この宵闇の中、まるで耳元で囁かれたかのように聞こえる声。
思わず背中を振り返ってしまう。暗視装置で辺りを見渡すが誰も居ない。
「なんだこれは……」
クライブは隙無く辺りに銃口を走らせる。

ネリスはヘッドライトを消灯してハンヴィーを発車させた。まるで逃げるかのようなスピードで急発進する。
装輪が地面を抉って大量の土埃を吐き出す。発車の衝撃で死体がボンネットから転がり落ちる。
「森の中に敵兵が居る！　囲まれてるぞ！」
クライブは叫ぶと同時にアサルトライフルを発砲。銃口が火花を上げて五・五六ミリ弾を吐き出す。弾丸は暗闇に吸い込まれては消えていく。暗視装置があるが、敵は樹木を遮蔽物として用いている上に、走行中の車両からの射撃だ。これでは当たるものも当たらない。
「ちぃ！　手応えがない！」
「自動擲弾銃を使って！」
ネリスの指示でクライブは荷台へ転がり込む。足を投げ出して自動擲弾銃のグリップを掴む。自動擲弾銃は四十ミリグレネードをフルオートで射出する事ができる、強力な空間制圧兵器だ。
「これでもくらいやがれ！」
クライブは暗視装置に映る敵影に向かってグレネードを乱射した。次々と吐き出され、着弾と共に辺り十数メートルを巻き込んで起爆するグレネード。弾帯が次々と機関部へと飲み込まれ、空薬莢が吐き出されて荷台の上を転がる。敵兵の数人を遮蔽物ごと吹き飛ばして木っ端微塵にした。
だが、グレネードランチャーの発射炎を目がけて敵は射撃を展開してくる。
クライブが敵の応射に晒された。慌てて身を屈めると、発砲音と共に車体を叩く音が立て続けに鳴り響く。
「大丈夫クライブ！」
「ああ、無事だ！　だけどこれじゃジリ貧だぜ！　早くこの場所を抜けないと！」
ネリスはさらに加速をかける。こんな一本道では敵にとっていい的になるだけだ。

それにしても、敵の数が多すぎる。明らかに罠に填ったようだ。こちらはハンヴィーを全速力で走らせているのに、敵を振り切れる気配が無い。恐らく、この山道の全域に敵が蔓延っているのだろう。操縦席のドアが敵の銃撃にノックされる。ネリスはドアを蹴り開け、片手に持ったサブマシンガンを撃ちまくって敵を牽制した。車道まで乗り出して来た敵兵を狙い撃ちにして葬り去る。再び敵が撃ってくるため慌ててドアを閉める。

このハンヴィーは装甲車ではない。あくまで汎用トラックなので、ろくな装甲も施されていないのだ。一般的なアサルトライフルの五・五六ミリ弾は何とか防げても、それ以上の弾丸はいとも簡単に貫通してしまう薄い装甲だ。だが、広く戦闘に使用されるため、前大戦でその防御力の低さが全軍に知れ渡ったのは有名な話だった。

「強力な電波妨害が……。これじゃ救援も呼べないわね」

ヘッドマウントディスプレイに表示されたＥＣＭ強度。歩兵携行の通信機では到底看破できない。

「……何あれ？」

ハンヴィーの進路上に立ちふさがる人影があった。

上空で雲が流れる。そこには不気味な紅い月が煌々と光っている。その月を背に白髪の魔物がそこに顕現していた。紅い瞳がネリスを捕らえる。

ネリスはその瞬間、本能的な恐怖に晒されて竦み上がった。

そのまま突撃して撥ね飛ばすという選択は出てこなかった。

「飛んで！　クライブ！」

ネリスは慌ててハンドルを手放して席を立つ。荷台でグレネードランチャーを構えていたクライブを後ろから抱えるようにして抱きしめ、そのまま車外へと身を投げた。

地面を転がりながら勢いを殺し、なんとか無事に停止できた二人。即座に手近な樹木の陰に身を潜める。

操縦者を失ってもなお、慣性により右へ左に揺られながら、白髪の少女に向かって疾走するハンヴィー。

ツェザリカは、長大なペイロードライフルを、まるで拳銃であるかのように片手で構えていた。紅い瞳が不気味な光を放つ。口元には歪な笑みが浮かんでいた。
トリガーを引ききると、銃口を中心とした円形の衝撃波が発生。彼女の白髪を熱風が靡かせる。視界を覆い尽くさんばかりに吐き出される夥しい量の硝煙。反動で彼女の華奢な腕が跳ね上がる。凄まじい余韻を残して射出された二十五ミリ口径の形成炸薬弾は、ハンヴィーのフロント部に着弾。発生した超高温高圧のジェット噴流がエンジンをぶち抜いて爆発炎上させる。宵闇の中に一際鮮やかな華が咲く。
それはネリスとクライブから逃走という選択肢を奪った。
「白髪の魔物……」
「あれと戦って撃ち勝たないと、わたしたちに明日は無いみたいね……」
ネリスは木の陰から顔を覗かせて、ツェザリカを睨み付けた。
「さぁ、挑んでこい！　傭兵隊の亡霊よ！　このツェザリカが相手になってやろうぞ！」
ツェザリカは仁王立ちして堂々と名乗りを上げ、ネリス達に対して宣戦布告。
「征くわよクライブ！」
ネリスはクライブに目配せをして、サブマシンガンに新しい弾倉を叩き込んだ。
クライブもそれに習って、フルロードの弾倉を機関部に差し込む。ボルトを引いて初弾を装填。
「俺たちを敵に回した事を後悔させてやるぜ」
クライブは不敵に微笑んだ。額には脂汗がじっとりとにじんでいる。
二人はほぼ同時に木の陰から飛び出していた。

『骨肉の記憶』

「――空が……紅い。こんな身の毛のよだつ夜は初めてだ」
エドワーズ・ウィンチェスターは、国立技術研究所の門前で歩哨に立っていた。
先ほど彼とセシリアは、戦車を駆って負傷したベレッタを研究所へと搬送したばかりだった。研究所へ到着したところで戦車の燃料が底を突き、今は整備と補給待ちだった。
だが、未だに補給部隊が現れる様子はない。この混戦状況では仕方のない事だとは思うが、こうして戦闘区域外で気をもんでいるだけというのも、何とももどかしい限りである。
セシリアは戦車内で、車間情報統合システムを用いて、ブラックナイツの指揮を執っていた。一世代前の戦車は、電源もエンジン任せだったため、走行不能になるまで燃料を食い潰してしまうと、内部システムもダウンしてしまうという弱点が有った。だが、この最新世代戦車は内部に独立した電源供給システムを持つため、走行不能になっても電子戦兵装を用いる事が可能だった。無論、砲塔を旋回させるためのモーターや、射撃管制装置もその電源で作動させる事ができるので、いざとなれば交戦や長距離火力支援も可能である。
ふと、エドワーズは後方を振り返る。
そこには、幅の広い研究所のゲートがある。まるで門番のように戦車が腰を据えていた。　周囲に照明はまばらで、敵の空爆に備えるため研究所は灯火管制を行っていた。広大な敷地内に人気は殆ど無く、辺りは不気味なほど静まりかえっていた。
エドワーズは無意識に、携えたアサルトライフルの装弾を確認した。ここが戦場だという事も忘れて、彼は物思いにふけっていた。現実拡張システムの搭載されたヘッドマウントディスプレイ越しに、暗闇の中でも周囲の状況を鮮明に把握する事ができる。だが、彼の瞳はどこか遠くを見ていた。

「姉さん……」
エドワーズには腹違いの姉が居た。
アルバートには腹違いの妹が居た。
そして、それはすべて過去形。思い出が舞う。やはりエドワーズは、ヘルミーナに多く依っていた。あの微笑みも、温かな抱擁も、加速症という病がすべてを奪った。
あの安逸はもう亡いのだ。そのはずなのに。怖くて訊けなかった。アルバートは一体何を創り出してしまったのか。あのベレッタという名の人工天使。姿形こそは違ったが、面影が重なってしまう。
『エド、兄さんを赦してあげてね――』
劣化してくれない記憶が、耳元で自動再生される。総てを肯定しているかのような、その声音。ヘルミーナは血濡れた笑顔で、柔和に微笑んでいた。どうして、彼女はそれほどまで穏やかに。ヒトを赦すことができるのだろうか。
目を見開き、こみ上げてきた嘔吐感を臓腑の奥に呑み込む。荒い息をつきながら、彼は何とかその場に踏みとどまった。手で口元と顔を覆い隠し、指の隙間から覗いた視線はいつもより鋭かった。
「姉さん。……俺は、兄さんを赦せそうにないよ」
エドワーズはふと、腰の拳銃に触れた。ヘルミーナから貰ったＧｌｏｃｋ１８ｃ。エドワーズの身を案じて、彼女が吟味した物だった。外見は普通の拳銃そのものだが、セレクターレバーを切り替えるだけで、フルオート射撃が可能になる。
この銃を眺めていると、ふと思い出が胸に去来する。それはエドワーズがまだ学生だった頃、軍警察への任官が決定した直後の事だった。ヘルミーナがお守りにと贈ってくれたモノだ。――思い出が舞う。

「姉さん、何故この銃を俺に……？」
『ああー♪　それねぇ、クライブに教えて貰って、買ってきたの～。

強いてっぽうがあれば安心でしょ？　何かあったとき、エドが無事で居られますように、って。今はおまわりさんも物騒なんでしょ？
エドがしっかりやれるか、私は心配で心配で～』
「ふふ、ありがとう、姉さん。肌身離さずもって歩くよ」
『約束だからね～。エドが帰ってこなかったら、私寂しくて死んじゃうんだから～』
「それは大変だ、死んでも帰ってこなくちゃ」
『生・き・て、帰ってくるのよっ！』
「はい、はい、わかったよ。全く、姉さんは心配性だな」
『もぅ、それだけ、あなたが可愛いのよ』
後ろからエドワーズを抱きしめた身体は、そのとき確かに温かかった。
『だからね――もしも、の時は。躊躇っちゃ駄目よ』
耳元で囁かれた優しい言葉。それは彼の訓戒として胸に刻まれている。

――その記憶が、ヘルミーナを見た最期だった。
次に会ったとき、彼女はヒトの形をしていなかった。

エドワーズは苦虫をかみつぶしたような表情で拳銃を抜き、スライドを引いて初弾を装填した。元からマニュアルセーフティは付いていないのでそのままホルスターに戻す。
秒間二十発の連射速度により、至近距離で右に出るモノはない、強力なマシンピストルだ。滅多にフルオートで使用することは無いが、お守りとして肌身離さず持ち歩いていた。
「結局、あんまり使う機会は無かったんだけどね」
直後、物想いに耽っていたエドワーズは、霞んでいた視界の端に人影を発見する。

（敵兵か？！）
即座に片膝を付き、アサルトライフルを照準するエドワーズ。
ヘッドマウントディスプレイの現実拡張システムがその映像を補正。輪郭を強調して映し出す。目標の危険度を自動判定。武装は無し。挙動に不審が見られるため、警戒せよと表示されるが、エドワーズはそれを無視した。
「たすけて。痛い、痛い……痛い」
足を引きずり、片腹を庇って、這々の体で歩み寄ってくる少女に、エドワーズは見覚えがあったからだ。
「あの時の！」
先ほど、戦闘の最中に見かけて、それきり見失っていた民間人の少女だ。恐らくシェルターに入れず、こんな郊外まで逃げ延びてきたのだろう。砲弾の破片を浴びたのだろうか、所々服と皮膚が破れて鮮血を滲ませていた。だが見た限り、まだ傷は浅い裂傷程度だ。手当をすれば大事には至らないだろう。
「もう大丈夫、すぐに手当を！」
無粋とばかりにライフルを肩に掛け、少女の元へと駆け寄るエドワーズ。確か、戦車に治療セットがあったはずだ。セシリアに許可を取って、車内に収容することができれば、その辺のシェルターに入るよりよほど安全だ。本来なら、狭い車内には民間人を置いておける余裕など殆ど無い。作戦遂行に支障を来す可能性も、万が一を考慮すれば無きにあらず。だが、セシリアはああ見えて、他人に対してかなり優しい性格だから、二つ返事で了承するだろう。最悪、ベレッタと同じように研究所に預けても良い。まだこの周辺まで戦火が及んでいないから、当面は問題なかろう。
「ここまでよく頑張った！　さあ、安全なところまで……っ――？！」
「お兄さんからは、少女の臭いがするね……」
片膝をついていたエドワーズの喉を、少女が突然掴んできた。
「っぐ？！　やめ――」

まるで人間のモノとは思えない力で首を極められ、急速に意識が遠のいていくのを感じる。霞む視界の中に映った少女の表情は何も宿していない。まるで何かにとりつかれたかのように無感動だった。判断能力が凍結した思考の中、エドワーズは半ば本能的に腰の拳銃を抜いていた。だが、銃口を突きつけたにもかかわらず、少女はおくびもしない。

トリガーセイフティが解除されるところまで引き金を絞ったところで――人差し指に躊躇いが走った。

（民間人の少女を撃つのか……？！）

頸動脈の圧迫によりすでに視界が明滅している。それにこのままでは意識が落ちるより先に首が折れる。エドワーズは何とか振り解こうと藻掻いてみるのだが、驚くべき事にびくともしなかった。

『だからね――もしも、の時は。躊躇っちゃ駄目よ』

姉の言葉が脳裏をよぎる。エドワーズは歯を喰い縛って決意した。

（ごめんよ……っ！）

照門と照星を少女の肩に合わせて、トリガーを引く。

乾いた銃声と共に、少女の肩を九ミリパラベラムが撃ち抜く。しかし、彼女は着弾の衝撃で少し身体を揺らしただけで、動揺した様子すらも見せない。そして、まるで報復の様に少女の華奢な手のひらに込められた力が増した。血管が内出血を始め、脊椎が軋む。エドワーズが感じたのは鮮烈な死のイメージ。直接脳に叩き込まれたかのような衝撃に、銃を持つ手が震える。二度目のトリガーは、引けそうになかった。

「ごめんなさい、さようなら……」

少女は小さく呟き、血走った瞳からひとしずくの涙を流した。しかし、エドワーズはそれを知覚することができなかった。

「がぁ……っ？！」

エドワーズの走馬燈が後半にさしかかった頃、少女の拘束が突如として解けた。

次の瞬間、風切り音と共に――少女の頭が爆ぜたのだ。幼い四肢

が力を失って傾ぐ。
解放されたエドワーズは地面に両手をつきながら盛大に咳き込む。
「げふ、げほげっほげふっぉっ……一体何がっ？！」
目前の地面には、物言わぬ死体と化した少女の姿が。頭部から大量の血液と脳漿が流出し、一目見ただけで致命傷だと解る。エドワーズは肺の酸素交換を急ぎつつも、周囲に意識を走らせた。
「何を惚けている！　エドワーズ！！」
後方から聞き慣れた怒鳴り声が飛んできた。戦車からアサルトライフルで狙撃したセシリアが、血相を変えて駆け付けてくる。
「っぐ……。騎士長、何故？」
呼吸を整える事もせずに、エドワーズは半ば諦念しながら問うた。殺す必要は無かったのでは。喉まで出かかった言葉を、苦痛と共に臓腑に呑み込む。乾いた唇は鉄の味がにじんでいた。
「戦場では相手が誰であっても躊躇うなと教えたはずだ。こんな定型句を私に言わせるなんて、お前らしくもない。それとも、警察官時代が恋しくなったか？」
言いながら淡々と少女の死体を検分するセシリア。
「おかしいな、武器が無い。本当に錯乱した民間人だったのか……？　――ック」
それでも、エドワーズは彼女が最後に眉根を寄せたのを見逃さなかった。おそらくセシリアも、エドワーズと同質の業を背負っているのだろう。セシリアは救いようのないぐらいに強く、そして優しい。それ故に、彼女は義憤と哀しみに明け暮れている。エドワーズはそう思えてならなかった。そんなセシリアに対して無責任な感情を押しつけることなど、誰ができようか。
「すみません騎士長、自分が不甲斐ないばかりに、お手を煩わせてしまって」
「まったくだよ。だが、部下の不始末は隊長の責任だ。おおかた、この少女に助けを求められて、銃も構えずに近づいたんだろう。――くそ、何がどうなっているんだ……？！」

セシリアは悪態をつきながらライフルを構えて周囲を警戒する。
「もう動けるなエドワーズ？　とりあえず戦車まで戻れ！　なんだか嫌な予感がする」
セシリアの振りまいた殺気が空間を埋め尽くす。背筋が総毛立つような感覚が伝播する。
少女の遺骸が、セシリアの背後で蠢いたのを、エドワーズは見てしまった。
ソレが何なのか、彼には見当も付かなかったが、焦燥にも似た危機感が全身を支配する。
まるで身体の制御を乗っ取るかの如く、機関拳銃が手のひらに吸い付くような感覚。
口が動くよりも早く、親指がセレクターレバーを下げていた。射撃形式がセミからフルへ移行する。拳銃のフルオートエンジンが解放される。
死体の背中を突き破って、『何か』がセシリアに向かってほとばしった。
「騎士長っ！」
脳が命じるまでもなく、身体が勝手に動いていた。エドワーズはセシリアを突き飛ばす。彼女へ向けて殺到してきた『何か』に真っ向から対峙する格好になる。反射的に銃を構え、ソレを視認するよりも早く引き金を引き絞った。
まるで壊れてしまったかのような速度で、拳銃のスライドが前後に往復する。一秒間に二十発という凄まじい連射サイクルで、九ミリパラベラムが弾頭と空薬莢に分離されていく。バレル上に設けられたコンペンセイターから、大量の硝煙が吐き散らされた。ほんの一秒弱という短い時間で、マガジンが底をつく。拳銃がホールドオープンしても、エドワーズはトリガーを引ききったまま呆然と尻餅をついていた。
「――え、エドワーズ……？！」
セシリアですら、状況がよく把握できなかった。自分が何かに襲

われ、それをエドワーズが庇ったのだということに気づくのに、少々の時間を要したらしい。
「……なんだよ？　何なんだよコレはぁッ――っ！」
得体の知れない恐怖と、戸惑いと、抑えきれない怒りが、エドワーズの喉から放たれた。　絶叫とも咆哮つかないような声が、彼の精神を蝕む。今は狂い叫ぶしかなかった。
エドワーズとセシリアはまるで幼子の様に、地面にへたり込むしかなかった。
「何だ、これは……？」
目前に広がった光景を否定したくて、まるで惚けるようにセシリアが呟く。
骨だ……鋭利な槍と化した『少女の脊髄』が、その容器から大きく突出していた。その長さは実に三メートルには達するだろう。もし、エドワーズがセシリアを突き飛ばさなければ、彼女はその血濡れた槍に串刺しにされていたに違いない。
まるでヒトのモノとは思えない姿に変容してしまった少女の遺骸は、二十発の九ミリ弾を全弾余すことなく浴びており、もはや見る影もなく原型を留めていない、目をつぶりたくなるほど無惨な状態だった。
「くそぉ――ッ！　何が！　一体何が起こっているって言うんだッ――？！」
込み上げてくる吐き気よりも、返ってくることのない答えを求めてエドワーズは吠えた。
「これが……少女の姿だとでも言うのか――だとしたら、なんと醜悪な」
セシリアはそれを嫌悪している風でもなかった。まるで無力な少女の様に、抑えようのない恐怖に身を震わせていた。
「畜生……畜生が」
二人は全身の怖気がとれずに、補給と増援が来るまでの数分間、その場から動けずに居た。

『グランギニョル』

大音声と共にネリスとクライブが今さっきまで身を隠していた樹木が根本からへし折れる。ツェザリカのペイロードライフルの前では遮蔽物など無意味だった。

ネリスは前転のような回避運動から態勢を回復して辺りを見回した。

幸いクライブもしっかりと攻撃に反応して身を投げていた。自分と一般兵士がバディを組んでも、足手纏いになるだけだったが、クライブはやはり違う。逸している。ヒトの身で卑徒を逸する事がどれだけの苦行か、ネリスに想像する事はできなかったが、クライブが日々どれだけの努力を積んでいるのか、彼女はよく知っていた。

クライブとネリスは地層が隆起して天然の塹壕のようになった場所を見つけ、その身を滑り込ませた。周囲の状況を覗う。暗闇のせいで肉眼では視界の殆どが役に立たない。ヘッドマウントディスプレイのバッテリー残量にも限界がある。何時までも悠長に交戦できる状況ではない。

ネリスとクライブは目配せをし、お互いの装備を確認した。ネリスは愛用のサブマシンガンが一挺。マガジンは後三本。弾数としてはそこそこ余裕がある。後は例に漏れず近接戦闘用に拳銃とダガー。クライブはアサルトカービンと軽量対物ロケットランチャーが一発分。二人とも潤沢とは言えないが、装備は整っていた。だが、これでは対人外戦に耐える事は難しいのではないか。

「どうした！　隠れていても明日の陽は拝めぬぞ！」

ツェザリカの凛とした声が森中に響き渡る。

それと共に、敵兵の軍靴が地を踏む音も聞こえてくるような気がした。熱源が森の中を陽炎のように生まれては消える。おかしい。遮蔽物に隠れつつ行動しているならこのような反応が出るはずがない。まるでステルス戦闘機と交戦してるような感覚。現れては消え

る。反応が希薄すぎる。この暗闇と地形のせいだけではない。まるで何か得体の知れない力が働いてるようだった。
「クライブ。一人で敵兵を相手できる？」
ネリスは頭の中で状況を構築し、最善の戦略を組み立てようとして――あきらめた。
状況はどう見てもこちら側に不利にしか働かない。
武装も潤沢にはほど遠い。在るのは、長年死線を潜り抜けて培われた練度だけだった。
だが、それでいて未だ二人はチェックメイトを宣告されたわけではない。
その一縷の希望が、光明が妙に禍々しく見える。半かな希望は絶望の母に他ならないからだ。その子宮からどんな怪物が産み落とされるのか。その嬰児を愛でる余裕など、この世界には無かった。あの白髪の魔物も、人々の希望が生み出した絶望の形なのだろうか。
愛でられ、祝福されて常世に墜とされた筈の天使達。彼女達は、人々を安寧へと誘う清廉な存在ではなかったのか。卑徒の安逸が死によってしか得られないものであるならば、この世こそが真の地獄ではないのか。ならばこの世界を構築した少女神ガイア自体が悪なのか？　くだらないグノーシス思想を展開している場合ではなかった。
「何か手でもあるのか？」
クライブの縋るような問いかけ。彼もネリスと同じ見解に至ったようだ。
――無い。
そんな事は口が裂けても言えなかった。彼にとって、ネリスは憧れの存在であり、強さの象徴でもあった。総てを捨ててまでその偶像に寄り添う彼を裏切る事なんてネリスには死んでもできない相談だった。善悪や良心の呵責などと言う理想論では説明が付かない感情の発露。
それは、もはや一種の愛であった。

彼を傷つけたくない。彼を失望させてはならない。
彼には強い自分を愛でていて貰いたい。
だが、この愛は結合して生へと向かうものではない。
おそらくは、こんな不実なものは愛と形容するべきではないのかもしれない。
死へと帰結する不義の徒情けか。そんな生やさしい感情ではないと思うが。
クライブの一途な想いは、ネリスを現世に縛り付ける鎖であり、檻である。
ネリスの安逸へと向かう、片道の旅を妨げる行為以外の何者でもないのだから。
彼女が建てる、嘗ての最愛の卑徒の墓標。
自らを墓石とし、その躯に傷跡としてかのひとの名を刻む。
その行為が、何の贖罪にもならないと知っていても。
背負った十字架を道端に捨て置く事はできなかった。
「私がツェザリカの相手をするから、貴方はその間、敵兵の邪魔が入らないようにして。……できるわね？」
「あ、ああ。やってみる。ネリスは大丈夫なのか？」
「……解らない。でもやるしかない。逃げる事を主眼に置いて戦った方がいい」
「了解。援護してくれ」
クライブは溝の中から外を窺い、ツェザリカの姿を見つけた。
「今！」
クライブが溝から飛び出し、それを援護するようにネリスがサブマシンガンを発砲した。
「そこか！」
ツェザリカは不意の襲撃に超人的な反応を見せた。ネリスの正確無比な射撃を跳躍して回避。そのまま手近にあった木の幹に手をかけ、枝の上に乗り移った。やはり人間の性能ではない。ネリスは舌打ちをし、反撃を避けるべく彼女も溝から飛び出す。

枝振りの良い樹の上でペイロードライフルを構えたツェザリカは、お返しとばかりに発砲してネリスが一瞬前まで居た地面を抉る。ネリスは背を低くしたまま疾駆し、その弾幕をかいくぐる。さほど時を待たずして、ボルトがホールドオープンして弾切れを告げる。

ツェザリカは、禍々しい雰囲気を纏った大型マガジンを機関部に叩き込む。

マグチェンジの際に生まれる刹那の隙をネリスは見逃さない。

高所でたかをくくっていたツェザリカに五・七ミリ弾のフルバーストを指切りしながら紡ぐ。

それに対してツェザリカはまたもや跳躍。恐ろしい高度まで舞い上がった。

まるでその背に翼が生えているのではないかと思ってしまうほど軽やかな身のこなしだ。とてもあの重たい銃を担いでいるようには見えない。今度はただの回避運動ではなかった。

ツェザリカは凄まじい運動エネルギーを纏い、ネリスに向かって落下してくる。

だがその機動は直線的でネリスはそれを捕捉する事ができた。

「空中で回避はできまい！」

ネリスは片膝を付いて射撃体勢を取る。人差し指とトリガーは殆ど一体化していた。ボルトがせわしなく前後に運動し、足下に空薬莢が流れ落ちていく。ダットサイトの照準（レティクル）はぴったりとツェザリカを捕らえていた。

五・七ミリ小口径徹甲弾はツェザリカの肉体に着弾すると同時に体内で横転。貫通に使われるはずのエネルギーの全てを、余すことなくその華奢な肉体に伝える。この弾丸は貫徹能力を有し、マンストッピングパワーにも優れた特性を持っている。あの生体兵器オーガでさえこのサブマシンガンの掃射に耐える事はなかったのだ。

しかし、白髪紅眼の魔物は戦火に灼かれた月を背負い、狂々とした笑みを浮かべていた。

弾丸の殴打におくびもせず、ツェザリカは空中でペイロードライ

フルを腰溜めに構えて撃ち放ってきた。強烈な反動に小柄な身体が回転する。
「何？！」
ネリスは思いっきり左に飛んで回避した。あの弾丸は紙一重で避けると危険だ。擦っただけで腕一本は軽く持って行かれる上、地面に着弾すればその周囲に手榴弾の炸裂並の暴力が発揮されるのだ。
そのまま着地してくるツェザリカ。ネリスは間一髪の所で前転しつつ回避。
人間が降ってきたとは思えないほど巨大なクレーターがその場に形成される。一体あの身体は何でできているのだ。
もうもうと土煙が立ち篭め、視界が遮られる。ネリスは距離を取って警戒しつつ、銃を構える事を止めない。背を丸めた猫のような姿勢で、銃を己の中心として行動する。ヘッドマウントディスプレイは、土煙の中に蠢く熱源を発見していた。煙の中で何かが動く。ネリスは咄嗟にトリガーを引き絞った。
しかし、煙の中から生えた華奢な手が、ネリスの銃口をずらしてしまう。まるで自動車の衝突を貰ったような衝撃が銃に走る。それはとても暴力的な腕力で、油断無く構えた銃を取り落としそうになるほどだった。
ツェザリカのもう片方の手が振られる。
指先が消えたかのような錯覚を覚える高速度。
ネリスは間一髪それに反応して身を屈めた。
ネリスの首が在ったところを、超高速の手刀が通過していく。
衝撃波を纏った金切り声が頭上で鳴り響く。銃声に馴れきった三半規管が麻痺しそうだ。
その余波にあてられて、ネリスの奇麗な金髪が数本切れてはらりと落ちる。
ネリスはその影に向かって蹴りを繰り出した。
手応えはなく、ネリスはバックステップで距離を取る。
それを追い撃つかのように、重装弾が噛み付いてくるが、曲芸の

ような軽業で射線をずらして九死に一生を得た。ネリスの頬を冷や汗が一筋伝う。擦ってしまった弾丸が脇腹を抉ったのだった。致命傷ではないが、擦過傷としては深すぎる傷だ。痛みにうずくまろうとする肉体を意志の力で服従させて、彼女は前を見据えた。

土煙が晴れ、そこには楽しげに紅い眼を光らせるツェザリカが居た。

――無傷。先ほど撃たれたはずの部分に、目立った出血はほぼ無いに等しい。また、銃創も残っては居ないようだった。おかしい、確かに手応えはあった。彼女の纏った野戦服に弾痕が確認できる為、着弾していたという事を物語っている。

「もう少しでその雁首、払い落としてやれるところだったのに」

ペイロードライフルを背に担ぎ、ひらひらと手を振る。

ネリスは背筋にひんやりとした感覚が走るのを知覚した。確かに直撃弾を浴びせたはずなのに、どうしてこの魔物は平気な顔をしてネリスの首を落としに掛かってくるのだ。

ネリスはサブマシンガンを一時下げ、神速で九ミリ拳銃を抜き撃った。

乾いた音と共に手から肩に伝わる小気味よい衝撃。目の前の標的に対して淡々と弾丸を撃ち込むネリス。ツェザリカの胸部と頭部に九ミリ弾を何発も撃ち込む。

いくら威力不足が嘆かれる九ミリ拳銃弾でも、これだけ急所に撃ち込まれて生きていられる生物が居るものか。着弾するたびにツェザリカの小柄な肉体が衝撃でのけぞる。頭部に数発撃ち込んだときには、そこには嘗ての美貌はなくなっていた。脳漿を吐き出してぐじぐじに崩れた果実のようなものがそこにあるだけだ。肉と血液と、その他よく解らない物体が後方に向かって噴き出す。その肉体は力を失い、地面にその身を横たえた。マガジン一本をまるまる消費して、そのつまらない定点射撃は終了した。マガジンキャッチを押すと空のマガジンが滑り落ちる。それが地面に達するより早く、新しいマガジンを取り出して装填。スライドストップを解除して、初弾

が熱帯びる薬室に送り込まれた。
先ほどからネリスの耳には、アサルトライフルの銃声が届いていた。少し離れたところでクライブが交戦している。早く行って援護してやらねば。と、踵を返そうと思ったネリスに投げかけられた言葉。
「仕合の最中、敵に背いて何処へ行く？」
愛らしく幼い声。それが、魔物の呻き声に聞こえるのは幻聴ではあるまい。その蕾のような唇から吐き出される息が、灼熱に焼けた鉄の発するものに見えて仕方がない。
『ソレ』はゆらりと立ち上がっていた。
ネリスの喉が鳴った。無理もない。
これは本能より、さらに原始的（プリミティブ）な所から来る戦慄だった。
遺伝子が――ネリスの躯を流れる少女の血が。啼いていた。
それは負荷をかけた電子機器のコイルが泣きだすように。
死など畏れぬ傭兵が感じた、それ以上の恐怖。
生える――そう表現する他なかった。
ツェザリカの肉体から。外部から与えられた力により欠損した部分から。
肉芽が萌えだし、嘗てツェザリカを形作っていた肉体を再生していく。
風穴が開いた彼女の胸部も、完膚無きまでに破壊された美しい貌も。
ずるずると肉が流動する。
損じた内臓を補完し、骨を形作り、肉を盛りつけ、皮膚を貼り合わせる。
音がする。肉や骨の軋む音が。
心の軋む音が。
これが、人類に与えられた福音なのか。
神が戯れる。これは人形遊び。とびきりグロテスクで退廃的な。
まるで植物の生長を早送りで観察するように。あたかも自然な現

象のように。
ネリスは自分で手を下したものにも関わらず、嫌悪感は拭い去れなかった。
こんなものが、自分と同じ『少女』なのか？　これが人類の望んだ天使の姿か？
こんなものが……。
残酷な人形劇（グランギニョル）は未だ終わらない。

『或る男の――』

『彼』は殺人に快楽を覚えるような人間ではなかった。
人よりも比較的裕福な家庭に生まれ、真っ当に教育を受けて教養と知識を学び、恐らくは、普通に育った。
しかし、人を退け、命を奪う事を悪とし、戒め、これ一切を嫌悪する事もなかった。
曲がりなりにも彼は貴族だ。民草に向けて振り下ろされる刃を退けるのは、貴顕の責務（つとめ）であると信じて疑わなかった。
しかし、己を善と信じて敵を悪と見なし、これを屠って正義を為す。
そのような行為が偽善でしかない事も、彼は真理として理解しているつもりだった。
なぜなら、敵を屠る行為は、必ずしも敵の悪たるのみを葬る行為ではないのだから。
彼の敵はすべからく人間であった。彼等は己の正義を信じて戦っている。
そう、彼が敵を葬るとき、敵の悪なるも、善もなるも、諸共に屠られる事になる。
その人間の総てを奪う。人は一面だけではない。必ず多面性を持っている。
然らば、この世に正義などはない。
在るのは、人が誰しも胸中に隠し持つ、正義と云う名の独善だけだ。
正義とは、殺人を肯定する逃避思考に過ぎない。
そもそも、生きる事、之即ち他者を退ける事だ。奪う事だ。殺す事だ。
生命は、そう神に運命付けられて生まれてきた。
では、殺し、殺され、その先に極まった生命。

神がそれを求めているのだろうか。わかりはしない。この賤しき矮躯では。
たとえ天使であろうと、その極地へ至る事は叶わないのだろう。
ならば、彼の為す事は決まっていた。
生きてやる。
みっともなく地を這い回って、泥と血に塗れて己が信念とやらを突き通すしかなかった。
もはや、彼の双眸には、愛する人の背中しか見えていなかったのだから。
彼の中の幻想がこちらを振り返り、肩越しに微笑む。
嗚呼……。どうして。
どうして、貴女はそんなにも悲しい眼をしているのだろうか？
わかりはしない。わかりはしない。この賤しき矮躯では。

『ゆらぎ』

クライブは樹の影から飛び出し、傍らを走り抜けようとした敵兵の首に腕を引っかける。

敵兵は疾走していた勢いそのままに背中から地面に叩き付けらた。

敵兵は肺から苦悶の声を吐き出しつつも、ライフルをクライブに向ける事は怠らなかった。地に叩き伏せられてもなお、戦いの意志を挫かないその姿勢には敬意すら覚える。

だが、クライブは倒れた敵に銃を向ける事を厭うほどの騎士道は持ち合わせていない。

アサルトライフルの銃口を敵兵の頭部に押しつけ、零距離のスリーバースト。

敵兵の躯がびくりと跳ね、生命としての帰結を強要された。

最後の空薬莢が排出され、アサルトライフルはホールドオープン。

マガジン内の全弾を撃ち尽くしたことを告げてきた。

「……は――。これであらかた片づいたか……」

底を突いたマガジンを新しいものに交換し、クライブは長い嘆息を吐いた。

足が地に着かない心持ちだった。磨き上げられた彼の武はここに証明された。

戦場に身を投じてから間もない彼だったが、ネリスと共に何度となく死地を潜り抜けてきた実力は、ここに於いても遺憾なく発揮されていた。

今回もネリスの望みに添うことができたのだ。

クライブはたった一人で両手の指に余る数の敵兵を退けたのだった。

「――ッ！」

クライブは咄嗟に身を隠す。敵兵の気配がこちらに近づきつつある。

（畜生、増援か……）
腹の中で悪態を吐いたところでどうにもならない。
クライブは樹の陰から敵を捕捉した。まだこちらには気付いていない様子だ。
息を殺して銃を構える。彼我の距離は約三十メートルにまで近づいた。
ヘッドマウントディスプレイ越しにダットサイトを覗き込み敵影に照準する。
息を止める。手ぶれは最小限に。引金を絞る。バースト射撃。
檄針が弾底を叩く直前。その敵影は消えた。
（――ッ？！　嘘だろ！　一体何処に？！）
まるでその敵は夢幻の類で在ったかのように。忽然と消えた標的。
銃口を左右に振って視界を見渡すが、熱源の反応は無かった。
（そんな……馬鹿な）
クライブが樹の陰で、この場を即座に移動するべきか、そうせぬべきかあぐねいていると、背後から発せられた殺気に反応して身体が勝手に動いていた。
自分の首筋に向けて振り下ろされる白刃。
クライブはライフルを掲げてその剣戟を防いだ。
鋼と刃金が金切り声を上げる。ものすごい膂力だ、一つ間違えばライフルのフレームごと両断されてしまいそうな程。クライブはその剣先を受け流す。そのまま勢い余って地面へ突き刺さると思われた刃は、直前で反転して再びクライブの喉元を狙う。
（そう簡単にくれてやるか！）
クライブは心なしか重心を後ろにずらし、その斬檄を薄皮一枚で避けた。
そのまま後方に向かって飛び退き、ライフルを構えて相手を見据える。
（何だ……こいつは……）
奇妙な敵だった。暗闇になれて夜目が効くようになったクライブ

の眼にも、その敵影の輪郭は把握しかねた。ヘッドマウントディスプレイはもはや一切の反応も示さない。バッテリーが残量が少ないため性能低下を起こしているのかと思いきや、システムチェックの結果、正常に機能している。ならどうして、この敵兵は……。

そもそも、気配が奇怪すぎる。目を瞑ってしまうと、その存在を知覚することは、全く持って不可能になってしまうほど。それほどこの敵には生気が希薄だった。命も心も持たない自動人形でさえ、もう少し自己を主張してくる。

在るのは、純粋な殺気だけ。いや、この殺気さえもクライブが今まで感じた事の無いものだった。混じりっけが無いとでも云おうか。悪意や敵意の欠片さえ感じ取ることはできない。

「ふむ、あの状況で私の一閃を防ぎきるか。手練れた武人と推察する。之は何たる僥倖」

その影は楽しげに呟いた。女の声だった。それも若い。少女兵か。それにしても何とも奇異な。今時、戦場に刀剣を持ち出すのは、何処ぞの酔狂な騎士長ぐらいしか居ないであろうと思っていたのだが。テネジアではつい最近まで、騎士が戦場を駆けて剣戟を繰り広げ、己が武を誇っていたものであったが、火器の発達により、英雄と云う存在は虚構の物に成り果てた。鉄の嵐が吹き荒れる戦場で生き延びるのは、運の良い臆病者だけと相場が決まっている。

「久々に血湧き肉躍る！　手合わせ願おう！　我が名はフリッカ！　貴公の名は？！」

フリッカは鋒をクライブに向けて宣戦した。

「テロリスト風情に名告る名など無い！」

クライブは応えて発砲。たとえ敵が火器を所持していなくとも、容赦する謂われは無かった。

「はッ！　袖にされてしまったか！」

（――速いッ！）

フリッカはクライブが引金に殺気を込めた瞬間に踏み込んできていた。巧妙に火線をずらし、紙一重で音速の三倍で飛翔する弾丸を

かわす。彼女は感じているのだ。クライブの呼吸、視線の挙動、銃口の向き、引金に掛かる指にどれだけ力が掛かればシアーが落ちるのか。刀身で弾丸を両断するなどと云う馬鹿な事をしてこない分、尚のこと始末に負えない。クライブは自分を袈裟に切り裂かんとする一閃を、再びライフルを掲げて防ぐしかなかった。

「クソぉッ！」

ライフルのアッパーフレームに裂傷が走る。恐らくは機関部に影響を及ぼしているであろう致命的な。こんな状態の銃器を使用すれば、動作不良、暴発などの危険性はもちろんのこと、射手の生命をも脅かしかねない。クライブは、愛銃がスクラップにされたことに多少の悲哀を浮かべ、すぐさま拳銃を抜いて応戦する。ついでに、破損したライフルをフリッカの顔面に向けて投げつけた。使えない銃器など背負っていても重いだけだからだ。どうせ、あそこまで破損したら修理も叶わないのだから、とクライブは自分に言い聞かせる。寒々しい懐具合を気にしている場合ではない。そんなことは、生きて帰ってからいくらでも悩めばいいのだ。何の悩みも苦痛も感じない素晴らしい身体にされる前に。

フリッカは投擲された鉄の塊を、片腕を振るうことによって叩き落とした。そこに生まれた一瞬の隙。その機をクライブが虎視眈々と狙っていたのは云うまでもない。低い姿勢を維持したまま、敵の懐深くに潜り込む。あの得物は極至近距離で殺傷性能を発揮できない。その事をクライブはよく知っていた。刀というものはただ敵に当てれば斬れるというものではないからだ。適切な重心移動を経て、刃の『ものうち』を規定の角度で斬り込むことにより、初めて切断が叶うのだ。

クライブはフリッカの腕を払い上げ、胴体に拳銃の銃口を突きつける。だが、フリッカもこの程度で膝を屈する事は無かった。柄を握りしめたままの両腕をクライブの手に絡めて、強引に射線をずらしたのだ。

（器用な真似を！）

明後日の方向を睨み付けて激発する自動拳銃。クライブは状況が敵に傾きつつあることを悟ってもなお、一度後退して仕切り直すという選択をしなかった。
クライブは獣のように、貪欲に噛み付く。喰らい付いたら離す道理があろうか。あえて空けておいた左手で、ホルスターからナイフを抜き去り、フリッカの喉元目がけて刺突した。だがフリッカは小首を傾げるかの様な動作でそれを受け流す。刃がフリッカの白肌を撫で付け紅い線を引く。今度はクライブに攻撃後の空白が生まれる。
フリッカは刀を握ったままの右腕を、肘撃ちの要領でクライブの胸部に当てる。
衝撃が来ることを予期して身構えたクライブだったが、予想に反して大して衝撃はない。
ただあてただけだ。だが、クライブがフリッカの意図に気付く頃には既に遅かった。
フリッカはクライブの間合いに、さらに一歩踏み込み、もはや身体を密着させるかのような状態に持ち込む。クライブのふくらはぎからかかとに至る部分に足をかける。腰をひねり、その力をクライブの上半身に忌憚なく伝える。
（しまった！）
その力のうねりに巻き込まれて、クライブは背中から地面に流し落とされた。
（こいつ、柔術も使うかッ？！）
態勢を完全に崩されたクライブに向けて、凶刃が再三に渡って振り下ろされる。
クライブは身体を回転させてその攻撃を避け、芋虫のように地を這い回る無様を晒した。
フリッカが止めを刺すべく、刃を大きく振りかぶった瞬間を見計らい、クライブは身体のバネを用いて下半身を浮かせ、腕の力だけで跳ね起きる。
逃げるのではなく、今まさに刃を振り下ろそうとするフリッカに

向けて。真正面からその身をもって刃と対峙するクライブ。フリッカもそれは予期していなかったのか、対応することが出来ずにいた。アクロバティックかつ強烈な跳び蹴りが、フリッカの腹部にめり込む。それは、見た目と同様、非常に柔らかく、軍靴を思い切り叩き付けて撥ね飛ばす。フリッカは衝撃で数メートル後退り、腹部を押さえて苦悶の声を上げた。

「あ〝っが！　っはぁ……！　ふふふ……。佳い！　佳いぞ！」

クライブは顔の前で拳銃を構え、それにナイフの柄を添える。

ネリスの得意とする、拳銃を用いた接近戦闘術。その猿真似だった。だが、虚仮威しでもない。眼光はフリッカを見据えたままだ。彼女が纏う奇異な雰囲気にも存外慣れてきた。こうして眼を凝らしていれば、そうそう拐かされることも無いだろう。よくよく見ると、彼女はすらりとした痩身に、背中を流れる濡れ羽色の髪が特徴的な少女だった。そしてその御尊顔は、仮面によって隠されていた。今までは、仮面を被っていようがいまいが、認識すらできなかったというのが本当だ。

フリッカはその背に背負っていたものを手に取り、クライブに投げてよこす。

爆発物の類ではないかと警戒したが、よくよく見ればそれは刀だった。恐らくはフリッカが使っているものと同列系のものだろう。そり上がった長刀身の片刃が特徴的だ。クライブが得意とする、刺突に特化した両刃の細剣とは作りがだいぶ異なるが、この種類はセシリアが御執心だった為、散々手ほどきを受けたものだ。腕には多少の自信がある。

「何のつもりだ……？」

クライブは殺気を解かずにフリッカを睨み付け、事の真意を問うた。

「貴公に決闘を申し込む」

（……）

クライブは逡巡した。

敵の手管に乗っているようでは愚かしい事この上ないが、このまま戦闘を続けたところで埒が開かない。徒(いたずら)に時間と互いの身を削り合うだけだ。ならば、一合の元フリッカを斬り捨てて、ネリスの元に急いだ方が得策ではないかとクライブは判断した。

「……よかろう。俺はクライブ・ストーナー。テネジア軍、傭兵隊所属」

「はッ！　名を訊いてみればずいぶんな貴人の様。斯様な賤しき者の刃に倒れるわけにもいきますまいな？」

フリッカはますますもって楽しそうに言を紡ぐ。フリッカはクライブが公爵家の跡取りであることを知っている口だった。

だからどうだというのだ。今更そんなものにこだわったりはしない。とうに捨てたものだ。彼の今の目的は貴人として世を治めることではない。ネリスと共に肩を並べ、何時しか戦場の土に身を横たえる事のみが彼の望みだった。

「初太刀で斬り伏せる」

クライブは刀を鞘から抜き放つ。白刃の煌めきが森の木々をざわめかせる。

互いに刃を突き合わせて相対する。

二人とも構えは中段。互いに徐々に間合いを詰めていく。

緊張感が迸り、物言えぬ戦慄が背骨を駆け巡り全身に伝わる。

梢が鳴らす葉擦れの音も、どこからとも無く響く破裂音も、徐々に音を無くしていく。

勝負は一瞬で決まる。クライブは攻勢に出る。一歩一歩足を進めて相手の間合いを侵す。

既にお互いの刃は、お互いを射程に収めている。

どちらかがしびれを切らして刃を振るえば、勝負は決まる。

クライブは遠山の目で相手を俯瞰していた。

視点は何処にも定まらず、それでいて総てを知覚の範囲内に納める。

脳内で戦略を構築する。敵が馬鹿正直に斬り込んでくるならばそ

れでよし。
応じ技で敵の刃を跳ね上げ、即座に反転させて胴を薙いでやる。
何もしてこないでこちらの攻撃を待つならばそれでも佳い。
ならば、何の躊躇いもなく、反撃をも畏れずに、敵の喉笛を刺し貫いてやる。
だがその時、決闘を邪魔する無粋な音が辺りに響き渡った。
鉄火に焼けた紅い空に、突如としてその存在を表した色とりどりの花火。
（あれは、信号弾……）
油断無く見据えた視線の先で、フリッカは刃を納めて後方へと退いた。
「済まないな、ストーナー。この決闘、持ち掛けておいてなんだが、おまえに預けた。またの機会を楽しみにしてる！」
そういうと同時に、フリッカは再びその存在を希薄にしていく。
まるで濃密な闇が立ち篭めていく感覚にも似た。人の存在を浸食する何かが展開されていく。もはや、フリッカが目の前に居たとしても、その気配を感じ取ることができなくなるほどに。
「待てッ！」
クライブは即座に刀を下ろし、拳銃を抜き撃った。
四十五口径弾は狙い違わずにフリッカの頭部へ命中。しかし、仮面に阻まれて頭部を破壊するには至らなかった。その代わりに、仮面に亀裂が入り二つに割れる。破片が地面へと落ちる。
「っ――くぅ……」
フリッカは衝撃に声を上げ、即座に露わになった顔を鷲づかみにした。だが、それにも構う事無くフリッカの姿は完全に消失する。
辺りには、再び夜の静寂が押し寄せてきた。
（あの顔……どこかで……）
フリッカの姿が完全に消失してしまう直前、クライブはフリッカの顔を見たような気がしたが、認識が希薄すぎて、もはや覚えてはいなかった。まるで夢でも見たかのよう。

だが、この幕引きは悪夢の終わりではない。恐らくは、さらに凄惨な運命が待ち構えているに相違ないのだ。

（……）

クライブはネリスを探して歩き出そうとして、何か固い物を踏みつけた事に気が付いた。眼を凝らして見てみると、そこには、先ほどフリッカに破壊されてしまったクライブのアサルトライフルが転がっていた。無残な姿になってしまったもう一人の相棒を拾い上げて状態を確かめる。

「アッパーフレーム交換すれば、まだ使えるよな？」

クライブは貴族とは思えない貧乏性を発揮し、その破損したアサルトライフルを再び背負った。仕方がない、傭兵隊で使われる兵装の殆どは隊員の出費になるのだ。その上、給金はお世辞にも良くない。ついでと言えばついでだが、フリッカから寄越された刀も腰に履いておく。

クライブは態勢を整え、はやる気持ちを抑えてネリスの元へ急ぐ。

（無事でいてくれ――）

『或る日の終焉』

トリガーを何度も引き続ける。
もう、手の中の拳銃は反応を返してはこない。
銃口をツェザリカの首に突きつけたまま、手応えのないトリガーをかちかちと、まるで手遊びのように、馬鹿の一つ覚えのように引き続ける。
歯を食いしばり、眼を見開く。それでも、仇敵を撃ち殺すには至らない。
それもそのはず、弾が切れているのだから。
だが、人差し指の前後運動を止めることができなかった。ネリスは未だ、引金に縋り付いている。もう人差し指以外、一寸たりとも動いてくれそうにないからだ。
肉を引き千切られ、骨をへし折られ、血反吐を吐いて、涙で顔をぐちゃぐちゃにしても。
戦う意志は最後まで砕かれはしなかった。それでも、ツェザリカを叩き伏せるには力が不足していた。その肉体に何度となく鉛を撃ち込もうとも、何度刃を突き立てようとも、何度その矮躯を撃ち砕こうとも。ツェザリカが膝を折ることはなかった。その間何度となく反撃され、肉体の破損を蓄積したネリスは、既に限界を超えていた。
血が足りない、肉が足りない、骨が足りない。この化物を屈する為の力が足りない。
足りなかったというのか、届かなかったというのか、他の総てを犠牲にして得てきた力だというのに。これでも最愛の人には遠く、届かないというのか。この世に神がいるというのならなんと無慈悲な。だが、そんな事を非難できる身分ではない。硝煙の死神として無慈悲を振りまいてきたのは、他でもないネリス自身なのだから。ネリスは力を欲した。修羅のように。魔物を葬り去るに足る圧倒的

な力が欲しかった。
英雄に成りたいわけではない。
神に成りたいわけでもない。
悪鬼に成りたいわけでもない。
――ただ、ヒトでいたかった。
己の信念を貫き通すだけの力が欲しい。
それでも、あまりの痛みに意識が遠のきそうになる。浮遊感に包まれていた。足が地に着いていないような心地だ。それも当然、ツェザリカはネリスの首を片手で掴み、その身体を造作もなく掲げて見せているのだから。いくら力を込めて抗ってみても、身体が小刻みに揺れるだけ。その抵抗が、自分の首を絞めているということは気付いていたが、抗わずにはいられなかった。
その姿はまるで、絞首刑に処される死刑囚。
だが、それでもネリスは死んでいなかった。
彼女の眼は未だ闘志を失ってはいなかった。
活きていた。負けるものか。
このまま諦めて暴力に身を委ねれば、常世の苦痛を忘れ去り、死の安寧を教授することも叶うだろう。だが、そんな無様を相棒に見せる事は絶対に許されないのだ。
――わたしは、ネリス・カラシニコヴァ。
至強の傭兵。そうでなくてはならないのだ。
そうでなくては、誰が彼の憧れに報いてやれる？
――クライブ・ストーナー。
彼の顔が脳裏に浮かぶ。走馬燈などと云う曖昧なものではない。
あの時から、一度たりともこの網膜から消えたことはない。
まるで、太陽を直接見つめてしまった時のように。
彼女にとって、死んでも忘れることのない鮮烈な光だった。
総てを捨ててまで自分に寄り添いたいと願った、あの愚かしくも純直な人間に。
誰が、彼の真っ直ぐな想いに報いてやれるというのだ。

「……うぁ……が、はッ！」
呻き声を上げる、それは地を這う虫の断末魔の様に、無意味で誰の耳にも届かない。
だが、こんな所で――！
ネリスの眼に力が宿る。その背に負った十字架が彼女を苛み、安息の死を教授することを許さない。動く。へし折られてもう動かないはずだった左手が。妄執のように握りしめていたダガーを一閃にて振るう。
その凶刃はツェザリカの喉笛を引き裂いた。大量の紅い液体が噴き出し、ネリスは顔に返り血を浴びる。血化粧した戦姫は粘着質な絶望の渦中にあった。
やはり、この程度では頽れない。もはやこんなもの生物でも何でもない。虚構だ。生きて、活動するだけの能力を持った誰かの妄想。
即座に傷口が癒着して流血を阻止する。ツェザリカの眼には何も映っていないようだった。感情を見いだすとするならば、それは失望か。散々弄んだ玩具が壊れてしまったときのような。諦念にも似た何か。首に掛かる力に何の躊躇いもない。死ぬ。人形の首をもぎ取るのと同じほど造作もなく、ツェザリカはネリスに引導を渡す。
「殺してあげる……」
ツェザリカの台詞には力がこもってなかった。敵意がこもっていなかった。
まるで、瀕死の兵士に対してミセリコルディア（慈悲の短剣）を突き付けるように。
嘗てネリスがそうしてきたように。
ツェザリカはネリスの首がへし折れる寸前、その身体を投げて捨てた。
「ぐぁぁぁ〝ぁぁ！　っうぅ……」
ネリスは十メートル程低空飛行した後、接地して身体を地面に擦り付けた。何度となく繰り返された衝撃が再び奔った。またどこか骨が折れたみたいだ。痛みに意識が遠のいていく。ネリスは仰向け

に倒れたまま、虚ろな独眼で空を眺める。
首を起こして敵を見据えようとしても、首から下がまだ存在するのか判らないぐらいだった。
ツェザリカは背負っていたペイロードライフルを片手に取る。
重装弾狙撃銃の砲口をネリスに向けた。狂々と黒光りするその巨躯。
「なッ？！」
か細い声でネリスは驚愕を漏らす。あのペイロードライフル、先ほどの戦闘で全弾撃ち尽くしたのではなかったのか。あの銃の弱点は、狙撃銃の宿命として、装弾数が決定的に少ないことだ。弾丸のサイズも相まって、あの冗長なまでに大きなマガジンにも五発しか収まらない。だからネリスは弾薬が尽きるのを待って、その後格闘戦に持ち込んだのだ。
まだ、あの妖銃は生きている。放たれた二十五ミリ弾は一切の慈悲もなくネリスを砕くだろう。避けるにしてもこの身体では。
「くぅ……」
ネリスはそれから逃れるように地面を無様にのたうち回る。
感覚のない右手に、何か熱を帯びたものが触れる。
「っは？！」
先ほどの戦闘の最中に取り落としたサブマシンガンがそこに在った。
必死に手繰り寄せて握りしめる。シースルーマガジンを覗き込む。少しだが、まだ弾は残っていた。手近な樹に背を預ける。これ以上は逃げられない。無論逃げるつもりも毛頭無い。
戦うしか――ない！
樹木に背を預け上体を起こす。ネリスは死力を振り絞って独碧眼に意志を込める。
敵を見据える。唯一動いてくれる右手でサブマシンガンをツェザリカに向ける。
銃口が震える。銃が重いのではない。そこかしこが断裂した筋肉

のせいで照準が定まらない。たとえ敵に命中したとしても、先ほどの二の舞であろう。
ツェザリカはまるで面白くもなさそうにネリスの悪足掻きを睥睨する。
「地の底に還れ、亡霊」
ツェザリカは重たいトリガーを引き絞る。
『――ネリスッ！』
その時、どこからともかく声が聞こえた。
「……え？」
轟音。風切り音。高速度でツェザリカに向かって突進する飛翔物体があった。
ネリスは血涙に滲む独眼でそれを視認した。それはロケットランチャーの弾頭だった。
そして、瞬時にその弾頭が引いた軌跡を辿っていく。まるで赤い糸を手繰るように。そこに彼の姿を認める。今際の際の夢ではない。
（クライブ――ッ！）
ロケットランチャーの砲身を担いだ相棒の姿。
弾頭は真っ直ぐにツェザリカに向けて殺到する。
あの魔物とて、あれの直撃喰らって無事でいられるはずもない。
だが、ツェザリカは想像の斜め上を行く化物だった。
「こんなものォォォォォッ！」
ツェザリカは弾頭を――掴んだ。
『おいおい、嘘だろう……』
その光景を目の当たりにしたクライブは驚愕に開いた口が塞がらなかった。
ネリスが地に伏しているという事実も信じがたいものだったが。それ以上に、何処の世界にロケット弾頭と力比べする阿呆が居たものか。
あの白髪の少女は先ほどのフリッカより幾分か頭が弱いのではないのか。

ロケット弾頭との、刹那の押し問答。炎を噴き上げる底部が右へ左へと揺れる。
ツェザリカの両足が地に着いたまま後方に流れる。
「――くたばれ」
無論、それは一瞬の内に終了した。ネリスは片手でサブマシンガンを撃ち放つ。
不思議だ、さっきまで震えて定まらなかった照準が、今では嘗ての正確無比を取り戻している。彼が居るだけでこの絶望的な状況下でも、士気が回復してしまうほどだ。
申し訳ないほどに軽い発砲音と共に放たれた軽徹甲弾は、ツェザリカに殺到するまでもなく、彼女の手に鷲掴まれたロケット弾頭へと着弾。大音声と共に激発。紅蓮の爆炎が吹き上がる。それは焔柱を形成して周囲を焼き尽くす。
爆発の衝撃波がネリスの髪を暴力的に掻き上げる。殺傷圏外ぎりぎりの所に居たネリスは何とか余波に巻き込まれずに済んだ。それが収まると、そこにツェザリカの姿は無かった。粉々に砕け散ってしまったのか。それとも、どこかに吹き飛んだのか。
どちらにせよ――。
（わたしたちの勝利だ）
ネリスは脱力して微笑んだ。薄れゆく意識の中。今にも泣き出しそうな顔で相棒がこちらに駆け寄ってくるのが見えた。
『――よくぞツェザリカを退けた。私としては賞賛したいところだが。残念ながらそうもいかないようだ』
（何ッ？！）
突如としてネリスとクライブの間に発生した影。
仮面の少女。フリッカだった。クライブの進路を塞ぐ。
ネリスを介抱する事で頭が一杯だったクライブは反応が送れてしまった。
フリッカは向かってくるクライブの腹部に向けて、刀の柄を捻り込んだ。

「が、ぐはぁッ！」
クライブが身をくの字に折って苦痛に呻く。フリッカはさらに追撃をかける。
その隙にクライブの背に回り、肘鉄をお見舞いして叩き伏せた。
予期せぬ痛撃に脳の処理が追いつかない。意識が鮮明なまま、苦痛を効率よく肉体に叩き込まれる。
「はッ！　あ〝あぁ！」
獣の呻き声にも似た、意味をなさぬ音を吐く。屈辱の味が口腔一杯に広がる。
「っは！　先ほどのお返しだ。存分に味わうがいいさ」
フリッカはクライブの背に馬乗って腕を極める。急いで立ち上がろうとするクライブの首元に刃があてられた。
「動くな」
（糞ッ！）
すぐ手の届くところにネリスが居るというのに。なんだこの様は。辺りに殺気が立ち篭めていく。またもや木々の間に敵兵の姿を視認してしまった。
――こんな時に。
クライブは忌々しげに歯を食い縛った。周囲は完全に包囲されている。
数々の射線に晒されているのが手に取るように判る。
そして兵を引き連れ、憮然とした表情でクライブ達の方に歩み寄る影があった。
「ふん、やはり生きていたか、ネリス」
（……っ！）
ネリスの独碧眼が驚愕に見開かれる。
疼く。今は亡い左目が眼帯の下で蠢いたような気がした。
老兵は立つ。圧倒的な存在を身に纏って。
「ラルフ・アーセック！」
クライブが憎しみを込めて吠える。

ラルフは虫の息で地に伏せるネリスを胡乱な眼で眺めた。
「この者達の処遇は如何しましょうや。やはり殺しますか？」
「――いや。まだこいつには利用価値がある。そっちの男は好きにしろ」
「好きにしろ――ということは私の采配に委ねてよろしいと？」
「――好きにしろ」
「アーセック様も人が悪い」
「……こいつなら、よもや――」
「王墓で手に入れたという『例の品』こやつに使ってしまわれますか」
「そうだな、少なくともその辺の少女に植え付けるよりは成長が期待できるだろう」
ラルフ・アーセックはネリスに歩み寄る。ネリスは抵抗できないでいた。泥のような絶望に身を沈めて動けなくなっているのだ。
ラルフはホルスターからナイフを抜く。ネリスの服を脱がせ、露わになった胸部にその刃を突き立てる。その眼は胡乱なままで、そこから感情を読み取ることは不可能だった。
「うっうううう〝ううううッうううう〝うううぅぁぁ〝あらぁぁ〝ぁぁぁぁぁ〝ぁぁ〝ぁぁ！」
耳を塞ぎ、眼を覆いたくなるような光景がその場にあった。
麻酔も何もなしに腹を切り開かれる激痛。遠のく意識は、気絶という逃避も叶わないまま、中途半端な覚醒と半覚醒を繰り返す。胸から腹にかけてをナイフが走る。お世辞にもその切れ味は一流と言い難い。刃は肉を巻き込みながら、ブチブチと力に任せて裂いていく。
ラルフ・アーセックはネリスの開腹を済ませると、ポーチから透明な容器を取り出した。
ネリスには未だ意識があった。それが恨めしい。少女特有の高い生命力がこんな所で徒になるとは。途切れぬ意識と命。それは苦痛を加速していくだけ。発狂さえ許されない。

ラルフはその容器の中身――『種』の様なものをネリスの内部へと埋め込んだ。
「うううぅあ〝あお！　お〝おぉお〝おぉ！　っいうぅ〝ううぅう！　おおおぅう！」
その『種』は苗床を認識し、発芽する。肉芽が触手を展開してネリスの肉体を浸蝕していく。それは、想像絶する激痛だった。慟哭で喉が焼ける。そのまま内臓を吐き出したくなるほど。
ネリスの傷口が閉じていく。そして、先ほどラルフに開腹された事が嘘のように元通りに再生する。ツェザリカから負った傷も順次回復していく。自分の意識しないところで肉が蠢く。体内で断裂した肉が繋がれ、骨折を無理矢理元の位置に戻して接ぐ。全身を這いずり回る嫌悪感にもだえ、のたうち回る。
自分が自分ではなくなる。肉体を何かが浸蝕している。
「やめてぇぇ〝ぇぇぇ〝ぇぇぇぇぇ！」
ネリスは恐怖に狂いそうだった。得体の知れない何かに自分が支配されてしまう。
やめろ、この肉の主はわたしだ！
肉体が再生したのにも関わらず、ネリスは動けなかった。
瞳孔は開ききり、糸の切れた人形の様にその身を横たえている。
「ネリスッ！」
クライブは力の限り相棒の名を呼んだ。全身が総毛立っている。一体何が彼女を蝕んでいるのだろうか。あり得ないスピードで肉体が回復していく様を目の当たりにしても素直に喜ぶことはできない。むしろ嫌悪感が募るばかりだ。
「やはり、駄目か？　耐えきれんか。やはりその程度だったというのかネリス！」
焦りを募らせるラルフ・アーセック。逆にフリッカというと、うっとりとした溜息を吐きながらその地獄絵図を眺めていた。
「くそっぉぉぉ！　フリッカ！　俺を解放しろ！」
フリッカはクライブを拘束し、刃を向けたままだった。

そして、初めて気がついたのかのように呟く。
「おや、すまなんだな。ほれ、征くが佳い」
「フリッカ！　貴様何している？」
フリッカはクライブの首元に当てた刃を放し、拘束していた腕を解放してクライブを解き放った。ラルフは驚いてフリッカを見据える。
「好きにしろと申したのはアーセック様ではあるまいか。武人に二言はあるまい」
フリッカは仮面の口元に手を当て、くすくすと嗤った。
「ネリスッ！」
クライブは猪突猛進にネリスに向かって駆けつける。
「させるか！」
ラルフ・アーセックは立ちふさがる。
クライブは拳銃を抜き撃つ。その速度は人の眼に追えないほどに達していた。ネリスが得意とする射撃術に近いものが再現されている。
右へ、左へ。ラルフ・アーセックは神速に達する機動でクライブの射線を翻弄する。クライブは銃口を振り、その残像を追いつつ発砲するが、ついに捉えることは叶わなかった。このままでは肉薄される。組み付かれたが最後、どのような体術を繰り出されるか解ったものではない。
そう思った瞬間、クライブの身体は動いていた。そこから先は思考を持ち込む猶予もない。拳銃をホルスターに納め、流れるような動作で腰に履いた刀へ手が伸びる。
心持ち腰を屈め、居合いの型を取る。刃の届く位置にラルフ・アーセックが至る瞬間を見極める。感の眼を間合い総てに走らせる。それは一種の制空圏だった。踏み込んだが最後、一閃にて斬り伏せる。
刃が奔る。ラルフの喉元目がけて。だがラルフ・アーセックはその機転を利かせた攻撃にも反応して見せた。ネリスの血に濡れたナ

イフを掲げ、喉元に殺到する凶刃を妨げる。
そこに生まれた空白。ラルフ・アーセックは四十五口径自動拳銃を抜き放つ。
クライブの頭部に照準。クライブは回避運動を取るが、今一歩反応が遅れた。しかも、その銃口がまるで生きているかの如く、クライブに噛み付いたまま離さない。自分の顔面を追随したまま離れない銃口に、刃を目前に突き付けられた時のような恐怖と焦りが生まれる。額に奔る冷や汗。悪態を吐く間も惜しい刹那。
クライブは目を見開く。
銃声が迸った。
ラルフ・アーセックの動きが一瞬停止する。
クライブは生きていた。ラルフが向けた銃口は火を噴く前に下を向いてしまっていた。
状況を把握するべく周囲に意識を巡らせる。
――ネリスが銃を構えていた。先ほどまでの死んだ魚のような眼が嘘のよう。
その独碧眼には憤りと敵意がこもっていた。
「クライブ！」
ネリスは叫ったのだ。最愛の卑徒を撃つ決意が。一縷の透明な涙が頬を伝い、血に汚れた顔を少しだけ清める。相棒の名を叫ぶ。その卑徒（ひと）を殺せと。
クライブは再び刃を振り上げる。後方から撃たれて胸部に血を滲ませるラルフ・アーセックに向けて。着弾時の衝撃により態勢が崩れ、クライブに対抗しうる速度を確保できずにいる。一方、クライブの掲げた白刃は確実にラルフの頸を捉えて離さない。
一欠片の躊躇いもなく、クライブは断罪の刃を振り下ろした。
だが、その斬撃は金属音に阻止された。
またもや、フリッカがあの奇妙な能力を用いて戦闘に水を差してきたのだ。
「ここは私めにお任せを。撤退してくだされアーセック様！　敵の

増援が近い！」
逆刃に構えた刀でクライブの剣戟を阻害しつつ、ラルフ・アーセックを背に庇っている。
ネリスは次弾を紡げずにいた。先ほどの一撃が最後の一発だったのだろう。
しかも、足が萎えてしまっている様子で、すぐに立ち上がるのは困難に見えた。
フリッカは片手でクライブを制し、もう片方をラルフ・アーセックに翳した。
それと同時にラルフの姿が霞む。
――あの能力は他人に効果を及ぼすことが可能なのか！
「……済まない」
やがてラルフの姿は完全に消え去る。フリッカは再び刃を持ち直してクライブと対峙する。
「さぁ、先ほどの続きといこうじゃないか。クライブ・ストーナーぁぁぁ〝ぁぁ！」
乾坤一擲。フリッカはクライブに向けて刃を振り下ろす。
速すぎる。単純な斬撃故に、極めれば何人たりとも避けること能わない。
クライブはその一太刀に応じる構えを見せた。一歩遅れて刃を振り上げる。
後の先で敵を制するのかと思いきや、その軌道は頂点まで至らない。
殺到する刃を峰で弾き上げる。刃にこもっていた剛力に、入魂の全力で応える。
この時点で既に勝敗は決した。
クライブの刃がフリッカの斬撃をはね退ける。
そして、クライブは刃を頭上で旋回させる。ガラ空きになったフリッカの腹部に、華麗な身のこなしで刃を這わせる。上半身を捻り込みつつ、一歩踏み込む。敵の突撃してくる勢いを利用した応じ技、

返し胴。敵の斬撃を跳ね上げて阻止しつつ、空いた胴を薙ぐクライブの得意技だった。元は、剣術指南中、師であるセシリアの凄まじい攻撃を凌ぐため、苦し紛れで会得した技だったが。
打ち抜け態、交錯する視線。
胴を薙がれたフリッカは流し目でクライブを見つめ――嗤った。
「……お見事」
フリッカはその場に倒れ伏せる。しかし、その身を地面に横たえる直前に跡形もなく消え去ってしまった。
一陣の風がその場を駆け抜ける。
先ほどの激戦が嘘のよう、辺りには静寂が充ち満ちていた。
クライブはネリスの元に駆けつける。
「ネリスッ！　その、無事なのか……？」
「大丈夫よ、生きてるから。そんな、泣きそうな顔しないの」
ネリスは精一杯笑みをたたえた。
未だに身体の隅々を這い回る違和感に嘔吐しそうな上、激痛の波が引かなかったが。
それでもだ。実感できたから。自分はやはり一人で闘っていたわけではなかった。
ヘッドマウントディスプレイに情報が表示される。味方の阻止侵攻部隊が近くまで来ているらしい。この場の敵兵は撤退を開始した。市街地での敵戦力も逐次制圧しつつある。
もうすぐ夜が明ける。想えば、長い一日だったが。
――テネジアは明日を迎えることができた。自分も、相棒も欠かすことなく。
「立てるか？」
クライブは手を差し伸べてくる。だが――。ネリスは少しだけ彼に甘えることにした。
「駄目、立てそうにないわ。抱いて行って頂戴」
「……やれやれ、この姫様ときたら」
クライブは芝居がかった風に頭を振り、やがて観念する様にネリ

スの願いを実行した。
ネリスの背と膝の裏に手を入れても持ち上げる。不思議なほど軽かった。
未だ彼等の戦いは終わっていない。だが、今この瞬間ぐらいは。
――静かに眠らせて。
ネリスはクライブにその身を委ねて、意識を手放した。
クライブは腕の中で子供のような寝顔を見せるネリスを愛おしげに見つめた。
歩き出す。帰りの足とする友軍を捕まえるべく。
そしてクライブの中に芽生える悪戯心。
クライブは静かにネリスの唇を奪った。
――これぐらいは許してくれよ。他は何も要らないから。

『旧友』

「それで、ネリスの状態はどうなんだ？」
「言ってしまえば正常そのものだねぇ。正常すぎて逆に怖いぐらいだ」
そう言ったアルバートの頬には大きな湿布が貼られている。
あの後、クライブはネリスを連れてアルバートの元を訪ねていた。
ソファーに腰掛けて、テーブル越しにアルバートと向き合うクライブ。
どうやら研究所の一室を応接間に仕立て上げているらしい。
お世辞にも整理整頓が行き届いてるとは言い難い。乱雑な様相を呈していた。
ネリスに埋め込まれた『種』の様なもの。
その力で肉体が回復したのは僥倖だったが、子細の知れない異物がネリスの中に根付いたとあれば、手放しで喜べたものではないのも道理だった。
「ここの設備が許す限りの検査はしたよ。その結果、彼女は正常そのもの。何も異常なものは検出されなかったんだよねぇ」
テネジア最高の技術が集う、王立技術研究所の設備を使って出た結果がそうだというなら、別の場所で調べても同じ事だろう。それにアルバートは少女及び天使研究の第一人者でもある。その彼がこう言っているのだから事実なのだろう。頭の中身はどうか知らないが、技術者としての腕は万人が認めざるを得ない。
「どうぞ、クライブさん」
クライブの目前のテーブルに、湯気立つ紅茶が振る舞われた。
ティーカップを置いた繊手の主を辿り、その姿を確認する。
サイズの合っていない白衣を着崩したベレッタだった。
「あ、ああ。ありがとう」
ベレッタは会釈をして、アルバートにも紅茶を差し出す。

紅い液体を睨んでクライブは怪訝に思った。
「おまえの所のベレッタは昨日の戦闘で酷い負傷を負ったと聴いたが？」
何でも二十五ミリ弾の直撃を喰らったらしいが。人間なら恐らく木っ端微塵だ。
「君はかねがね僕の腕を侮ってはいないか？　あれしきの破損はすぐに修復できる」
自信満々に胸を張って言い張るアルバートを尻目に、ベレッタが小声で怖々と呟いているのがクライブには聞き取れた。
「胴と下肢を泣き別れにされる破損をあれしきと評さないで欲しいなぁ……。ああ、やっぱりアルバートさんとは認識に齟齬が生じているようだぁ……。また手酷く扱われるんだ！　あの時見せてくれた優しさは、きっと私を持ち上げておいて突き落とすために違いない！　やだよぉもう痛いのはやだよぉ」
（……切実だ）
ぶつぶつ、と呟くベレッタを哀れに思いつつクライブは聞こえぬ振りをしてあげた。
幸運にもアルバートの耳には届いていなかったらしい。もし聞こえていたらどんな八つ当たりが待っている事やら。クライブは昔から、アルバートの破綻人格に散々振り回されてきた被害者だ。ベレッタの気持ちはよく解る。同情はするが、手を差し伸べてやれるものではないので、一歩下がって見守るしかなかった。次に戦場で会ったらそれとなく助けてやろうとクライブは決意を固くするのであった。
「ふん、それはおまえの腕じゃなくて、人工天使の性能に依る所じゃないのかな？」
調子に乗って天狗になっているようでは、生い先短い人生を送る羽目になるぞと言外に含めて。
「まあ、そう言われてしまえばこちらにも反論の余地はないのだけれどねぇ」

認めたくないものだな、とアルバートは自嘲気味に溜息を吐いた。
「全く、人工天使の生命力には驚かされてばかりだ。少女でさえ旧人類を凌駕する身体能力を有しているというのに。飛ぶ為の翼も無い矮躯には、それ以上の力を宿している。まさに神の御遣いだな」
クライブは腕組み、先日交戦したツェザリカとフリッカのことを思い出していた。
恐らく、あれでただの少女兵とは言うまい。ネリスをあそこまで追い詰めたツェザリカは、実態はよく解らないまでも超級の化物であることは間違いないだろう。伊達に重装弾狙撃銃をこれ見よがしに振り回していたわけではないと言うことだ。
それに、クライブが直接刃を交えた――フリッカとか言う、道化じみた雰囲気の剣士。
何とか退けたが、どう考えても、あの程度でおめおめと冥道に至るような器ではないだろう。クライブと闘った際、あれで手加減をしていたと言われれば、それで合点がいってしまう。刃を交えて解ったことがそれだ。あの少女は底知れない。水底に何かが潜んでいるような。得体の知れない化物が、顕現の瞬間を虎視眈々と狙っているのでは。そう考えてしまうのは単に矮小なる卑徒の性か。
ラルフ・アーセックにはネリスが一発お見舞いしたが、恐らく致命傷には至っていない。
「そう言えば、聞いたか？」
アルバートが楽しげに話を切り出す。
「何の話だ」
憮然として応じるクライブ。アルバートから掲示される話に、吉報が混ざっていた試しが無いのは気のせいか。
「先日のテネジア王都襲撃事件。あれに参加した敵兵、殆どが戦闘中に殺害されたが、一部が捕虜として捕らえられてね」
「まあ、そりゃ当然だろうな。で、敵の正体でも掴めたって言うのか？」
クライブはおおかた反王制派のテロリストか、ソレイユ連邦に属

する国家の手のものだと思っていたが。それにラルフ・アーセックが関与している理由も見当たらなかった。単に傭兵として雇われて動いているのか。それとも別に目的を持って行動しているのか。
「それが、めぼしい情報は何も得られなかったそうだよ」
「なんだ、尋問する前に自害しちまったか」
「いいや、捕虜の処刑はオリヴィア様の命下、直に執り行われる」
「じゃあ、なんで」
「その捕虜とした四八名。全員が少女兵だったそうだ。恐らく、敵軍兵士の殆どが」
クライブの顔が驚愕にゆがむ。思わず身体が動き、テーブル縁に膝をぶつけてしまう。
まだ手を付けていないティーカップの中身が揺れる。
「……まさか、あの噂は本当だったとでも言うのか！」
「ああ、そうだねぇ。テネジアですら、少女兵は軍の重要な戦略物資だ。全軍を見渡しても三桁には届かないだろう。しかも、その中の誰もが軍内部で重要な役割を帯びている。
そう、貴重な兵器なんだよ、少女兵はねぇ。あんな、特攻かぶれの作戦に投入して消耗させて良いような駒じゃない。第一、どこから少女を調達する？」
クライブは喉を絞り上げたような苦い呻き声を上げる。
「人工少女か……」
ご名答、と言いたげにアルバートは眼鏡のブリッジに指をかける。
「恐らくはねぇ。オリジナルの少女兵に比べれば性能に著しい劣化が見られたみたいだけど、それにしたって脅威には相違ない。恐らくは、肉体を培養した後、高速学習装置で必要な知識と情報、それと命令を直接脳に叩き込んで洗脳。部隊を編成して実戦投入。一人前の兵士を一から作り上げるよりはよほど効率的で安上がりだ。あの実用化にこじつけたＦＡ（Ｆｉｒｅ　Ａｒｍｓ）といい、敵さん達はこのテネジアですら発掘できていない深度の古代技術を擁していると見て間違いない」

「人間の所行じゃない……」
クライブはまるで神に祈るように両手を組み、その上に額を乗せて低く唸った。
「おや、クライブにも人並みの倫理観や善悪観念、良心が残っていたなんてねぇ。僕としては嬉しい限りだよ。……エドワーズもそうだった。それで良いんだ、人非人は僕だけで」
アルバートは珍しく物憂げな表情を作り、湿布の貼られた頬を撫でた。恐らく誰かに殴られたのだろう、外観で解るほどに腫れ上がっている。
「だ、大丈夫ですよ！」
ベレッタがその重苦しい雰囲気を察して口を開いた。
「そんな少女兵崩れの劣化品が束になって攻めてこようと、アルバートさんの最高傑作である人工天使のこの私が遅れを取ることなど決してありませんから！　どうぞ、ご安心くださいませ！」
ベレッタはネリスやセシリアと比べれば幾分か薄い胸を張り、仁王立ちで堂々と宣言する。
――こいつ今自分のことを最高傑作と称さなかったか？
クライブとアルバートは笑みを零したが、二人ともその意味はまちまちだ。
クライブのは小動物を愛でるそれだが、アルバートのはだいぶ悪辣としている。
「ふふふ……、いい。それで良いんだベレッタ。おまえはいずれ、オリジナルの天使をも凌駕する存在に成り上がるのだから」
アルバートは立ち上がってベレッタの銀髪を撫で付けた。
頭を撫でる、手が頬に触れるとベレッタは嬉しそうに目を細めた。
「はいっ！」
ベレッタは快活な返事で応える。
良い娘だ。クライブは贔屓目にもそう思う。だからこそ境遇が不憫でならない。

「おまえ達には事後処理の任務が残っているんだろ？　入院させる必要も無いからネリス嬢を連れて仕事に戻ると良い」
「ああ、世話になったな」
「いいってことよぉ～。僕も嘗ての親友とお喋りできて嬉しいしねぇ」
「おい、今聞き捨てならないことをほざかなかったか？　悪友と称するのも憚られるわ！　この悪魔め！」
「僕はクライブの事、結構気に入ってるつもりなんだけどなぁ。――玩具として」
無意識に腰の拳銃へと手が伸びたが、自制心を総動員してこらえる。
ネリスの元へと急ぐことにする。そうだ、ネリスが待っていると思えばこそ、アルバート殺害を先延ばしにする事も叶うのだ。

『散髪と懐古』

『散髪と懐古』

「ほら、じっとしていろ」
手狭な簡易浴室の中。セシリアはネリスの長い金髪に鋏を入れていた。
二人とも一糸纏わぬ姿で。ネリスは眼帯を付けたままだが。
事が済んだら後腐れ無くお湯で流してしまおうという魂胆だった。ネリスは折れそうな程細い肢体を丸めて、セシリアに背を向けて座っている。セシリアは全裸ということに気後れもせず、淡々と作業を続けていた。
「全く、小まめに手入れぐらいしておけ」
櫛を走らせて髪を梳く。ネリスの髪はウェーブの掛かったくせっ毛で切りづらいことこの上ない。彼女は身嗜みにあまり執着しない質だった。精々、櫛を入れる程度が関の山だ。
この伸ばし放題の長髪をどうするか、セシリアはあぐねいていた。第一、長い以前にこれでは重くないのか。後方から見ると彼女の身体のシルエットがほぼ完全に隠れてしまうほどだ。女性は髪が長い方が良いと言うが、何事にも限度があると思う。
「言い訳させて貰うと、この髪昨日まではここまで伸びていなかったのよ。一晩寝たらこの有様」
「もっとましな言い訳を考えろ。恐怖のあまり髪が一日で白く染まった、なんて逸話並に非科学的だな。脳に回る栄養がこの髪にいってしまったのか？　しかし、全く羨ましいほど良い髪質だ。売ったら金になりそうだな」
いや、悲しいことに嘘でも何でもない。あの種を植え付けられた事による、ささやかな変化だった。何か得体の知れないものがひたひたとにじり寄ってくるような幻想に囚われそうになる。正直、恐

ろしさに負けて、みっともなく泣き喚いてしまいたいぐらいだったが、そうもいかない。
「貧乏性～」
ネリスは流し目に抗議の声を上げる。
「よくもまあ、これで闘えたものだ」
「まあ、私はセシリアと違って元から格闘戦苦手だし」
射撃専門なのですと小さく言って、人差し指で銃を形作り撃ち放つ真似をする。
「組み手で十人を相手取って息一つ乱さない奴がよく言う。――横を向いてくれ。……右じゃない左だ」
「寒くなってきたわ」
ネリスの極めの細かい白い肌が、心なしか逆立っていた。思えばずいぶん長丁場になってしまった。ネリスのだらしない格好を見咎めて、気紛れを起こして整髪をかって出たのが運の尽き。セシリアに若干の後悔が滲む。既に時計の短針が何周した事か。浴室椅子に座っているネリスの大腿には相当量の金の残滓が降り積もっていた。その周囲のタイル床も同様に金の雪景色だ。それなりに綺麗だが、何か得体の知れない生物が脱皮した跡に見えなくもない。
「シャワー浴びるか？　最初は良いかもしれないが、後からまた寒くなるぞ」
「……我慢する」
セシリアは櫛を走らせつつ思案顔になる。
「う～ん。どうしたものかなぁ」
「あまりこだわらなくても良いからね。なるべく早く済ませて頂戴」
「そうもいくまい。一度やり出したことだ、適当で済ませるのは性に合わない」
「……そういう性格だったわね、あなた」
半ばげんなりしながらも、言われるがままに姿勢を変えるネリス。
ふと、昔の事を思い出す。あれはまだネリスとセシリアがラルフの元に居た頃。

毎度のように喧嘩（一般には殺し合いと相違ない）に明け暮れていた二人。
ふとした拍子にセシリアのナイフがネリスの髪を切り落としてしまい、とても不格好になった事があった。特にネリスは気にしていなかったのだが、後日セシリアがおずおずと鋏を持ってきて、整えてやるなどと言い出した時の事は未だ鮮麗に記憶されている。元より、セシリアは人の世話焼きが好きな性格だった。ブラックナイツでも隊員の面倒見が良い事で有名だ。もしかしたら、セシリアは戦士としてのそれより、何か人の世話を焼く仕事の方が性に合っているのかも知れないと、ネリスはそう思えてしまってならない。たとえば母親とか。
――想像できないと思いつつも、想像してしまう。思わず笑いが零れ出す。
「何をにやにやしている、貴様らしくもない。むしろ奇っ怪だから止めろ」
セシリアは怪訝に思って眉を顰めた。
「何よ失礼ね。――ただ、少し昔の事思い出しちゃってね」
心外だとばかりにセシリアを振り返るネリス。
「何だ、貴様と私の蜜月を思い出して赤面でもしていたのか」
冗談きつい。
「貴方はずいぶんと特異な愛情表現をするのね。あの殺愛（ころしあい）をどう好意的に解釈していいものか。少なくともわたしには理解しがたいわ」
お互いに何度死線を彷徨ったことか。恐らく両手の指で足りないぐらいだろう。
喧嘩するほど仲が良い。それを究極まで発展させるとああなるのだろうか。
正直、互いの生死に関わってくる時点でその理論はない。
ちなみにほぼ全てセシリアが発端である。セシリアは様々な理由を盾に、激情のままネリスに勝負を仕掛けて来た。ネリスにとっては、迷惑も良いところだった。最初の頃は何も思う所が無かったが、

何度も死にかけるといい加減にセシリアに対して興味が湧いてくる。ネリス自身、あのときの自分はどうかしていたのだと思っている。
思えば、友達と呼べる存在はセシリアぐらいしか居なかった。
一緒に訓練して、独自に教養を学んで、他愛もないことで喧嘩して、満身創痍になって共に眠りに就いたあの頃。
あの過去を良い思い出だったと感じてしまう自分に嫌気が差してくるが、実際悪くなかったと思えるのも確かだ。今でも、なんだかんだ言って時折酒盃を交わすぐらいの関係だ。
何か得るものはあったのだろう。そう言うことにしておく。
「ずいぶん仲が良いことで、お二人さん」
（――え？）
クライブが立っていた。自分の今の状況を思い出す。生まれたままの姿である。セシリアも同様に。
悲鳴の代わりに銃声が轟く。セシリアが振り向き態に発砲していた。
クライブが着弾の衝撃で後方に吹き飛ぶ。だが、直ぐさま態勢を立て直す。
「てめぇセシリア！　防弾鎧付けてなかったら死んでたぞ！　というか風呂場に銃を持ち込むな！　手入れが面倒だぞ！」
「ちっ！　気付かなかった。防弾着とは味な真似を。次はヘッドショットにしよう」
特に裸体を隠すことも無くクライブを睥睨するセシリア。
「確認せずに撃ったの……？」
ネリスは相棒の悪運に感謝した。いや、予め撃たれることを予期して重装備をしてきたに違いない。そうでなければあんなにクラスの高いボディアーマーを普段から身に付けたりするものか。というか、気配の消し方異常じゃないか？　ネリスとセシリアがこんな距離まで接近されるまで気付かない程とは。全く、こんな命を張るような真似をしなくとも、頼まれれば見せてやらないこともないというのに。

「それより二人共、隠すべき所は隠せ！　おまえらの美しさはよ～く解ったから！　この目には眩しすぎる！　見せ付けられると逆に申し訳なくなってくる！」
別に見せ付けているわけではないが。
クライブは手近にあったバスタオルを投げて寄越した。
ネリスとセシリアはそれを受け取って身体に巻いた。
「なんだ、覗きに来たんじゃないのか」
セシリアは未だに銃を突き付けたまま、断罪者のようにクライブを見下していた。
「ネリスを探していたら偶然ここに行き着いただけだ！　ここの構造よくしらねぇしな！　問答無用で撃たれるようなやましい事は何ら企てていない！」
「まあいい、とりあえず出て行け話はそれからだ」
どう考えても話す気はないセシリアを背に、頭に両手を組んだまま、おずおずと退出するクライブ。ネリスは自分の薄幸が彼に感染しているのではないかと危惧していた。どうも最近、世界の悪意を感じざるを得ないほどの不遇が続いている。昔からその傾向はあったが、最近は特に顕著だ。
オーガの群に追い回されたり、左眼を撃ち抜かれた後、パラシュートなしのスカイダイビングを強要されたり、セシリアに殺されかけたり、ＦＡ相手に生死の境界を彷徨うような空戦を繰り広げたり、ツェザリカに全身を砕かれたり、得体の知れない肉種を身体に植え付けられたり。一体自分は後何度の不幸に耐えられるのだろうか。正直、長生きする自信は元より無かった。
「よし、まあこれで上出来だろう」
セシリアは額に浮かんだ汗を拭いながら、一仕事終えた後の達成感に浸っていた。
鳥肌が浮かんだ両腕を抱きながら、とりとめもない思考に走っていると、意外なぐらいに調髪が早く終わった。浴室に据え付けられた鏡は原型を留めないほどに割れてしまっていたため、姿見は後の

楽しみに取っておく。
切った髪を回収した後、身体をシャワーで洗い流す。バスタオルで拭いて、髪を乾かすのもそこそこに軍服を着込む。一足先に身なりを整えていたセシリアがドライヤーをもって来る。温風を吹き付けながら、ネリスの髪型を綺麗に整えた。
「よし、我ながら完璧だ」
セシリアは自画自賛してうなずく。
ネリスは先にクライブに見て貰おうと部屋の外へ出た。
クライブは幸薄そうな顔をして壁際に寄りかかっていた。腹部が弾痕を中心として若干焦げている。本当に悪運のいい人だ。フレンドリーファイアで死んだら彼も報われなかったろう。というか、情けなくて死因を口外できない。
「……どう、クライブ？」
髪型は前と大して変わらないが、小綺麗に整えられているとだいぶ印象も変わったものだとクライブは思った。ウェーブの掛かったくせっ毛が、ストレートに直されているのを見るのは初めてで、とても新鮮な光景だった。ウェーブの金髪も可愛らしくて良かったが、これはこれでまた違った良さがある。まるで深窓の令嬢の様な、楚々とした雰囲気が醸し出されていた。
「あ、ああ。良いんじゃないか？」
クライブはわざと気のない返事を返した、そうでもしないと顔の熱くなるのを誤魔化しきれないからだ。
「そう、良かった」
ネリスは微笑む。まるで花が綻ぶような笑顔。反則級に可愛かったので、クライブはその光景を脳の絶対保護領域に保存しておいた。変われば変わるものだ。クライブがネリスと出逢った頃、彼女はこんな顔をしただろうか？

『在りし日の開闢』

『在りし日の開闢』

――五年前。ＡＷ３１０年。

「クライブ様……。クライブ様。起きてくださいませ。起床のお時間です」

クライブは微睡みの中にいた。ベッドがある種の引力をもって意識と身体を縛り付ける。

あと五分。いや、五分と言わずに後二時間ほどこの温もりに身を委ねていたいものだ。

このまま泥のような安逸の中に溶けてしまいたい。

「……時間に猶予がありません。致し方在りませんね……。失礼致します！」

身体をくるむ高級な羽毛のシーツを無理矢理剥ぎ取られる。

その時点でクライブの意識は現世までサルベージされた。

寝ぼけ眼でこの尊い微睡みを妨げたメイドを見詰める。

「……おはよう。セシリア……」

クライブは茫洋と挨拶を告げた。

「おはようございます、クライブ様」

簡素なメイド服に身を包んだ、少女が微笑む。

年の頃は十五、六に達するかいなか。肩口で切り揃えられた柔らかな黒髪。

黒曜石の瞳は切れ長で、見ようによっては威圧的な印象を与えるかもしれないが、表情はあくまで柔らかく、年相応の愛らしさを失っていないのが絶妙だ。発育の良い胸部は良い具合に自己主張をしている。それでいて、引き締めるべき所は確りと締まっている。

その楚々とした佇まいも、抱擁のような雰囲気も、男性の理想とずる女性像を見事に体現している。
「さぁ、起きてください。朝食の用意ができております。お召し物はここに」
セシリアは綺麗にたたまれた制服一式をベッドの上に置く。
「さあ、いつまでもぼーとなさっているなら、私がお召し替えを済ませてしまいますよ」
「いや、結構だ。下がってくれて構わない」
セシリアは流れるように完璧な動作で、クライブの寝間着を脱がしに掛かるが、クライブは片手を上げてやんわりと制する。
「畏まりました。二度寝したら承知しませんので、そのつもりで」
セシリアが退室すると、クライブはやれやれといった具合に一つ欠伸をし、窓の外の日光に眼を眇めた。セシリアがカーテンを開け放ったため、クライブの自室が光に満ちていた。クライブはあまり飾り気を好まないので、目立った調度品もなく、貴族の部屋としてはかなり質素にまとまっていた。それでも面積は相応に広く、天井も高く手が届かないほど。ここで剣術の仕合を行っても滞りないぐらいだろう。一人で寝るには些か孤独が募る広いベッドに腰掛け、クライブは寝ぼけた頭に朝日を浴びせて、何とか起動を果たしていた。クライブは緩慢な動作で学園の制服に袖を通し、洗面所へと歩き出した。
一通り支度を済ませた後、食堂へと向かう。
絨毯の敷かれた廊下を歩いていると、セシリアが待ち構えていたかのように佇んでいた。
驚くことに、セシリアは先ほどまでのメイド服ではなく、クライブが通う学園の制服を身に纏っている。貴族や著名な資産家の嫡子が通う名門校の制服に、気後れなど微塵も感じさせず袖を通している。その着こなしは見事なもので、クライブよりいくらか様になっているぐらいだった。毎度の事で解ってはいるのだが、クライブは未だに新鮮な驚きを隠し得ない。

セシリアは小走りでクライブに駆け寄り、彼の胸元にその繊手を伸ばした。
「タイが曲がっておいでですよ。……これでよし」
「……ありがとう」
「礼には及びません。さあ、参りましょうか」
クライブはセシリアの背を追い、食堂へと向かった。
テーブルには既にこの屋敷の主が着いていた。年齢は五十に手が届くかといったぐらい。
壮年の男性は物言えぬ存在感を放ちつつ、朝食を取りながらコーヒーを啜っていた。
「おはようございます父上」
「ああ、おはよう、クライブ。セシリアもおはよう」
「おはようございます。トーマス様」
会釈を交わして二人は席に着く。クライブがトーマスに近い上座に、その一つ下座にセシリアが座る。後ろには数人の使用人が控えている。
「最近、オリヴィアの様子はどうかなクライブ？　あの方は執務中全くといって良いほど私情を表に出さないので、私としても計りかねていたのだ。何か、ご心労が重なっているご様子ならば、おまえから支えてやって欲しい。おまえとオリヴィアは婚約を交わした仲だ。私には明かせぬ事柄でも、おまえになら心を開くやもしれん」
「いえ、父上。昔から、自分の方が彼女の世話になってばかりです。彼女は誰にも泣き言を吐きませんからね。全く、自身の不甲斐なさを恥じるばかりです。未だ彼女を支えるに足る器にはなり得ませんだ」
ストーナー家はテネジア王国の貴族階級筆頭だ。その当主たるトーマス・ストーナーは前テネジア王の実弟であり公爵の位を冠している。現在王位は前王の第一子、王女オリヴィアにある。だが、まだ若いこともあり、トーマスが後見人を務めている現状だった。
戦後間もないこともあり、国内の情勢は混迷を極めている。クラ

イブは父の顔に疲労の色を見逃さなかった。貴族が民を導くのは貴顕の責務。クライブはそんな父を誇りに思っていた。だが、クライブは同時に感じてもいた。自分などにそれが務まるのか。
能力一辺倒は凡庸そのものな自分に。身分だけが取り柄と言われてしまえばそれまで。親の七光りと言われれば甘んじて罵られる他ない。無論、毎日を無為に過ごしているわけでもないが、とりとめ何か特別なことに打ち込んでいるわけでもない。平凡そのものの日常。いや、平凡自体がもはや贅沢だろうか。このテネジアと隣国ソレイユは最近まで国家の命運をかけた闘争に明け暮れていた。彼の叔父に当たるテネジア王が暗殺されるまでは。
その間も、父は国のために奔走し、一晩では語りきれないほどの功績を国へ捧げてきた。それと比べて自分はどうだろうか、何も成し遂げていなかったではないか。
「お言葉ですがクライブ様。クライブ様にはクライブ様のすべきことが有るかと存じ上げます。貴方はまだそれを見つけるに至ってはいない様子。そう焦りなさらずとも、追々見えてくる事もあるかと」
セシリアはティーカップを置き、クライブに抱擁的な微笑みを浮かべた。
セシリアの言も尤もだ。焦ったところでクライブはまだ学徒の身。できることは限られている。言い換えてしまえば、自分は無力な子供だ。その事実を認めたくなくて。
「全く、セシリアはクライブに対して優しいな。普段が普段なだけに、私には特異に映ってしまうよ」
トーマスは上品に笑って、セシリアを揶揄した。
「自分でも戸惑って居るぐらいです。もしかしたら、こちらが本当の私なのかも知れませんね」
クライブには二人の会話の真意が計りかねたが、由としておいた。余計な詮索を挟む事はセシリアも望んでいないことなのだろう。クライブはセシリアの素性をよく知らない。ある日、突然トーマスがどこからともなく連れてきた。どこかの貴族の娘が行儀見習いでも

しにきたのかと思ったが、セシリアは使用人に混じりつつ屋敷の仕事をこなし、クライブと共に学園に通うようになった。全く持って訳がわからない。

セシリアの人となりに好意を抱くにつれ、もはや気にはならなくなった案件であった。

自己を肯定することを由としないクライブ。

だが、セシリアは無条件でクライブを認めてしまう。

その事に戸惑いを感じつつも、決して不快に感じることは無かった。

むしろ、その微笑みに安らぎを覚える自分が居ることを自覚していた。

だが、それで良いのだろうか。答えの無い自問自答を繰り返すことで卑徒は前に進むことができるのだろうか。それに帰結は無く、ただ無為の闇が広がっているだけなのではないのか。ならばこの世界に、どうやって光を見いだせばいいのだ。

――俺は。

『トリガーハッピー』

――現在。ＡＷ３１５年。

任務に使用する装備を調えるべく、クライブとネリスはグラネイ基地に戻っていた。

あらかたの準備を済ませ、ハンヴィーの点検も滞りなく終わった。

ふと時計を見ると、まだ時刻はまだ午前を差していた。

任務は午後からなので、まだ時間にはだいぶ余裕があるということだ。

なんら問題ない。一日を平穏無事の内に過ごせるのではないかと、甘い幻想を抱いていたクライブだったのだが。哀しいことに、見過ごせない問題が発生してしまった。

――ネリスが遊び始めた。

何故かクライブとネリスを乗せたハンヴィーは、ただっ広い野外射撃場のど真ん中に停車していた。ここは射撃場と言うより、ロケットランチャーなどの対物兵器の教練を目的とした敷地だ。

現在、先日の襲撃の事後処理の為、首都管区の軍人は絶対的な人手不足に陥っている。

まだ訓練課程が修了していないような新兵達も雑用などの仕事に従事させられていた。

その為、今は傭兵隊の二人の貸し切りになっている。

普段は爆音で騒々しい草むらは、ただその身を風に晒しているだけ。

その光景だけを見れば長閑なものである。

だが、その静寂を掻き乱す存在が、クライブの頭上で騒々しい重低音を奏でていた。

ネリスはハンヴィーの銃架に据え付けられたＭ２重機関銃を連射

し、その辺に設置されていた標的として余生を過ごす退役戦車に鞭を打っていた。装甲の表面で火花が踊る。

そう、事の起こりは、ネリスが訓練施設の倉庫で機関銃弾の弾薬箱を大量に見つけた事だった。それを見たネリスは、いつもの無表情のまま碧眼を爛々と輝かせていた。獲物を目前にした野獣というか、人気の無い玩具店で、ずっと欲しかった玩具を前に万引きを計画する子供というか。とにかく、クライブは妙に生き生きしたネリスを見た覚えがある。

見つかったら確実に営倉行きだが、ネリスは悪魔の誘惑に負けてしまったようだ。ネリスはクライブの制止も聞かずに、弾薬をハンヴィーに積み込み、その足でここまで来る運びとなった。立派な軍紀違反、備品の横領である。ネリスは傭兵隊に着せられたネガティブイメージに対して事ある毎に腹を立てていたが、その一因を自分が担っているということをいい加減自覚した方が良い。

ベルトリンクされた巨大な弾丸が次々とＭ２重機関銃に飲み込まれていく。発砲の振動で車体が小刻みに揺れる。長大なバレルの先から硝煙がこれでもかと言うほど吹き出している。ものすごく煙たい。下手したらハンヴィーの窓に火薬の燃えかすがこびり付いて視界を遮断してしまうのではないのかと思うほどだ。そんな事を気にするクライブを尻目に、ネリスは全く気にする様子もなく、淡々とＭ２の銃把を握り、押し金に当てた親指に力を込めている。

表情こそいつも通りの無表情だが、どう見てもネリスは愉しんでいる。クライブにはそれが解った。今にも歌い出しそうな陽気さで重機関銃を撃ちまくり、その暴力的な振動に酔いしれている。ハンヴィーの車内はルーフから降ってくる五十口径弾の太い空薬莢のせいで足の踏み場もないぐらいだった。ある程度ぶっ放したところで、射撃が中断される。ネリスはＭ２の重たいスライドハンドルを二度引いた。軽快な作動音を響かせて遊底が前後する。良く整備されているという証拠だ。

「クライブ！　リロード♪　リロード♪」

屋根の上に顔を出しているネリスがハミングした声色で命令してくる。
「全く、仕方ねぇな！」
クライブは車内から重たい五十口径弾の弾薬箱を持ち出して屋根の上に飛び乗る。
空っぽになった弾薬箱を放り捨てて、新しい方を重機関銃にセットしてやった。
弾薬箱を開いて中身のベルトリンクを引きずり出す。もうもうと熱を帯びたＭ２のフィードカバーを開き、機関部にベルトを噛ませる。カバーを閉じて準備完了である。
ネリスがスライドハンドルを二回引くと、再び重機関銃は鎌首をもたげた。
「高い弾薬をどばどば撃ちやがって。ま、良いけどさぁ。自腹じゃないし」
訓練施設から横領してきた品物なので、クライブの懐は痛くもかゆくもならない。
ただ、個人でこんな事やろうとしたら、金がいくらあっても足りない。
この巨大な弾丸一発の値段が、大体クライブの一日の食費に相当する。
ネリスは機関銃の中で最強に属する、非常に高価な弾丸を毎分五百発以上の連射サイクルでばらまいている。指切りにもあまり遠慮が見受けられない。標的にされている退役戦車の側面装甲は、ネリスがこの遊びを開始する前までは綺麗なものだったのだが、短時間で見るも無惨なスクラップと化しつつある。
――どどど、どどどどど、どどど、どどど、どどどどどどどどどどどどど。
拳銃やアサルトライフルの乾いた発砲音とは段違いの、遠雷のような重低音。滝のように流れ落ちる空薬莢。もうもうと立ち上がる熱気と硝煙と土煙。

ネリスはただひたすらに暴力的なソロコンサートを続けている。クライブは重機関銃の耐久性を心配して、時折バケツに汲んできた水をかけてやっていた。五十口径弾の連続発射に耐えうる重厚なヘヴィバレルが、焼け石に水をかけたときの様相を呈している。

これは後で銃身交換する羽目になるだろうな、とクライブはまた懸案事項を発見してしまった。この重機関銃は銃身交換の際、非常に手間が掛かる。

「全く……」

だんだんとクライブはウズウズしてきた。あまりにネリスが楽しそうにフルオート射撃するものだから、クライブにも思い切りブリンキングしたいという衝動が生まれてくる。

クライブは傍らに眼をやる。先日の戦闘で機関部を破壊されてしまった彼の愛銃――Ｍ４　ＣＱＢ－Ｒは、奇妙な姿となってそこに鎮座していた。クライブは先ほど部品を調達して、修理という名の改造を施していたのだ。

全体的に見た目はあまり変わらないが、やはり全軍で使用されている有名な銃であるため、細部が異なるだけでものすごく目立つ。機関部からバレルにかけての部分を丸ごと交換し、普通は標準的な五・五六ミリ弾を使用するところを、ネリスのサブマシンガン――Ｐ９０に使われている五・七ミリ弾を無理矢理使用できるようにした代物である。

Ｐ９０に使われているのと同じマガジンが銃身と並行して装着されている。本来Ｍ４マガジンが刺さる筈の部分から、排莢受けバッグが垂れ下がってる。

気がつくとネリスは射撃を中断して、クライブが持ち出したそのアサルトライフル擬きを注視していた。

「どうだ？　かっこいいだろ！　Ｍ４　ＣＱＢ－Ｒ改めＡＲ５７だ。ずっと使ってみたかったんだよなこれ」

クライブは生まれ変わった愛銃を自慢げに掲げて見せた。

「ほんと、すごい改造よねそれ。もはや別物じゃない」
「まあ、アッパーを交換しただけなんだがな。これでネリスのＰ９０とマガジンが共用できる」
「何、私とペアルックでも気取ってみたかったの？」
ネリスは冗談めかして言った。
「そう言うことにしておいてくれ」
マガジンが共用できると言うことは、戦闘時に少なからずアドヴァンテージがある。
「でも、さすがに遠射性能は低下するでしょうね。まあ、元から近接戦闘仕様だったから、あんまり問題はないか。他にあるとしたら、フロントヘヴィにならない？」
「いや、フォアグリップがあるからあまり気にはならないな。やっぱり五・七ミリ弾は反動が殆ど無いから制御しやすい」
クライブはＡＲ５７を構え、ダッドサイトに眼を通した。
ネリスが先ほどまで撃ち込んでいた戦車に照準。トリガーを引き切って心置きなくフルバースト。五・五六ミリ弾を使っていたときと比べると明らかにおとなしい。反動が殆ど無い。百メートルほど先にある戦車の砲塔部に向かって着弾が綺麗に収束する。
マガジン容量が三十発から五十発に増えたのも嬉しい。前と同じ連射サイクルなので、フルオートを撃ちきるまでに掛かる時間が延びている。短縮されて、フラッシュハイダーも取り払われたバレルが加熱する。シースルーマガジンは次々と目減りしていき、割と長い時間をかけて中身を空にした。
クライブの射撃にネリスは重機関銃で合いの手を入れる。フィフティキャリバーの重厚な大音声が、ＡＲ５７の乾いた発砲音を掻き消す。
クライブは排莢受けバッグのチャックを開放し、空薬莢を足下に捨てる。マガジンを新しい物に交換。負けじとフルオートでネリスに追随する。
ネリスは重機関銃を左右に振る。着弾が散らばる。戦車の無限軌

道が弾け飛ぶ。
物々しい二重奏が加速して行く。二人共とても楽しそうに各々の火器を連射する。
そう、銃口の先に人さえいなければ、射撃とはこんなにも楽しいモノである。
「ええい！　じれったい！」
先ほどから散々銃弾の雨霰を撃ち込んでいるのにも関わらず、戦車はびくともしない。
ダメージは与えているはずだが、明確な破壊には至らない。クライブはついにしびれを切らした。車内からロケットランチャーを引っ張り出す。コンテナを引き出して肩に乗せる。
「ちょっと、クライブ？！」
流石のネリスもクライブの行動は予期していなかったのか、驚いて重機関銃の連射が止まる。
「喰らえ！」
発射ボタンを押し込む。弾体が射出され、標的の戦車へと煙を撒き散らしながら一直線に向かっていく。着弾と同時に爆炎と小型のキノコ雲が立ち上がる。爆発の衝撃が二人の元まで届く。ネリスは思わず屋根から出していた上半身を車内へと引っ込めた。
爆発の余韻が去ると、戦車の土手っ腹に穴が空いていた。見るも無残な姿である。
「クライブ？　あなた最近セシリアっぽくなってきてない？」
恐る恐る屋根から顔を出したネリスが非難めいた声を上げる。
「そうかもな」
に、と屈託無く笑うクライブ。
二人は顔を突き合わせて、お互いに笑みを零した。
ひとしきり笑うと、クライブは広いボンネットの上に身体を投げ出した。
澄み切った青空を眺める。ものすごい速さで雲が流れていく。
「ああ、面白れぇ」

クライブは一息吐いて、硝煙臭い空気を胸一杯に吸い込んだ。
「――で、ネリス。俺に何か言うこと無いのか？」
妙に真面目な顔でネリスに問いかけるクライブ。
「何の事？」
独碧眼をしばたたかせてネリスは疑問符を浮かべる。
「とぼけるなって」
クライブは小さく息を吐いて笑みを零す。
「……何で解ったの」
そこでネリスは観念した。全く、隠し事のできない相棒である。
隠しておきたかったのに。自分の弱いところなんて。
「そりゃ、解るさ。今みたいにトリガーに依存して銃を撃ちまくっている時、おまえは決まって何か悩みを抱えている」
クライブは自信ありげに持論を展開した。
「クライブには敵わないわね」
言われてみると、その通りだった。ネリスは何か悲しいことやつらいことがあった時、決まって銃に依存していた。弱さを彩るための鋼。銃とは、彼女に取って力の象徴だった。それと自己を同一化することにより、ネリスは弱い自分を必死になって取り繕うとしていたのだ。
ネリスはハンヴィーの屋根から飛び降りて、ボンネットの上に居たクライブの胸にダイブする。
「おうっ！？」
クライブは突然の衝撃に奇声を上げる。勢いよく胸にのし掛かってきたため、肺から空気が漏れる。ネリスはクライブの胸に顔を埋めたまま静かになった。
「……ネリス？」
硬直した両手のやり場に困るクライブ。このまま抱きしめてしまって良いモノだろうか。
「あのね、恐いの。私」
ネリスはふつふつと、思いの丈を打ち明ける。

「自分が自分じゃなくなってしまうような。そんな悪夢を見るの。私の中で何か得体の知れないモノが蠢いている。それはいつか芽吹いて、私を何か別のモノに変えてしまうかも知れない。そう考えたら恐ろしくて」
ネリスはその小さな身体を震わせて、独りで耐えていた恐怖を相棒に吐露する。
「だからね、クライブ」
ネリスはクライブの手を取る。
「もし、私が、私じゃ無くなったら」
クライブの手のひらを開かせて、指の親指と人差し指だけを残したまま握らせる。
「私を、殺して」
銃の形を模したクライブの手を自分の額に押しつけるネリス。そして、今にも消え入ってしまいそうな笑顔を浮かべた。
「――やなこった」
クライブは否定した。ネリスの願いを。自分のエゴで否定する。それは救いを求める自殺志願者に、倫理を説いて偽善を押しつけるような行為に等しい。だがクライブの口は自然に動いていた。自分にネリスを害することはできないのだと。たとえ、それをネリスが望んでいたとしてもだ。
「……意地悪」
ネリスはクライブの胸の中で拗ねたような声を上げる。
「何とでも言え」
クライブはネリスの額に突き付けていた手で、ネリスの頭をかいぐりまわした。

『硝煙の死神』

――五年前。ＡＷ３１０年。

テネジア王都。

世界一の昌盛を誇る都市にも、必ず暗部というモノが存在する。

郊外に設けられた貧民街。急ごしらえの家屋が、寄り添うように、傷を舐め合うようにして軒を連ねている。住民の殆どは前大戦で国を追われた流浪の民達だった。

あの戦争の渦中、周辺に名を連ねていた小国の多くが没した。

流民の殆どはヴィスタ共和国の出身だ。

当時、テネジア、ソレイユに次いで、強大な国力を誇っていたヴィスタ共和国。

ある家屋の軒先に、薄汚れた旗が掲げられていた。それは、眺望する眼を象った、今は亡きヴィスタ共和国の国旗だった。人々は昔日の栄華に縋り付いて日々を生きていたのだ。

Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏ．の惨劇で、一晩にして愛すべき祖国を失った数億の人々。彼等は一体何を思って、敵国であるテネジアまで逃れてきたのだろうか。亡国の民となった人々は、未だに満足な援助も得られないまま。明日に希望を抱くことも出来ずに、夜毎床に就いていた。

路地裏を数人の男達が走り抜けようとしていた。

その手に手に、錆の浮いた銃器を携えている。

だが、武器を持って徒党を組んでいる者達に付きものな、油断じみた余裕は一切感じられない。まるで、悪鬼に睨まれたかのように。誰もがその表情に恐怖を刻み込んでいた。

路地に面していた家屋の住人達は、皆一様の動作を採る。

その者達を庇って、家に招き入れることもせず、恐れおののいた

様な表情で門戸を固く閉ざした。そして、まるで借金の取り立てが来たときのように、知らぬ存ぜぬ居留守を装う。
武装した男達はその様子を見て、忌々しげに舌打ちを一つ。
早鐘を打つ心臓をなだめる余裕も無く、辺りに銃口を向けながら肩で息を吐いた。
辺りはまるで死に絶えたかのように静まりかえっている。
普段は残飯をあさる鴉や野良猫が目障りなほど闊歩しているというのに。
この場においては、虫けら一匹すら見つけることは出来なかった。
まるで、空間が現世から隔離されてしまったかのような。
そんな錯覚に陥ってしまいそうになる。
埃臭い乾いた風が駆け抜けていく。男達は砂が眼に入るのも厭わず、開け放った瞳で警戒を続ける。もし、瞬き一つでもしてしまえば、次に見る景色がこの世のものでは無いかも知れないからだ。それがまた男達の恐怖を加速させていく。何か物音一つでもあれば、その瞬間に全員が猛り狂って引金を引いてしまいそうな程、張り詰めた空気が充満していく。
ふと気がつくと、男達の中の一人が倒れた。
どうしたのかと眼をこらすと、その男は頭部が使い物にならなくなっていた。
地面に紅い水溜まりが形成される。ほこりっぽい不毛の土地が潤いを帯びた。
「ひぃ！」
最初に気がついた誰かが悲鳴を上げる。その方向を指差すまでもなく銃を構えた。
漆黒の人影が家屋の屋根を伝って疾駆してくる。その姿は、黒い外套を羽織っているため良く解らない。小柄な人影は、まるで鎌を振りかざす死神のような存在感を放っている。
手には特異な形状をした小火器が握られていた。法務執行者にのみ所持が許可される、小型高火力の凶悪なサブマシンガン――Ｐ９

0だ。
黒い外套が風にあおられて棚引く。顔を覆っていたフードが後方に流れた。
まるで人の物とは思えない、幻想的な雰囲気を纏った金髪が風と同化してなびく。綻ぶ花のように、空間を彩る美貌。まるで粒子が放出されているかのようだ。
凄烈に、鮮やかに、少女はこの地獄に舞い降りた。――碧い双眸の、美しい少女だった。
男達の恐怖が最高潮に達する。己の命有ることを、心から呪う。
「硝煙の死神――！」
彼等は口々に、その絶望を呟く。
怨嗟の声と共に、高らかに謳われる、忌まわしき二つ名。
彼等の同胞――ヴィスタ系反テネジア武装集団を連日連夜、悪鬼の如く鏖殺して回っているという少女兵。誰もが畏怖と畏敬を込めて、声高にその名を叫ぶ。
「硝煙の死神――ネリス・カラシニコヴァぁぁ〝あ〟ぁ！」
皆一様に弾数を考えもせず、ネリスに向けて銃を乱射し始める。
ネリスはその哀れな集団を無感動に見据えていた。
そう、彼女にとって、これは狩りにすらなりえないのだ。
訓練場で慣れ親しんだ標的射撃と何ら変わりはない。
男達の放つ無秩序な弾幕は、意識して回避行動をとるまでも無かった。
強い季節風が吹き荒れるたびに、弾丸の軌道が若干だが逸れている。
距離を鑑みればたいした影響は無いはずだが、男達は狂乱している上に、フルオートを上手く制御できていない。総じて弾幕はネリスに擦ることさえ叶わない。
そもそも、それがよく訓練された兵士達でも、ネリスを銃口の先に捕らえられるかどうか怪しいものだったが。
風と一体化してしまったかのような速度で、ネリスは男達との相

対距離を詰める。
回転する足を止めることなく、低い姿勢で疾駆したままＰ９０を構える。
軽く狙いを定めて指切り三回。
抜けるような清んだ発砲音が、男達の奏でる無様な旋律を否定する。
それだけで敵三人が物言わぬ骸と化した。
――つまらない。満たされない。
このまま高所から狙い撃ちにして、路地裏を紅い水溜まりにしても良かったが。
――それでは面白くない。
ネリスは屋根から飛び降りて、集団の行き先に立ち塞がる。舞い上がった外套の裾が落ち着くよりも早く態勢を整えた。ネリスは哀れなテロリスト達を視界に納めた。彼女の薄く閉じられた双眸に、殺意は見受けられない。何処までも透明で、絶望にも似た穏やかさをたたえている。他人を屠ることに何ら感慨を抱くことがない。そんな眼だった。
「よくも仲間をぉ〝ぉ〝ぉ――！」
無謀にも蛮勇を奮い立たせる者がまだ残っていた。逃げればよいものを。たとえ逃げても、それは束の間の延命に過ぎないが。
一人が大振りのナイフを構え、ネリスに向けて斬りかかって来る。だが、その動きは洗練されているとは言い難い。
「遅い」
ネリスは欠伸を堪えるように呟いて、襲いかかってくる男の手を絡め取る。
ナイフを握る手を捻り、それを男の胸に突き立ててやる。男はまるで悪魔を目の当たりにした時ような表情をし、自分の得物で胸を刺され、もがき苦しんで倒れた。
ネリスはその頭部に、Ｐ９０の銃口を突き立てて無造作に引金を引く。

また一つ、命が弾けて華を散らした。
大の男が、一秒と掛からずに屠殺された。その場に狂気と恐怖が充ち満ちる。加速して行くそれを止める術はない。
返り血を浴びた黒い外套を翻し、ネリスは唖然としている男達を流し見た。
「さあ、次は誰が相手なの？　私と踊ってはくれませんの？」
ネリスは繊細な指先で、自分の金髪を弄りながら諧謔を呟く。半分ほど閉じられた、眠たげな瞳で、まだ戦闘能力を失っていないテロリスト達を見詰める。
その視線に一欠片の殺気もこもっていないが、それだけで男達は脂汗を滲ませて、笑い出す足腰をなだめるので必死だった。一人が銃を構えてネリスに照準する。流石にこの距離では猿でも当ててくる。回避しないわけにもいかない。
ネリスは片足を軸にして独楽のように回転。そんな動作一つとっても、人外を彷彿させる速度だった。男は風に舞う外套に惑わされる。視覚が翻弄されて上手く照準が定まらない。ネリスは踊るようにステップを踏み、巧妙に自分の身体を射線からずらす。
距離を詰め、まるでついでと言わんばかりに、片手で突き出したＰ９０を発砲。
身体の回転に合わせて腕が微動する度、正確な一点射で男達の頭が次々に爆ぜていく。
空薬莢が直接地面へと落ちる度、紅い華が咲き誇る。
人家の壁に前衛的なアートが描かれていく。それはとても美しい。なにせ、数人の人間が己の命で彩ったのだから、たとえそれが下衆なテロリストのものだったとしても、その価値は揺らぐことない。
「この化物がぁ〝ぁ〝ぁ――！」
男が手榴弾を取り出した。だが、よほど恐慌してしまっていたのか、手が震えて上手く安全ピンを引き抜くことが出来ずにいた。
ネリスは羽織っていた外套をその男に投げつける。
それを頭から被ってしまった男は、払いのけようと一瞬あがくが、

それは叶わなかった。
ネリスの投擲したダガーが男の喉笛を貫通したのだ。
倒れようとしていたその男の骸を掴み起こす。喉から血濡れたダガーを引き抜く。自分より幾分か体積が大きいそれの陰に身を隠した。
近くでネリスに照準していた男が狼狽える。死体とはいえ、仲間を盾にとられた事に動揺してしまっていた。無論、それは直接死に繋がる。
ネリスはその死体に蹴りを入れ、銃を構えた男に叩き返した。
その男は銃で両手を塞がれていたため、仲間を抱き止める事が叶わず、そのまま体勢を崩して後方に倒れてしまった。ネリスは慌てふためくその男の胸部と頭部に、五・七ミリ弾を二発ずつ撃ち込んで息の根を止めた。銃声も反動も、拍子抜けな程軽い。ネリスの足取りも軽い。まるで舞い踊る羽根のようだ。もはや、その殺戮劇は芸術的で、見る者の心を激しく打った。だが、観客は瞬く間に減っていく。それが少し残念でならない。
「動くなぁ〝ぁ〝ぁ！　動いたらこいつを起爆させる！」
最後の一人になってしまった、リーダー格の男が恐慌状態に陥りつつ叫ぶ。
その男はよく見ると、腰回りに大量の軍用爆薬を隠し持っていた。手には起爆装置らしき物が握られている。
ネリスは構うことなく男に照準していた。が、その手が一瞬止まる。いつもの無表情のままだが、碧眼が少しだけその光を増していた。
「……」
「へへへ、賢い選択だ。こいつが起爆すればここ一帯は綺麗に消し飛ぶ！　いくら硝煙の死神とはいえ、罪も無い一般人に被害を出すのは渋るようだな！」
――馬鹿かこいつは。ネリスは敵の浅慮に呆れかえった。手が止まったのはその為だ。

今更、市民に被害を出したところで、ネリスは心を痛めたりなどはしない。
そもそも、罪の有無で人の生き死にを決めるのは、神にのみ許された行為。
烏滸がましい。人が人を裁くなどという行為がどれだけ愚かしいことか。
ネリスは唯、殺すだけだ。罪も罰も、善も悪も、初めからそこには無い。
それが彼女の存在意義だからだ。彼女はそれしか知らないから。
ネリスは鋼だった。自身が一挺の軍用銃だった。銃とは、いくらオブラートに包んで取り繕ったところで。いくら聞こえの良い理想で塗り固めたところで。
――所詮は人殺しの道具だ。
それ以上でも、それ以下でもないのだから。ならば、ネリスは自分の使命を果たすだけだ。道具の本懐とは、その用途を忠実に遂行する事。
ネリスは硝子のような碧の双眸で男を睥睨して、無感動にトリガーを引く。
たとえ、それが高性能爆薬の起爆を誘発するものだったとしても構わない。
爆発に巻き込まれて、この肢体が四散しようと構わない。
それで、自分の存在意義が証明できるなら、それで構わないのだ。
その時、ネリスは鋭い風切り音を聞いた。
起爆装置を握った男の腕が弾け飛んだ。
まるで、予め男の腕に仕掛けてあった時限爆弾が、たった今起爆したかのようだった。
肘から先を失った男は、何が起こったのか解らない、といった表情を浮かべ、状況を把握しかねていた。ネリスはその隙を突いて、目にも止まらぬ早さで肉薄し、男の首根っこを掴みつつ地面に押し倒した。

「ひぃぃぃぃ――！」
ようやく自分の置かれている状況を把握した男が悲鳴を上げる。
吹き飛ばされた男の腕が近くに転がっている。
破断面からリズミカルに血流を噴き出していた。
男は痛みに耐えかねて暴れだそうとするが、ネリスが首根っこを強く締め上げたまま、Ｐ９０を額に突き付けている為それも叶わない。
「余計なことしてくれたわね――セシリア」
ネリスは通信機に向かって怒気を孕んだ台詞を吐く。
弾頭が飛んできた方向を辿っていくと、遠方に背の高い鉄塔が建っているのに気がついた。距離にして二キロ以上は離れている。
ネリスの超人的な視力は、その鉄塔の高所で、長大な狙撃銃を構える人影を目視した。
『窮地を助けて貰っておいて、その言いぐさですか？』
飄々と応答するセシリア。
「私は援護不要と予め伝えた筈なんだけど」
ネリスの返す言葉はいつも通り、自動人形の様に事務的な物だった。
だが、それには少なからず苛立ちが込められているのをセシリアは感じ取った。
『全く……。私がこの糞重たい銃を背負ってここまで登るのにどれだけ苦労した事か』
溜息を吐きつつぼやく。セシリアは足場が殆ど無い鉄塔の上に、頑丈なワイヤーを張り巡らせ、それで身体と銃を安定させて狙撃を行っていた。彼女が狙撃に使用した銃はＮＴＷ２０。使用弾薬は十四・五ミリ。全長約二メートル。重量約三十キロの大型対物ライフルだ。それを担いだまま、梯子を伝って地上二十メートルの高所まで登るのは、生半可な苦労ではなかっただろう。
「おおかた、その銃の試し撃ちをしたかっただけでしょう？　というか、貴女は射撃苦手とか言ってなかった？」

『中距離の機動射撃は苦手だけど、長距離定点狙撃は大の得意でしてね』
「そう」
どうでも良いと言う意味を込めての生返事。
「頼む！　助けてくれぇ〝ぇ〝ぇ――！　何でも話す！　だから命だけは！」
ネリスは再び喉から悲鳴を上げて、恐怖に濁った眼を向けてくる男を見据える。
『ああ、情報収集の為、一人は殺さずに逮捕しろとのお達しだ――』
セシリアは男に対して容赦する旨を伝えるが。
ネリスはまるで呼吸をするかの如く、自然にトリガーを引いた。
抵抗できない相手に対しての、無慈悲な零距離射撃。
中枢を失った肉体はびくびくと跳ねた後、物言わぬ骸と化した。
「――おやすみなさい」
ネリスは死者の目蓋を閉じてやる。
『お前、人の話を聞いていなかったのか？！　何を血迷ったことを！』
「黙って」
怒鳴り声を上げるセシリアをぴしゃりと遮り、ネリスは眼を閉じて意識を集中する。死体の額に当てたネリスの手が淡い光を放つ。
それは、死者を冒涜する行為。死者の記憶を勝手に掘り起こしていく。墓荒らしと何ら相違ないが、死者はそれに逆らうことは出来ない。これが『硝煙の死神』の由来の一つだ。
彼女は生者に対しても、死者に対しても、絶対的な力を行使する。
やがて、ネリスは静かに眼を開けた。
「彼等のネストの位置情報が掴めたわ。そして彼等の首脳が集まる日時もね」
『お前、だからと言って、殺す事は無かっただろう！』
セシリアが噛み付く、ネリスのやり方は肯定できなかった。
「生者は嘘吐きだから」

ネリスはそう吐き捨てて踵を返す。
死者は枷となる肉体を持たない。故に無防備で、無垢で、正直だ。
『お前は、自暴自棄になった上、子供っぽい八つ当たりを振りかざしているに過ぎない』
セシリアの押し殺した声が耳朶を叩く。
それはじわじわと浸透して、ネリスの閉ざされた心まで届いた。
「――そうよ」
是と肯定してネリスは睫を伏せる。
もう、自分にはこれしか残っていない。
――ラルフ・アーセックが去った今となっては。
ネリスは孤高の道を一人歩み続けていた。一歩一歩、誰かの屍を踏みにじって。
自分の肉体が錆付いて朽ち果てる、その日を夢見て。

『罪と罰』

――現在。ＡＷ３１５年。

テネジア王都。

王宮前広場は、喚声と怨嗟で満ちあふれていた。

普段は公園として解放されている広場。普段は閑静な憩いの場となっている場所だが、今は大衆がそこに雪崩れ込んでいて、人間が居ない空間を探すのが困難になるほどの盛況ぶりだった。こうしてテネジア国民が王宮前に集うのは、五年前の終戦時――オリヴィア王女の戴冠式以来だ。警備の兵士達は沸き返る民衆を抑えるので必死だった。

民衆達のまるで悲鳴のような呼号は、王宮前のある一点に対して殺到していた。

全身を縛られ、身動き一つ取れない程に拘束された、見目麗しい少女達がそこに居た。

人数にして約五十人は下らないだろう。まだあどけなさを色濃く残す少女達は、皆一様に十字架へ磔られていた。荘厳な造りの王宮を背景に、十字架を背負った少女達は民衆の怨嗟を浴びる。

殺せ、早くそいつらを殺してしまえ。まるで地獄のそこから響いてくるような、怒りと悲しみを多分に含んだ音の波。もはやそれが男の物か女の物かも解らない叫声の数々。

磔にされた少女達は眼に眼に涙を湛えて泣き喚く。

聞いている人間が、罪悪感に苛まれてしまいそうな命乞いの数々。鈴を転がすような幼い声が漏れるであろうその口で、喉が張り裂けんばかりに噎び泣く。

少女達は口々に死の恐怖を奏でて慈悲を希うが、もはや聞く耳を持つ人間などそこには皆無だった。

少女達の目前には、物言わぬ黒衣の兵士達が整列していた。全員がその身の左側に銃を携えている。先日の王都襲撃事件に於いて最大の功労者とされている、ブラックナイツと傭兵隊の面々だった。
白の正装を身に纏ったオリヴィア王女が中心に立ち、民衆に向けて何か読み上げている。
それは少女達の罪状だった。だが、高らかに唱えた断罪は、民衆の怒声に掻き消されてしまい、もはや聴くものは誰も居ない。オリヴィアはそんな事は気にもとめずに、少女達に向き直る。オリヴィアは腰の後ろに付けたホルスターからリボルバーを抜く。
それは白銀の輝きを太陽の下に晒す。世界最強の威力を誇るマグナムリボルバーＭ５００。
それを天頂に向けて掲げた後、目前の少女に照準する。オリヴィアの細い腕がピンと張り詰る。巨大な銃口が、眼を見開いたまま首を左右に振る少女を睨み付けた。猿ぐつわを噛んでいない少女の口からは、もはや意味を成さない音が漏れ続ける。
やめて、やめて、死にたくない、殺さないで。お願いだから、死にたくない。
恐怖のあまり失禁してしまったのか、股間部分がじわりと湿り始めていた。
オリヴィアは親指でＭ５００の撃鉄を起こす。五連発シリンダーが回転し、激発位置で固定される。それを合図に、処刑執行を受け持つ黒衣の兵士達が次々に銃を構えた。兵士達の顔からは表情が消えているが、皆一様にトリガープルの重さに辟易していた。少女達の罪は、死を持ってしても償いきれるかどうか不安な代物である。だが、少女達の生い立ちを知る兵士達は、処刑を完全に肯定することが出来ずにいた。理性では解っているが、感情が後ろ髪を引く。
それでも、オリヴィアは公務に私情を持ち込むような愚かしい王ではない。
国の事を第一に考え、時には自ら銃を執ることも厭わない高潔な女王だった。故に彼女を慕う臣民は数多い。

オリヴィアはシングルアクションで、ストロークの短くなったトリガーを引ききる。
撃鉄が雷管を叩き起こし、推進薬に着火して高グレインの五十口径弾を加速させる。
銃身内で多大な活力を得た弾丸は、コンペンセイターから大量の延焼炎を噴き上げて射出される。弾頭は少女の胸部でその暴力を惜しむことなく解放して爆ぜる。胸骨を意にも介さずに砕き、心臓を木っ端微塵に撃ち抜く。嘗て一人の人間を構成していた肉片を四散させて、少女は痛みを感じる事すらも叶わずに昇天した。
少し遅れて、幾多の銃声と甲高い断末魔がオリヴィアの初弾に追随する。
少女一人に対して三人の兵士が発砲する。少女達の美しい肢体は、たちまち命を内包しない醜悪な肉塊と化していく。
乾いた銃声と、涙に湿気った断末魔と、狂々と熱を帯びた民衆の喚声が奏でる処刑交響曲。それはものの三十秒足らずで終演を向かえ、後には寒々とした死屍累々の光景が残された。

「後味が悪い」
「右に同じく」
「左に同じく」
セシリアのつぶやきに対して、挙手して同意を表すクライブとエドワーズ。
王都襲撃事件の実行犯処刑を終えた後、ブラックナイツと傭兵隊は束の間の休息を与えられていた。それでも、あと一時間もしたら彼等はまた任務に戻らなければならない。襲撃事件の事後処理が山ほど残っているのだ。首都機能の復興と治安維持は軍部に課せられた急務だった。
だが、彼等は移動する気も起きず、未だに王宮前の公園で無為に時間を過ごしていた。そこはすり鉢状の広場で、中心にある噴水に

向かって土地が窪んでいる。昇降が可能なように、微妙な段差が全方位に敷いてあった。周囲からは目に付きにくいそんな場所で、ネリス、クライブ、セシリア、エドワーズの四人は、何となく互いに身を寄せて段差に腰掛けていた。
「彼女達が今回の事件の実行犯で、軍と民間人に対して夥しい被害を出したのは事実だ」
だが、とセシリアは溜息を吐いて、膝の上で頬杖を突く。照準越しに覗いた、彼女達の澄んだ瞳を思い出す。恐怖と絶望に見開かれたそれは、自らの罪を自覚しているとは思えなかった。
「彼女達の無実を訴えるわけではありませんが、問答無用で公開銃殺刑というのも、なんだか納得のいく物ではありませんね」
自分の掌をじっと見詰めるエドワーズ。処刑に参加した兵士達の銃には、三人に二人の割合で空砲が仕込まれていた。三人一組で一人の処刑を担当する。兵士達が罪悪感を持たないようにと言う、慰めにもならないような配慮だった。当然、少しでも銃に触れたことがある者ならば、発射時の手応えで実包か空砲かの区別など容易につく。エドワーズの銃に込められた弾丸は紛れも無い実包であった。剣とは違って人を貫いたときの手応えが無いはずなのに、あどけない少女の柔らかい頭蓋を撃ち抜く感覚が嫌に鮮明に残っている。
「実行犯を民衆の前に引っ立てて、血祭りに上げることにより、民衆達の怒りを上手く発散させる策略だろうな。こうすることにより、敵の実態が掴めていない事を上手く誤魔化せる。総ては大義も誇りも失ったテロリストの仕業として民衆に納得させ、事態の沈静化を図る。これがオリヴィア女王陛下の政治手腕だ。これは本来、王として賞賛に値する物だ」
クライブは幼い頃からオリヴィアをよく知っていた。彼女は自分の立場を良く理解し、常日頃に滅私で行動する事を旨としていた。だが、オリヴィアは本来とても優しい性格だ。女王という仮面の下の素顔は、危ういほどの慈しみに満ちていることをクライブは知っている。自分の一挙手一投足に人の命が懸かっている事に対して、

酷く心を痛めているのだろう。
「しかし、彼女達は人工少女だ。その重さも知らずに銃を執り、命令されるがままに戦った。善も悪も彼女達には関係なかったはず。存在意義を果たすための行動だ。唯、そこには罪が存在していた。――銃に罪を問うのは無意味だと思うのだがな」
セシリアは独りごちる。自分が何を言いたいのか良く解らなかった。セシリアは兵士だ。女王の命に依り人を屠る。いわば女王の剣だ。だが、生じた罪や責任総てを女王陛下になすりつける気は毛頭無い。武器としての自分を認めていようと、様々な感情や矜持がそれを邪魔する。やはり、セシリアは何処まで行っても『人間』だった。『少女』には到底なりきれる物ではないな、と彼女は自嘲気味に微笑んだ。だが、少女や天使とは違う、人間には人間なりの美しさと強さがあるということを信じていた。セシリアはそれを追い求めていこうと決意していた。たとえ無様に地べタを這いずり回ろうと、泥と血と罪に塗れて生き続ける。それでこそ人間は美しいのだと。
「そうですね、銃に罪はありません。そして、人の形をしたモノが人間であるとも限りませんしね。――だけど、それでも。そう簡単に納得できる話でもないですよ。……所で、ネリスさんは先ほどから何をしてるのですか？」
エドワーズは訝しげにネリスを見た。三人のやりとりを意にも介さず、明後日の方を向いて小鳥と戯れていたネリス。眠たげに伏せがちな睫毛と、憂いを帯びた碧眼の醸し出す白痴美に、誰もが視線を奪われてしまいそうだ。
「ああ、エドワーズ。お前はそんなおぞましいモノを見てはいけないよ」
セシリアはエドワーズの肩を抱き寄せる。セシリアの豊かな胸が肩に触れる。エドワーズは赤面しつつもされるがままだった。
ネリスが掌で弄んでいる小鳥は、先ほど処刑された少女の魂だった。

「本当に綺麗……。まるで、生まれる前の赤子みたいに純粋で無垢。……そして、空虚」
ネリスは陶酔しているのか、悲歎しているのか区別の付かない溜息を吐いた。
結局の所、この魂の記憶を探ったところで、敵情は一切解らなかった。
「可愛そうに。地上に墜とされたばかりに、こんなに痛くてつらい思いをして。だけど、まだあなたの翼は折れていないわ。さぁ、お逝きなさい。何時までもこんな所に居ては駄目よ」
肉体から解き放たれて自由になった魂が、天頂に向かって羽ばたいて逝く。それを見送った後、ネリスは三人に向き直って、憮然と口を開いた。
「この世界には善も悪も無いわ。それでも、罪と罰は確かに存在する」
ネリスは言い放つ。少女達の処刑に罪悪感を覚える事は無粋だとでも言いたげに。
善悪で人の生き死にを決めること自体が烏滸がましいことなのだと。
だが、全ての生物は在るべくして在るしかない。
それ以外に為す術はない。そこに在るのが罪と罰だけだったとしても。
「そうだな。だからこそ、ヒトは救いを求めて足掻くんだよ。それはそれはみっともなく」
セシリアはネリスの言の続きを紡ぐ。クライブとエドワーズが肯く。
「――そうね」
それを肯定する事が出来ても、それを佳しとすることは出来ない。
ネリスは――そう、思った。
(だって、それじゃ、哀しすぎるじゃない……ヒトは)
ネリスはおもむろに、ホルスターから拳銃を抜いた。恨めしい程

燦々と輝く太陽に眼を眇めて、青空に銃口を向ける。九ミリパラベラムの射程では、届きそうにもなかった。

「もしも、この下界に神が在るならば、それに銃を向ける事もやぶさかではないわ」

『傭兵隊司令』

――五年前。ＡＷ３１０年。

『――セシリア・ブラウニング。ネリス・カラシニコヴァ両名出頭致しました』

「入りたまえ」

グラネイ基地。高級士官室の前に立ったネリスとセシリアは、珍しいことに軍の制服を着込んでいた。いつもは野戦服にばかりお世話になっているため、ネリスは窮屈な礼服にやや落ち着かない気分になっている。まずセシリアが先に歩き出し、ネリスがその背を追うように入室する。安楽椅子に腰掛けた、壮年の男性の目前で直立不動の姿勢を取り、セシリアとネリスは敬礼をする。セシリアは完璧な挙動で腕を上げたが、やはりネリスはこういった儀礼的なことに慣れていないのか、わかりやすい程ぎこちない敬礼だった。

「休んでくれ」

二人は腕を後ろに組み、足を肩幅に広げて休めの姿勢を取る。

トーマス・ストーナーは微笑ましい物を見たとばかりにまなじりを緩めた。クライブの父であり、公爵の位を持つ彼だが、古くからその身を戦火に投じてきた生粋の武人であり、かのラルフ・アーセックの、今となっては数少ない戦友の一人でもある。軍では重鎮の立場にあり、公表はされていないが、ラルフ・アーセック無き今、傭兵隊の運用は彼が引き継いでいる。基本的に階級制の無い傭兵隊でも、ネリスとセシリアは幼い頃からトーマスの世話になっており、彼女達二人にとって、頭の上がらない数少ない人物となっている。特にネリスは誰に対しても敬意や愛想など示さないため、他人を前にこうして固くなっているというのは相当珍しい光景である。

前大戦で多大な活躍をした傭兵隊だが、公には全滅したことにな

っている。
　現在、傭兵隊員はネリスとセシリア。彼女達唯二人のみである。なぜなら、ラルフ・アーセックが傭兵隊を去る際に、彼が他の隊員を皆殺しにした為だ。ネリスとセシリアはその地獄から、命辛々何とか生き延びた。その為、ネリスとセシリアは傭兵隊の亡霊と呼ばれている。傭兵隊全滅直後の二人の様子は酷い有様だった。特にネリスは心の拠り所だった人に裏切られたせいで廃人状態に陥り、長いこと病床で伏せっていたが、セシリアの甲斐甲斐しいまでの介護により、何とか任務に復帰できるまで回復した。だが、回復したと言っても、明らかにネリスは嘗ての彼女とは違っていた。無論、セシリアもそうではあったが、ネリスの場合はそれが特に顕著だった。彼女の碧眼からは、嘗ての『濁り』が消えていた。そう、今のネリスは、まるで人形の様に透明で澄んだ眼をしている。様々なモノを捨てた――いや、無くした（亡くした）、とても無垢で、空虚な眼だ。だが、それをもはや人と呼んでよいモノだろうか。セシリアはネリスの眼を見る度、底知れない恐怖を感じていたのも事実だ。
「これが、今回の報告書です」
　ネリスはトーマスに向かって一歩踏み出し、淡々とした様子で書類を差し出した。
　トーマスはそれを受け取ると、苦虫をかみつぶした様な口調で要所を読み上げた。
　戦果はたいした物である。これで王都に潜むテロリスト共は、当分の間満足な活動は出来ないだろう。だが、死者の中に、ずいぶんな数の民間人が含まれているのを確認したトーマスは眉根を顰めた。セシリアも同じ事を思っているのだろう。兵士として恥ずべき事をしているのだという、自分を責めるような雰囲気が手に取るように解った。それは一種の嫌悪に近い。だが、やはり避けられないこともあっただろう。都市部に潜伏するテロリストを民間人と見分けるのは非常に困難だ。慎重に選定することは重要だが、時にはそれが不可能な場合もある。現状、悠長に情報戦をやっている余裕は無い。

一分一秒の遅れが、大規模なテロ行為を素通しすることになる。この犠牲もやむなし、と思える人間はこの場には一人もいなかった。
ネリスの場合は、喪われた人命を犠牲とすら想っていない為だったが。
「その報告書に記載されていない部分を口頭で申し上げます。本日、１２：００。ＶＴＯＬ（垂直離着陸機）を用いて、超低空より目視でＪＡＤＭ（精密誘導爆弾）を投下。目標の破壊を確認。着弾誤差は五メートル以下。王都市内を活動拠点としていた、テロリストのネストを殲滅しました。死傷者六十八名。内、民間人への被害は十二名」
「――ッ？！」
セシリアは驚愕した。その作戦の存在は知らされていなかった。恐らく、セシリアが学園に行っている最中に実行されたものだろう。セシリアはそのネストの処遇について、この後軍議に挙げようと思っていたのだが、その必要性は失われてしまったようだ。
「ネリス！　貴様！」
セシリアはネリスの襟元を掴み上げ、壁際に追い詰める。
トーマスが瞬きをした次の瞬間には、二人のホルスターが空になっていた。
「何のつもり、セシリア」
四十五口径特殊大型拳銃――Ｍｋ．２３ソーコムのサプレッサーを突き刺さんばかりに。
コックアンドロックだったＭｋ．２３は既にセーフティが外されていて、セシリアの人差し指はトリガーを半ば引き込んでいた。四十五口径のセミワッドカッター弾を喰らえば少女とておとなしくなる。
喉元に銃口を突き付けられていても、あくまで冷めた視線を向けてくるネリス。
そして、いつの間にかネリスの九ミリ自動拳銃がセシリアの胸部を照準していた。

歴戦の少女兵二人が醸し出す、隙間無く敷き詰められた刃物の様な空気。
この場に新兵が居たならそれだけで卒倒してしまいそうなほど。
「自国の市街地を空爆する阿呆が何処にいる！」
「突入すれば犯人を取り逃してしまう可能性があった。それにこの方法なら最小限度の損害で済む」
「市民への被害はどう説明するつもりだ！　周囲には住宅地があったことを貴様は知っていただろう！」
「忘れたの、セシリア。私達の任務はテロリストの殲滅よ。市民の保護が目的じゃないわ」
「――貴様ッ！」
セシリアがまたトリガーを数ミリ絞った。それに合わせてネリスの碧い眼光も鋭くなる。
「二人とも銃を納めたまえ。それに、ネリス。作戦行動の立案と実行は君達に一任していたわけだが、周囲への影響が大きい場合は是非私に相談して欲しい」
トーマスの穏やかな一声で、鬼を殺しそうな殺気が一瞬で霧散した。
「……取り乱してしまい、申し訳ありません。非礼をお詫び致します」
セシリアはトーマスの前まで戻り、憤りを噛み締めるように敬礼をした。
「……はい」
ネリスは拳銃をホルスターにしまい込み、乱れた着衣を直してからトーマスに向き直っる。敬礼の代わりに小さく頭を垂れた。
「君達が過酷な任務に就いているのは、私の命令によるものだ。よって全責任を負うのは私の役目だ。君達はよくやってくれている。大戦期から、君達はずっと戦火に身を投じて戦ってきた。だが、しかし、もう君達が戦う理由は無いのだよ？　君達が平穏を羨んで、ガンオイルと硝煙の香りが充満した世界からその身を引こうと、誰

も責めはしないよ。セシリアはクライブの級友として、学園にもよく馴染んでいる。きっと、君達は普通の少女として人生をやり直すことができるはずだ。遅すぎることなんて無い。君達は若い。だから、どうだ、前々から何度も提案していた事ではあるが、養女としてわたしの所に来ないか？　生活は確実に保障しよう。衣食住に困ることは無い。不足があらば何でも都合しよう。君達は今まで数え切れないほど国に貢献してきた。平穏に――そして、君達なりの『幸せ』を生きる権利は十分にあると思うんだがな。それに私は、君達がアサルトライフルと背比べしてたような年頃から君達のことを知ってる。ああ、よく知ってるとも。……そう、私の妻はクライブを産んですぐに召されてしまってね。もし彼女が『少女』を授かっていたならば、きっと君達の様に強く美しかったに違いない。そう考えると、君達の事が実の娘のように思えて仕方がないんだ」

現在、傭兵隊は半ばトーマスの私兵と化している。主な任務は、軍警察が積極的に推し進めているテロリスト掃討作戦に参加することだ。ネリスとセシリアの作戦遂行能力は、テネジア軍一個中隊にすら匹敵するため、非常に得難い戦力ではあるのだが、トーマスはこれ以上彼女達に戦って欲しくはないと、影ながら思っていた。だが、トーマスは彼女達が希望する限りのことはしてやろうと、不器用な親心を持っていた。二人が戦いを望むなら。戦火の下でしか、その傷ついた心を癒すことができないと言うのならば、トーマスは彼女達に武器と敵を提供するまでだった。

「トーマス様……。身に余るありがたきお言葉。自分のような無頼者には、もったいないぐらいです。お気持ちは非常に嬉しいのですが、返事は以前と変わりません」

セシリアはふつふつと、感謝と否定を口にした。言葉が湿り気を帯びている。クリアーとは言い難い視界状況だった。セシリアは他人の悪意に慣れている分、他人の善意には免疫が無い。瞳にいっぱいの涙をたたえ、泣き出すのを堪えるように眉根を寄せ、切なげな表情で前を見据えている。だけどネリスには見られたくなかったの

ですぐに顔を背けた。
「まだです……。まだ、銃を捨てるわけにはいきません。まだ、終わらせるわけにはいかないんです。わたしは過去に、自分の有り様を定めてしまった。それに対する責任はまだ果たしていません。それに、一度決めてしまった生き方を曲げることは、そう簡単にはできませんから」
ネリスは、まるで自分に言い聞かせるかのように呟いた。
「そうか……。気が変わったらいつでも言ってくれ。気長に待っているよ」
トーマスはそこで話を区切った。佇まいを直し、指揮官の顔に戻る。
「作戦内容の修正だ。ネリス……また働いて貰うぞ。今回は少々厄介かも知れない」
その一言に反応してネリスの表情が少し動いた。碧眼の輝きが増し、表情に昂揚が見られる。とにかく、今のネリスは戦いたくて仕方が無かった。まるで自分を罰するかのように、苛酷な戦況に身を投じる。だが、どの様な戦場でも、彼女の墓所となるには役不足だ。
「――望むところです」

『ノブレス・オブリージュ』

王宮の執務室。オリヴィアは机の上に広げられた戦略地図を睨み付けていた。広大な紙の図面には、王都防衛戦力の配備状況が事細かに記されている。主に航　空戦力に関する事柄だ。無数の扇が重なり合うようにして描かれた、対空ミサイルや対空砲の射程。迎撃陣地の稼働状況に移動パターン。レーダー網の守備範囲　まで。テネジア軍の最高機密情報で、他国の軍部からすれば喉から手が出るほど欲しい物だろう。だが、たとえこの戦略地図が外部に漏れたところで、それを握りしめ、嬉々として王都侵略を目論む輩は居ないだろう。逆に、少しでも軍事に聡い人間ならば、二度とテネジアに対して反旗を翻すなどという考えは起こさなくなる。そう、たとえテネジア全軍の戦力分布が敵に漏洩しようとも、その情報を元に王都へ攻めいることができる戦力など、この地上には存在しない。筈なのだ。

「有り得ない……。隙など何処にも無い筈なのに……」

オリヴィアは憔悴していた。表情には若干の疲労が浮かんでいる。まるでテーブルクロスのように広大な戦略地図には、至るところにオリヴィア直筆の走り書きが乱舞していた。定規で引かれた敵の侵入予想経路が、まるで幾何学模様のように、幾重にも書き連ねてあった。

オリヴィアの白磁のような手は、インクですっかり薄汚れてしまっている。彼女が執務室に籠ってから、既に六時間以上が経過していた。王都急襲の事後処理は、トーマス・ストーナーを初めとした、オリヴィアの信頼が厚く、それに加えて有能な為政官達に一任してある。首都の治安維持活動はブラックナイツと傭兵隊に頼んでいる。今のところ、たいした暴動も起こっていない為、当面の心配は無かった。現在は敵軍の侵入経路を炙り出すべく、多くの人員を割いている。

オリヴィアの周囲には、無数の可動式モニターが設置してある。軍事ネットワークを介して、実働部隊から逐一情報が送られて来る仕組みだった。そこからめぼしい情報を汲み取り、アナクロな紙媒体へと自らの手で出力する。長い定規が道を指し示し、ペンは忙しなく紙上を駆けずり回る。その狭い空間は既に、一種の仮想戦場と化していた。

何度も、何度も。各所から寄せられた膨大な量のログを参照して、昨夜の戦況を事細かに検証する。

「こんな時ばかりは、人工天使の二次電脳とブレインマシンインターフェースが恋しくなりますね。アルバートさんのM9。――たしかベレッタと仰りましたか。彼女は技術研究所でサーバー管理の真っ最中でしたっけ。あまり備品扱いしたら可哀想ですが、この状況では致し方ありませんね」

オリヴィアは一度、深く椅子に腰掛けて天井を仰いだ。

静かに眼を閉じると、まぶたの裏に昨日の光景が鮮明に甦る。

――自分はその場に居なかった筈なのに、腕にライフルの重量を知覚した。

戦場の熱い風が頬を撫でる。汗ばんだ長い髪が顔に張り付く。

轟音と閃光に焼かれて、まともに機能しなくなった視覚と聴覚。

現実感を失い、朦朧とした意識の中。縋り付くように、ひたすらトリガーを引き絞る。

硝煙と赤錆の香りが鼻腔を突き、噎せ返りそうになって辺りを見渡すと、足元には夥しい数の死体が折り重なっていた。

敵味方も、老若男女も問わず、皆平等に死んでいる。

下していた視界を元に戻すと、自分はいつの間にかライフルを取り落としていた。かくん、と自分の膝がおれて、体制を崩して血だまりに倒れこんでしまう。

立たなければ。麻痺した脳髄がそう思い至っても、躯はもう自分の制御を受け付けてくれなかった。
ただ、重力に従うだけの肉の塊がそこにあった。
口の中に紅い味が一杯に広がる。血反吐を吐こうにも、呼吸すら儘ならない。
瞬きする事はできる。唇を動かす事もできる。だが、それ以外に為す術がない。
そこでオリヴィアは首から下に意識が通っていないことに気づく。
それもそのはず、もう自分の身体は無いのだから。亡くしてしまったのだから。
痛みを感じる事すら許されずに、胴体と首が泣き別れになっている。
もう声を上げる事すらできずに視線を彷徨わせると、誰かの足が目の前の血だまりを踏みしめた。
『彼女』は足元に転がる生首を見下し、不敵に微笑んだ。
「とんだ無様ね。女王陛下」
それはオリヴィアにとって、とても馴染みの深い声音だったが、変容が酷すぎて気付くまでに少し時間を要した。
『彼女』はその愚鈍を諌めるように、死にかけの生首を爪先でこづいた。
そこに現れたのは、紛れもない、オリヴィア女王陛下その人だった。
まるで共鏡の様に、寸分の狂いもなく精緻なまま。世に無二の美貌が、そこに存在していた。存在してはならないはずのモノが。その矛盾に脳が焦がれる。残された最期の血液を振り絞って思考し、唇を非難がましく動かす。だが、その努力を嘲笑うかのように、流麗な黒髪の殺戮者は死に逝く生首を軍靴で踏みにじった。
鏡に映ったかのような、よく知っているはずの自分の姿。だが、まるで悪鬼のそれと見紛う所業。自分はこんな表情(かお)しない。こんな顔で嗤わない。だけど――。

（これが私の本質なのでしょうか……？）
『私』を汚すことは決して赦さない。そう叫ぼうとしても、肺も気道も持たないこの容器では声すら出ない。抗うことはできない。羅刹のなすがまま、人だった尊厳を踏みにじられるしかない。そう、自分にはもう抵抗する力は遺っていないのだから。力が亡ければ……何も為すことはできない。
「何を非難がましい。この殺戮を引き起こしたのは、紛れも無い『貴女自身』でしょう。すべての罪は貴女に帰結する。忘れたとは、言わせない」
（そんなこと……解っている！）
オリヴィアは悔しさに唇を噛んだ。
認めたくなかった。こんな事が、世の摂理だと信じたくはなかった。そんな不条理にこの身を委ねたくはなかった。
だから、今まで生きてきた。抗うために死を拒み続けてきたのだ。それがたとえ、他人の屍を絨毯にして進む道だとしても。
「ふん、ならば逝くが良い。この終わり無い修羅道を。屍（かばね）を踏み越えて征くが良い。終わりの先に在るモノが、虚無であることを証明してくれ！」
そう高らかに叫んで『オリヴィア』は、兵士の生首を踏み潰した。
まるで灯火を吹き消すように、彼女の意識はそこで途絶えた。

「――陛下！　女王陛下！（Ｙｏｕｒ，Ｍａｊｅｓｔｙ！！）」
誰かに肩を揺さぶられていた。重たい頭を引き起こし、薄ぼやけた視界でその人物を捉えた。
「……セシリア」
――王室親衛騎士団、騎士長。陸海空の三軍に次いで、女王直轄の独立軍『ブラックナイツ』を率いる兵（つわもの）、セシリアは漆黒の礼服でその身を固めていた。まなじりはいつものごとくつり上がり、険しい表情を構成しているが、

「無断で入室した無礼をお許しください。ご連絡申し上げたのですが、お達しが無く。様子を伺いに……。何やらうなされておいでしたので……」
セシリアはオリヴィアの体調が気掛かりだった。きっと急襲事件の事を一人で抱え込んでいるのだろうと、心配して様子を見に来てみれば、案の定だった。元より無理の効く身体ではないというのに、オリヴィアは自分の事など顧みずに公務に没頭していた。それ故に、人々はオリヴィアを、慈愛に満ちた名君と讃えている。だが、セシリアは主の事が気が気ではなかったのだ。そんなオリヴィアがとても危うい存在に見えたからだ。烏滸がましい事だとは思うが、セシリアは騎士として女王を支えたいと願っていた。彼女の剣として、立ちはだかるものを凪ぎ払い、盾として弾雨から護り抜く。そんな存在でありたかったのだ。
「んぅ……。私はどのぐらい意識を失っていたのですか？」
オリヴィアは気怠げに目頭を押さえながら問うた。
「端末のログを参照すると、三十分程かと」
「加速症のせいで、意識が混濁していましたか……煩わしい」
目をこすりながら深い疲労の含まれた溜息を吐く。
オリヴィアは不治の病に犯されていた。
――加速症。
この症状に罹患した者は、肉体の潜在能力が半ば強制的に発露する。身体能力が向上し、超人的な能力を得る。その反面、心身に掛かる負荷は凄まじく、本来不老長命な少女ですらその寿命を著しく損ねる。細胞分裂の際に遺伝子が欠損していくため、生存率は極低。そして、死因の殆どは――自殺。加速症は身体だけで無く、脳にも多大な影響を及ぼす。それほどまでに加速症の精神汚染は酷いモノで、末期まで人格を保てる者は極一握りだ。原因は殆ど解明されておらず、遺伝子に組み込まれた『少女』の因子が加速症を引き起こしているのだという説が有力だが、根本的な改善には未だ至っていない。

オリヴィアの父である前テネジア王が、国家を挙げて治療法の確立に取り組んだ。だが、テネジアは戦乱に呑まれ、王の崩御と共に計画は頓挫した。

「抑制剤をお持ちいたしましょうか？」

「いえ、それには及びません。あれを飲んだら、またしばらく動けませんから」

「御身の大事もお考え下さい。軍務は我等にお委せを」

「そういう訳にも参りません。今動かなければ、総て終わってしまう気がして……」

オリヴィアは一種の強迫観念に囚われていた。また自分のせいで、多くの民草が望まぬ黄泉路を逝くことになる。それだけは絶対に避けなければならない。それがせめてもの償いになるのなら。例え自己欺瞞だとしても、自分が必要とされている限り、歩みを止めるわけにはいかないのだ。

「だとしても！　今、陛下にもしもの事があれば、それこそテネジアは終わりです！　情勢が困窮している今こそ、陛下は堂々と玉座にお掛け下さい。それだけで、皆は安心して自分の役目を果たせると言うものです」

「解りました。少し休みます。――紅茶を……紅茶をいれて貰えませんか、セシリア。久々に貴女のいれたものが飲みたいわ」

「御意に」

セシリアは穏やかな笑みを浮かべて一礼し、踵を返して退室した。

オリヴィアはその間に、書き連ねた資料を整理する。

ついつい読み耽ってしまい、何とか茶器を置く場所を確保する頃には、セシリアがティーセットのキャリーを押して戻ってきた。彼女は先程とは一変して給仕のエプロンドレスを身に纏っていた。細かいところに拘りを持つセシリアの事だ、お茶一つ出すのにも騎士の礼服では不相応だと思ったのだろう。

そんな彼女を目の当たりにして、オリヴィアは思わず笑みをこぼしていた。

「如何なさいましたか？」
「ふふっ……いえ、なんて事は。ただ、貴女の給仕服姿を見るのも、ずいぶん久しぶりだと思いましてね。それでも、あの時の貴女は十分風格が漂っていましたけど」
オリヴィア懐古するように目尻を細めて微笑んだ。
「そんな事を仰らないでくださいませ。あまり誇れることでもありません。それにあれは任務です」
「真似事とはいえ、本物のそれと見分けがつかない器用さでしたね」
「こればかりはお褒めいただいても、喜ぶわけにはいきません」
そう言いながらも、セシリアは慣れた手つきで紅茶をいれていく。
「ですが、こうして陛下のお役に立てるのであらば、あながち悪い気はしません」
そう言ってセシリアは静かに微笑んだ。
「二人分用意して下さいね。貴女の分です。さぁ、お掛けになって」
オリヴィアはそう言って、執務机にもう一つ椅子を据えた。ちょうど彼女の横に並ぶ位置取りだった。
「そんな、私が同席するなど、もっての他です！」
だが、セシリアがそう言う事は、長年の経験から予想済みだった。
「これは軍議です。お掛け下さいまし。ブラックナイツ騎士長、セシリア・ブラウニング卿」
卓上の戦略地図を指し示して、オリヴィアは着席を促した。
「う……。陛下のご下命とあらば、是非もありません」
女王と騎士が肩を並べて卓に着く。
ティーカップに口を付けると、二人は戦域地図を眺めながら意見を交換し合った。
内容は高度に軍事的で、お茶会の話題にふさわしいかどうかはさておき、久々にセシリアと共に時間を過ごせてオリヴィアは幸せだった。少女達は束の間の安息を味わい、それがまた新たな戦火へ繋がる事を、何となく予期していた二人だった。

『ウィンチェスターの三つ子』

――五年前。ＡＷ３１０年。

クライブは屋敷から送迎車に乗り、学園を目指していた。

「全く、たいした距離でもないのに、こんな仰々しい防弾車で登校する事になるとはな。王都の治安も悪化の一途のようだ」

クライブは頬杖をつきつつ、車窓から後方に流れていく景色を眺める。

生まれてこの方の十数年間。クライブは王都から出た事など、数えるほどしか無い。街の景観と様相はここ数年の間にだいぶ様変わりした。その要因が戦争にあることは、もはや考えるまでもない。他国の追随を許さない技術力を固持し、それによって構築された屈強無比な三軍を用いて、テネジアは隣国に名だたる列強ヴィスタ、古豪ソレイユを圧倒した。国王崩御という内政不安により、一時的な停戦協定を結んだということになってはいるが、その内容はテネジアにとって非常に有利なものばかり。街は戦争特需によって潤い、国民の大半を占める優秀な技術者達は、己の持てる全てを注ぎ込んで強力な最先端兵器　を戦場に供給し続けた。

この現状は、まるで内部から爛熟した林檎のようで。腐臭に近い独特の甘露を放つ。そのため、その繁栄を疎ましく思う者達から常に敵意の矛先が向いているのだ。だがテネジアは狼の群れに飛び込んだ羊などではない。斯様に無力な存在ならば、本来人口も資源も乏しいはずのテネジアが、この戦乱を戦い抜けるはずもないのである。

だが、国と国とがその存亡をかけて行う『正当な闘争』は、各々統括された軍によって行われるのが通例だが、その私怨と私欲のために横行するテロリズムは、個人によって引き起こされる。それは

もはや戦争や闘争とは程遠く、軍（群）では、個に対抗するには、その本質が違いすぎる。国家と云う名のマクロな安全保障機構では、もはや国民全てをその驚異から庇護することは不可能なのであった。

その一方で貧民街は難民で溢れ返り、彼らによって引き起こされる犯罪は増加の一途をたどっている。そして、テロ行為により数え切れないほどの市民が死傷した。その中には、彼らの同胞（はらから）であるはずのヴィスタ人も多く含まれていると云うことを、彼らの指導者は知っているのだろうか。

クライブは思わず拳を握りしめていた。理由はよく解らなかった。世界の不条理に対して、子供の視点でああだこうだと不平を述べるような年頃はとっくに過ぎていた。

世界はそんなに美しいモノではないと、クライブは自分なりに理解していたつもりだった。自分が今こうして生きているという事実さえも、自分以外の誰かが築き上げた、夥しい数の骸の上に成り立っているという事ぐらいは。王にもっとも近い貴族であるクライブは、解っているつもりだった。王宮に敷かれた絨毯の紅さの意味ぐらい。知っているつもりだった。だが、ソレらを直接見てきたオリヴィアとは違って。その意味を正しく理解できているかは、甚だ疑問であった。

セシリアは横目でクライブの様子を窺ってみた。その表情は王都の情勢を憂いで居る様にも見えた。そして、満足に町を出歩けない自分の境遇に対して、一抹の不服も含まれている様にも思えてならなかった。

「まあ、クライブ様のご身分を鑑みれば、致し方ないことかと思われます」

クライブの隣。楚々とした佇まいで腰掛けていたセシリアがおもむろに口を開く。

貴族の乗機としては、非常にこぢんまりとした車内空間にエンジンの低い駆動音のみが響いている。

「国内最高規格の防弾車とはいえ、テロリストにロケット弾でも撃

ち込まれようモノなら、一巻の終わりだろうに」
　クライブは腕を組みつつ、いつものように冗談をふっかけた。本来なら、笑えないと誰かに叱責されそうなモノだが、ここはクライブにとって数少ないプライベートであり、それを担うセシリアだからこそ、安心して口を緩めることができるというモノだ。
　彼の発言は公の場において、国の命運を左右する力を持っている。そのことがクライブにとって結構な重荷だった。――本来、彼の口は存外と軽いのだ。
「その様に仰るならば、次回からＩＣＶ（歩兵戦闘車）で学園へ参りましょうか？　王室騎兵隊のストライカーには、スラット装甲が御座います。あれならばＲＰＧのＨＥＡＴにも耐えられましょう。クライブ様がご所望なされば、今日明日中にでもご用意致しますが？」
「冗談だ、セシリア。俺にサファリバスで登校する趣味はない」
「左様に御座いますか。出過ぎたことを申しました」
　しれっとした表情で呟くセシリアを横目にクライブは思った。
　たとえ自分が王位に就いたとしても、この瀟洒な従者をやり込める事はできないのだろう。もう長い事セシリアと共に過ごしているが、クライブがセシリアを出し抜けたことなど一度もなかった。
「お、アルバートじゃないか」
　クライブは視線の隅に、見慣れた人影を捉えた。
「もう学園は近い。ここで降ろしてくれ」
　クライブが運転手である初老の男性に告げる。運転手は畏まりました、と了解して車を歩道に寄せた。
　この時勢にも徒歩で通学する、腐れ縁の幼なじみを見据えて、クライブは車のドアを開け放った。
「全く。門前が一番危険ですと何度も具申しているというのに」
　やれやれ、といった感じに後に続くセシリア。クライブの背中に粛々とついて行くセシリアの後姿には、見るモノを釘付けにするような気品が漂っていた。クライブを含め、その場の誰一人として、

彼女の心中を把握できる人間などいなかっただろう。
そう、――『人間以外』を除いて。
（何かと苦労しているようね）
彼女を注視する人外の視線に、セシリアは気づいているのか気づいていないのか。そのあざ笑うかのような思念は、セシリアの掌を戦慄かせるには十分だったのだが。セシリアは穏やかな笑みをたたえたまま。ただ主に付き従っていた。
「おはようクライブ。朝っぱらからその不景気な面がすこぶる元気そうで何よりだよぉ～」
「ご挨拶じゃないかアルバート。今日は大層機嫌が良いようで」
「ヘルミーナが久々にご登校からねぇ。それは晴れやかな気分だよぉ」
「兄さん！　またクライブさんに喧嘩ふっかけて！　この間も散々な事になったばかりじゃ無い……。いい加減、学習してくれよ。後始末をするのは俺なんだから」
アルバートから少し下がったところで、エドワーズが慎重に車椅子を押して歩いてきた。
彼は苦笑しつつも、どこか嬉しそうな表情をしている。その理由はすぐに判明した。
「久しぶりねクライブ～。会いたかったわ～」
車椅子に身をゆだねたまま、人なつっこい笑顔で手を振る少女の姿を見つけて、クライブは喜悦を顔に浮かべた。
栗色の髪はくせっ毛なセミロング。桜色の空気を纏った少女。小柄だが独特の存在感を放っている。そのせいか特に胸元の膨らみがよく目立つ。確かに少し頬はこけてしまったし、肌の色もだいぶ白が目立つようになったが、それでも昔と変わらない融けるような微笑みがそこにはあった。天真爛漫と天衣無縫を絶えず体現する彼女には、それがとてもよく似合っている。よく通る、ふわりとした声音が耳朶をくすぐる。それがとても心地よかったと言うことを脳が覚えていた。

「ヘルミーナ！　やっと外にでられるようになったのか！　どうだ具合は？　まあ、その様子なら健勝そうで何より……？」
――そこでクライブは語尾を濁した。
エドワーズが至極大事そうに押している車椅子。まるで赤子のように、全てを委ねて揺られるヘルミーナ。彼女は生来病弱で、よくこうして車椅子に頼ることがあった。だが歩行が苦手というだけであったはず――今までは。
クライブは彼女の姿を見改めて戦慄した。動揺を隠すのも困難だった。ヘルミーナには両足の膝から下がついていなかったのだ。
「……どしたの、クライブ？　私が元気になったのに、あなたは浮かない顔して」
小首をかしげていぶかしむヘルミーナ。たまらずエドワーズが口を開いた。
「加速症の進行が思ったより酷くて……。浸食を止めるのに、足は諦めるしか無くて」
ヘルミーナが煩った病の致死率を鑑みれば、それでも増しな方であるのだが、それでもクライブはどんな顔をして良いのか解らなかった。
「良い知らせと、悪い知らせ、か」
「そうですね……そのおかげで浸食を遅らせることができましたから」
「――んっ？　ああ～？！　コレのこと？　気にしないでちょうだいね。私としたことが、どこかに落として来ちゃったみたいで～」
得心がいったという風に両手を叩いて、無邪気な笑みを浮かべたまま、笑えない冗談でおどけて見せるヘルミーナ。クライブは思い返す。そういえば、彼女はこれが自然体なのでしかたがない事だ。彼女のゆるい笑顔にやられて、皆一様に苦笑を漏らした。
「なに、僕がすぐに義足をこしらえてやるからね、ヘル。安心してくれ、機械義肢なんていう無粋なものじゃない、血の通った肉の脚をつけてあげるよぉ」

そう言って、アルバートが彼女の髪を撫でた。彼はクマの浮いた不健康な目を細めて、愉しそうに笑っていた。
「あら、楽しみにしていますわ、兄様」
「俺は警察に入って王都をもっと住みやすい街にするよ。姉さんが安心して外を出歩けるように」
まるで競うようにエドワーズが声を弾ませる。
「ありがとう。エドは優しいのね。きっと良いお巡りさんになれるわ」
そのやりとりを見るだけで、ヘルミーナがとても愛されてることがよくわかった。彼等の中心に間違いなくヘルミーナの存在があった。
「相変わらず仲がよろしいようで」
セシリアが微笑ましい物を見たように呟いた。
「あきれるだろう？　こいつらは昔からこうなんだ」
肩をすくめて、おどけたようにクライブが言った。
「いえ、わたくしには羨ましい限りでございますわ」
「そんなもんかね」
多少呆れ気味にクライブはつぶやく。
「そんなものでございます」
セシリアもつられて微笑んで見せた。ヘルミーナと比べると、多少険が抜け切れてないが、それでも厳冬の昼下がりのような暖かさがにじんでいた。
それが後からじんわり染みてくる。
「お前でも、そんな風に笑うんだな」
頬をかきながらそっぽを向く。
「あら、クライブ様が私の事をそんな風に思っていらしたなんて、心外ですわ」
「いや、気を悪くしたなら、すまないな」
憎まれ口を叩いてみても、クライブはセシリアの笑みに少しあてられてしまったので、今は精細を欠いていた。

「いえ、そんなつもりは。そういえば、クライブ様はあのお三方とは、長い付き合いなのですか？」
「付き合いというか、どちらかといえば腐れ縁だな。古くから、家ぐるみでの縁って奴だ」
ストーナー家とウィンチェスター家の交流は古く、それでいて非常に親密な間柄だ。
かねてより両家は、有能な兵器設計技師を輩出してきた。彼等が設計した銃がこの国をここまで繁栄させたといっても過言ではない。近代テネジアの歴史は、銃と共に歩んできた。両家の銘打たれた銃は軍、民生品問わずに高い人気と信頼性を得ている。
そんな家の関係もあり、クライブとウィンチェスターの三つ子とは幼馴染みの関係だった。アルバート、ヘルミーナ、エドワーズは腹違いの三つ子である。ウィンチェスター卿には三人の后がいた。この国の貴族階級において、それは珍しい事ではない。むしろクライブの父が正妃一人しか愛さなかったという方が、かえって稀有なケースである。
クライブには、三人の女性を母と仰がねばならぬ感覚が解らなかった。もっともクライブが母と呼ぶ存在は、彼が世に産み落とされた時には、既に世に亡かった。結局のところ生きた母の姿を見ることは叶わなかったのだ。
実のところ、セシリアは写真で見た母の姿によく似ているのだ。
「どうかなさいましたか？　なにやら浮かれないご様子ですが」
「いや、何でも無いんだ。ただ今日の決闘に関して想いを馳せていたら、想像以上にたぎってきたんだよ」
「あら、お盛んなことですわね。――そのようには見えませんでしたけど」
セシリアがぽつりと呟いた語尾は、アルバートの哄笑にかき消された。
「くはははは っ！　なんだい、クライブ。今から負け戦に心躍らせるなんて、君も殊勝だな」

「ちげぇよ。てめぇのその瓶底眼鏡をたたき割れる日が来たんだ。身体が震えるほど楽しみなんだよ！」
「いうねぇ。ヘルミーナの前で無様をさらすのが嫌だったら、今から中止にしてあげても良いんだけどねぇ。どうするぅ？」
「ああ、また始まったよこの二人……」
エドワーズが空を仰いで嘆いていた。
「あら、素敵。まだアレ、やってたのね～♪」
ヘルミーナは愉しげに眼を光らせた。この少女の興味をひいた事は、だいたいにおいて実行される定めにある。それがこの集団における唯一の秩序だった。

『少女機関は人工天使の夢を見るのか？』

王立技術研究所のサーバールーム。巨大な筐体が林立する広大な空間。距離感が狂いそうな光景だった。すべてが同じデザインで統一されているため、まるで合わせ鏡の中に居る錯覚に陥りそうになる。

古代技術の粋を集めて設計された演算装置を並列接続することにより、強大な性能を持たせたクラスターシステムだ。本来なら化学研究用の物理演算に使用されていた実験機材なのだが、現在では軍が借用して運用を行っている。

襲撃事件の時に敵軍が行った破壊工作により、軍の通信インフラは多大なダメージを受けた。それを補い、全軍から絶えず送られてくる情報の中継地点として、情報統合サーバーとして、この素粒子演算クラスターシステム『グヌーテラ』に白羽の矢が立ったのだ。

端から端まで見渡すと、向こう側が霞んでしまうほど広い空間のおおよそ中心部。

制御用のコンソールがいくつか立ち並ぶ区画で、ベレッタ黙々と作業を続けていた。

開け放たれた制御端末は内部の基板を剥き出しにしている。そこから伸びた何本ものケーブルが、車椅子に身を委ねるベレッタの脊髄に突き刺さっている。

「あーあ～。暇だな～。単純な条件分岐演算をひたすら繰り返すだけじゃぁ、いい加減飽きてくるよ～。平和なのは良いことだけど、ひとりぼっちは退屈だしぃ～！」

ベレッタは足をばたつかせて、ぐちぐちと作業をこなしていた。それでもブレイン・マシン・インターフェースの恩恵で処理は的確だった。この程度の制御なら、居眠りしていてもできる。

「まあ、そうぼやくなよぉ。地味でも大切な仕事だ」

サーバーの影から突如として現れた人影に、驚き車椅子から飛び

上がるベレッタ。
「アルバートさんっ？！　サボってませんよ？　寝ようとなんてしてませんよ！　決してそんな事はないんですよっ？！」
「そんなことわかってるよぉ。ずっとモニターしてるんだから、僕が気づかない訳、無いじゃないかぁ～。……もし手でも抜いてるなんて事が解ったらぁ、すぐ脊髄の神経接続子にノイズ流してやるんだからねぇ。痛いよぉ～とっても」
「ひぃぃぃ～？！」
あの悶絶するような激痛を思い返して、いやいやとかぶりを振るベレッタ。
「冗談だよぉ。今日はあんまり無理しなくてもいいから。適当に処理しといてぇ」
そう言ってベレッタの額に手を当てる。思った通りじんわりと熱い。
「――んっ？！」
また殴られるのではないかと身構えたベレッタは拍子抜けした。
「ほら、差し入れ」
アルバートは氷の入った袋をベレッタの小さな頭の上に置いた。
「あ、ひんやりしてて気持ちいい……ありがとうございます」
ベレッタの頭蓋内部に増設された二次電脳は、処理能力に特化した弊害として、かなりの熱を持つという弱点がある。それは演算を続けると、かかる負荷に比例して排熱量が増加する。あまり高熱状態が長く続くと、保護機能が働いて電脳の処理能力が急激に低下するという事態に陥る。生体部品のタンパク質が硬化してしまうと、後が大変だからだ。
ベレッタの髪が長く、銀の光沢を放っているのはそれが理由だ。彼女の頭髪は熱伝導効率が非常に高い金属で形成されている。髪の毛一本一本という細かい排熱素子をかき集めて、外気と触れる表面積を稼いでいるのだ。そのため、熱暴走の危険性があるときは、ヒートシンクである銀髪に風を当てたり、冷水に浸したりして強制排

熱する。たいていはアルバートが面倒だといって、裸に剥かれて水風呂に放り込まれたりするのだが。
　そう考えると、今のアルバートの優しさは、嬉しいには嬉しいのだが、どうにも気味が悪いとベレッタは思ってしまう。普段が普段なだけに、気遣われると返って怖いのだ。
　いつもベレッタはアルバートの提案する数々の非人道的な実験や、無茶な肉体改造の被検体にされているのだ。彼女の身体はちょっとやそっとじゃ壊れない。人間とは根本的に身体のできが違うのだ。それに、たとえ壊れてもすぐに治ってしまうので、外見上の破損箇所などは残っていないが、もし人間なら何度廃人になってもおつりが来るような拷問を受け続けてきたのだ。内容はそれこそＰＴＳＤ（トラウマ）を誘発するため筆舌に尽くしがたいし、保護機能が働いて記憶領域にリミッターがかかっているのかよく覚えていない。
「なあ、ベレッタ。僕がお前を発掘した二号遺跡のプロトコル……覚えているか？」
　真剣な顔つきで、アルバートはベレッタに耳打ちする。顔が異常に近づき、ベレッタは戸惑い赤面してしまう。
「え、あ、はい。大丈夫ですけど、あそこはもう完全封鎖されて、ヒトなんて誰も残っていませんよ？」
「違う、少し思い当たる節があってねぇ。システムは生きているだろう？　制御は奪えないにしても、状態を確認する程度なら造作もないはずだ。この経路（ルーティング）制御でアクセスしてみてくれ。作業は一時中断してくれて構わない。ただし、スタンドアローンで作業しろ」
　アルバートが差し出したホワイトボードには、無数の数字が手書きで記されていた。
　彼女はそれを瞬時に記憶し、ネットワークの侵入経路を割り出す。
「えっ……あのぅ……せめてファイアーウォールだけでも使わせてくれませんか？」
　そう上目遣いで懇願するベレッタだが。
「却下だ」

「うぇぇぇ〜？！」
ベレッタは悲嘆に暮れた声を上げるしかない。とりつく島もなかった。
「モニターだけはしておいてやるから、安心したまぇ」
アルバートは小脇に抱えた情報端末からケーブルを引き出し、ベレッタの脊髄端子に差し込んだ。
「――んっ。それが返って不安ですよぉ……」
「何か言ったかぁねぇ……？」
「いえ、なにも！」
「よろしぃ！　では二号遺跡のシステムに接続を試みる。軍が敷設した中継器にはくれぐれもログを残さないことっ、しっかり消してから通るんだよぉ。片道切符にならない事を祈ってるよ」
「で、では……行って参りますっ！」
ベレッタは潜在意識をネットワークに散逸させる。途中いくつものゲートウェイを超えて、目的の二号遺跡の無人防空システムに侵入した。
「……何かおかしいとは思いませんか？　アルバートさん」
「ああ、二号遺跡の自立防衛システムが稼働してるねぇ」
ベレッタから渡されたデータを情報端末で確認して、アルバートの目付きが険しくなった。
「様子が変です。私、遺跡内の光学監視装置を殻割りしてみます」
「やめろベレッタ、危険だっ！」
「大丈夫ですって、任せてください、このぐらい大したことありませ――」
そこで思考のアルゴリズムに嵐のようなノイズが走る。眼球のデバイスドライバが一瞬応答を停止する。瞬きを一回、そこでベレッタは眼を見開いた。大量の情報が二次電脳に向けて流入してきたのだ。
（まずっ――？！）
防壁も纏わない、まるで丸裸の状態でこの規模の情報氾濫を喰ら

えば、人工天使である彼女でも無事では済まない。あっという間に進入を許してしまい、もし四肢に仕掛けられた水素式蓄電池の緊急起爆コードが作動すれば、研究所はおろか王都の四半分が消滅する。その被害規模は昨日の戦闘の比ではない。

（電脳をパージするしか――？）

ベレッタは即時に判断を下す。脳と二次電脳のシナプスを強制切断すれば浸食は防げる。しかし、それを実行すれば彼女は向こうしばらく廃人である。人間としての体をなさない、植物人間になってしまう。

（アルバートさんに介護してもらえるなら、それも悪くはないかなって。いや、その前に廃棄処分されちゃうかな？　でも、まあ、いいか――）

そう覚悟した瞬間、彼女の脊髄にバチリ、という衝撃が走った。

「え……？」

気が付くと、彼女はその身を床に横たえていた。ネットワーク上に散逸していた感覚が、元の器に戻ってくる。視線の先にある細い指先は、彼女が命ずるままに動いてくれる。自爆プロセスのプロテクトも普段通り、正常に稼働している。

「くそっ、だからやめろと言ったんだ」

ベレッタから引き抜いたコードの束をつかんで仁王立ちするアルバートの姿が視界に映った。彼は緊張の為か、珍しく荒い息を吐いていた。ほとんどの端子が引き抜かれた中で、一本だけ残っている接続がある。アルバートの情報端末が、ベレッタの代わりに火を噴いて壊れていた。

「アルバートさん、もしかして、バイパスして助けてくれたんですか……？」

「まあねぇ、今君に壊れてもらっちゃ、困るわけだし。はぁ、一時はどうなることかと思ったよぉ……」

そう言って胸を撫で下ろす。安心したのか、いつものアルバートに戻っていた。

彼はその場にどっかりと腰掛けて、手元の帳面に何やら書き込んでいた。
「まあ、これで事態がはっきりしたわけだしね。誰かが二号遺跡のシステムを掌握している。それも物理的に」
「――じゃあ、今あそこに誰か居るって事ですか？　あんな危険地帯に……どうして」
「ただの盗掘団にしては手が込みすぎてるしぃ。コレはまた面白い事になりそうだねぇ」
アルバートはニマニマと薄気味の悪い笑みを漏らした。その悪魔の微笑みに、ベレッタの二次電脳が条件反射の如く疼いた。そんな情報は存在していないのに、悪寒のような幻覚が全身をくまなく駆け巡った。自分はまたろくでもない使い方をされるのだろう。いっそのことの事、核分裂炉にでも放り込んで貰えれば、この苦しみからも解放されるだろうに。そんな自壊願望はとかく冗談として、ベレッタはもう少し愛が欲しかった。
「失礼します」
そのとき、表情を硬くしたエドワーズが入室してきた。すこぶる不機嫌そうな面持ちだった。あの顔は、『任務の最中に別件で呼び出されて不服』、そして『命令とは言え、苦手な兄と顔を合わせたくない』といった具合である。ベレッタが記憶領域に検索をかけた末に出た結論だ、おおよそそんなところだろう。
「ああ、ちょうど良いところに来たねエドワーズ。僕はちょっとこれから陛下に謁見をしてくるから、ベレッタを空母マリアまで護送しておいてくれるかな。艦載機と一緒に放り込んでおいてくれれば、後はこっちで何とかするからさぁ～」
「了解、しました」
「え、アルバートさん？　サーバーの管理はもう良いんですか？」
「プライオリティ（優先順位）が変わったんだよぉ」
そう言って、アルバートは携帯端末を取り出して、王宮のホットラインに繋いだ。

「あ、陛下ぁ～？　確か今、グラネイの軍港に空母マリアが寄港してますよねぇ？　アレの原子炉をちょっと貸していただきたいのですがぁ。ベレッタの蓄電池の急速充電にどうしても必要なんですよぉ。え、だめ？　そこを何とかぁ～。ほら、親衛隊向けの機甲外骨格、すぐに使えるように調整済ませておきますから。何とか頼みますよ、ほんの三時間で構いませんから……」

ベレッタの高感度な耳には、まず『どうしてあなたがこの回線を知っているのですか……？』という、オリヴィア女王陛下の半ば呆れて不機嫌そうな声がしっかり聞こえた。声の質から分析するに、おそらくは私室で仮眠を取っているところを叩き起こされたのだろう。ベレッタはその肉体の半分以上が機械だが、人間の感情の機微には特別敏感だった。

周りの人間に次々と不幸を振りまいていくのが、アルバートの特性である。しかし、それ以上聞き耳を立てたところで、自分の不運はおそらく確定事項だろう。そう思い至って諦めたベレッタは、聴覚から意識を逸らした。

「では、行きますよ」

「あ、お願いします」

エドワーズが床にへたり込んでいたベレッタを両手ですくい上げ、車椅子に腰掛けさせる。もう自立歩行しても問題は無いのだが、換装した細胞が馴染むまでなるべく動かない方が良いらしいので黙って身を委ねていた。人形扱いされるのは、さほど嫌いでは無いのだ。たぶん、機械らしくしていた方がアルバートも好いてくれる。アルバートが事有る毎に虐めてくるのは、自分が必要以上に人間臭すぎるのがいけないのだと、ベレッタは自分なりに日頃考えていた。主人の寵愛をいかに獲得するか、そんな事ばかり考えてしまうのは、たぶん機械の習性だった。――そう、思い込んでいた。

『空に焦がれた少女の劣情』

子供の頃に空を飛ぶ夢を見た、という話を良く耳にする。
私はそういった夢を何故か判らないが全く見る事が無かった覚えがある。ヒトには翼など無く、いくら手を伸ばし焦がれようと、真っ青なキャンバスには触れる事さえできないのだと、幼心にも理解していたのだろう。ましてや、そこに自分の軌跡を刻むなんて思い上がりも甚だしいのだと。
そう思うと、私は空を見上げる度に、なんだか哀しかった。
燦然と輝く太陽を仰ぎ見て、自分の繊手を空へ伸ばすと、主観で見ていた自分の存在がどんどん稀薄になっていくのを感じた。
絶対的なモノとしてそこに在る――空。地を這いずり回る自分がとてもちっぽけに思えたから。世界は主観により構成される、とても可変的なモノ。少なくとも、その頃の私から見た世界は、私を中心として回っていた。なのに、自我の形成に伴って、他人を認識するに従って、自分の価値が際限なく堕ちてゆく。たとえ私の躰が融け出して、大気の粒子と同化してしまったとしても、世界は何事もなかったかのように淡々と回り続けるという事実。
途轍もなく巨大で、何処にでも在り、何処にも無い空。
その姿に世界を感じてしまっていた私。
手の届かないモノ。無い物ねだりはヒトの世の常。
ヒトは往く鳥に焦がれて、航空機を作った。今や、空を飛ぶ事は大衆にとっても造作のない事に成り下がっている。
しかし、それで良いのか。悲願は達成されたのか？　お前達は神になれれば満足か？
いや、何かが違う。私が空へと馳せていた思いとは？　私を駆り立てた感情は？
ああ――そうか――。
これは『支配欲』。

そうだったのか。
自分でも判っていた。
ありふれていて、誰もが抱いている、純然としていながら、どこまでもドス黒い劣情。
その感情に気づいた時から、私は世界に抗う事を決意していたのかも知れない。
誰かに認めさせたい。私がゼロでは無い事を。
そう、私は『異色』。
他のどんな色とも相容れない、染まらない孤高の絵の具。
そんな矛盾した色で、この忌々しい青のキャンバスを穢してやる。
私の『色』で支配してやる。その何処までも無垢な青に私の軌跡を刻みつけてやる。
ああ、結局、私も高慢なその他大勢と同じじゃないか。
だけど、そんなの、解っているさ。
だから――。

『不遜な謁見』

「――陛下、ご下命により、登城つかまつりました」
そのとき、ドアがノックされる音に、オリヴィアの意識は浮上した。
「――また、気絶していたのですか……煩わしい」
何度か目をしばたたかせて、気怠げに上体を起こす。質素な置き時計に目をやると、あまり時間は経っていないようだった。オリヴィアは体裁を整えて、訪問者を迎え入れる。威儀を正すには、少し時間が足りなかったかもしれないが。漏れ出すあくびをかみ殺して、髪に手櫛を入れることが精一杯だった。
「ようこそおいでなさいましたね。あなたが登城してくるのは久々な気がします、ウィンチェスター伯爵」
「陛下のご尊顔を拝見奉り、恐惶謹言にございます。おや、しばらく見ないうちに調度品がだいぶ減りましたねぇ。そこに有った絵画なんか、僕は結構好きだったんですけどねぇ」
そう言ってアルバートは無遠慮に室内を見渡した。
「王宮にある調度品は、特に国民の目につかないところにあるものは、だいたい売り払ってしまいましたからね。王宮で――ひいては私が使っていたモノには箔がつくと言うことで、先方には高く買い取って頂きました。おかげで必要なところに資金を回せました」
一国の女王が貧乏性では嗤われてしまうかもしれないが、この有事に遊ばせておける資金も人材も、テネジアには不足しているのだ。特に親衛隊は彼女の私費で運用されていると言っても過言は無い。その上、彼女は難民や戦災孤児に対して多額の寄付をしている。外交上必要となる場面以外は、贅沢品など望むべくも無いのだ。
「陛下はいつもご他愛に満ちていらっしゃる。いやはや、頭が上がりませんなぁ」
ドアをノックし、返事を待たない不作法で入室してきたアルバー

トを、オリヴィアはどことなく疲れた表情で迎えた。執務机の彼女は人形の様な気品を振りまいて佇んでいたが、それでもこの不機嫌は隠しきれるモノでは無いようだ。
「全然ようこそって感じじゃありませんねぇ、陛下ぁ」
そう皮肉って、アルバートは薄く頬をつり上げて嗤って見せた。相変わらず底の見えない男であると、オリヴィアは思う。彼の青白い肌はすでに身に纏った白衣との境界を曖昧にしている。学生時代からクライブの知己と言うことで少なからず面識があったが、未だ持って得意な人物ではない。幾分か奇行が目立つが、国にとっては得がたい優秀な技術者であることに変わりは無い。実のところ、その分だいぶ厄介だとは思うが。
「あなたの要求通り、空母マリアの動力炉の使用許可を申請しておきました。これが私の詔勅書です。近衛の者に話は通してありますから、そこまで嫌な顔はされないでしょう」
「ははぁ、ありがとうございますぅ～」
オリヴィアがぞんざいに机上に投げた書類を彼は嬉々として受け取った。
「二号遺跡に何者かが潜伏しているとの報、それは確かですか？」
「ログはグヌーテラの記憶領域に残っていると思いますので、後ほどお目通しのほどを願います。――おそらく間違いは無いものかと。あそこのシステムを掌握し、ベレッタを退けるほどの手練れが居ると拝察致します。テネジアが長年苦心しても突破できなかった遺跡のセキュリティをどうやって手懐けたのか、一技術者としてとても興味深い事ではありますが……。さきの襲撃事件に関与した敵軍の可能性が非常に高いと推測されますねぇ」
「またやっかいな場所に……。空爆と艦砲射撃で鏖殺して差し上げられないのが、歯がゆい限りですわね」
「陛下は勇猛果敢であらせあれますなぁ～」
アルバートは心底愉快そうに目を細めている。いくら慈悲深いオリヴィアとて、無辜の民草を問答無用で殺傷して回った敵軍に対し

て、それなりの返礼はする腹積もりだった。
　しかし、こうも簡単に怒りと憎しみを発露させてしまうとは、彼女も少し抑えが効かなくなってきているらしい。あまり、芳しくは無い兆候だった。
「できるものなら、そうしたいのですが。緩衝地域に軍を派遣したと知られればソレイユが黙っていないでしょう。こちらから提示した停戦条件を進んで破棄するようなモノです」
　比較的被害の少なかったヴィスタ辺境の地は、現在ソレイユ帝國の占領下にある。
「おそらく、敵は二号遺跡の飛行不可能空域から、戦術輸送機を飛ばしてきた物と思われます」
　オリヴィアの思案はよそに、アルバートが推論を続ける。
「あそこ一帯の空域は遺跡の無人防空システムが稼働している限り近づくことができない。その固定概念を逆手に取られましたか……」
　遺跡の対空防衛網は、三百年が経過した今もなお生き続けている。空域の安全確保のために何度破壊しても、どこからともなく兵器が増強されて、開いた穴を補強されてしまうのだ。そのため、未だにあの遺跡の上空は不可侵領域にして、航空機を喰らう『魔の空域』として恐れられている。誰も近づけないし、近づかない。
　テネジアとソレイユとの中間地点に位置するヴィスタが永久凍結してしまった今となっては、両国間を隔てる溝は大きく、交通手段は装甲船舶を用いた海路か、不可侵空域を大きく迂回しての空路しか無い。険しい山岳地帯を陸路で行くという道も有るが、その道中はＡｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏの極低温地域をかすめていて、並大抵の装備では生きて帰ってこれない。
「そうです。向こうが遺跡群のシステムを掌握しているのならば、あの目に見えない蒼穹障壁は無いものに等しい。もちろん、軍・民間の空路から大きく外れている上に、電波干渉が強くて探知も不能。監視衛星の目も欺けて一石二鳥といったところでしょうかねぇ」
「確かに、二号遺跡なら、あの規模の軍を受け入れる許容量が有る

……。隠れ蓑としてはうってつけですね」
オリヴィアはあの場所に少なからず因縁を感じる物があった。二号遺跡は古くからテネジアの技術躍進を支えてきた、巨大な遺跡群である。レベル４までの深度が存在し、三百年前に失われた文明が眠る、いわば遺物の宝庫であり鉱山である。
遺跡を発掘し、出土品から技術を奪い、転用することで今の世の中が成り立っている。
すでに人類には、新たな技術を自力で開発するほどの余力は残されていない。
そのため、領土内に発掘可能な遺跡をいくつ所有しているかが、国家間の軍事的均衡そのものであると言っても過言ではないのだ。
ヴィスタ共和国とテネジア王国の国境沿いを横たわるように存在し、そのため古くから外交上の根強い対立があった二号遺跡。前王が軍を派遣して強硬に発掘権を主張したため、前大戦の直接の原因になったと言われている。時の第１２６次大深部強行調査隊にはラルフ・アーセックを筆頭とした精鋭部隊が参加し、当時の傭兵隊を率いていたトマース・ストーナーも前線で指揮を執っていたとされている。記録のほぼ全てが抹消されており、クライブの父であるトーマスから語られたことが、オリヴィアの知るところの一部始終だ。
――オリヴィアにとっては、数々の忌まわしい記憶が眠る場所。
少女神信仰における聖地とされ、今も各地の遺跡には天使の化石が散逸していると言われている。そのため、国交における軍事的にも宗教的にも、非常にデリケートな場所である。そんなところで問題を起こそう物なら、即座に大戦の悪夢が蘇りかねない。
「まったく、天才というのはやっかいな存在ですね。私とセシリアが寝ずに考えて見つけられなかった答えを、あなたは何でも無い風に持ってくるんですもの」
そこでオリヴィアは、昨日から必至で考えを巡らせていた自分が、急に馬鹿らしくなってきてしまった。つい先ほど仮眠のために退室したセシリアと、長時間におよび意見交換を交わし、とことん地図

を汚してみても、今回の結論に至ることはできなかったのだから。
「ほめても何も出ませんよぉ陛下」
「そういえば、あなたはいつもそういう人だったわね。クライブが嫌う訳だわ」
「僕はあいつのこと大好きなんですけどねぇ」
「そんなところばかり趣向が合いますね。私もです」
「陛下からこんなにも懸想されているというのに、クライブはあの少女兵にご執心。なんとも酷い奴ですねぇクライブは」
「それでも、私は。彼が帰ってきてくださるのを、いつまでも心待ちにしていますから」
「たいそうなご自信ですねぇ。焦ったりとか、しないんですかぁ？」
アルバートはまるで道化のように煽り立てる。
「急いてはいませんよ。私は彼の選択を尊重したい」
「理解のある女性は、とても素晴らしいと存じ上げます」
「――それに、特殊な状況下で結ばれた男女は、長続きしないモノですから」
「ほほぉぅ……。案外、陛下もしたたかでいらっしゃる」
その発言に興味津々と言った具合に呟いた。彼の中に下心が無いと解っていても、やはり良い気分では無い。
「さぁ、下世話な話はこれくらいに致しましょう」
オリヴィアはこの男にまんまと乗せられているということに、少なからずいらだちを覚えた。全く調子の狂う相手である。少し顔の温度が上がったことを知覚した。
「……私は融和路線を掲げる外交政策の都合上、二号遺跡の扱いについては非常に神経質になりながら事を進めてきました。それを今更、テロリスト潜伏の可能性があるからと言って、おおっぴらに軍を派兵することなど、とても。できようもありません……」
悩ましげな思案顔を浮かべるオリヴィア。
「陛下、恐れながら、近衛隊と傭兵隊の派遣と、機甲外骨格の使用を具申させて頂きます」

唐突に、アルバートは奏上する。
「あの分隊支援戦闘機を、今使うというのですか?！　あれは、Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏ．調査の為の切り札。いわば虎の子を兵装です。それに、まだパイロットの完熟訓練どころか、選出すらもしてはいないのですよ?！」
多少取り乱した風を装って、オリヴィアは自分の黒髪をもてあそんだ。
「ブラックナイツからパイロットを選出し、その全員にブレインマシンインターフェース手術を受けて貰います。デバイスドライバーが適用されれば、完熟訓練など三分で済みます」
彼はしれっとした表情で、そう言い放った。
「しかし……。わたくしに、忠臣の肉体改造を命じろというのですか?」
オリヴィアは苦悩に眉をひそめて逡巡した。
「恐れながら、陛下」
そのとき、執務室の扉が勢いよく開け放たれた。皺一つ無い軍服に身を固めた、セシリアだった。仮眠を取るべく先ほどまで兵舎に居たはずだが、こんな状況でもよく寝られたらしく肌の血色がよかった。濡れ羽色のセミロングはいつもにも増して艶やかだ。
「セシリア……どうしたのですか?」
オリヴィアがいぶかしげに問うた。
「私もウィンチェスター伯の腹案に賛同致します」
「あなたが?　珍しいこともある物ですね」
「事態の方は、先ほど彼から送られてきた資料にて把握しております。二号遺跡には未だに多くの古代兵器が、即時使用可能状態で埋蔵されています。テロリストがそれを鹵獲している可能性は少なくないでしょう。これ以上、国境線上の緩衝地帯にそのような輩をのさばらせておくわけにはいきません。今回の強行偵察、および隠密掃討作戦、是非とも、女王陛下の黒騎士たる、我ら近衛軍にお任せください。必ずや、ご期待に添える働きを、この忠義にかけて――

！」
　セシリアは恭しく最敬礼をした。オリヴィアはその姿に、揺るぎない決意の色を見た。
「それに、正規軍を動かすには元老院を通さねばなりません。しかし、近衛軍と傭兵隊ならば、陛下のご裁可でいずこにでも運用ができます」
　これは好機とみて、アルバートが一気にたたみかける。
「本来なら少数精鋭による隠密作戦を展開したかったのですが、敵軍の規模を鑑みるに、奇襲が成功したとしても、おそらくは戦力に不安が残るでしょうね」
　オリヴィアは早々に折れることにした。元より、その覚悟があったからだ。
「敵が制空権を完全に掌握している以上、投入できる戦力は地上部隊と、匍匐飛行可能なヘリ、無人偵察機、ＶＴＯＬに限られます。部隊の展開方法は、遺跡の沿線を通っている軍用輸送路線を使用して、１５式戦車と機甲外骨格の混成編成で当たらせます。おそらく、敵が陣を構えているとしたら、臨海部に面した東端区域でしょう。本来ならば、艦隊勢力の支援が効果的なのですが、隠密作戦とあらば望むべくも有りません。なお、作戦後、部隊の帰投方法としましては――」
　将才に長けたセシリアは即座に軍の運用方法を掲示してきた。たちまち作戦の具体性が増していく。闇雲に模索していた昨晩とはうってかわって、今回は具体的な攻略目標が有る分、セシリアの弁舌はとてもなめらかで、どこか晴れやかだった。
「――解りました。もしもの時の保険として、ソレイユの皇帝には私が直接話を取り付けておきます」
　おおむね理解したオリヴィアは、兵站の調整を始めるべく席を立った。
「作戦は二週間以内に決行します。それまで、各人の奮励努力に期待します」

『Ｙｅｓ．Ｙｏｕｒ　ｍａｊｅｓｔｙ！！』

――いくつかの事項を確認し、それぞれの役割を分担した後、セシリアとアルバートは執務室から出た。

「まさか君が味方してくれるとは思わなかったよぉ。これは恩に着ておくねぇ」

「貴様に貸しを作るのも良い気分ではないな」

「あ、そうそう、騎士長。――コレは感謝のついでなんだけど、『少女の肉体』欲しいと思わない……？」

「――なん、だと？」

悪魔のささやきだった。それはアルバートの薄気味悪い笑みと相まって、なおのこと邪悪の度合いを増している。

「話だけは、聴こう」

セシリアは内心の動揺を隠しきれずに頷くと、アルバートの提案を二つ返事で呑んでしまった。彼女はこの事で後悔することになるが、それは後の祭りだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3953d/

Absolute zero.

2011年4月15日10時55分発行